
とある世界と重力掌握

将軍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある世界と重力掌握

【Zコード】

Z9073P

【作者名】

将軍

【あらすじ】

とある少年は機械の暴走に巻き込まれ
気がつけば、異世界にいた・・・

ひかる少年の災厄（前書き）

始めまして！

初一次小説作成となります。

なにぶん文才がないもので、読みこくいとは思いますが

どうか優しくみてください。

とある少年の災厄

「さて、あと10分で実験開始だ！みんな気を引き締めろー。」

『はい……』JJIは東京郊外のある会社の秘密研究所。

JJI、今までに新製品の試作品のテストが行われようとしていた。この会社が開発していたのは、新型の小型原子力エンジンだ。これが実用化できれば一般車や小型舟艇などにも搭載可能になるということで、おおいに儲けが期待できるのだ。

なので、今回のテストではもちろん細心の注意を払い、万が一にも事故が起こらないように配慮して事前に何度もシミュレートを繰り返した上で実験だった。

だが、この世上100パーセントの安全などなかつたのだ。

「ん……なんだ、あの子は？！」「馬鹿なすでに実験は始まっているんだぞ！」「どこから入った！？」「早くあの子を外に出せ！」怒声が研究所内に響く。

監視塔にいる男の眼に映るのは、年のころ16歳くらいの少年。

「くそーどうなってるんだよ？！なんだよ！？不良どもから逃げるためにこの廃墟に逃げ込んだのに……今日に限って人がいるんだよ？」少年、古門 護は自分の運のなさを呪っていた。

「そこに君ーはやくそこから離れなさい！危険だ！」そう後ろから

言われても、ここで止まつたらいかにも重要そつた施設には無断侵入したこととどがめられ、多分退学になる・・・

「そんなの、『免だ！』そのままフルダッシュして南門から出ようとする護だつたが、「うそ！こっちにも？」すでに門の前には、『捕獲準備完了』とでも言わんばかりに捕まえる気満々でネットを構えた『しつい男たちが待ち受けていた。

「くそー」こうなりやあ、あの手だ！」護は踵を返し、研究所の中央にある小屋を目指す。その小屋が外に通じていることを彼は知っていた。だが彼はあくまで部外者である。その小屋が持つ意味までは分かるはずがなかつた。

「おい！あの子。例のものが置いてある小屋に入つたぞ！」監視塔にいる研究者の言葉に焦りの色が混じる。「はやく、テストを中止するんだ！」「はい！ただちに！」あわてて助手らしき男が装置をいじる。

だが・・・・「大変ですチーフ！原子力エンジンが暴走を起こしています！」このままでは私たちごと・・・・いや敷地じたい簡単に吹っ飛んでしまいます！」

研究所の顔が真つ青になつた。「ただちに地下に避難するよう指示を出せ！すぐにだ！」「あの少年はどうするんです！」助手の言葉に研究者は振り向きもせず言った。「しりん！」

小屋に飛び込んだ護は、ドアの外で急に足音が遠のいていくことを不思議に思った。

「いったいなにが・・・・にしても、なんか熱すぎないかこの小屋・・・・ん？！」次の瞬間、彼の視界は突如莫大な光に包まれ

た。

「これは・・・いつたい・・・」それが彼の最後の意識だった。
彼は忽然とこの世界から存在を『消した』のである。

とある世界で、目覚めれば（前書き）

ここから、主人公の異世界での生活が始まります。

とある世界で、目覚めれば

「う・・・・・ん・・・・・！」は・・・・？」

視界に入る、見覚えのない、真っ白な天井。

「いつたい僕は・・・たしか、小屋に逃げたら、いきなり光が・・・」

そこまでは記憶があるのだが、凄まじい閃光が視界一杯に広がったのを最後に記憶が無くなっていた。

改めて周りを見渡してみて、護は不思議な感覚を憶えた。

「なんか、この部屋の雰囲気知ってる氣するんだけどな・・・」

「そうかな？君がここに来るのは始めてだと思つよ。」

突然聞こえた『聞きなれた』声に、思わず護は思わず叫んでしまった。

「へ・・・・・ヘブンキヤンセラー！？」

「うん？君は私のあだ名を知ってるのかい？」

護の視線の先に立つのは、護が良く知る人物。

すなわち、『とある魔術の禁書目録』の世界における名医。

『カエル顔の医者』またの名を『冥土返し』その人だったのである。

「あの・・・これは何かのぞきついでしょつか？」

「ん？なにを言つてゐるんだい？君は、ここ昨日、入院したばかりの患者で、ぼくは、君の担当医。それだけだと思つよ？」いかにも当たり前だといつ風に答えるカエル顔の医者。

「あの・・・ここはどこか教えてくれませんか？」

「ん？・・・・ああ、君はこの街の人では、無かつたんだね。ここは、『学園都市』。ここの国に住んでいるなら聞いたことぐらいあると思うけどね。」

「学園都市？！んなバカな！」護はベットから飛び出し、フルダッシュで窓にかけよる。その先に広がる風景が、自分が見ていく幻想を碎いてくれることを信じて。

「つそ、だろ・・・・」だが、眼の前に広がった風景は彼が見ていく幻想を『新たな現実』とするものだった。

何度もパソコン画面を通して見た町並み。

未来的なビルが立ち並び、掃除ロボがうごめき、なにより、街をあらぐ人々のほとんどが『学生』。

(嘘だろ・・・・) 護は茫然とし、この風景を否定しつつも、ここのどこかで新たな現実を認識しだしていた。

(僕は、異世界に・・・と禁の世界にあがまつたんだ!)

となる世界で、目覚めれば（後書き）

いやあああ・・・なかなか話しが進みません（汗）

話も硬くなりすぎて、なんか、難しいですね。

まあ、ともかく、ようやく主人公のと禁世界での人生が始まります。

これからも、お願いします。

とある出会いと2人の少女

「君、落ちついたかい？」「はあ・・・・もつ大丈夫です。」

つい30分前、とんでもない『新たな現実』を受け止められず、錯乱状態になつた護は、病院スタッフ5人がかりで抑えられ、鎮静剤を打たれて、ベットに固定された。

「もうそろそろ、外していただけませんか？」「いや、まだ確実に暴れない保障はないからね。もうすこしそのままでいてもらうよ。」力エル顔の医者の言葉につなだれる護。

「時に、君を見つけて通報した子をまたせてるんだけどね。」

「へ？ぼくを見つけた？誰ですか？」「それは、彼女に直接聞いた方が早いと思うよ。」

医者が指差す先、護の眼に映つたのは、まさに見なれた顔の少女、そしてここが異世界と決定付ざるをえない人物。

(御坂・・・美琴・・・)硬直してしまつた護に、美琴は訝るような視線を向けた。

「なによ。私の顔になにかついてる？」いや、あなたの存在が信じられないのですと言い出しそうになるのを必死に抑える護。まさか別の世界から来たなどと話せるわけがない。

「あの・・・・君が僕を・・・・」「そうよ、あのバカを追いかけて路地裏に入つたら、あんたがボロボロの姿で倒れていたからあ

わてて通報したの。おかげであいつは取り逃がしちゃつたけど。」

美琴のいう『あいつ』とはおそらく上条当麻のことだらう。となると今まだ、作品でいう第1話か2話になるだろうか。

「ところでアンタ、いつたいどこのだれなの？学生証もないし、ＩＴパスももつていなかつたけど、どうして、あんなところで倒れてたわけ？」そう聞かれてもこつちにもさつぱり分からぬ。だが、なんらかの理由をつけなければ、怪しまれる。

悩んだ末に、護がだした理由は……

「あの……憶えてないんだ。気がついたらここにいて……」

「でも、ボクのことは知っていたよね？」ギクリとなりながらも護はなんとか話を続けた。

「ええ……といひ憶えてる部分もあるんですけど……・自分がだれかとかがさっぱり……」

「ふーん……記憶喪失ねえ……んじゃあ、この街の人間かをまず知らなきやね。」美琴は、カエル顔の医者のほうを見て、一瞬硬直し、その後なにか話しあいだした。

(たぶん、『リアルげこた』に衝撃うけたんだろうな。)などとなんがえているうちに、美琴が戻ってきた。

「話がついたわ。アンタの怪我、もうたいしたことないから、退院して良いことになったわよ。」そう言われても行く当てのない護か

うすれば「まあ・・・・」と並つしかない護だが、次に告げられた言葉は衝撃的だった。

「私の後輩のジャッジメントを呼んだからから、そいつのところまで来てもらひつわよ。今すぐ」「

「え・・・・今すぐにつて・・・・」あたふたする護を氣にもかけず、カエル顔の医者は拘束具を外し、美琴が護をベットから引っ張りあげる。

その女の子の手の感触に、改めてこれは現実だと再確認する護だつたが・・・・

「なにしてるんですの?・・・・・」超悪意がこもった声が病室内に響いた。「あ、黒子。早かつたわね。」その声の主は明らかに殺る氣マンマンですとばかりに、両手に尖った金属矢を両指で構えていれる。

「な、なにやつてんのよ黒子! 今は私がこいつが起き上がるの手を貸しただけよ?」

「へ? そりなんですか? それは失礼いました。わたくしお姉さまのルームメイトで、ジャッジメント

177支部所属の白井黒子ともうつします。」

れつかまでの殺氣はざいくやら、優雅に挨拶をする黒子を見て(原作とかわんないな・・・・)と思つ護だつた。

「んじやあ、黒子。あとは頼むわよ。」「任せてくれ下さいのお姉さま。」なんか、良く分からぬ内に美琴は部屋を出て行つてしま

まい。

部屋には、護と黒子だけが残された。

「それじゃあ、一緒にひいて来てもらいますわよ。」「どっこく？」と返す暇も無かつた。突然黒子に手を握られ、視界がぶれだと思つたときにま・・・・・

「や・・・・やうの上…？」「あまり下を見なこまつがいいですわよ。」「遅すぎる黒子の警笛に答えるヒマもなく、護はつぎつぎと起立の出来事に翻弄されついた。

となる出でいと2人の少女（後書き）

やつぱり、話しがすすまない・・・

なれないとキツイです。これから、とある科学シリーズの話に繋げ
ていくつもりですが、まだまだ時間がかかるかもしれません・・・。

とある支部での事実確認

「あ、お帰りなさい白井さん……ってだれなんですか那人？」

黒子に有無を言わさず連れてこられた、風紀委員第177支部に入つたとたん、妙に甘つたるい声が護の耳をうつた。

「それを知るために、ここに連れて来ましたの……初春、この方がバンクのデータに乗つているか、確認しなさい。」

「はあ……わかりました白井さん。ところで、お名前はなんというんですか？」

突然、質問されあわてながらも、護は自分のフルネームを答えた。

「わかりました。古門護さんですね。すぐに調べます。」そう言って常人ではできないスピードでキーボードを叩く初春を見て、だいたいしつてるけど、ここまでとはね……と素直に感心した護だが、同時に不安もいっぱいあった。

まず、ここが学園都市なら、データにすべての学生の情報を保存しているはずである。即ち、気がついたらここにいた自分がデータに残っているはずがなく、一発でよそ者だと分かつてしまう。

次に、もしバレれば、不法進入で外に出され、ここ以上に知識がない、外の町を彷徨うことになる。

それは絶対に避けたい。なんとか言い訳を考えようと、思考の迷路に入りかけていた護だったのだが……

「検索、終わりました。護さんはちゃんとデータが残っています。」
昨日付で学園都市の住民登録がなされていますよ。」思いがけない言葉に、護は自らパソコン画面に映し出されているデータを確認する。

そこには、どこで手に入れたのか、無表情な護の顔写真と、生年月日、家族構成等々が書いてあつた。因みに護は孤児である。

「えっと住所は、第7学区の…」のアパートですね。」そう言われても護にはさっぱり分からぬ。

「とりあえず、そこまで私が案内してさしあげます。初春！　そのデータをコピーしてくださいな。」印刷機からデータをチラツとみただけで、もう憶えたのか、黒子は、ふんふんと頷くと、護に向き直つた。

「一緒にについて来てくださいな。ついでにいくすがら、学園都市の説明もして差し上げます。」そう言われ、ありがたくそうとしてもらうことにして護だったが、行くすがら、聞かされた話はだいたい知つていることだったので、記憶がないふりをするのは、大変だった。

そんなこんなで、やつとアパート前につくと黒子は、管理人らしきお姉さんとなにか話したあと、護に部屋の鍵をわたした。

「ここの部屋があなたにあてがわれた部屋ですわ。管理人さんのお話ではすでに業者的人が色々と荷物を運んでいるそうですから、たぶん部屋の内装などは完了していると思いますの。それと、なにやら無印の手紙がきてるそうですわよ。まあ、なにはともあれ、わたくしはお役ごめんということで帰らせていただきますわ。ああ、お姉

「まあ…」

なんか一方的に言われて、いくつか質問したかったのに黒子は、さつさとテレポートしてしまった。

「まあ、悩んでも仕方ない。とりあえず、部屋にはじろいだ。」「管理人さんに部屋のある階を聞き、エレベーターで3階にあるその部屋に向かう。

「すでに表札がかかっているし…どうなってんだろ?」「色々と疑問におもう護だつたがとりあえず、中に入り……おもわず目を疑つた。

部屋の中には、（なぜか）大きなタブルベットがドンと置いてあり、それを置いても差し支えないくらい、広々としている。なんか、最新っぽいハイビジョンテレビや、ハイテクすぎでどう扱えばいいか困るようなマッサージ機能つきの椅子など、誰がそろえたのかと気になるぐらい、大量の家具がおかれていた。

「やついたら、手紙があるとかいってたよな…」

部屋のインパクトある内装に、氣をとられすぎたがようやく肝心なことを思い出し、郵便口にさしてあった便箋をとり、机に置く。

つばを飲みながら、便箋を切ると、中には一枚のコピー用紙が入つており、そこには、護がこれから通う高校の名と、追伸として次のようなことが書かれていた。

『君が異世界からきたことは承知している。だが心配するな、私が君の邪魔にならないといどにサポートする。T.Sより』

「僕が違う世界からきたことを知っている人がいる？」

護にとつてこれは結構衝撃的だつた。いつたい誰が自分を支援してくれるのか、そして、一体なんの目的で援助するのか。謎だらけである。

「ふう……いま、考へても仕方ないか。学校に通うのは2日後と書いてあるし、あしたここの人達に場所をきいたり、街を見て回ろう。とにかく今日はなにもかも急すぎて疲れた……」護は部屋のタブルベットに転がり、天井を見上げた。

「ここ」で寝て、目覚めたら戻れんのかな？……当たり前の日常がこんなに恋しくなるなんて、元の世界では違う世界にあこがれて、違う世界では元の世界が恋しくなる……僕つてバカだな。」「自嘲しながら、眼を閉じる謙。

護は、まだこの世界を受け止められてはいなかつた。だが護が迷い込んだこの世界はすでに彼を取り込んでいたのである。

じある文部での事実確認（後書き）

いくつか感想を書いてくださいました。ありがとうございます。

まだ始めなのに、微妙なオリキャラの登場をおわせてしましました！

これから、主人公である護が能力を発現していくことにするつもりですが、戦闘シーンに到達するまで、どのくらいかかるかわかりません。

戦闘シーンを期待しておられる読者の方は、もう少しをお待ちください（汗）

なんとか、頑張ってみます（涙）

新たな田覚めと自分だけの現実（パーソナルリアリティ）

「う…………朝か…………」護はまだだるい体を無理やり起こす。

「やつぱり戻れない……か。」口のどじかで甘い希望を抱いていた自分がいた。だが、どうやら、これは夢で醒めれば戻れましたみたいな甘いオチは起きやしないものない。

「僕は…………」の現実を受け入れるしかないんだらうか。」そんな思いに囚われ、なんだか落ち込んでしまった護だったが、落ち込んでばかりもいられない、なにしろ今日はしなければならないことが沢山あるのだ。

幸い冷蔵庫の中には、（なぜか）大量の冷凍食品が入っており、護は適当にそれらをレンジで温め、食べた。

（学園都市つて冷凍食品の分野でも進んでんのかな？かなり面かつたけど）

そんな事を考えつつ、護はまよじ近所さんへのあこがれから始める事にする。

まず1部屋田、左となりの部屋、表札は『土御門』？

「あ…あわか…」「クソとつせを飲み込み、インターホンを押す護。

「はーはー、誰なのだ？」「ん？」予想していたのと違う声に一瞬

「戸惑つた護だつたが、すぐに思い出した。

(ルーフィー、土御門には義理の妹の舞夏がいるんだだけ)

「すいません。僕はとなりに引っ越してきた古門つていうんだけど、挨拶にきたんだ」

「そりゃあ、悪いな。でもいまは家事で忙しくて手がはなせなくてな、悪いけどドアの前に置いといてほしい。あとでばか兄貴に取らせるから堪忍な」

「因みに、お兄さんの名前は？」妙な質問だと思われたのか、しばしインター ホンは静かになつたが、しばらくして……

「元春といつんだぞ～これから、よろしくな～」となると、どうやらここは土御門兄妹が住むアパートと見て間違いなぞうだ。

「うふ。有難う。」わらわらとよろしく。」とつあえず、左となりへの挨拶を完了したところで護はふと重大な事を思い出した。

「たしか・・・・・・土御門兄弟の隣が上條さんの部屋だつたよな・・・・なんか、都合が良すぎな気がするぞ」

昨日の手紙の主は、護が別の世界からきた事を知っていた。その誰かさんがなんの理由もなく、と禁シリーズの主人公各の人間達が暮らすアパートに護を住まわせるだらうか？

「悩んでいても仕方ない・・・・・・か。まずは上條さんに挨拶しなきやな。ついでに高校の場所も聞かなきやならないし」

いよいよ作品の主人公と会つ事になる。護は異様に胸が高鳴る感覚を覚えていた。

だが、2度、インター ホンを押したのだが、反応がない。おかしいなと思いながら押し��けていると . . .

「ドンガラガッシャーン！」と景気よく何がが崩れる音と、外にまで聞こえる大声で、主人公の定番口癖である「不幸だああああーー！」といふセリフが。

「やつぱり、不幸体質なんだ . . . 」思わず呟いてしまった護だったが、上條さんと話すには今がチャンスである。

もつて一度インター ホンをおすとよつやくへ上條さんがでた。

「はあ 」の上條さんになんの用で「」ありますでそうか？ 「なんか、凄まじく暗~い声に若干下がりながらもなんとか訳をはなす護。

「そりゃあその高校の名前を教えてくんないなかなか？」そういうわれ、紙に書いてあった名前を告げると、意外な言葉が返ってきた。

「これ、俺と同じ学校だぜ。」いいもやつ、もはや仕組まれているとしか考えられないような、ついついのよや。

「なんか、あそこちばんに寝起きの邪魔しちやつて悪かつた。ごめん」「いや、気にすんな。あんな事しょっちゅうだから もはや自分で認めてるって 不幸だ

・「

なんだか、またブルーモードに突入してしまった上条さん。「なんか、悪い事したよな。」と後ろめたさをおぼえながらも護はその後、ご近所さんへの挨拶を一通りすませた。

「さて。一仕事終わったしこれから街に散策にでも乗り出そうかな?」そんな事を呟きつつ部屋の前まえまで戻ってきた護だつたが……

「うん?手紙?」郵便口にまた無印の手紙がさしてある。それはつまり、手紙の主からの連絡がある事を意味している。

「ええっと…………学校で身体測定システムスキャンを受ける?」

その手紙には、システムスキャンを受けに学校に行くよ!といいつ手紙と、GPS機能付きのハイテク携帯と解説書が入っていた。

護はしばし、考え込んだ後、ポツリと呟いた。

「今日の散策は後回しだな…………」

その1時間後、部屋にあつた制服に着替えた護は同じ学区内にある某高校へと着いた。そこでこここの名物教師である、小萌先生とつて感動したりしながら、様々なテストを受けることとなつた。正直なところ作品の大まかな流れや用語は知つても、詳しい内容までは知らない護としては、ただ、言われたとおりの事をやるしか無かつた。

そして、約30分でテストは終了し、廊下で待つ事になつた護だ

つたが、内心不安で仕方無かつた。普通に考えて、自分に超能力などあるはずがないのだ。

「またせたね。結果がでたよ。一緒に着いてくれ」なんだか汗をかきつつ上擦った声で話す教師にもしかして、無能力者とばれたらんじやないかしらとビクビクしながらついて行くと……

「へ？運動場？なにするんです？」護が連れてこられたのは高校のグラウンドの中だった。

「ここで、君の能力のレベルチェックを行なう…………あそこが見えるかい？」男性教師に指差された先にはなんだか超凶暴そうなゴリラ顔の教師が、なぜかヤリを構えてたつっていた。

おもわず凍り付いた護などお構いなしに、教師は説明を続ける。

「あの先生が投擲用のやりを君に向かって投げるから、君はそのやりに上からの力をかけるようイメージをしてください」

いや、普通に考えて無理でしじうと言つ暇もなく問答無用とばかりにヤリが30メートルさきからすっ飛んできた。

「死ぬ……」もつとうなつたらやけくそだ！と、観念し、ヤリに上からの力をかけるイメージを全力でした瞬間だった。

ズズン……と明らかにヤリが刺さるのはまったく違う音が響いた。

「え？…………」護は目の前の光景が信じらなかつた。

先ほどまで真っ直ぐに自分に向かってとんできていたヤリが、1メートルほど先で地面に横向きで埋もれているのだから。

「これは……いつたい？」 「それが君の力だよ。詳しい事はこの資料に書いてあるけど、かいつまんでいえば君の能力は重力を操る力。いまなら、上からのG……重力を通常の倍近くかけてやりを地面に埋めた訳だ。」

「重力を……操る？」 そう言われても、中学で勉強した程度の知識しかない護からすれば、どう答えれば良いか迷ってしまう。

そんな護の心情を汲み取ったのか、男性教師は付け加えた。

「そう難しく考えなくていい。要は、重力をかけるイメージをすれば使えるんだ。ただし、使い過ぎは危険だがね。なにしろ扱う力が力だ。」

教師は、次にグラウンドの端に置かれた廃車の前に連れてきた。

「ここの廃車に真上からさつきより強い力をかけるイメージをしてみろ」

言われるままにさつきよりも強い力をかけるイメージをする護。次の瞬間、ズグワアーン！という凄まじい音と共に、目の前の廃車は真上からかかつた異常な重力によつてただのスクランプと化していった。

「ふう……ここまではね、正直驚いたよ。測定結果レベル5で決定だな。君がこの高校で初のレベル5になる訳だ。」

護は教師の話を半分も聞いてなかつた、レベル5といえば1人での軍隊に対向できる能力者を指すはず、この学園都市にも7人しかいない、最強の称号。

それに、自分がなると言われても実感がない、なにより自分は『よそ者』。いきなりレベル5級のちからがあると言われてもそう簡単には信じられない。

「序列とかは、後で統括理事会とかで出されて連絡とか行くと思つからまつてゐるといい。いやあ、しかしウチに超能力者が誕生するとはな。先生は嬉しいぞ。ん? おいおいそんな不安相な顔をするんな」男性教師は護の不安げな表情を、能力に対する自信のなさだと受け取つたらしい。

「君の能力の使い方は、それだけじゃない。その力はまだいくつも応用が聞くだろうし なにより、それは君の全力じゃないはずだ。氣後れしなくとも大丈夫だよ」

確かに護は氣後れしていた。それはレベル5^{パーソナルリアリティ}という称号に対しても氣後れしてしまつたのだ。

もし、この力を完全に受け入れてしまえば、この世界を、現実を『自分』の現実としてしまうこととなる。

あくまで、外から来たよそ者として、元の世界を『自分だけの現実』とするか、それともこの世界をそれと認めてしまうか。

それは、そう簡単に答えが出せる問題では無かつた。

新たな目覚めと自分だけの現実（パーソナルリアリティ）（後書き）

いや～……やっと主人公の能力を出せました。

見てのとおり、主人公の能力は『重力を操る力』です。

調べてみると、万有引力なんかも重力の一種だつたり、なんか、いろいろ勉強になつたりします。

さて、次回からいよいよレールガンのストリーに入つて行くつもりです。バトルシーンも入れて行くつもりです。

最後になりますが、文才がないせいで1話が異常に長いことお許しください。

これからも、どうかよろしく、お願いします。

じめの出来こと事件発生（前書き）

ここから本格的にレールガンストーリーに入つていきたいと思つて
います。……が、実は私、レールガン関係の知識がつる覚
えでして、読者の方の中にはあれ？と違和感を覚える方もいるかも
しれません。

間違いに気づかいたら、どんどん指摘してくださいと幸いです。

とある出来こと事件発生

「はあああ…………なんか色々ありすぎて心が追いつけてないかも…………」護は身体測定を終えた後、第7学区の街中を散策していた。

思つたより早く、身体測定が終わつてしまい。暇を持て余すこととなつた護はすぐにアパートには戻らずに、当初の予定だつた散策をすることにしたのだ。

「しかし…………僕たちの世界にあつた作品なんだから当たり前といえば当たり前かもしれないけど、

なんか、現実と非現実がまじりあつてゐなこの街は…………」

護はすでに大体の建物や店を見て回つたが、なんだかハイテクすぎてどう扱えばいいかわからない電化製品を扱う店から、そもそもこの作品世界のことを扱つていた雑誌を扱う店まで…………元の世界にあるものも、こちらの世界にしかないものも複雑にまじりあつてゐる。

「でも、今ではどちらが『現実』になるんだろう…………田に入るこの世界は今の僕にとつてはたつた一つの確かめられる『現実』だ…………でも、この現実を認めたら僕は…………戻れないような気がするんだよな…………だつて認めることになっちゃうんだ。この世界が僕の生きる世界だつて…………」

すでにこちらの世界に来てしまつてから、3日目になる。3日もさめない夢はあるのか。いやそれ以前にここまでつつきとした夢などあるのか。試しに頬をつねつてみてその痛みが本物だということ

を認識する。

「さて クレープも食べ終わっちゃったしこれからどうしようかな 」護は広場のベンチで一人座り込んでいた。いまがまだ平日の午前ということもあり学生の姿はほとんど見えない。広場には全くと言つていいほど人はいなかつた。

「これから、家に帰つて昼食にしようかな……せつかく探索して料理屋も見つけたんだからそこで……ってそうだ財布持つてきてないんだ……どのみち、一度はアパートに戻らなきやいけないか……」がっくりと肩を落とした護はふと自分の手に目をやつた。

「重力を操る力か あの先生は力の使い方はこれだけじゃないとか言ってたけど そもそも重力の仕組み自体よく知らないしな 今のところ分かつてるのは縦向きにかかる重量の強さを変えることができるってこと。じゃあ、想像するだけで力を使えるなら 横向きに重力をかけることはできるのかな?」護は周囲に目をやり人がいないことを確認してから、ベンチの横に置かれたごみ箱を、目の前に置く。

「あつちやあ、やつちやつたよー」頭を抱える護。それと同時に気がづいたことも一つあった。

（あのごみ箱、僕が一瞬力を使つただけで飛んで行つて窓ガラスを割つて止まつた。もし僕がイメージした瞬間から自分で止める意思を持つまでGがかかり続けるならあのごみ箱はばらばらになるまで横にすすみ続けたはず。つまり力が働くのはイメージしている時だけといふことになるのか ）

「おい！誰だごみ箱を投げたのは！」店長らしき茶髪男のどなり声が響く。ここで知らぬふりをしてにげだすという手もあつたのだが、良くも悪くも正直な性格の護は素直に自首してしまい、その後、午後3時までの4時間、店の片付けと店長の説教、そして店の雑用の三重苦を味あわされることとなつた。

「つ . . . つかれた . . . もう、動けない 」なんか色々と雑用を押しつけられそれを全部こなすのに3時までかかつてしまつた護はさつきの広場の別のベンチに座り込むなり、そく意識が薄れてきた。考えてみれば朝もそんなにご飯を食べていしないし。昼も昼飯抜きで作業したせいで、ほとんど腹に食べ物が入っていない . . . だが、それ以上に疲労が急激な眠気を引き起こしていた。

「ほんとは . . . さつさとアパートに戻るのが一番なんだけど . . . もうげんか . . . 」護の意識は闇の中に落ちて行った。

夢の中で護は逃げていた、たくさんの同年代の子供たちと一緒に。

夢の中で護は小学生になっていた。

必死に逃げ続ける、周りの風景は見えない。ただ前に向かつて走っている。だが周りの子供たちは次々と後ろから迫つてくる強大な化け物の手でつかまれ、消えていく。

そしてついに、自分ひとりになつた。もつ、おしまいだ……。
そう思つたときに『あの子』が現れた。

緑の服に身を包み、悲しげにほほ笑む少女。彼女は右手を一振りするだけで化け物を倒した。

その圧倒的な強さで、護を守つた少女はそのまま護を守つてくれた。

「一緒に逃げよう?」 そいつで護の手を引き駆け出した少女。

護を守り、励まし、勇気づけ、ともに泣いてくれ、ともに笑ってくれた少女。

その少女は、護のために・・・・・・

「うああああ……」 大声をあげて飛び起きた護に、まわりのベンチに座る学生たちからの痛い視線が飛んできて思わず身が縮む思いをする護。だがそれよりも護の頭を占めていたのはさつき見た夢のことだ。

(あの、女の子……誰なんだ? ...) 護は夢の中の少女に覚えはない。というより起きてみるとなんだか記憶があいまいでどんな顔をしていたかなどの肝心なところがあやふやなのだ。

(でも、なぜか懐かしい感じがする夢だった……ビックリしてだろ
…………)

頭をひねつても、なんら浮かんでこない。護はとりあえず「この」とを考えるのはやめることにした。

「いま、何時だろ……って3時30分?まだ30分しか寝てなかつたのか」まだ少し体はだるいが寝る前ほどではない、家に帰るくらいの体力は回復したと感じた護はとりあえずベンチから起き上がるうとした……だが、次の瞬間背後から聞こえた爆音が護の行動を停止させた。

「んん!? いつたい何が……ってあれは!」先ほど自分が迷惑かけた銀行店のシャッターが無残に爆破され3人組の強盗が外に出てきている。

「この場面……レールガンの一話であつたやつだよな……たしかこの後、黒子が一人倒して、美琴が一人を車」と超電磁砲で吹っ飛ばして……じゃあ、ここは大丈夫か。」

ほつと安心して立ち去ろうとした護だが、ふと大事なことを思い出した。

「そういうや、黒子や美琴のほかに初春と佐天さんもいるんだった!たしか初春はバックアップに努めていて、佐天さんは、男の子を……そうだった!」そう、佐天は強盗の一人がさらおうとしていた男の子を助けようとして一人で強盗のところに向かいかけを負ってしまうのだ。

「いくら、原作介入してしまうとしても……どうしてもそれだ

けは避けたい

実は「いつと、と禁、レールガン両シリーズのファンである護が作中、どうしても納得できなかつたのがこのシーンだつた。そうしなれば美琴が介入するきつかけを作れず面白くなかったのかもしれないが、かといって無能力者である佐天さんがけがを負わなくともよいはずだと護は思つていた。なにも佐天さんが傷つかなくても黒子が最初から3人いつきに倒せばいいのに という理不尽な考え方まで浮かんでくるほどだつた。

実際は、警告されていたにも関わらず行動したのは佐天なのだから、怪我した責任は彼女自身にあるのだが そういうた理屈を踏まえていても納得できなかつた。なぜなら佐天さんはもつとも読者である自分に近いと感じていたからだ。特殊な力を持たない、なにか特別な技能を持つわけでもない、生まれが特別なわけでもない、『普通』の少女。そんな子が傷つくのを護は納得できなかつた。

「だけど ここで動けば 原作へ介入すれば、もう後戻りはできなくなる この世界で起こるすべてのこと

に巻き込まれる立場になつてしまつ 」

護の前に用意された選択肢は2つきり。そして時間はそうないし、待つてはくれない。

「それでも、構わない。だが、何の目的で僕をこの世界に送った
かなんてわからない」

護は唇をかむ。

「だけど、目の前で起ころうとしていることが分かっている以上……それを見ないふりできるような器用さは僕はないんだよ！！」

あまりにも幼稚な言い訳、あまりにも無責任な言い草、だがなんであれ護は選んだのだ。この世界を新たな『自分だけの現実』とすることを……

「離せ！」「ダメー！！」佐天は強盗犯から子供を取り返そうと、必死で子供をつかんでいた。

もとより体格や力が違う男相手にかなうはずがないことくらい分かっている、それでもこの子がさらわれそうなのを見つけた時、頭で『私にもできることはある』と思うより先に体が動いた。

「くそ！」男が前蹴りの構えをとる。「……」思わず身構える佐天。だが、男の蹴りが放たれることはなかった。

「な……なんだこれ……足が……上がらねえ！」

「女の子相手に何やつてるんだ、あんたは」「んん！？」強盗犯の男は前から平然と歩いてくる少年にいぶかしげな目を向ける。

「なんだ、てめえは」

「古門 護。3日前、この学園都市に編入になつた者だ」「ホウ……要するに新参者ってことだ……なんだこの能力は？」

「さあね……何て呼ばれることになるのかは僕も知らない……

．．．まあ、それなりにかつこいい言葉にはなるんじゃない？なにしろレベル5の力だからな！」

「レ．．．．．レベル5だと！3日前に入つたばかりの新参者がレベル5だとなめんじゃねえ！」

「それじゃあ、見せてあげようか？レベル5の力を」

「ん？．．．．．なんだ？　体が重い．．．．．」。

「重力だよ。僕の能力は、重力を自在に操る力。きみがどう動こうと勝ち目はないよ。」

「なめんなよ．．．．．クソガキ．．．．！」

男は必至で動こうしているようだが上からかかるGによってその場に縫いとめられていくかのように一歩も動けなかつた。

男が動けない状態なのを確認した上で護は先ほど自分の力を試していたときに考え付いた技を試してみようかと考えた。だが今の自分では一度に重力を使用した技を複数使うのは難しい。ここでこの技を試そうとすれば男の動きを止めている重力の増加を解かねばならない。だがそれでも決着をつけるため護は重力の増加を解いた。

せいぜいと荒い息を吐いてへたり込む強盗の男を見つめながら、護は自分の掌を前に突き出し、周りに普遍的に存在する重力をその掌に集めるイメージを行う。

その途端護の周囲半径1メートルの空間の重力がほぼ一瞬で護の掌の前で無色透明な力の塊となつた。

一瞬で重力を抜き取られ無重力状態になつた護の周囲の空間は圧力が0の真空となる。

よつて無重力になつた空間にあつた空気は近くの重力がある空間すなわち護のすぐ周りに流れ込みその空気に運ばれて小石なども護の周辺で渦巻く。

その姿に銀行強盗の男は自分では勝てないと悟つたのか慌てて腰を上げバンに向かおうとする。

「直接重力の塊をぶつけたら下手したら強盗を殺してしまつ……」

護は男がバンへとたどり着く前に彼に当たらない角度に掌を構えた。

護が狙つたのは強盗たちが乗ってきた車だった。

「超重力砲！」

刹那車は轟音とともに車体をゆがませて吹き飛び、はるか先の路上で横転して大破した。

その光景に声もあげることもできずに腰を抜かしている強盗たちを黒子が素早く拘束しているのを見て護は安堵のため息をついた。

群がつて一部始終を見ていた、ギャラリーから歓声がわく中、護は

子供を抱いたままぼうぜんとしている佐天のもとに駆け寄る。

「佐天さん。大丈夫?」

「へ?はい、私は大丈夫ですけど」

「自分に能力がないからダメとか思わないでよ?」

思わぬ言葉に佐天は思わず謹を見つめた。

「佐天さんが子供を助けようとした時のあの行動は、そろそろ誰かがマネできるもんじやないよ。僕があの場所にいて、こんな能力を持つていつてもきっと動けなかつたすごいよ佐天さんは」

「

「あ あの」佐天はまだよく状況を理解できていなかつた。「どうして、私を助けてくれたんです?」この質問に謹はしづし沈黙し、やがて思い切つたようにこう言つた。

「なにか特別な理由があつたわけじゃない。ただ、君が傷つくるのを止めたかつた」一瞬、その場のときが止まつた ような気がした。

「あの それつて」佐天が何か言おうとした時だつた。

「佐天さん!」

遠くから美琴が走つてきた。

「まざい！彼女の性格上、間違いなく勝負を仕掛けてくるにきまつてる。ここは逃げるしかない！」

もうダッシュで人ごみの中に突入し、姿を消す護。

佐天は、護が消えた人ごみをみながらぽつんとつぶやいた。

「古門 護さん か にしても、なんで私の名前を知つてたのかな？」

となる出番」と事件発生（後書き）

やつとバトルシーンに突入しました。いやあ、そう書き始めるかで
だいぶ悩んでしまい、遅くなつたこと申し訳ありませんでした。

この回で護の夢に出た少女。勘の鋭い方なら・・・いや多分多く
の方が予想してしまったのではないかとびくびくしております。

とにかく、今回佐天さんに対して主人公である護が抱いていた思い
は、作者自身の思いでもあります。主人公の介入によつて佐天さん
はどうなつていくのか、そのあたりにもちゅうもくしてみていただ
ければ、幸いです。

相変わらず、マイペースで文才の乏しい私ですが、どうか温かい目
で見守ってください（涙）

命名決定と連続虚空爆破（グラセント）

「ふわああああ…………眠い…………」

護はかすむ皿をこすりつづけ、ベッドから体を起こし時計を見る。護はまだ寝起きの状態で、時計を見ると5時である。彼はうなづいて、ベッドに戻ろうとしたが、直前で思いなおして起きることにした。

（元の世界でも、いつもやつて起きる時間を延ばしたあげく遅刻してたからな……………ですがにこっちで同じことをするわけにはいかんよな）

「さて、朝飯何にするかなーってうん？」護は郵便受けに白い封筒があるのに気づいた。

「やついえば、昨日帰った時には来てたつて。異様に頭が重くて、読む氣にもなれずに、そのあとベッドにバタンキューだつたから。さつぱり忘れてたけど。」

封筒をひとつ、確かめる護。封筒の差し出し人は『学園都市統括理事会』。

「あそこから、来たつてことは順位付けと名前が決まつたつてことか？」

手で、封筒を破り、なかなか小さなコピー用紙を出す。そこに記載された文章は以下の通り。

「本日付で、第7学区在住生、古門護を学園都市レベル5、第4位とする。なお能力名は『重力掌握』とする」と書かれていた。

「『重力掌握』か……なかなかカッコいいじゃん。にしてもレベル5の第4位か……まあ一方通行や垣根帝督の末元物質（ダークマタ）にはさすがに及ばないと思っていたけど、美琴より下だつたか……」しばし落ち込む護だが、逆に利点もあると思いなおすことにした。

「もし第3位とかなつてたら、プライドをズッタズタにされた姫^{ひと}が雷の槍とかぶつけてきそうだし……そういう点ではフツキーだつたと思うべきかな？」

だが考えてみれば、そもそも新参者で、記憶喪失をしている護^{みさかみ}が同列に並ぶことは、どの道、彼女のプライドを傷つけることになるかもしれないことに気づき、なんだか暗い気持ちになってしまった護だった。

「まあ、気を取り直して。朝食食つて準備して散歩でもして学校に行こう。今日が初の登校日だし。」

その後、朝食を食い、散歩に出かけ、（なぜか）アパートの近くにいた美琴に追いまわされ、何とかまいて上条といろいろと雑談しながら登校し、教室で紹介され（また偶然に上条たちと同じクラス）、土御門と青髪ピアスを始め、クラスの生徒に質問攻めにされ、なんだかんだいって学校生活初日を楽しんだ護だった。

「ふう……昨日とは対照的に今日はなかなか有意義な一日が

過ごせたな。上条や土御門もいい奴だし……まあ青髪ピアスも悪い奴ではないしな……」初日ということで居残りなどもなく護は帰り道を急いでいた。

「えっと……話の通りにストーリーが進んでいくとすると、次に起こるのは『連續虚空爆破事件』のはず……あれは最終的に上条さんがその右手の幻想殺し（イマジンブレイカ）で打ち消して防いだおかげで事なきを得たけど……僕が原作に介入した以上、なにか原作どおりにいかない事情が生まれてもおかしくはないはず……だったら自分からも何か動くべきだよな

」

とはいっても護に、犯人を捕まえるあてがあるわけではない。そもそも『連續虚空爆破事件』の犯人の名を護は知らないのだ。『メガネをかけたウラナリ』とは覚えているものの名前は覚えていなかった。

「それでも、分かつてていることは幾つかある。まず、やつは風紀委員シートターゲットを標的レベルアップバーにしてるってこと。そして幻想御手ジャッジメを使つてているっていうこと……」

レベルアップバーを使つている彼は、外に出歩いているときは、うつむいて歩きながらヘッドホンを常に耳にかけて歩いていたはず、人相はアニメでしつかり覚えているのでこの特徴をもつもので、風紀委員に敵意をむき出しにするやつを探せばいいのだ。

「と盛り上がりつてみたものの……そんだけじゃ当てはまる人が多すぎて絞り込めないよな……」

一機にテンションが落ちる護。

「となるとやつぱり、作品の流れが正しいことを信じるしかないか……でも、それまでに大勢の風紀委員が傷つくのを防ぐぐらいなら、完全じゃないけどできるはず……それでいくしかないな。」

「あの…………」突然背後から聞こえた声にびくつとなる護。

だが直後に聞き覚えのある声だと思いだす。

「第4位の古門 護さんですね？ 昨日はありがとうございました」

後ろにいたのは、昨日自分が助けた少女、佐天涙子だった。

「びっくりした……佐天さんだったんだ……いいよお礼は。僕が自分でやつたことだし。」

「でも、あの時護さんが助けてくれてなければ私怪我してたかもしれません。それにあの時言つてくれたこと嬉しかったです」

護としては、あんな恥ずかしいセリフ早く忘れてほしいといふのだが、それを自分の口から言に出せるわけがない。

「ところで、護さん。何をうそつん唸りながら歩いてたんですか？」

「え？ 見てたの？」

「はい、護さんを見つけて話しかけようとしたんですけど、なんか

そんな雰囲気じゃなかつたんで、すこし距離を離しながら話しかけることあいを図つてたんですけど……

（まやか、連続虚空爆破事件とかの話しも全部聞こえたりしてないだろくな…………）と心配になる護だが、佐天はそんなこと知る由もない。

「ところで、時間あいてますか？護さん」

「うん？まあ、後は家帰るだけだから暇といえば暇だけど……」

そういった瞬間、護は佐天の眼がきらりと光った……気がした。

「だつたら一緒にきてくればかりで、あえて蛇の護としては今朝、美琴に追いまわされたばかりであり、あえて蛇の護としている穴な飛び込むような真似は避けたいところなのだが……」

「そついえば、御坂さん知りたがつてましたよ。護さんが去り際に何を言つたか。どうしようかな、思い切つて話しかやおうかな」

ぞぞあああと背中を冷や汗が流れしていく感触を覚える護。明らかに佐天は脅迫している。

要するに、『つこてきてくれれば、あの話は言こませんけどつこてこなければ……』といつ脅迫なのだ。

「分かつた、行くよ。でそのなんとかつていう店まだあるの
？」

「ここで断つて御坂の耳にあの話が入つたらと思うと寒氣がする護。
ここは素直に従うしかなさそうだと觀念したのだ。

「ええと、私が案内しますよ。こっちです」

なんだかにこやかな笑顔の佐天に護は（女の子ってみんなこんな風に黒いところあんのかな？）などと全世界の少女をてきに回すような不埒なことを考えていた。

「ここが、セブンスミストですよ」佐天とあつた場所から20分もしないうちにセブンスミストについた。どんな建物かと思つていた護だったが、想像以上にでかい建物に圧倒されていた。

「ここって、デパート？」

「そうですよ？あれ、護さんは知らないんですか？」

「僕は、まだここにきて4日だしねえ。それに過去にもこの街にいたらしいんだけど記憶がなくてね・・・」

後半は嘘であるが、確かに護は散策のときもここには寄りらずにきたので、このデパートのことはさっぱり知らなかつた。

「え？護さん。記憶喪失だつたんですか？」

驚く佐天。だが次には怪訝そうな表情になつた。

「でも、そう言えば私の名前は知つてましたよね？」

うつと詰まる謹。昨日のあの時、うつかり『佐天さん』と語りかけてしまつたのを忘れていた。

「じゃあ、謹さんと私つてどこのかで知り合つたことがあるんでしょうか？」

佐天の問いに即答できない謹。知り合いといえば知り合いと呼べるかもしれないが、直接話すタイプの知り合いでなく、雑誌という媒体を通しての一方的な顔見知りというほうがあつてゐる気がする。

「うん……記憶がないからよく分かんないけどそつかもね……って向こうからやつてくるの君が言つてた人たちりじゃないの？」

「あ、本当だ。初春、御坂さん、こっちです！」

なんとか話をそらすことに成功した謹だが、一難去つてまた一難、おそらくこの後待つてゐるであろう、質問タイムと電気姫のビリビリショーを予想して一段と冷え込む思いをする謹だった。

その後、やはり初春と美琴からは質問攻めにされたが、電気ビリビリショードだけは免れた。（佐天が必死に説得してくれたことが大きい）

というわけで、謹は現在、佐天や美琴たちとは離れて、書店に入っている。佐天たちは向かいの服屋で品定めをしている。

「ねえ、初春? なんで、ジャジメントのワッペン付けてるわけ?」

「最近、ちょっと事件があつて警戒してるからですよ」

「ふーん……仕事熱心だねえ……でもせめてここに来て時ぐらいゆつたりしなさいよ!」「ああ!佐天さん、何するんですか、ワッペン返してください!」

ほのぼのとしていていいなと感じる護だが直前に、ふと違和感を感じた。

(まてよ……このメンツで『パーティ』でなんか覚えがある場面だぞ……までよ、たしか初春が狙われた時は『セブンスマスト』にいるとき……)

その時だつた、プルルルル!と携帯の着信音が前方から聞こえてきた。ここからでは誰の携帯が鳴ったのかは分からぬ。だが護には確信めいたものがあった。いまこの状況でかかつてくるとすれば……それは黒子からの初春への電話だ。

「どうした。だれからの電話だつたんだ。」書店から出てきた護の質問に初春は緊張した面持ちを向ける。

「落ち付いて聞いてください。実はここ最近、あちらこちで爆発事件が起きてるんです。そして今、このアパート内に犯人がいる可能性があります。だからお客様たちを外に避難誘導しなきやなりません。佐合さんは外に避難を、御坂さん、護さん、誘導を手伝っていただけませんか?」

「ちょっとまつてよ。せつかくだから佐天さんにも手伝つてもらおう」

護の思わぬ言葉に3人は戸惑つた表情を見せる。

「ほんとは佐天さんも初春さんの手助けしたいいんじゃないのか？自分には素直が一番だよ？」

嬉しそうにうなづく佐天。だが初春は首を振つた。

「万が一の時に、民間人である佐天さんが巻き込まれたら大変なんです。あきらめてもううしが……」

「

「じゃあ、僕が一緒に付いてるのはどう？ 僕の能力『重力掌握』ならたぶん爆発が起つても佐天さんを守れると思つけど？」

「

この言葉に初春はしばらく悩むそぶりを見せたが、けっきょく了解した。

「じゃあ、みんなで手分けしてお密さんを誘導しよう。」そういうわけであちこちで手分けしてお密さんの避難誘導を行うこと15分ほどで、大体の密は外に避難が完了した。

(しかし……まだどこかにいるはずだ……たしか、あのウラナリは女の子にカエルの人形を渡して、それを爆弾として利用して、初春を爆死させようとしていたはず……なら今は初春のところに向かわなきやな……)

今、もっとも危険なのは初春だ、なんだか上条さんも見かけなかつたし（学校で補習つけていたから当たり前なのだが）やけに連續虚

空爆破事件が起きるのも早い。

（僕が原作に介入したことで、少しづつ本来の話とのずれが出でているってことか ）

護は後ろで残つているお客がいかの確認をしている佐天のほうに向きなおつた。

「佐天さん。ちょっと気になることがあるから初春さんのところに行つてくる。そこを動かないで確認を続けてて！」

「わかりました。任せてくれださい！」

なんだかやる気満々な佐天に安堵しながら、護は広い通路を初春がいるであろう地点へと急いだ。

「おにいちゃんがこれをお姉さんにこれを渡してって。」

護が初春を見つけた時、ちょうど女の子が初春にカエル人形を渡そうとしている時だった。

「初春さんーそれを受け取っちゃいけない！それが爆弾だ！」

護の叫びに驚き、人形をあわてて子供から取り上げ、放り投げる初春。その人形がゆがみ、爆発が起きよつとする。

「くそ！間に合わない！」 いまからイメージしては時間が足りない。このままでは初春は爆死してしまう。

「くそおーー」

もはや、絶望か、そう思ったその時、「ピュンー！」といつ狂氣を切り裂く音とともにオレンジ色の光線が人形を貫き、粉々にした。

「これは……超電磁砲！？」

「危機一髪だったわね、大丈夫？ 初春さん」

おかしい……と護の本能が告げていた。これで終わるはずがない……と、本来美琴に起こるはずだったイレギュラーな事態は起きなかつた。本来ならあそこで美琴は「インを落としてレールガンを撃てなかつたはずなのだ。

（こつたい、なにが引っかかるんだ？）そこが分からぬ護はとりあえず周りを見渡してみて、そしてはつと気づいた。

（あのウラナリは風紀委員をターゲットにしてる。初春は今、風紀委員のワッペンをしていないのに狙われた。ということは奴はそとから初春をつけてたつてことだ……そして女の子に人形を渡して行かせたってことは中にもいたはず……その時にもし、佐天さんが避難誘導をしているところを見て、彼女も風紀委員だと認識していたら……）

「御坂さん。初春さんとの子を連れてはやく外に避難してください。それから外の路地裏でぶつぶつ言いながら歩いているウラナリメガネ男を探してください。ぼくはちょっと用事があるんで失礼します！」

「ちょっとあんた、何言つて……」美琴が何か言つ前に全力でダッシュし佐天さんのもとに向かう護。

（僕が馬鹿だつた…………昨日、この世界を自分の現実にすると決めておきながら、まだ元の世界の知識に頼つて、完全にこちらの世界を受け入れていなかつたんだ。その結果がこれだ……・絶対に佐天さんは死なせない！）決意を胸に護は通路を走つていく。

「ふう…………もうさすがに逃げ遅れた人はいないよね。にしても護さん遅いなあ。自分から私を守るつていつたくせに…………」

ぶつぶつ言いながらも護を待つ佐天。その前方にある非常階段から男の子がてくてくと出てきた。

「おねえちゃん。」

前から聞こえた声に顔を上げる佐天は、一いち方に大きな猫の人形を持つて走り寄つてくる男の子を見つけた。

「あれ、まだ逃げ遅れた子がいたんだ……ボク、そうしたの？迷子？」

「ううん。あのねメガネのお兄ちゃんがこれをお姉ちゃんに渡してくれつて」

男の子が差し出した人形を佐天が取ろうとした瞬間だつた。

「とつちゃだめだ！佐天さん！」突如響いた護の声に思わず人形から手を話す佐天。その人形はふわりと空中に浮かんだと思ったらすさまじい速度で後ろにすつ飛んで行く、その先に立ち右手で人形を

つかんだのは

「護 さん」

「ごめんね、守るはずだったのがこんな目に会わせちゃって。でも大丈夫。責任は僕が負う。こいつは僕が何とかしてみる。だから佐天ははやく逃げる。」

「いやですよ！なんですかその死亡フラグみたいな言い方は！やめてください！」

佐天は自分が死ぬことになるうともここに残るつもりだった。自分に力がないからこの事態に何も出来なくて人が死ぬなんて、佐天はいやだった。だが

「え？」気づいた時には佐天は子供を抱いたまま非常階段のところまで流されていた。

「ほんとにごめん、佐天さん。でも僕は 君だけには傷ついてほしくなかつた。そのため僕が傷ついても君だけは じゃあ、またあとでね。」護は横に設置されているシャッターの開閉ボタンを押す。

護と、佐天を隔てる厚いシャッターは佐天の叫びもむなしく間をふさいだ。

その日、セブンスミストは爆破された。だがその効果はひとつフロアだけにどどまり全壊どころか半壊にもならなかつた。

救助隊により佐天は救出された、だが佐天が供述したフロアに残つ

た少年、古門 護は発見されなかつた。

護は忽然とセブンスミストより姿を消したのだつた。

命知決定と連続虚空爆破（グラセント）（後書き）

なんだか、中途半端な終わり方になってしまったみません。

これで、いきなり佐天さんと護を悲劇的にしてしまいました。

もちろん、いきなりこれで主人公が死ぬなんてことはないのですが、安心を。

さて、護はどんな方法でセブンスマイルを救い、そしてどうに消えたのでしょうか？

それでは次回をお楽しみに（笑）

あ、一つ付けくわえさせていただきます、できれば感想をもう少し書いてくださいかなと思っております。それが私にとっての励みですので、どうかお願ひします。

けつこうの辛口な感想を頂いて、反省しまくりです。

レベル5は、能力開発を受けなければ使えないという指摘がありましたが、それに着いては自分も考えていました。本編を進めて行くなかで、なぜ護が力を持てたのかについて、解説していくたいと思っています。

後、一方通行とかなも、かてるんじゃないかといい指摘もいくつかもらいました

。確かにそうかなと思いますが、この順位になつたのには、ある人の作為があつたと考えてはいただけないでしょうか。

また、連続虚空爆破事件で、護が予測できたんじゃないかという御指摘ごもつともです。確かに重力使いなら探知できるという可能性は確かにあります。

ですが、あえてこういう風にしたのは、護がまだ全てを掌握できていないという設定にしているからです。最初から、自在に重力の応用技をすべて使えるようにすると、なんだかつまらなくなりそうなので、あえてこんな形にしてしまつた事

御許しください（涙）

護は、あれはてた廃墟に佇んでいた。ここになぜいるのかを護は知つていた。

向ひから、化け物達が迫つてくるのが見える。その後ろには、兵隊達まで。

佇む護の横に立つ少女は、いづ。

『自分にまじりても出来なかつた』

護がなにかをいう前に、少女は黒い空をバックに飛び上がる。

止めようと必死に伸ばす手を少女は、届くのに握らなかつた。

そして、敵の群れに正面から突つ込む直前、護の方にゆっくり振り返り言つた。

いつもと同じ、悲しげな微笑みを浮かべながら、こう言つた。

「忘れないで、生きていればかなうまた会える。だから、私のこと忘れないで」

止める間も無かつた。

彼女は、敵の群れに正面から突つ込み、そして……

護の意識はそこで途切れた。

「う…………」は…………? 護の眼に最初に入つたのは、天井に無数に張り巡らされたパイプ。

「いつたい…………僕は…………」

セブンスミストで佐天を無理やり逃がし、爆発物である人形を真上からからかけたGで覆うように地面に押さえ込んだ護だが、いきなり力を使い過ぎた反動か…………

頭を激痛が走り、力のイメージを最後まで保てず、結果的に僅かながら爆発エネルギーを逃してしまい、その時のエネルギーをモロにくらつた護は吹き飛ばされ意識を失った。

そして、気がついたらここにいる。暗くて不気味な部屋。体を起こし見渡してみて、この部屋がなんなのかを理解する護。

「ここは…………そうだ。だけどどうして…………」

「興味深いな。ここのことも知っているのか、少年」

広い空間全体に均等に広がるような声。その声を放つたのは…………

「学園都市、統括理事長…………アレイスター・クロウリー…………」

「ほう、やはり知っているか…………さすがは『異世界』の人間だよ護くん」

アレイスターの言葉に護は思わず身を震わせた。

「私が君の存在に気づいていないとでも、思っていたのかね。分かっていたさ、君が最初に現れた時から今まで私は君を見ていた」

護はすっかり失念していた。この世界に入り込んだ不確定要素を、アレイスターが放つておくはずがなかつた。

「プランの障害になる可能性がある僕を、消すつもりなんですか」

護の言葉に、アレイスターは苦笑したようだった、すこし含み笑いの入った口調で続けた。

「それなら、わざわざ君をここには呼ばない。暗部組織に君を殺させてたよ。ましてやレベル5になど任命しない。」

「じゃあ、何故…」

「魔術、この言葉を君は知っているはずだ」

護の中で時が止まつた。

「いや、悪いけど知らないです」

「嘘は良くない」

即座に否定された護。だが、そこで折れる護ではない。

「なにを、根拠に魔術を知ってるというんですか！」

「土御門…………彼の名を見たときの反応は、面白かった。」

「さりに、君は意識していたか知らないが『幻想殺し（イマジンブレイカー）』。これについても君はなにか知っている素振りを見せている。それが根拠だ」

護は自分の能天気さを呪つた。あまりにも不用心すぎた、だがアレイスターは何をさせるつもりなのだれう。

「納得して、もらえたかな？」

護はかなわない事を悟つた。

「ええ、確かに僕は魔術の事は知っています。そして、この後、起ころる事も」

「在るてこど予言できる…………だね」

「はい…………」

護には、アレイスターの考えが理解出来なかつた。いつたいなにをわせる気なのか…………

「君には、してほしい事がある。まずは私の指揮下で、新たな暗部組織を動かすリーダーになる事。そして、もう一つは…………」

「…………」

ここで、アレイスターは一度区切り、強調するよつてひいて書つた。

「幻想殺しの監視、及び守護をしてもらいたい。未来を知る君なら、彼に起ることもわかるはずだ……」

「それを断つたら……」

「あまり、お勧め出来ないね。君のためにも、そして君が守りとった少女のためにも」

「守りとった少女。それが誰をさしているかは明白だ。

「佐天さんを人質にするのか……」

「君が素直に動けば、なにも起きない。それだけのことだよ」

アレイスターは、もう一つ。思い出したように付け加えた。

「やうそ、君が率いる暗部組織にやつてもらうのは、街の中、外での外部組織の討伐だよ。チーム名は『ウォール』。壁という意味だ」

アレイスターは、目の前で唇を噛む護に最後の問いをかける。

「ああ、どうする?『重力掌握』」

佐天は、護のアパートの側を歩いていた。こうしていればそのうちに彼が帰ってくると信じたかったのだ。セブンスミストで護が消え

てから1週間。

護の行方はまつたく分からず、初春が教えてくれた、アパート前にきてみても、護は帰つてこない。

こうして、毎日通つて、落胆して帰る。それが日課となりつつあつた。

「なんで、なんで、あの人、が残つたんだろう……力がある護さんだけなら逃げられたのに、どうしてあんな終わり方にしちやうのよ！後で会おうつていったのに、どうして消えてしまったの？お願い、姿を見せてよ……」

下を向き、涙を流す佐天。つい先日知り合つたばかりの相手に涙を流す不思議さを思いながらも、佐天は涙を止められなかつた。

「佐天さん！」ビクッと佐天の肩が上がつた。この声は、そして自分が『佐天さん』と呼ぶ男性は一人しかいない。

「護さん！」向こうから走つてきた護は、息をせいぜい切らせつゝも、佐天のほうを真つ直ぐ見つめた。

「『めん、心配かけて……2度とあんな想いはさせない』

「私のことばかり考へないでください。自分のことも考えてください。護さんが傷付くのは、私は嫌です……」

佐天の言葉に頷きつつも、心中で手を合わせる護。

(『めん、佐天さん。僕が傷付くのは避けられないかもしねない。

だけど

護は心に決める。

(たとえ、どんな闇に落ちようと、佐天さんだけは守り通す)

護は、学園都市の闇に飲み込まれながら、自分の意思を貫きとおすことを決めたのだった。

その結果。たとえ、この世界で死ぬこととなつても

ひある田原あと暗部転落（後書き）

何度かあつた指摘も踏まえて、護を暗部組織に入れるよつ話を傾けることにしました。

これから、じうじいくか、非常に悩んでいますが、流れてきて、次の話は暗部組織を率いることになつた護の活躍を書いて行くことになると思います。

新たなチームを、書いていきますから。必然的にオリキャラが多く登場することになります。

どうか、温かい田で見守つていただければ幸いです。

バトルシーンをいれなくて申し訳ありません（汗）

とある暗部の掃討作戦

「くそ！ 弾が当たらねえ！」

「ンな馬鹿な話があるか！」

「しかし、確かにいたはずの場所に撃ち込んだはずなのに手こたえがないんですよ！？」

第19学区にある寂れた工場の中で、男たちの怒声が飛び交う。

彼らは手に手に銃器を所持している。学園都市では建前上、アンチスキル警備員でもない限り銃器の使用は禁止されている。それを完全に無視する形で短機関銃サブマシンガンや拳銃ピストルを持つ男たちは何者なのか。

「そお、遠くには隠れられないはずだ。全員で手分けして探せ！」

リーダー格の男の指示のもと、工場内に広く分散して捜索を始める男たち。その斜め上、天井近くの柱の上で一人の少年が男たちを見据えていた。

「ひい、ふう、みい・・・・・二十人前後ってどこか。先に倒した5人も含めて約25人か・・・・・いつたいどこからこれだけの人数が湧いて出たんだ？」

首をかしげながら、少年、高杉宗兵は外にいる『仲間たち』に頭部に装着したヘッドセットを通じて連絡を取る。

「敵の人数は約25人。そのうち先ほど5人を倒したので、残存す

る敵兵力は20人前後。敵は銃器を所持しているが、学園都市外部では複数の組織で使われる者のためどこの組織かの特定ができない、まあ、事前の報告で正体は確定しつつあるが、用心に越したことはない。もう一度奇襲をかけて外に追い出すから後は頼むよ。『少女軍団』？』

連絡相手の抗議の声をヘッドセットのスイッチを切り強引に無視した宗兵は懐から学園都市製の『機能性炸裂弾（クラスター弾）』発射用の小型射出器を取り出す。

「さあて……もうひと暴れさせてもらおうか」「

工場の外では、金髪碧眼の外国人少女が門の前に立っていた。

「まったく宗兵の奴は、デリカシーがないんだから！ まあそれはそれとして、護くんも無茶言うわね。敵を殺さぬよう各門まで誘導しろなんて」

工場の敷地内には東西南北に一か所ずつ、計4か所に門が設置してある。

現在、そのすべての箇所を彼女たち『ウォール』が押さえていた。

「でも、みんなで誓ったもんね。学園都市の駒にならないように、闇の中につても自らの信念を貫ける組織になるって」

少女、クリス・エバーフレイヤは自らの力を使い、周囲に転がる鉄骨を宙に上げる。

工場の中では銃声と男たちの叫びが聞こえる。宗兵が奇襲をかけたのだ。

「まあ、あいつの『無限移動』なら大丈夫だろうけども……」

「無事でいてよ……」

そんなことをクリスがつぶやいた直後、男たちが工場のドアから外に転がり出ってきた。

「……」信じられないものを見る目でクリスを見つめる男たち。なにしる、田の前の少女の周辺には無数の鉄骨が浮き、その先は明らかにこっちに向いている。

「外に出られれば、助かるなんてほどこの世は甘くできませんよ？」動搖する男たちの前方に次々と鉄骨が撃ち込まれ、彼らの動きをけん制する。

「第1班は少女に対して射撃開始！ 2班と3班は左右に分散、最寄りの門から脱出しきろ！」

兵力の分散になることを承知の上でリーダーは指示を出した。たどえここであの少女に殺されても、最終的に部下たちが1人でも脱出できればいい。そう思っていたリーダーだったが……

「リーダー！ 逃がすわけには……いかない……」

「悪いけど、ここでアンタたちを逃がすわけにはいかないのよね」「左手では男の1人が宙を舞い、右手では稻妻と共に電光が走る。

「リーダー！ あの少女化けもんです！ こちらの弾が一向に当た

りません！」

クリスは鉄骨をすべて投げ終わった後、今度は男達から放たれる銃弾をすべて空中で止め、逆に男たちの前方に撃ち返していた。彼女の能力『念動霸王』は念動力系最強のレベル5であり、その力は男達に絶望を与えていた。

「くそ！ 左右に攻撃が集中しているうちに脱出する。何人か残つて射撃を少女に集中させつつ、南門に向かうぞ！」

幸いなことに、田の前の少女の近くには鉄骨はもう存在しない。したがつて進路をふさがれる心配はない。足音も立てず、残った男達が懸命な射撃をクリスに放つていてるすきを突き、男達は南門前に止めてある緊急避難用のバンに乗り込む。だが・・・・・

「リーダー！ 門の前に学生が・・・・・どうします！」

南門の前には高校の学生服らしきもの着た少年が立っていた。ここで强行突破を図れば、学生を巻き込む可能性が高い。だが、悩んでいる時間などあるはずがない。

「かまわん！ 必要とあらば学生の命の1つや2つ犠牲にしても脱出することを優先する！」

猛スピードで南門へと疾走していくバン。その車体が容赦なく少年の体を吹き飛ばす・・・・・はずだった。

しかしそうはならなかつた。

なぜなら突入するはずのバンは護にぶつかることもなく、むなしく

宙に浮かびタイヤを空回つさせていたからだ。

「いつたい、なにが 」 いまだ状況を理解できていないリーダーたちは次の瞬間答えを知った。

空中に浮いていたバンが突然支えを失ったかのように落下し、その落下の衝撃に内部の人間は上にたたきつけられたり下にたたきつけられたりと散々な目にあった。

そんな中からうじて軽傷ですんでいたリーダーは車体が歪んだバンの前にやってくる少年の姿を見た。

状況から考えて今の出来事はこの少年により引き起こされたものだわうとリーダーはよつやく理解した。

「ありがとうございます、終わりにしませんか？」

静かな、しかしある思いのこもった声で護は告げる。

「あなたの方の仲間はすべて拘束しました。1人の死者も出ていません。僕たちはあなたがたを殺すつもりはない。あなた方にも帰るべき場所があるはずです。我々と協力してくださいれば、あなた方を何としても国に返すよう努力します」

男達は信じられない目で護たちを見る。

「そんな甘い話を俺たちが信じるとでも思っているのか？」

あざ笑うかのよつて言ひ口でリーダーに護は少しため息をつきつつ告げる。

「信じる信じないは自由です。しかし後数分もしないうちに警備員

アンチスキル

が到着します。それらに逮捕されれば、待つのは悲劇でしかないと
思いますよ。そうでしょう? なにしろあなた達は、外部機関の武装
工作員ですからね。それもどびきりの大物組織。たまげたよ、まさ
か CIA 日本支部所属員が潜入してたなんて」

男達の顔に衝撃が走る。自分たちは監視されていったというのだろう
か。

「この学園都市内にはとある無数の監視網が張り巡らされているん
です。ぼくらはその情報を受け取れる一番近い立場に立っています。
あなた方の情報は上からの報告でだいたい把握していました。まあ、
確実に確認が取れていたわけじゃないんですが、あなた方の表情を
見れば一目瞭然ですよね」

愕然とする男達を見ながら護はどじめの降伏勧告を行つ。

「さあ、どうします。これは学園都市としての意思です。抵抗する
気なら我々だけではなくこの街 자체を敵に回すことになること重々
承知して考えてください」

数分後、降伏を承知した男達を工場から出てきた宗兵が自らの『無
限移動』を使って男達をアレイスターが指示した建物に移動させる。
今後、男達は各国における学園都市からのスパイとして生きること
になる。

「それにしても、恐ろしいわね。統括理事長、アイツらが侵入し
ていたことを承知の上で行動を起こすまで潜伏させてたわけよね」

東門から戻ってきた黒のショートヘアの少女。その外見は、学園都市レベル5、第3位の『超電磁砲』御坂美琴と瓜二つである。

「美希、お疲れ様。だけど、いつしてみるとホントにそつくりだな、美琴に……」

護の言葉にすこし頬を膨らませる美希。

「当り前よ、アンタが知っていたのは意外だったけど私はお姉さま（オリジナル）の遺伝子を利用した『量産能力者計画』における0000号。すなわち完全なクローンだもの。天井亞雄の目をこまかすために自我を持たない失敗作に見せかけていたけど、アイツの研究の中で唯一の成功作が私」

すこし、虚ろな瞳を向ける美希。

「でもアンタが名前を付けてくれたときは嬉しかった。お姉さまのクローンではなく、一人の美希という女として生きていこうと思えたのは護のおかげ。感謝してる」

「そう……美希だけじゃない……私も……護に感謝してる」いつの間にか護の近くまで来ていたのは、西門を守つていた竜崎哀歌。

「化け物の私を……女の子として……見てくれたのは……
・・護が初めてだった」

彼女の背中を見つめる護。その背中には龍の羽根のようなものが折りたたまれている。

「人外の私を……いつ暴走してもおかしくない私を……仲間と言つてくれた……だから私は感謝してる」

「みんな……すこし、しんみりとした雰囲気となる資材置き場だつたが、その空氣は長くは持たなかつた。

「なにが『少女軍団』よー。どんだけデリカシーがないのよあんたつて奴は！」

「こんな困難な作戦、[冗談の1つくらい]言わないとやつてられないよ。文句言いたきや護に言えよー！」

「自分のリーダーを侮辱するな！」

「ぎやあぎやあ騒ぎなら追いかけっこをする2人を見て、護はため息をつきつつ呟いた。

「とりあえず、アジトに戻ろう。」護の声と共に『ウォール』のメンバーは（追いかけっこをしているクリスと宗兵を除く）学園都市の闇へと消えていった

オリキヤラ紹介

『高杉宗兵』

暗部組織『ウォール』の構成員で護を除けばチーム唯一の男子。父親譲りの銀髪を持ち、イギリス人の父と日本人の母を持つ。

学園都市の学生であり、長点上機学園に書類上は通っていることになっている。

所有する能力は空間移動系のレベル4『無限移動』

あらかじめ定めた座標へなら、その距離を無視して移動できる。

『クリス・エバーフレイヤ』

イギリス人の両親の間に生まれた金髪碧眼の少女。

暗部組織『ウォール』の構成員の1人で書類上は霧ヶ丘女学院に通つていていることになっている。

能力は念動能力系のレベル5『念動霸王』。

念動系最強の能力を持つが、とある事情により書類上はレベル4とされている。

『御坂美希』

御坂美琴のクローン体である『妹達』^{システムズ}の1人で、『量産能力者計画』^{ディオノイズ}により最初に作られた『00000号』^{フルチューング}。

オリジナルの御坂美琴に瓜二つだが、髪は黒で染めている。

能力は、オリジナルと同じレベル5の『超電磁砲』。なお銃器の扱いにも長ける。

『竜崎 哀歌』

なんらかの理由で人の形をしている『竜人』の少女。神話にしかほとんどの出でこない存在だが、なぜ学園都市にいるかは不明。

『ウォール』の構成員であり、自らを『少女』『仲間』として見てくれた護を慕っている。

所有する能力は不明だが、学園都市のデータ上では『人外変化』といふ名がつけられている。

じある暗部の掃討作戦（後書き）

はい

やつと投稿できました（涙）

冬休みが終わつた後、宿題に追われていてなかなか時間がありませんでした。

さて、今回登場させたオリキャラの中に、1人だけ懸念しているキャラがいます。

お分かりとは思いますが、『妹達』の一人『〇〇〇〇〇〇』です。

じつはこのキャラ、原作でもいまだ正体がわからないキャラです。

なので、この際、仮説の一つを押し立てて登場をさせてしまえ！と勢いで出してしまつたのですが、後々さまざまな指摘が飛んできついでビクビクしております。

さて、年も明けまして、気がつけばたくさんの人私が作品を見てくださりつていたことに驚きと感謝の言葉がつきません。

あいかわらず、未熟な私ですが、本年もどうか温かく見守つてくれさい！

とある高架の決戦場

「くそ……なにが守るだ……結局僕は傷つけるだけじゃないか……」病院のベッドに横たわる佐天を前に護は立ち尽くしていた。

未明に行われた『ウォール』によるCIA武装工作員掃討作戦は無事に成功し構成員たちは各自の居場所に戻つて行った。

「護……辛いのはわかる……でも……ここに立ち尽くしても……その子は……それにこれは避けられなかつた……」

護に声を掛けるのは同じ『ウォール』の構成員の1人、竜崎哀歌。

彼女がなぜ護についているのかというと、じつは哀歌は護と現在同居中だからなのだ。

とある事情により学園都市内に住処を持たない哀歌は護の提案により、彼の家に住み込みで家事等を手伝つことを条件に同居しているのだ。

「分かつてる……分かつてるよ哀歌。だけど、だけどそれでも僕は……自分が許せない……」

護達が掃討作戦を行つていたとき、佐天は幻想御手を使いその後意識不明となつた。

そこまでは原作の通りであり、仕方ない面も少なからずあつた。

だが一つ違うことがあつたのだ。

それは佐天が幻想御手に手を出した理由である。

元からあつた能力者への劣等感に加えて、役立たずな自分のせいで大事な人に苦しんで欲しくないというのが理由だったと電話越しに対話した初春は言つていた。

つまり、今回の出来事で護は佐天を守るうと動いて結局彼女を追い詰め、彼女の悲劇への道を後押しすることになってしまったのだ。

「結局、僕は佐天さんを守ると決意しておきながら、善意の押し売りで彼女を追い詰めてただけだったんだ……」

その事実に気づくのが遅すぎたことを後悔しても手遅れだ。

「それでも…………護は…………その子を助けたいんでしょう？…………その子の前で…………謝つて…………自分の過ちを悔いて…………ありのままの気持ちを伝えたいんでしょう？…………」

護が心の底で願つてゐることを浮き彫りにしていく哀歌。

「護が選ぶべき道は…………2つ。一生…………そこで立ち尽くして…………後悔しつづけるか…………それとも自分の過ちを踏まえた上でそれを償う為立ち上がるか…………護はどうを選ぶ？」問い合わせつつ指を2本立てる哀歌。

「僕は…………」

護の瞳が揺れる、二つの道の狭間で翻弄されるかのよひ。

「僕は . . . 」

翻弄されながら護は自らの決断を下す。それは . . .
「さてと . . . 来てはみたけど . . . 事件性の欠片もない . . . と。護が言うからには . . . なにか起ころのだろうけど . . . 」

哀歌は護が示した事件が発生する可能性がある場所、つまり学園都市に無数に走る高速道路の一つだった。

護が下した結論は、事件の元凶の排除。即ち真犯人たる木山春生を抑えることだった。だがとある用事の為にすぐには現場に駆けつけられない。

そこで哀歌が、（護の下手くそな絵を頼りに）事件が起こるであろう現場に先回りし、リスクを排除し同時に足止めすることになつたのだ。そのリスクとは風紀委員の初春が人質となつていることだ。

可能なら初春を救助し、その上で安全な場所に避難させる。それが叶わない場合、最悪木山の注意をこちらにそらせ、そのすきに初春に自力で逃げるよう促すことになつていた。

「にしても . . . 護の予知 . . . 前からおかしいとは . . . 思っていたけど . . . まさか . . . 異世界から . . . 来たなんて . . . 反則よ . . . 」

事件発生場所を伝える祭、護は他言無用と念をおした上で血ひらの秘密を伝えていた。

「普通は……信じられないけど……今までの実例と……私自身の例もあるし……護の言うとおり事件が起きたれば……その事実は確定する……」

哀歌は空を見上げた、すみ渡る青空はこれから起らるかも知れない事件などまるで感じさせない。

「秘密……か……私も……護に話をなきや……
……いけないよね……」

悲しげにため息を漏らす哀歌。

そこで哀歌の耳は、猛スピードで近づいてくる車のエンジン音を捉えた。

「来た！」

接近を察知した哀歌は高架道路に付属する階段に身を潜め様子を伺う。護の話によると木山をまず警備員アンチスキルの部隊が止めようとするらしい。だが敵わず蹴散られ、ほぼ壊滅状態となるらしい。

護は、最優先は初春の救助であり警備員の戦いには介入しないよう哀歌に頼んでいた。そして木山の力を確認するよう念をおしていた。

「能力者でもない……ただの研究者なのに……な

んで護は あやこまで 念を押してたんだろ? 「

その理由を聞く前に護はさつさと用事にでかけてしまった。

「まあ とりあえず 観戦しますか あ 警備員が来た 」

完全武装の警備員一部隊に警備口ボ複数に背後には装甲車両まで控えている。

「これだけの部隊相手に あの研究者が 事件を起こせるはずが ん? 」

警備員に前方を塞がれ逃げ場を失つた研究者が車から降りて来た。事前にデータで確認した通りの顔、木山春生だ。

「まさか 本気で 完全武装の警備員相手に やり合ひつもりなの? 」

困惑する哀歌の田は次の瞬間信じられないものを目撃した。

木山の目が真っ赤に染まつた。そして包囲している警備員の1人が自らの仲間に向けて銃弾を放つたのだ。

「な?!. . . . このタイミングで 仲間割れ いや違う. . . . あの表情からして 操られてる 」

仲間に向けて銃弾を放つた隊員は驚愕の表情を浮かべていた。おそらく彼の意思で放つたわけではないのだ。

「となると ク里斯のような 念動能力系の力 ? 警備員に使えるはずがないから あの木山とかいう研究者が使ったとしか考えられないけど 」

哀歌が思案を巡らす間にも警備員と木山との戦いは続く。警備員たちは木山に向けて猛烈な射撃を加えるが、なにをどうしているのか木山の前の地面が隆起し盾となる。

お返しとばかりに木山が突き出した右手から凄まじい渦巻きのような水流が放たれ警備員たちを吹き飛ばす。

慌てて、警備ロボを前に出せば手から放たれるレーザーのようなもので円形に切り取られ。残存する警備員が銃を向けようとした途端、木山の手の動きに合わせて、警備員たちがいる場所に向かって一直線上が爆発し彼らを蹴散らす。

そのままじい行いが示すのはただ一つ。

「デュアルスキル
多重能力者 」

学園都市内で複数の機関によつて研究されながら、『脳への負担が大きすぎる』ため事実上不可能とされている事象。

それを田の前の木山春生は実現していた。

「護の言つたとおりになつた 今ままじゃ警備員は撃破される 本当は助けたいけど 敵の田が警備員に 向いてるうちに初春ちゃんを助けないと 」

「そりと階段を登り、木山が警備員と交戦する脇をすり抜ける

形で車に近づく哀歌。攻撃の余波でもぐりたのか初春は意識を失つていた。

「まあ……意識ないほうが……説明する手間が省けるし……後はさひとつ安全地帯へ……」

「おや、どこから現れたのかな？君は」

そう簡単に事は運ばなかつた。いつの間に警備員を壊滅させた木山が近づいていたのだ。

「あの子たちの知り合い……でもなさそつだな……君の顔には憶えがない……だがその子を助けようとしたといつことは私が知らぬ仲間というところかな？」

一步一歩確実に近づいてくる木山を哀歌は睨みつけた。

「あなたに……教える必要がある」とも「ある」とでも「ある」と思つてゐんですか……」哀歌の返事にすこしため息をつく木山。

「確かにそうだな。ではこれだけ答えてくれないか？君は戦闘系レベル4以上の能力者か？」

「ええ……まあ……」

木山は薄く笑つ。

「さうか、それは良かった」

笑いの意味を理解できない哀歌に向けて木山は答えを突きつける。

「丸腰のレベル1や3だつたら私は傷つける」と躊躇つただろうからな」

木山の言葉に不穏なものを感じた哀歌が初春を抱えながら上空に飛び上がった瞬間、横の車は凄まじい業火につつまれた。

「（手から火炎を放つた・・・まるで火炎放射器ね・・・と
いうか、いつたい幾つの力をつかうのよ?!)」

飛び上がり、いつきに跳躍して高架の下に着地した哀歌はその地面に初春をおき、なにやら唱え、再び跳躍し木山の前に立ち塞がる。

「その身体能力・・・肉体強化系の能力かね?」

「そんな・・・ところです・・・それはともかく・・・
護が来るまで・・・あなたを止めます」

木山は首を振る。

「君に止められると?」

「止めれるかなんて問題じゃありません・・・私は止めるために足搔く・・・護との約束を果たすために」

哀歌の答えに木山は軽く息を吐く。

「そうか・・・なら、その決意を実証してみろ!」木山の右

手から巨大な火球が放たれる。

「なめるな 私の決意は こんなものでは砕けない！」

哀歌の腕の動きに合わせて突如現れた巨大な炎の渦が火球を吹き飛ばし木山に襲い掛かる。

「くー？」

慌てて水流をぶつけ、炎を消し見る木山。だがその時には凄まじいスピードで接近してきた哀歌が懐に回り込んでいる。

「これで お終いです 」慌てて防御の構えをする木山だったがもう遅い。哀歌の拳が木山の腹に直撃する はずだった。

だが、次の瞬間哀歌の拳は宙をきつた。首をかしげる哀歌は20メートル先にたつ木山を見て原因を知った。

「テレポート瞬間移動まで 使ってる まったくなんでもありみたいね 」

木山は肩をすくめ、苦笑している。

「なんでもありなのは そちらもだろつ 私のこの力は擬似的に多重能力を再現した多才能力とでもいえる物だが 君の場合は見たところ多重能力者だ。肉体強化に発火能力の同時使用ときた いつたいどんな体の構造をしているか知りたいぐらいだな 」

木山の言葉に哀歌はわずかに唇を歪める。

「実際は……少し違うけど……そんなものかも……手を引く気になつた？」

「まさか……」の程度で私は引かない。いや、引くわけにはいかないのだよ」

再び放たれる火球。それを避け空中に飛び上がった哀歌。それを見計らつたかのように回りに異物が出現する。

「（アルミニウム空飛ぶ）テレポート空間移動で移したの？ でもなぜ……」

哀歌の疑問に答えるかのように木山は自らの手の内を明かす。

「すでに分かつていいはずだ。私は複数の能力を自在に扱うことができる。そして私はまだ手の内を全てさらけ出したわけじゃないぞ？」

「くつー？」

危険を感じ退避しようとする哀歌。だが回りをアルミニウムに囲まれていねつえに、空中では自由に身動きがとれない。

歯噛みする哀歌に向けて木山は最後の一言を投げかける。

「さうばだ勇敢な少女。君の勇気は立派だったが舞台に立つには早ステージ

すぎた
「

その言葉を合図に起爆した無数のアルミニ缶は凄まじい爆炎となり空中に毒々しい花弁を咲かす。哀歌の姿をかき消し火炎が爆ぜた。

とある高架の決戦場（後書き）

いやあ・・・大変遅くなつたうえに 話がトンボぎれで申し訳ありません！（汗）

最近、様々な事情により（インフルで倒れたり、食中毒でのたうち回つたりなどど）ロクにパソコンの前に座れぬ日々がつづき、まったく更新が出来ませんでした。お詫びいたします。

さて、今回は暗部戦闘の回で登場させた、竜崎哀歌の戦いを描いてみました。

彼女の超人的な身体能力を始めとする秘密は、のちのち解説していくつもりですが、また忘れるかもしれませんので、気づいた方は御指摘お願いします。

とある事件と遅れた英雄（ヒーロー）

「終わり……か」木山は自らがおこした爆炎を苦々しげに見つめた。

「成さねばならぬ」とがあるためとはいえ……子供を殺すのは気分の良いものではないな……」

わずかに後悔の色を滲ませながらも自ら選んだ道を進もうとする木山。

（「たとえ極悪人と呼ばれようとまわない……これが終わつたならどんな罪でも償う。どんな罰でも受ける。それでも今は悪の権化となるつとも成さねならぬことがある……」）

だがその耳に聞こえるはずのない声が飛び込んできた。

「現出せよ！ 破壊大剣！」
ディスクラクション・ブレード

哀歌の叫びとともに先ほどまで彼女をのみこんでいた爆炎が一気に吹きとばされる。

「なに!?」木山の驚きは単に彼女が生きていたからだけが原因ではない。それより信じられないのが目の前の少女が片手に全長が3メートルは越そうかという大剣を構えていることだ。

「（こつたいどうやつてあんなものを保持している…………いやそれ以前にあんなものをどこに隠し持っていた?）」

あまりにも理解不能な状況に混乱する木山を哀歌は上空から睨みつける。その眼に宿るのは『殺意』。

「さすがに……今は効きました……でもあれだけじゃ私は倒せない……私の能力は分類上は学園都市の中でもかなり希少な能力とされている『肉体変化^{メタモルフォーゼ}』です。そして私の能力に付けられた名は『人外変化^{わけ}』……その理由を見せましょウか？」

哀歌は薄く笑うと自らの『翼』を大きく広げる。

「馬鹿な……これはいつたい……」

目の前に広がるありえない事象に木山は困惑していた。最初は肉体強化系の能力者だと思った。

そして発火能力^{パイロキネシス}を見せたことによつて多重能力者^{デュアルスキル}者の可能性も考えた。

だが目の前の少女^{バケモノ}には、そんな理屈や理論がまるで通じない。

だれが合理的に説明できるだろウ。爬虫類じみた『翼』をふるつて空中にとどまり、3メートルを超す大剣を片手で構えることが可能な理由を。

「驚いてます？……当然ですよね……こんな姿を見せちゃ……どんな人でも『バケモノ』と思いますよね……」

「……」

右手に構える大剣を高々と振り上げる哀歌。

「ほんとなら」の姿で戦いたくはなかつた……嫌な過去ばかり思い出すし……。「の力を振るえれば……護との約束を果たせなくなるから……」

護との約束とは『足止めすること』それが守れないといつのが指すものは明白だ。

「それでももう止められない……傷つけられた私の血が……本能が騒いでる……前の敵を『殺せ』と……」

哀歌の顔に苦悶が浮かぶ、木山を殺すことを後悔しているのではないか、護との約束を守れないことを後悔しているのだ。

「わっわ、^{ステージ}舞台に立つことは早すぎた……そう言いましたよね？」

木山をまっすぐ見つめつづり哀歌は告げる。

「やうでもないですよ……私も何度も踊ったことがあるんですね……血まみれの^{ステージ}舞台で」

一機に振り下ろされた大剣は大気を切り裂き、同時にすさまじい衝撃波を放つ。やう、道端にたたずむ木山のもとに。

「ぐ！」慌てて空間移動し後方に下がる木山。先ほどまで自分がいた場所には月面に見られるようなクレーターができていた。

もし自分の反応が遅れいたらと戦慄する木山。しかもあれはただ

剣を振つただけの余波にすぎない。

一方の哀歌は舌打ちしていた。

「やはり空間移動が厄介ですね でも何度か見ていくつちに対策を思いつきました 」

再び衝撃波を飛ばす哀歌。当然木山は空間移動で避ける。

「同じ攻撃を繰り返しても無駄 なに！？」

木山の驚愕も無理はない。いつの間に木山の前に哀歌が廻りこんでいたからだ。

「あなたの扱う空間移動は確かに厄介ですが 『特徴』^{テレポート}さえつかんでしまえば、

対処方が見えてきます。あなたはものを飛ばすことは自由自在のようですが 自らの移動に関しては縦か横にしか移動していませんよね？ そして私の一撃を避けたあなたは200メートルほど後方に下がった 表情から見てあれが全力のようなので 予想出現地点を予想して先回りさせてもらいました 」

とつさにふたたび空間移動を行おうとする木山の腕を哀歌はがっちりとつかんだ。

「逃がしませんよ？ 」

そのまま恐ろしい腕力で木山を投げ飛ばす哀歌。猛烈な勢いで宙を舞いながらも木山は再び空間移動を使う。だがそれは哀歌に先読み

されている。

「同じ手は2度は通じないといつのは……常識ですよ?」

哀歌の右手が大剣を振るい、そのすさまじい斬撃が道路の一部を崩落させる。

「くそ!」

なにやら風をまとわせ、直接地面にたたきつけられるのを避けた木山だったが危機はまだ続く。

「古来の力よ現出せよ!『破壊炎撃』!」
フライイライズ・デストロイヤー

声とともに振るわれた大剣から巨大な炎の斬撃が放たれる。

こんなものをまともに喰らえれば木山は一撃で灰塵と化してしまつ。だが空間移動を行うには時間が足りない。木山は自らの運命を悟つた。

「(もはや……これまで……か)」

覚悟を決め、目を閉じる木山。そこに容赦なく炎の斬撃が遅いかかる。

「?」

木山は首をかしげた。来るはずの衝撃がいつまでたっても来ない。まるで火炎が消えてしまったかのように先ほどまで感じていた熱波まで消えている。

「いつたい、なにが……」

目を開けた木山はそこに信じられないものを見た。

炎の斬撃が止まっている。いや正確にはもはや斬撃ではなくただの炎の塊だ。何らかの力が360度すべての角度からかかり炎を押しとどめている。

「この力……たしかデータにあった……学園都市レベル5の第4位。『あの子たち』の協力者。『重力掌握^{グラビティマスター}』！」

驚愕の表情を浮かべ木山は前方、茫然と立ちつくす哀歌の肩に手を置く少年、古門 護に視線を向ける。

「哀歌。もう十分だ。後は僕に任せて」

「私……どうしても……逆らえなくて……護との約束まもれなくて……バケモノになつて……」

「分かつてる！分かつてるよ。でも哀歌忘れちゃいけない。君は『怪物^{モンスター}』じゃない。僕たち『ウォール』の仲間で、僕の友人。そして優しい女の子だ。これ以上君に化け物になんてなつてほしくない。」「

護は一步前に出る。

「だから . . . 決着は僕がつける。哀歌のためにも、佐天さんのためにも、そして」

護は近くにある階段に視線を向ける。そこから上がってくるのは

「美琴のためにも」

「あんたに . . . 呼び捨てされるのも癪だけど。いまはそれどころじゃないわ。協力してもらつわよ『重力掌握』？」

「言われなくてもわかってる。元凶倒してすべてを終わらせよう」

学園都市の頂点にたつレベル5。そのうちの2人による猛攻が始まつた。

となる事件と遅れた英雄（ヒーロー）（後書き）

今回は異様に短いです。ともかく哀歌の戦闘を描き終えましたがいかがでしょう。

見ていただければ分かると思いますが、この哀歌というキャラクターには非常に自由なポジションを取っています。すなわち科学側、魔術側どちらでも活躍できるようにしておるのですが……。

このペースでこつこつ書かなければなりません（涙）

戦いの終焉 新たなる闇

「ふ、『超電磁砲』と『重力掌握』か……学園都市が誇るレベル5の2人と闘うことになるとはね。正直、不安になつてきたよ」

「だったらサシサと降伏したら？ アンタが逃げ切れるわけないわ」

「そりは、いかない。私にはまだやらねばならぬことがある。それが終わりさえすれば幻想御手事件で巻き込んだ人たちは解放する。だれも傷つけるつもりはない」

淡々と語る木山の言い草に美琴の中の怒りが爆発する。

「誰も傷つけない？ こんだけたくさんの人を……佐天さんまで傷つけておいて傷つけてないとよく言えるわね！ こんなひどいことを見逃せるわけないでしうが！」

「また美琴！ この人……木山にもどうしてここまでしなきやいけない理由があるんだよ！」

怪訝そうな表情で護を見る美琴。当たり前だ。今日の前にいる元凶をもつとも倒したいはずの護がその元凶を庇つ発言をしたのだから。

「木山さん。あなたがここまでして……幻想御手事件まで起こして巨大な演算装置を必要としたのは、生徒たちを救うためなんでしょう？」

木山の顔が驚愕に染められる。

「知っています。あなたが所属していた研究機関で行われた実験。『暴走能力の法則解析用誘爆実験』として関わった『置き去り（チャイルドエラー）』の子供たちは……その実験の影響で意識不明となり、いまも眠り続けている。あなたはその回復手段を探るために『樹形図の設計者（シリーダイアグラム）』を利用してようとしたが……その要求は23回にわたって拒絶され続けた……なんとしても生徒たちを助けるためにあなたが代替の演算装置とするために作ったのが『幻想御手（ペルアップ）』……確かに無数の人間を利用して作り上げた脳波ネットワークなら、あなたの生徒は助けられるかもしません。ですが……そのためにどれだけの人をあなたは傷つけてるか分かっています？」

「なぜだ……なぜ私の過去をここまで知っている？だいたいあの実験のことを見守る学生である君がなぜ知っている？」

木山の顔に驚愕と困惑の色が浮かぶ。木山が隠している事情。それすべてをさらけ出していく目の前のレベル5に木山は恐怖していた。

「そりやー！だいたいアンタがなんでそんなこと知ってるのよー！」

驚愕している美琴の方にジェスチャーで後で教えるの合図を送る謹。

「さあ？なぜでしょ？今あなたに話す義理はありません。それより答えてくださいよ。どれだけの人をあなたが傷つけたかわかってるか？」

「さつき言つただろう。私は幻想御手にとりこんだ者たちを傷つけ

はしない。私の為さねばならぬ」とそれ終われば、全員解放すると

・・・・

「それじゃあ、周りの人間は？」

護は強引に木山の話に割りこむ。

「周りの人間？」

「そうだ、周りの人間だ」

護は木山をまっすぐ睨みつける。

「あなたは確かに幻想御手にとりこんだ人間は傷つけないで返せるかもしない。でも周りにいる人間を傷つけているのを忘れてないか？ こうしてる間にもあなたは幻想御手という凶器で倒れた奴らの心をえぐり続けてるんだぜ？ 傷つけてないなんて言葉。堂々と言えるわけないだろ！ それに今のあなたの姿みて生徒たちが喜ぶとでも思つてんのかよ？」

「なに？ ……」

「木山^{せんせい}春生が傷つけられた自分たちのために、身も心もボロボロにしてその手を汚して、人を外と内の両面から傷つけているなんて …… 生徒たちが認められると思つのかよ！」

「く！」

「こんな方法で助けられたって生徒たちが苦しむだけだ！ 生徒たちが望んでいるのはただ一つのはずだろ？ 木山せんせいと会うこと

だろ？ あんたがこのまま突き進んで、結果として生徒たちを救えたとして、その生徒たちの前にアンタがいなきや意味がないんだよ！ そして今のまま進んだらあんたは、生徒たちの前に立てない！

「

「（シリーダイアグラムに23回拒否されている時点で、木山は学園都市上層部、統括理事会の一部に確實に目をつけられている。もしここで木山が目標を達成してしまえば間違いなく木山は邪魔者として消される。それを避けるためにもここで何としても止めなきやならない！）」

「もつ・・・・・おそいんだよ・・・・・第4位。私の手は君の言つとおりすでに汚れきっている、すでに私にはあの子たちの前に立つ資格はない。ずっと昔のあのときですら、本来ならあの子たちの前に胸を張つて立てるような人間ではなかつた私にいまさらあの子たちの前に立つ資格など・・・・・」

「じゃあ、放棄するのか？ あんたの役割を。あんたはすでに教師じゃない。俺と美琴にとつては元凶。アンチスキル警備員ジャッジメントと風紀委員にとつては犯罪者だ。それでも『あの子』たちにとつてはあんたは昔も今も『せんせい』なんだよ！ 肩書きとか資格とかそんなの関係ないんだよ！ あの子たちにとつてのあんたが『せんせい』ならあんたはその子たちの『せんせい』であり続けなきやいけないんだよ！ 自分が罪を犯すかわりに生徒を救う。たしかに理由は立派だ。だけどそれが結局、自分が負うべき責任を入れ替えてるだけだ。『せんせい』でありつづける責任を、犯罪を犯した責任に置き換えてるだけじゃ

ないか！」

「もう、いい。君の意見はもういい。いまさら後悔してももう遅い。たとえ私の選んだ方法が間違っていたとしてもいすゞ動き出した流れは止められない！」

木山は護の言葉を意見をすべて切り捨てた。その姿はこう告げていた。（もはや、私は止まらない）

「もう、話し合いは終わりだ第4位。ここからは殺しあいことこうつか！」

瞬間、木山の右手からすさまじい水流が護に襲いかかる。

「ぐー！」といきなりGを横向きに変えて増幅させ護は水流を止める。

「第4位を、なめるな！」

一機に重力を増大させ水流をはじき返す護。

水流を避けるためにいつきに後ろに空間移動する木山を美琴が追撃する。
テレポーター

「あんたに、そんな事情があるなんて知らなかつた……それでも、それが人を傷つける理由になんてならない！」

雷撃の槍を放つ美琴だが、木山が作った透明なバリアのようなもののせいで防がれてしまう。

「それは複数の能力を使用して構成された避雷針みたいなものだ！
木山に電撃は通用しないぞ！」

驚愕する美琴にフォローを送る護。

「まったく……あきれるほど私について知っているんだな？
これはきみからつぶした方が早そうかな？」

不穏な言葉に身構える護に向けて木山は巨大な火炎を放射する。

「なんだ同じ手を使うんだ？ 正面からぶつけたってはじき返されることは分かつてるのに？」

再び重力をくわえてはじき返そうとする護。

「ふん……では、これははじき返せるかね？」

瞬間護の周囲に大量に現れる空き缶、

「な？！」

「君の能力『重力掌握』は文字通り重力を操る能力、たしかにその力は絶大だ。だがそれゆえに多方面への力の放出が君には難しいはずだ。なにしろ能力が発現したのがついこの間という話だ。そんな状態で多方面への力の放出のコントロールなど出来るのかね？」

いま目の前に迫る火炎放射をはじき返すにはそちらに重力を受ける

イメージが必要だ。

だが、強めの重力をぶつけるイメージを行うためにはそちらに集中する必要がある。

そんな状況で別の方から攻撃が加えられた場合、護には手の施しようがない。

やるつと思えばできないことはないかも知れない。

要は全方向にGを放つイメージをしてみればいい話なのだ。だが、ここで無差別に全方向に火炎放射をはじき返すだけの力を持つGを放出してしまえば。

近くにいる美琴まで巻き込んでしまつ。

「くそ！」

歯噛みする護。木山はそんな護に向けてほほ笑みかけた。

「さらばだ、第4位」奇しくも竜崎が陥った状況とおなじ状況の中、護は爆炎に飲み込まれた。

「古門！」爆炎に飲み込まれる護を見て絶句する美琴。

その爆炎から飛び出るように衝撃で吹き飛んだ護の体が美琴のそばに飛んで、転がった。

「おや、体は吹き飛ばなかつたのか。五体満足でいられるとはやはり第4位というところか……だが、もはや起き上がること

はできないだれつ。はやく病院に運ばないと手遅れになるぞ？』

「あんたは・・・・・あんたは・・・・・いつたいどれだけの人を苦しめたら氣がすむのよ！」

美琴の叫びに木山は唇をゆがめた。嘲笑わざわざした。

「私を止めるために立ち塞がつたのだ・・・・・犠牲は覚悟の上だつたんじやないのか？ それとも所詮は世間知らずのお嬢様。『悪は最後には倒される』というヒーローものセオリーでも信じていたのか？ 君はまだしらない。この学園都市の闇を。君はまだしない。自分が『限りなく絶望に近い運命を背負つている』ことを

なにを？と言ひ返そとした美琴だったがその言葉は出なかつた。なぜなら、田の前の木山春生の胴体に穴が開いたからだ。

は道路沿いに建つ一軒のビル。

「な・・・・・?」後ろを振り替える木山。その先にあるの

アンチスキル
「まさか・・・・・狙撃手・・・・・警備員か・・・・・

「や!」の君！ たちにその場から離れなさい！ これより警備員による鎮圧作戦を開始する。一般人ははやく現場から離れなさい！

』

突然響くアナウンスが木山の推理が正しいことを証明した。

「な！ 鎮圧つて・・・・・」

戸惑う美琴の口がいきなりふさがれた。

「ん！？」

いつの間に近づいたのか覆面姿の警備員が美琴の口を布のよつたもので押さえている。とたんに急速に視界が狭まり意識が遠のいていく。

「（こ）れ、昏倒効果のあるガスがしみこませてあるー。」

眠気に逆らおとすが、あえなく美琴の意識は闇へと沈んでいく。

闇に沈んでいく美琴の耳に最後に響いたのは無情な声。

「これより、容疑者木山春生を射殺します！」

無数の銃声と爆発音が響きわたるのを確認したところで美琴の意識は唐突に途切れた。

「う…………」は…………

唐突に視界が開き、まぶしいばかりの光に目のが真っ白になる感覚を覚える美琴。光りが收まり天井が見えるようになつて自分が病院にいることを意識する。

「あれ？ 私、確か…………」

木山との戦闘の最中、突如木山を警備員の弾が貫き、その後、背後に近寄っていた警備員に口をふさがれ、意識をなくした美琴だつたが。それでは病院にいるわけがわからない。

「なんで、病院に……とりあえず起きて……」

起き上がらうとして全身に走った痛みに思わず倒れ伏す美琴。

「おやおや、まだ起きるには早いと思うよ？」「あきれ顔で近づいてきた男を見て美琴の表情が固まる。

「リアルげ……じゃなかつた、古門の担当してた医者よね？」

「古門……ああ、彼か。そうだね、ついでに言つと今回も彼の担当をしていいよ。私は複数の患者を担当することも珍しくないんでね」

「古門は無事なんですか？！」

「他人の心配より少しばかり自分を心配したらどうかね？ 全身打撲にいくつかの裂傷による大量出血で一時は危篤状態だつたんだよ？」

カエル顔の医者の言葉に驚きを隠せない美琴。

「私、そんな重傷だつたんですか？」

「まあ、たしかにね。それでもあの現場から生還できただけ君はましかもしれないよ」

へ？と困惑の表情になる美琴。その美琴に力エル顔の医者は一枚の写真を見せた。

「これが君がいた現場の今の姿だ」

力エル顔の医者が見せた現場は、まさしく天災級の破壊が引き起した地獄絵図と化していた。

美琴と護が戦つていたあの高架道路。

それを含む現場一帯が巨大な穴となっていた。

さうに遠巻きに離れていた警備員の装甲車や特殊車両がフレームが完全にゆがんだ状態で廃墟となつたビルに突っ込んだり、橋の上から落ちて転倒したりしている。

「これ、 いつたい

「彼の仕業だね」

「彼つて

「きまつてるじゃないか 古門 護くんだよ

そんな馬鹿など美琴はその言葉を否定しようとした、だがあの場にいたのは警備員たちと護と美琴、そして木山春生だけ。自分にはみんな光景は作り出せない。木山にも可能とは思えない。警備員など論外だ。となると

「いぐらあいつでも、こんなこと」

「彼の能力は重力を自在に操ること だつたね？かれはあの場でその力を全力で使用したようだね 木山春生が射殺されようとした瞬間だつたそうだよ」

そうしてカエル顔の医者は当時の状況を語りだした。

「これより容疑者、木山春生を射殺します！」

無線で報告を終えた警備員の狙撃手はレンズの十字に木山の頭を重ねた。その時だつた

『超重力砲！』^{グラビティブースト} 無線機から突如少年の叫びが響いてきた。

なんだ？と首をかしげた狙撃手は直後に気づいた。この声は、学園都市第4位の声であることを。

次の瞬間、狙撃手が潜んでいた建物は狙撃手もろとも崩壊した。

「きみ！ いつたいなにを！？」驚き、抑えよつとする警備員の隊員を『吹きとばして』護は起き上がる。

「落ち付け！ 何をしてるかわかつてゐのか！」慌てて銃を向ける威嚇する警備員に護は視線を向ける。

瞬間、隊員たちは戦慄した、護の眼が真っ赤に染まっている。

「止まれ！」一人の隊員が上空に威嚇射撃を放つ。

だがその放った銃弾はいつたん上に上がった後、倍のスピードで『放つた本人に命中した』。

「なー？ くそ、かれも敵対者とみなす！ 射撃せよ…」

隊長らしき男の隊員の指示のもと、警備員の一斉射撃が護を襲う。だがその銃弾は届かない。護から放たれる強力なGは弾を押し返すと同時に重力の波となって隊員たちを吹きとばす。

上空のへりに乗る隊員は驚愕していた。今まで倒れていた少年が急に妙な攻撃でビルを崩壊させ、さらに銃を向けた警備員たちを文字通り『吹き飛ばした』のだ。

「！」「！」「！」
これより上空からの援護射撃を始める！

そう無線にこどなった直後、パイロット席かの機長が悲鳴のような声をあげた。

「どうした！」

「あの少年が！ あの少年が装甲車を吹き飛ばした直後にこちらに線を向きました。あきらかに狙つてます！」

「ただちに退避しろ！ ビル一戸破壊するレベル5だ。むやみに近づくな！」

慌てて高架道路から遠ざかぬとするへり。高架道路の下では遠巻

きに警備員の部隊と装甲車。さらごどりから出てきたのか、学園都市製の高性能ヘリ通称『六枚羽』が上空を旋回しつつ少年を狙つている。

「あんなものまで、持ち出すか？！」

少年1人に對してオーバーキルすぎないかと思つてしまふのはやはり彼が『能力者』ではないからだといえよう。彼はレベル5のもつ意味をしつかり理解していなかつた。

高架の下で無言で佇む謙。その瞳は真っ赤に染まっているが、そこにはなにも映っていないかのようにその包囲の輪を狭めつつある部隊や、上空のを舞うヘリに対して何の反応も示さない。

最初に攻撃を仕掛けた警備員部隊を吹きとばはしたもので、その後は行動をおこさない。

「なにを考えてる？ だが今がチャンスだ。意識を失っているうち
に木山を処分しろ！」

先ほどの攻撃の余波を受け氣絶してころ木山に近づいたある隊員たち。

その途端、護が動いた。

「ウウオオオオオオオオオアアアアアアア！」喉をひきさかんばかりの獣じみた叫びに隊員たちの動きが止まつた次の瞬間だつた。

上空を舞っていた戦闘ヘリ、六枚羽を含む、無数のヘリがすさまじい速度で地面に叩きつけられた。

「！！」驚愕する隊員たちだが状況を冷静に確認している暇などなかつた。なにしろ次の瞬間、彼らの体は真上から『押し潰された』からだ。

装甲車や特殊車両に乗つていたものは車両」と、生身の者はそのまま全身にかかつた異常な圧力によつてただの肉塊となつた。無数のシミが道路に広がり、包围しつつあつた警備員部隊は壊滅した。

「地獄だ」

後方に控えていた予備部隊を率いる隊長はおのれの不運を呪つていた。

「後方待機と言われたから、戦闘はないと思つてたのにこれじゃあんまりだろうが！」

嘆く隊長だが、死んでいった隊員たちに対しても失礼な発言に部下の副隊長がいさめる。

「隊長。そんなことでは、死んでいった仲間が浮かばれません！予備部隊としての務めを果たしましょう！」

「馬鹿野郎！ 六枚羽まで潰した化け物相手にビリヤツテ戦つもりだ！」

「無理を承知で突撃するしかありません！ 全部隊前に！特殊音波発射装置搭載車を先頭に進め！」

隊長を無視する形で副隊長は命令を出した。

特殊音波装置搭載車は、実は先ほどの部隊も装備していた。だが、ろくに使用する前に装甲車とともに飛ばされてしまったのだ。特殊な音波によって能力者の能力の使用を妨害するこの車両は、もはやこの戦いの切り札となっていた。

「ターゲット目標は自分が木山が攻撃されるまでは、行動を起こさない！ ゆっくりと距離を詰めろ！」

部隊は特殊音波装置搭載車を先頭に少しずつ、護に近づいていく。

「いまだ！ 音波発射！」 有効距離まで近づいた複数の車両から、強力な音波が護に向けて放たれる。

「グ！？ ウオオオオオオオオ！！」 再び咆哮とともに重力がかかるが、隊員たちを外れて近くの建物を倒壊させる。

「効果あります！」

「よし、今のうちに作戦を達成するぞ！」

一気に士気をあげた隊員たちが木山の確保と、護の処分に動き出そ

うとした瞬間だった。

「ん?」隊員たちが最初に感じたのは妙な浮遊感だった。

まるでプールの中で浮かんでいるような。そして足が地面から離れ、体が空中に上がる。

特殊車両も装甲車も浮かんでいる。そうこれはまるで『無重力』。そう言い終わる前に隊員たちを支えていた地面ごと彼らがいた一画が空高く舞い上がった。

地球には引力、つまり重力が働いている。本来かかっているその引力より軽い引力の場所が現れればどうなるか、その場所にすさまじい上昇気流が発生しその場にあるものをすべて根こそぎ上に持ち上げてしまう

その結果が、写真にあつた大穴である。

「で . . . その後、彼は氣を失つて倒れた。木山も同じだ。そしてここに運ばれてきた。あの破壊の中心にいただけあって重傷だつたが何とかしたよ。しばらくリハビリは必要だろうけどね。それより不思議なのが、彼に関することが全くといっていいほど取り上げられないことなんだ。警備員のほうでもすさまじい被害を与えた張本人だというのに、なにも罪を問い合わせに来ない。おかしな話だよ

」

美琴は黙り込み、思考を巡らしていた。

この医者の話が本当なら、護はなんだかとんでもない奴ということになる。第3位である美琴を超えるような実力を持つ怪物。だが、

美琴の知つてゐる古門 護に人が殺せるとは思えない。

現に憎んで当然の木山に対しても、最後まで話し合いで済しようとしていた。その護が警備員を惨殺。とても信じられない美琴だった。

黙り込んだ美琴を見て、ため息をついたカエル顔の医者は、むりはしないようにねと言い残した後、思い出したようにこいつ言った。

「ああ、そうそう、動けるようになつても当分彼の個室にはいっちゃダメだよ？ あれから、彼の友人という少女がずっと付いているんだ。入るのは無粋だろ？ それとこちらはすこしリアルな話だ」

一呼吸置いて、カエル顔の医者は美琴にとつて衝撃的な琴を告げた。

「本来は話すべきではないことかもしれないけど 学園都市統括理事会の一人がここ数日見舞いに来てるんだよ」

統括理事会は学園都市の上層部。統括理事長の下にある組織だ。そんなトップの人間がレベル5とは言え、つい数ヶ月前にこの街に入つた人間に何の用だというのだろう？

困惑する美琴に、カエル顔の医者はやんわりとくぎを刺す。

「今は、関わらないほうがいいと思つよ？ へたすると君まで飲み込まれるかもしれない」

へ？と向き直る美琴だがカエル顔の医者はそそぐと部屋を出てしまっていた。

「統括理事会」

誰もいなくなつた個室で美琴を思案を続けた。

そんな美琴の部屋の向かい側の病室で、無数のチューブを体につながれ、ポンベを口に装着され、無数の電極コードにつながれた状態でベットに横たわる護のそばに一つの人影があつた。

一つは少女の影。もう一つは初老の男性の影。

「しつかりしろ護君」

初老の男は実に残念そうな声で「」ついた。

「まだまだ、君は私にとって必要だ。わざわざ『来てもらひた』意味がなくなる」

意味ありげなセリフに少女、哀歌が訝しげな視線を送る。

だが男は気にするそぶりもなく、ドアから出て行くつとする。

「田が覚めたら少年に伝えておいてくれ。学園都市統括理事会の剣崎達也が君と会いたがっていたとな」

そのまま、どうぞと部屋を出していく剣崎。だが哀歌の眼にはなぜか剣崎の向かう先が先の見えない漆黒の闇に見えていた。

「護を、あんな所にはいかせないすでに闇に落ちていても、じれ以上深みには堕とさせない。だから起きて?護」

もつ何度も田になるであつて、護の額の汗をぬぐいながら、哀歌は空
を彩る星座に祈りをあげた。

やつと書きました！

やつといひか、『幻想御手』編終了です！……………と言いたいところですが、思いつきり途中から原作無視になってしましました……しかもあれだけ言葉で説得しようと/orしていたのに、最終的にはあんな事態に……………

わながら、やつひやたなーと後悔したりします。

この回では、ラストに護と関わる統括理事会のオリキャラを入れました。名前を考えるのに時間をかけたりして、ぐだらないことに時間を使費したりしてしまいました……………

あと、この回では一度は出してみたかった護の能力全力使用を描いてみました。この場合は『暴走』により引き起こされた現象となりますが、暴走状態の彼がなぜこれほどまでの力を發揮できたかについては、のちのち解説していくつもりです（とにかくここまで解説していくなかつたりする……………）

なにはともあれ、次から魔法世界にも入っていきます。これからさらに忙しくなるので不定期更新になる確率が非常に高いです。

あいかわらず迷惑かけてばかりの私ですが、どうか末永く見守ってください。

あとですね、感想なんかあつたらどうぞ送ってくださいとあります。励みになるので。

とある部屋と魔法少女

「ふわああああ…………よく寝たな…………」「護は伸びをして、ベットのそばに置いてある携帯電話に手を伸ばす。

「7月20日…………夏休み初日か…………もう『この日』が来たのか…………というかつてこの間も騒動があつたばかりなのに、イベントが立て続けに起こりすぎだと思うんだけどな…………」「

そう、ほんの数週間まえ、護は木山春生を止め、幻想御手事件を止めるために彼女と戦い、結果的に木山を止めることに成功した。
レベルアップ

だが、その代償はあまりにも大きかった。自分でよくおぼえていない『暴走』によつて『警備員アンチスキル』部隊を壊滅させてしまつた護はなんだかんだでいろいろと警備員に敵視されることになつた。暴走だつたのだから仕方ないのだが仲間を殺された側としては、だまつていられるわけがない。

その自分が何事もなくいつも通りの日常を過ごしていられるのは、やはり裏で上層部が根回ししたからだろう。とくに統括理事会の人、剣崎達也は護に何らかの関係がある人物の可能性がある。おそらく彼が根回しした張本人だろう。

「根回しのおかげで、罪に問われてないけど…………実際のところ人殺しなんだよな、今の僕は」「

ズーンと落ち込む護に優しい声がかけられる。

「また、落ち込まないで護…………あれは護にござつにかで
きたわけじゃない…………それにたとえ『警備員』に目を
つけられても、裏の私たちに表の人間が手を出せるはずがないよ？」

「

「そのことは分かつてゐるよ…………それより僕が心配なのは美
琴のことさ」美琴とはあの時共闘して木山に立ち向かった。そし
て護の暴走に巻き込まれた美琴も重傷を負つたが一命はとりとめた。
だが、その後からどうも美琴が自分に向ける視線に違和感を感じて
いたのだ。まるで猛獸に怯える小動物のような…………怯えと
困惑が入り混じつた視線。

「美琴は、なにか知つたんじゃないかな…………僕に関するこ
とを」「そうじゃないと思つ。たぶん護が警備員を惨殺したこと
がショックだつたんじゃない？ 暴走のせいだと分かつていってもシ
ヨツクは計り知れないと思うよ？」「最近護と話すときはだんだん
と、ときれどきれの話し方を無くしていけるようになつた哀歌。

「そんなものなのかな…………あの強気な美琴が…………
」「美琴のことは気になるが、それよりも今は気にしなければな
らぬことがある。

「なあ…………哀歌。『禁書田録』^{インデックス}つて知つてる？」

「ええ…………魔術に関わるものなら誰もが知る名よ？ 世界
中で封印されている魔道書を一字一句精密に記憶し頭の中に保管し
ている魔道書図書館みたいな少女のことでしょう？」

「今日、7月20日はうちの学校にとつての夏休み初日だ。そして

俺のいた世界で書かれていたことがこの世界にも流れはあるなり、

その『禁書田録』は本日中に学園都市に現れる

「はー? いくらなんでもそれは 大体たしか『禁書田録』はイギリス清教が管理してるはず それがいきなり学園都市になんて」

「それが来るんだ。禁書田録は一年ごとに記憶を消されている。そして今回目覚めたとき彼女は味方の魔術師を魔術結社の人間だと勘違いして、なんらかの手段でこの学園都市まで逃げてきたんだよ。そしてこの街の学生。上条 当麻に会いつ」

「前に話は聞いたけど、本当に彼は『右手で触れた異能を打ち消すなんてばかげた力を持つているの?』護の語ることが真実だと認め始めている哀歌にしても当麻が持つ力といつのはそうそう信じられるものではないらしい。

「ああ、それは間違いないよ。少なくとも美琴や美希の電撃程度なら軽く打ち消せられるはずだ」

実際に田の前で見た護としてはそれは分かりきつてこるが、やはり哀歌は半信半疑のようだ。

「まあ、それはともかく 僕がしなきやならないことは幾つかある。まずは上条さんの部屋に赴いて禁書田録さんインテグスがベランダに干されてないか確認しないと」

「べランダ?と首をかしげる哀歌を連れて護は当麻の部屋に向かう。

「なんか、まだ寝てるっぽいな」「そつみたいだね . . .

「…………」部屋の前まできた哀歌と護だつたが。『ひつや』卑
く来すぎたらしくインター ホンを押しても反応がない。

「どうあえず出直す?」「いや、たぶんしばらく待てば……」
そう護が言つた刹那、「ひつきやああああああああああああああ
まじい悲鳴が。

「な、言つただらう?」「ええ……」相変わらず正確な護の予言
に啞然としながら哀歌はドアノブに手をかける。

「哀歌? 鍵がかかつてゐからまだ開かない…………」「私には
開けられる。だつて魔術を使えるんだもん」哀歌がドアノブに触
れながらにやら咳くと一瞬で鍵が外れる音がした。

「す」「…………」「どうやったの?」「企業秘密」そんな
ことを言い合いながら2人は部屋に入つていいく。だが入る寸前護は
急に思い出したかのように後ろを振り返つた。

「どうしたの?」「いや、そついや、あの『腹ペコシスター』で
ある『禁書目録』^{インデックス}から素直に話を聞くには食べ物が不可欠だなと思
いだしたから、いそいで昨日哀歌が作ってくれた残りを持つてくる。
ついでに冷凍食品も

「分かつた、じゃあ、先にまつて話を聞いておく。急いで」「分
かつてる」

護は駆け足で自室に向かう。とにかく時間との勝負だ。『禁書目録』
は朝の内に自分から上条の部屋を出てしまう。その前になんとか話
しを聞いて引きとめなければならない。それが無理でも最低、護衛
の承諾ぐらい取つておかなければならぬ。そうしないと……神裂

が禁書目録を切つてしまつ。それは避けられれば避けるべき出来事だと護は考えていた。

「うん。モグモグ……私の名前は『禁書目録』で間違いはないんだよ。正式名は『index-librorum-prohibitorum』だけど、みんなはそう呼んでるんだよ」

数分前、護が持つてきた昨日の晩飯の残り（哀歌作）と大量の冷凍食品を護からみてもどういう賈袋してるんだという疑問を持つ勢いで平らげた禁書目録は腹を満たして満足したのか、ようやく自分のことを語りだした。

「それ、本当に名前か？ あきらかに偽名じゃねえか？」

不審そうに聞く上条に、まあ普通はそつだらーなとしみじみ思う護。護にしても、哀歌に出会つまでは魔術を見ることはなかつたので半信半疑であつた時期もあつた。

「インデックスの意味は、禁書目録よね。それでなんで逃げていたの？」

「魔術結社に追われてたからだよ」

「その追つていた魔術結社の人たちは、どんな感じの人たちだったの？」

インデックスは意外そうに哀歌の顔を見つめた。

「魔術結社の所、なんの疑問も感じないの？」

「感じないわ。だって私も魔術師だもの。ただしフリーだけど」

「証拠はあるの？……あなたが魔術結社の仲間じゃないっていう証拠と魔術師の証拠を見せてほしいかも」一気に警戒レベルマックス状態になつたインデックスに哀歌はすこしたため息をついた。

「やっぱり疑われるか……じゃあまず魔法名からいうね。私の魔法名は『debit a935』。所属はさつき言つた通りなし。仕える術式は世界各地の神話や伝説における竜や龍に関する伝承をモチーフにしたもので、具体的にはこんな感じ」

哀歌が右の掌を広げ、なにやら囁くと、その手に小さな炎が現れる。

「（）までやれば信じもらえる？ それに私が魔術結社の人間ならとっくに捕まってるよ？」

「うん……言われてみれば確かにそうかも……でも、どこにも所属してないのなら、なんで私に関わるの？」

「それは、俺が哀歌に頼んだからなんですよ『禁書目録』さん」

「あなたは誰なの？ そういうえば名前も聞いてなかつたかも」「俺の名前は、古門 譲。この街の学生さ。と同時にレベル5という肩書も持つてるけどさ」

首をかしげる禁書目録。どうやら部外者の彼女にレベル5がどうだとかは難しかつたようだ。

「まあ、レベル5についてはあとで話すとしてこいつからが本題だ。禁書目録さんは飯食つたあと、ここを出していくつもりじゃないか？」

「

「なんで、分かるの！？ 確かにそう思つてたんだよ」

「この護は、人の心を読んだりするのが上手いの……。それはそうとして、あなた、自分一人でこの先、慣れない学園都市の中で逃げ続けるつもりなの？」

「仕方ないんだよ、追われてるんだから……………」

「そこで、相談なんだけど……。この哀歌をお前の護衛としてつけちゃいけないかな？」

思わず護の顔を見つめるインテックス。

「なんで、あなた達がここまでするの？」

「なんでって言われてもな……。話聞いてて女の子がピンチなのを助けない手はないってどこかな。哀歌には哀歌で理由があるらしいけど……」

「私は自分の魔法名に込めた理由のためにも……いまこのあなたを助けなきやいけないんだ……。わが身の全ては贋つために……。それが私が魔法名にこめた思いなの……だから私はあなたを助ける

「

護は、上条の方も向ぐ。「上条はどうする。まだ全ては信じられないだろうから、協力しろとは言わないけれど……」

「

「確かに俺にはまだ良く分からねえ……正直あまりにも色々あります
きて頭が追いついていかねえ……でも、護が守るうとする奴が悪人
じゃないことはたしかだ。だったら俺も協力するよ。なんでもで
きる」ことがあつたら言つてくれ

「ああ、頼む」護は心中でだけ呟いた。（やつぱり上条さんは主
人公だよ！）

「さて、そつは言つたものの、實際今じゃすることが……そうだ
！ インデックスだつたけ？ とりあえずその服、この街じゃ絶対
田立つから着替えたらどうだ？」

「え？ 別にいいんだよ。これはね、『歩く教会』っていう強力な
……」「いいから、いいからとりあえず着換えろって、そう
思つだろ護？」

まで！触れるのは……と声を上げる前に上条の右手がインデックス
スの修道服にふれ……『歩く教会』は数秒後、びりびりにちぎれ
飛んだ。

「！」原作通りなのかよ？」修道服の切れはしが舞う部屋
の中で護と哀歌の溜息と少女の悲鳴が響き渡った。

じある部屋と魔法少女（後書き）

この回で出てくる『debita935』（わが身のすべては贖つために）のdebitaとはラテン語で『罪』を表す単語です。

この単語を探すのに、ほとんど普段意識しないラテン語を必死になつて調べ、やつと見つけました。正直もううたたです。

これから、もっと魔法世界について研究して、作品に入れていかねばならないことは思っていますが、くじけそうになるかもしれません。そんな私ですが、これからも見守ってください！

とある組織の迷子捜索

「不幸だ……」頭にいたそうな歯型をつけながら、歩いていく上条に護と哀歌はかける言葉を見つけられないでいた。

つい先ほど、糸余曲折の末、やつと護衛の話をインデックスに承諾させるところまで漕ぎ着けたのだが上条の原作通りのピンクハブニングにより完全にブチ切れたインデックスさんはすさまじい勢いで部屋を飛び出して行ってしまい結局のところインデックスさん護衛作戦は失敗に終わってしまったのだ。

「そう、落ち込むなよ当麻。大丈夫だつてあの子は俺と哀歌が探しておくれから。上条は学校に急いで帰る。下手すると遅刻になるぞ？ たしか補習があつたんだろ？」

「げ……朝からのパブニングのせいですっかり忘れてた！ わるい護、頼むぜ。ていうかなんで途中から入ってきたお前の方が俺より優秀なんだよ……」上条が愚痴るのも当たり前で護はこの街の学生となつてからかなりの好成績を維持している。

「（うーん……たぶんこの世界での立場がレベル5となつた時点で、『何か』によつて無理やり体裁を整えられたんだろうな……元の俺は数学苦手だったのに、なんかこの世界では得意科目に一つになつたりしてると……）」そんな護の内心を知るはずもない上条は、さつせと準備を整えフルダッシュで高校に向かつていしまつた。

「さてと……俺らはインデックスを探すことにするか！」「でも……どうやって探すつもり？ 私にはサーチ能力なんてないよ？」それとも護の予知で何とかする気？

確かに自分はインテックスがどこに現れるかは知っている。なぜならフードをインテックスが部屋に置き忘れているからである。ここもとことん原作通りだが、このまま原作通りに進むならインテックスはおそらく夕方にはもう一度アパートに来るだろ？

「確かに予知はできるんだけど……その場合に待つのがどちらも悲劇なんだよな……」「え？ どうこいつこと？」「哀歌の問い合わせに護はすこし首を振った。

「その話は、後です。とりあえず今はこの街でインテックスがいける範囲の場所で迷子探ししなきやならない。そのためには人手が必要だな……」

「それなら……『ウォール』のみんなに頼んだらいいんじやない？ たぶんみんな暇してるだろ？」「

しばし『ウォール』メンバーの予定について思い出してみる護。たしかに本人たちの提出している予定表（ウォールでは組織の構成員はリーダーにその週の予定などを書いたプリントを提出するのが義務となっている）には特に用事はなかつた。

「じゃあ、それでいい。哀歌手分けしてみんなに連絡入れよう」「了解

30分後、護の部屋には『ウォール』メンバーが勢ぞろいしていた。

「で、そんなことのためにわざわざメンバー全員を呼んだのかよ？ まったく人使いの荒いリーダーだぜ……」

「愚痴言わないの！　だいたい別に用事がないなら仲間同士助け合うのが私達『ウォール』の約束でしょう？」

「私としては、まあ暇だったし、協力するのは構わないけど……その子を探すのにわざわざ全員を呼ぶ理由ってなんなのよ？」

「それを……今から……護が説明するから……」

高杉宗平、クリス・エバーフレイヤ、御坂美希ら『ウォール』メンバーがそろったところで護は今回の迷子探しに『ウォール』メンバー全員を集めた理由を話し始めた。

「俺達『ウォール』の役目は外部組織の掃討、討伐なのは知ってるよな？　でももう一つ、統括理事長のアレイスターから『ウォール』に『えられている役目があるんだ』」

護の言葉に顔を見合わせる『ウォール』メンバー達。一番護の身近にいる哀歌さえそんな話は知らなかつた。

「それはどんな役目なの？　護君？」

「学園都市の中に『幻想殺し（イマジンブレイカー）』という能力を持つやつがいるって都市伝説を聞いたことはないか？」

「ああ、聞いたことぐらいはあるぜ。たしか『異能の力を問答無用で打ち消す力』だったけ？」

「そう、その『幻想殺し』っていう力を持つ能力者はここだけの話実在するんだ。その名は『上条　当麻』このアパートの住人で、俺

の友人だ。そしてアレイスターから依頼されたのは『上条当麻の監視、および守護』なんだ。アレイスターは『幻想殺し』つてのを自分^{プラン}の計画に必要なものだと考えてるらしく重要視してるのさ』

「リーダーの言つことをすべて信じるとして……じゃあ、なんで今回動く必要があるんだ？　たかが迷子探しがその依頼に関係するとは思えないんだが？」

宗兵のいうことはもつともで、『ウォール』メンバーは魔術というものについて（哀歌を除いて）知らないのだから、そう感じるのも当然だった。

「そこ」の所を理解してもらつにはまず『魔術』について理解してもらわなきゃいけないんだけどね……」「護は哀歌に田で合図を送り、哀歌は頷いて右手を上げる。

「これから、私が『魔術』を見せる……みんなよく見ておいて」

その後、30分ほどに渡つて哀歌の実演と護の説明が続いた。

宗兵は最後まで『魔術』について疑問視する立場を崩さなかつたが、他のメンバーは協力の意思を表明したため、『ウォール』の総意として『迷子のインデックス捜索大作戦』（クリス命名）はスタートすることになった。

9時間後、護は喫茶店のベンチで突つ伏していた。

すでに時計の針は5時をさしている。『ウォール』総出で第7学区を総出で探ししているのだから一向にインテックスは見つからない。

「インテックスは徒歩なうえに科学に疎いから、せいぜい第7学区内でうろちょろしてるだろうと甘く見たのが不味かったかな……まあ、それ以前にあの仲間達にも原因がある気もするけど……」

実は護は『ウォール』メンバーに何度か状況把握の為に連絡をとっているのだが、その時のメンバーの返事はこんな感じだったのだ。

御坂美希の場合

「ええと……とりあえずデパート関係はみてまわったわ。え？ ファンシーグッズを見たかつただけじゃないかって？ ははは、そんなわけないじゃ無い……ってあれはトラ次郎ストラップ！ そういうや今日限定販売があるとか広告にあつたけ！ これを逃す手は無いわよ！ ドドドドドド……（足音）」

高杉宗兵の場合

「悪い！ いま口クに話せる状況じゃねえんだ！ は？ 敵かつて？ んなわけねえだろ！ 敵だつたら応戦してるよ！ クリストの馬鹿が俺の安眠を妨げた拳句に追いかけてきてんだよ！ は？ それはお前が悪い？ うるせえな！ 眠つて脳を休ませることも必要なんだよ。それをあいつは分かつてね……おい、つそだろ、いつからそこに？ てやめろ！ 賴むから鉄骨浮かばせて脅すの止めろよ！ 普通なら死……ぎやああああ！ ブツ！ ツー、ツー、ツー！」

クリス・エバー/フレイヤの場合

「あー護くん？ごめん、今搜索を一時中止してるの。宗兵の馬鹿が昼間から堂々とサボってたもんで追撃中なのよ。え？そいつはいいから早く搜索に加われ？ そうもいかないのよーあいつここらでがツンとお仕置しないと習いぐせになつてこれからも同じ事するに決まつてるもん・・・・ん？あれは・・・また寝てやがるー逃走中に居眠りとかどんだけ余裕こいてんのよあの馬鹿はーブツー、ツー、ツー、ツー」

といつた具合に護と共に搜索を行つてゐる哀歌を除く3人は3人も搜索というよりは自由行動状態であてになつていなかつた。

「はー、仕方ない・・・・」うなつたら最終手段だ。できればこれは避けたかったんだけど・・・・

「どうするつもりなの？」

「アパート周辺でインデックスを追つていた2人の内の日本刀の使い手を探す。インデックスを最初に襲うのはそつちのはずだ。そして俺の記憶が正しいなら夕方、インデックスは赤の他人の上条を戦いに巻き込まない為にわざと危険を冒して、フードをとりに戻ってきて、切られる。それを止める方針に切り替えよう。できれば戦いは避けたかったけど仕方ない。全員に至急連絡を回さう」

真っ赤な夕日が沈んで行くのを女は見ていた。昔、自分が友人である少女の記憶を初めて消した日もこんな日だつた。自分は彼女を助ける為に最善の方法を実行し続けている。それは正しいはずだ間違つては無いはずだ。

それでも、心のどこかが、自分の考えを否定する。まだなにか方法はないのか、自分は可能性を否定していないのか？

首を振つて、沸き起くる感情を打ち消す元天草式十字淒教女教皇にしてイギリス清教所属の聖人である神裂火織は前方に建つアパートを眺めていた。魔術的なサーチを使って禁書目録を追つていた神裂だつたが、ここまできて、禁書目録が備えている『歩く教会』の反応がこのアパートに出たのだ。

「部屋まで特定しましたが、他人がいた場合にどうするかが問題ですね……反応が弱いのが気がかりですが早めに済ますとしましよう」

神裂は、自らが脇に構える日本刀を構え直す。『七天七刀』その巨大な刀を手に禁書目録の確保に向かおうとする神裂。だがその前に思いもしない障害が立ち塞がった。

「やつと見つけたぜ追跡者の魔術結社さんよ」神裂の前に立つのは高杉宗兵。

彼は護の連絡を受けたあと、テレポーター瞬間移動の利点を使って真っ先に現場に到着したのだ。

「なにが目的かは知らないが、ここで止めさしてもうつぜ日本刀ガール！」

宗兵の叫びに神裂は眉をすこし動かした。

「下がつてください少年。私は余計な人死にを出したくはありません

ん」

「その自信は、行動で見せてみろ！」瞬間、宗兵の体は一瞬で神裂の前まで移動し、その蹴りが神裂に放たれる。

「舐めないでほしいものです．．．．．」放たれる蹴りを人間離れした反応で躱した神裂は鞘に収まつたままの七天七刀を宗兵の腹にめり込む。

「がはあ！？」凄まじい速度でまっすぐ吹き飛び、瞬間移動する暇もなくそのままビルの壁に突っ込み気を失う宗兵。

そんな宗兵を見ながら、神裂は今の状態に考えをめぐらしていた。

「（能力者が、なぜ妨害をする？ 学園都市側には探知されていなはずなのに．．．．．）」

疑問は尽きないが、いまはまだやるべきことがある。

確保を急ぐ為に、一気に宙を飛び目標の部屋の前に着地する神裂。その前に禁書目録がいた。

「！－」慌てて逃げようとする禁書目録に向けて神裂は鞘から抜いた刀を振り下ろすとする。だが．．．．．

「止める！」空氣を切り裂くような声が一瞬神裂の手を止めた。声の方を向けば2人組の少年と少女。

だがその存在は、神裂にとって障害とはならない、いつぺんの迷い

もなく振り下ろされた刀はインデックスを切り裂いた。驚愕し硬直する神裂の前で守ろうと誓った少女が血にまみれて倒れて行く。

自分が、守ると誓った少女。それを傷つけてしまうというありえない状況に立ち尽くす神裂に声がかけられる。

「やつちまつたな神裂火織。サーチで探つて気がつかなかつたのか？今のインデックスの『歩く教会』は破壊されていることに！」

「そんな！」

「知らなかつたとは言え、傷つけてしまつたことは変えられない。事情を洗いざらい聞かせてもらおつか」

「あなたたちに話すことなど、ありません」

「そりかよ、だつたら・・・・・俺たち総出で聞きだしてやる！」

瞬間、護と共にいる、哀歌、クリス、御坂の3人が神裂に向かつていく。

「さあ、始めようぜ聖人！あんたの実力がどんなもんか見せてみろ！」

科学を象徴する暗部組織と、魔術を象徴する聖人。

巨大な力と力が1人の少女を巡つて激突した。

じある組織の迷ト搜索（後書き）

魔術編本格始動です！

いやあ、なかなか話しが進みませんね。

これから先、まだまだ道が長いなと心配になっています。

魔術と関わることになったウォールの面々がどうなつていいくのか、
これからも見守ってください（涙）

とある女性と暗闘対決

真っ先に飛びかかったのは、哀歌だった。

その人間離れした拳が神裂に向けて放たれる。

その拳をまともに受けた神裂の体が宙を舞う。「なに？ この力は、
いつたい 」

アパートから飛ばされ、アパート前の路地に着地する神裂に向けて
再び拳を放つ哀歌。

だが、その拳を神裂は躊躇し、避けざまに、蹴りを放つ

「つ！ ！」と同時に両手を十時にしてガードの構えをとる哀歌だ
ったが、そのまま衝撃を受けて吹き飛ぶ。

「哀歌！ くそ、あんた何者なのよ？」哀歌が飛ばされたのを見て、
クリスと美希は少し後ろに引く。ウォール1の格闘戦のプロの一撃
を軽々と交わしている時点で相手の実力が感じられた。

護は相手を『魔術師』だと言つたが、目の前の女がそうであるとし
て、彼女はまだ一度も魔術を使つていない。

「私達程度だつたら、魔術を使つまでもないと思つてるわけ？！」

「なぜ、あなた達が魔術のことを？」

「あなたに答える義務なんてないわよ！」

叫びと共にクリスは、ポケットから無数のパチンコ玉を取り出す。

「鉄球乱舞！」クリスの手から放たれた無数のパチンコ玉は空中に舞い上がり、一直線に神裂に向かう。

「遅すぎです……」瞬間に右に移動し、かわそうとする神裂だったが、直前鉄球が予想していたかのように向きを変えた。

「なに？」

「私の能力は念動力。パチンコ玉を直進させるだけのはずがないでしうが！」

パチンコ玉が勢いをつけて突っ込んでいく。神裂は再びよける構えを見せるが……

「拡散！」クリスの叫びと共に、進んでいた無数のパチンコ玉は、分散し、神裂に向けて全方向から襲い掛かる。

「さあ、これを避けられるかしら？　自称魔術師さん？」得意げに言つクリスだったが、直後首を傾げた、追い詰められているはずの神裂の口元がわずかに笑っていたのだ。

「こ」の程度で全力と見られるのは心外です……七閃！」瞬間、迫つていたパチンコ玉はその全てが切断され地に落ちた。いた斬撃が向かってくる。

「な？！　いつたい？！」驚愕するクリスに向けて鉄球を切り裂いた

「しまつ！ 」後悔する暇もなく、クリスの体を無数の斬撃 に見せかけたワイヤーが切り裂く 箕だった。

「おい、いくら聖人でも、複数の能力者相手に圧勝できると思わないことだよ？」

神裂の放った7本のワイヤーは、全てが地に叩きつけられ、押さえつけられ、その切れ味をなくしていた。

「これは 」

「これが僕の能力『重力掌握』グラビティマスター。普遍的にこの世界にかかる力を制御する。ここは僕の占有地フィールドだ。いくらあなたが強くてもこの星にいるかぎり、僕だってあなたとやり合える！」

護の手が高々と掲げられる。その手が指す真上になにか巨大な力が溜まつていく。

『重力鉄槌』グラビティックハンマー！ 」刹那、一気に振り下ろされた護の手と連動して、真上から集められた巨大な重力の塊が神裂に向けて襲い掛かる。

凄まじい轟音が走り、土煙に一帯が包まる。

「グフツ！」その一撃をまともに受けて、それでも倒れなかつたのはさすがといえるだろう。

神裂は、地面に出来た巨大なクレーターの中心で刀を支えにして、なんとか立っていた。

（うかつでした 禁書目録の回収を最優先していたとはいっても、ここまでの相手と遭遇することは想定していなかつた。不覚でした あとはスタイルに任せらしかなさそうですね ）

神裂がかけた、人払いの術式が効いているからよいものの、後で間違ひ無く大騒ぎになるだろう。

「終わりだ。禁書目録にこれ以上関わるのは止めてください。イギリス清教のこの街への介入を許すわけにはいかないんです。それが僕達『ウォール』の役割なんですから」

「なにを言つてゐるか、分かっているんですか？ 大体なんで私の所属を？」

「それを語る必要はないですよね？」 とにかく、禁書目録を助けるには、あなたたちを止めることができ必要なんです

神裂は、なにか言葉を返そうとしたがすでに体は限界だった。

神裂の意識は深い闇に沈んでいた。

「死んだの？」 完全に意識を失つた神裂に向けて拳銃を向けつつ聞く美姫は首を横に振る護に驚いた表情を向けた。

「あれだけの技を喰らつたのに、まだ生きてるつての？」

「こ」の程度で死ぬような人じやない。それに、気を失つたのは重力鉄槌の打撃からじやなくて、彼女の周囲の重力を操作して、重力鉄

槌を止められた直後に後頭部に一撃を加えたからだよ 」

「 なんて、やつ 護のあれを防ぐなんて、人間離れしすぎじゃない 」

「 僕らが言えないと思つけどね それより今はもう1人を抑えなきゃ 」

護が見つめる先、上条当麻の部屋に向けて階段を駆け上る哀歌がいた。

「 あれ、哀歌もう復活してたんだ！ 」

「 あいつの回復力は人離れしてるのは知ってるだろ？ さて、クリスはここで援護を頼む。美姫は一緒について来て。哀歌が先にいつて、時間稼ぎしてくれる。いいか、美希、相手は得体の知れない技を使う魔術師だ。油断しないで 」

美希は不敵に口元を歪める。

「 分かつてるって、心配しないで？ 私は腐つても学園都市レベル5の第3位の御坂美琴オリジナルと同じ力を持つてるんだから。オリジナルのことはまだ許せないけど、私は。前みたいな先走りはしない 」

「 なら良いけどさ よし、じゃあ行こうか 」

護は指し示す。護るべき少女と友がいる場所を。

「 禁書目録搜索大作戦の終着点へ インデックス フィナーレ 」

じある女性と暗部対決（後書き）

「ひつでしたでしょ」つか（汗）

神裂との戦い、強引にまとめてしまいました。

なんか反省します。

次はスタイル対ウォールメンバーにするつもりですが、なかなか大変かもしれません。

どなたでも、かまいません。感想ください（涙）

あと、遅れに遅れてごめんなさい！

じある神父との戦い

「しつかりしろ！ 禁書インテックス目録！」 部屋の前で血まみれで倒れている少女を上条は必死に搖すつていた。

「どうしたんだよー？ いつたい、ビリのビコヒヤウレタんだ？」
！

「ん〜？ 僕たち、魔術師だけど？」 背後から聞こえてきた声にバツと反射的に後ろをふりかえる上条。その目に映るのは、赤髪の神父。

「！」つやまた、ずいぶん派手にやつちやつて

「なんで 」

「この子が部屋に戻った理由？ さあな、忘れ物でもしたんじゃないかな？ 昨日はフードを被つてたんだけど あれ、どこに落としたんだらうね？ ？」

上条は気づいた、少女は自分を戦いに巻き込まないためにわざわざフードを取りに戻ってきたことを。

「バツカやろうが！」 「フンフンフンフン やだな、そんな顔されても困るんだけどね。それをやつたのは僕じゃないし 神裂だって、なにも血まみれにするつもりはなかつたんじゃないかな。その修道服、『歩く教会』は絶対防御なんだけど . . . はあ、なんの因果で壊れたのか」

上条の胸の中にどす黒い感情が湧き上がる。

「何でだよ．．．．俺には哀歌から聞いたりしても、魔術とか魔術師つてのを言葉としては理解しても、いまだに信じられないよ．．．．でもな、お前達にも正義と悪つてもんぐらいあるだろ？こんな小さな女の子をよつてたかって追い回して、血まみれにして、これだけの現実リアルを前にまだ自分の正義を語ることができのかよ！」

始めて、赤髪の魔術師、ステイル＝マグヌスの眉がピクリと動く。

「まで、君は魔術や魔術師についてその哀歌という子から聞いているのか？」

「ああ、お前らが禁書目録インテックスを狙つていることとかも全てな。正直、俺は信じれてなかつたけど、これで本当だと分かつたよ！」

馬鹿な．．．．とスタイルは歯噛みした。この街に自分たち以外の魔術サイドの人間が入つてくるとは考えにくい。

自分たち、それなりの経験をもつ魔術師でも入るのは容易ではないのだ。しかも、禁書目録を回収するための2人の行動を知り得るのは、『必要悪の教会ネセサリウス』のメンバーか『最大主教アーチビショップ』だけのはずなのだ。

「大体、お前は何様だ！」「君に話す必要など．．．．」

「イギリス清教、第零聖堂区、『必要悪の教会ネセサリウス』所属の魔術師にして、ルーン24文字を完全に解析し、新たに文字を生み出した天才．．．．ですよね？」スタイル＝マグヌスさん？」「

思わぬところからかけられた言葉にスタイルの視線がついぐ。

その先、階段の側に、哀歌はたつていた。

「哀歌？　お前、どうして……？」

「伏せて……」

「え？」

「早く伏せて！」

戸惑いながらも、声に押されるように伏せる上条を確認し、哀歌は両の手を組み、スタイルを睨む。

「『火龍の怒りは大地を滅する！』」哀歌の叫びと共に彼女の前に現れた真紅の魔法陣から猛烈な火炎が放射される。

「なに！？　我が手に炎、その形は剣、その役は断罪！」驚愕しつつ、とつぞにスタイルは炎剣を放つ。

2つの火炎がぶつかり合い、空中で相殺される。

その衝撃波と熱風に押され、後ろに吹き飛ばされた上条は、自分の体を誰かが支えていることに気づいた。

「？！　ビリビリ？」「なに？　私のこと知ってんの？」

「いや、お前、御坂じゃないのか？」

一瞬、首をかしげる美希だが、すぐに勘違いに気づいた。

「私は、従姉妹の御坂美希よ。あいつが世話になつてゐるってね。これからもよろしく。そして始めまして！」

「あいつに従姉妹なんていったのか…………いや、そんなこと考へてる場合ぢやない！ 早くここから逃げるんだ！ このままだとお前まで巻き込まれ…………」

「それを承知でここにきたの。あの子を、インデックス禁書目録ちゃんを助けるために」

「なんでお前がそんなこと…………」

「僕が頼んだからだよ当麻。美希は僕の仲間なんだ」

上条は思わず人物の登場に目を見開いた。

「護？！ わ前、いつたい？」

「話は後だ。今は、目の前の事態をどうにかしなきゃならない。そのためには当麻、君の力が必要なんだ」

「は？ どうこう…………」「君の右手」「護の言葉にハツとなる上条。そう彼の手には全ての異能を打ち消す力、『幻想殺し（イマジンブレイカー）』が宿っている。

「！」の右手が通じるのか？

「ああ、君の右手なら魔術でも打ち消せるはずだ。僕らが総出での魔術師を抑える、その隙にあの子を、インデックス禁書目録を救い出してくれ

ないか？無論、強制はしない。逃げてくれても構わない。それでも、強力してくれるなら、頼む！」

「そんなの……決まってんじゃねえか……赤の他人を戦いに巻き込まないために戻ってきた禁書目録を見捨てて逃げるなん……そんなこと、できるわけがねえ。俺の右手が通用するなら、協力するぜ護！」

「それでこそ、当麻だよ！　さあ、行こう、あの子を助けに！」
上条、護、美希の3人は輪のよう、ステイルと睨みあう哀歌を囲む。

「ステイルさん。今回は引き上げてくれませんか？　これ以上、血を流したくはないんですが」

「なにを、言つている？」

「血を流したくはないといつてるんです、あなたの仲間の女の人はさつき私達が倒しました。後はあなただけなんです。とにかく今回は一回手を引いたほうが得策だと思いますよ？」

驚き、明らかに動搖をかくせない様子のステイルだが、すぐさま様子を見ようとはしない。そんなことをすれば、敵に弱点を自ら示すようなものだと知つてゐるからだ。

「その言葉を、信じるとでも？」

「さあ？　信じるかはあなたしだいです。ですが、あなた一人で学園都市の能力者である僕達を相手に回収を成功させることができですかね？」

スタイルは、言葉に詰まる。確かにこのままの状況でたたかうのはリスクが高すぎる。

「（じつある…………だが、）」引き上げればあの子を戻すのは難しくなる」「

葛藤するスタイルだがそう時間はない。

「（僕がすべきことは、いつでも一緒に。あのとき誓った約束のために、僕は…………戦う！）」「

スタイルの目に力強い意思が宿る。

「断るよ。君たちにこの子の回収を邪魔はさせない。それでも立ち塞がるところのなら、いくらでも殺す、いくらでも壊す、生きたままでも燃やしきつく。自分の誓いを果たすために」

スタイルの右手が高く上げられる。

「世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎…………」
「スタイルがやろうとしていることかないち早く哀歌が

気付いた。

「あの詠唱を止めなきや！」哀歌の言わんとすることを理解できたのは哀歌ぐらいだったろう。だが、彼女の叫びに焦りを感じたのは全員だった。

「美姫！『超電磁砲』を！哀歌！君の魔術あれを止めてくれ！」

レールガン

「分かつてゐ！」「任せて……」

それぞれに動こうとする2人だがスタイルの詠唱の方が若干早かつた。

「その名は炎、その役は剣、顯現せよ、わが身を喰らひて力と為せ！」

「オオオオ！という雄叫びと共に、猛烈な火炎が人の形になつて現出した。

じある神父との戦い（後書き）

相変わらず、マイペースですみません。

今回は、スタイルとの戦いを描くつもりでしたが、恐ろしく長くなってしまったため一分割します。

とある戦いの終幕

「オオオオー！」といつ雄叫びと共に、猛烈な火炎が人の形になつて現出する。

その高熱と、熱風に押され、今までに攻撃を加えようとしていた2人の動きが止まってしまう。

「ぐ……遅かったか……」

「なによ……これ……」

「話には聞いてたけど……本当に法王級の魔術を個人で扱うなんて……」

ウォールメンバー3人はもちろんのこと、上条も驚愕の表情を浮かべている。

護にしても、アニメで見ると実際に体感するのでは全く違うとう当たり前のこと改めて感じていた。

「さて……行け、魔女狩りの王。イノケンティウス我が名が最強である理由をここに証明しろー！」

スタイルの声に応え、イノケンティウスはまっすぐ護たちに向かってくる。

「くそ、止まれええ！」美姫の放つ『超電磁砲』レールガンがイノケンティウスの胴体に穴を開けるが、すぐにその穴は塞がてしまう。

慌てて次の鉄球、クリスのものと同じパチンコ玉を取り出す美姫を護が止める。

「あの怪物には、そう簡単にダメージは与えられない！　3人がかりで一気にダメージを与えるよう。美姫は『雷撃の槍』を、僕は『超重力砲』^{グラビティブースト}を、哀歌はあれにもつとも効果がある術式を、皆で一気にぶつけよう！」

3人は頷き合い、それぞれの力を発動する。

「俺はどうすればいい？」「上条はあの子の確保を頼む！　僕らのことら気にかけず、一直線線にあの子の元へ！」

上条に叫びつつ、護は右手を前に向ける。

「いぐぞ、みんな！　『超重力砲』^{グラビティブースト}！」

「くらえええ！」

「水竜の慈悲は地を潤す！」

3人の繰り出す力。それが合流し、電撃を纏つた水竜となり、それを護の放つた重力波が加速させる。

突き進む水竜は加速しながら、一気にイノケンティウスを吹き飛ばす。

「なあ？！」一時的とは言え、イノケンティウスが粉々に吹き飛ばされ、驚愕するスタイル。そこへ水竜の後ろからかけてきていた

上条が右拳を握り締め近づいてくる。

「くそ・・・君一人であがらえるとでも思つてゐるのか！」

スタイルが右手に新たな炎剣を生み出し、その剣が上条に向かう・・・が、その炎は上条の右手に打ち消される。

「バカな・・・！」

「ふう・・・護の言つたとおりだつた・・・そうだよ何び
びつてたんだ、あの修道服をぶち壊したのだつてこの右手だつたじ
やねえか」

「この！」スタイルが再び放つ炎剣を上条は右手でつかみ、握り
締め、再び打ち消した。まるでガラスがバラバラになるかのように、炎が飛び散る。

「終わりだ、その子を助けさせてもらひやぞ」「この程度で勝つた
と思うな！」

スタイルの叫びとともに、上条の背後に崩されたはずのイノケンティウスが現れる。

「君がどんな力をもつてるか知らないが、これで終わりだ！」

イノケンティウスの手に光の十字架が握られる。この位置からなら一撃で上条は叩き潰されてしまつ。

「同時に2方からの攻撃をかわす」とはできるかい？」

イノケンティウスの右手が大きく振られ、上条を吹き飛ばそうとするが、その攻撃は上条の右手に防がれる。だが……

「（この十字架……右手が通用しない？……）この炎、消滅した直後に復活してるんだ！」

打ち消せず光の十字架を必死に防ぐ上条を見て、スタイルは薄く笑い、そのまま真後ろから攻撃をかけようとして、直後違和感に気付いた。

「なん……だ、体が……重い……」そのまま思わず膝をついてしまうスタイル。なにか真上からの強烈な圧力がスタイルの体を押さえつける。

「そこまでですスタイルさん。あの女人の人……神裂さんにも言いましたが、僕の力は重力を操ることです。今はあなたにかかる重力を通常の2倍ほどの強度にしています。もはや立つことも困難だと思いますけど？」

「なめ……るな……僕にはまだイノケンティウスが……」
「ああ、それはそうですね……でも……高杉！」

次の瞬間、スタイルは背後に人の気配を感じた。

「悪いな、一瞬で終わらせてもらつぜー！」

スタイルがなにかを言い返す前に、後頭部とみぞに同時に激痛が走り、スタイルの意識は一瞬にして途絶えた。

それと同時にイノケンティウスも苦しげに体を震わせながら消えていく。

「ナイスタイミングだ。高杉！」

「お前ってほんと人使い荒いよな……あの日本刀ガールに吹き飛ばされた後だつたつてのに、意識戻したとたんに能力使えて……」

「わるいわる……『どうやっても良いくから高杉を起こせ』とクリスに言つたことも含めて謝る。だけど今はそれよりすべきことがあるんだ」

「わるいわる……『どうやっても良いくから高杉を起こせ』とわめく高杉を無視し、護は血まみれの少女を抱きかえた哀歌に目線を向ける。

「哀歌！ 君の魔術でインデックスを治療できる？」

「できないことは、ないとは思つけど……保証は出来ないし自信も微妙。禁書目録なんてVIPは私も治療したことないしつつ……」

となると原作通り、小萌先生の家で内なるインデックスとも言える『自動書記、ヨハネのペン』に治癒させるしかない。

「高杉！ 御怒りのところ悪いんだけど、お前はな力が必要なんだ。哀歌と上条との子をこの座標に飛ばしてくれないか？」

護が渡す、座標位置を示した地図と、2枚の写真を受け取り、しばらくそれを確認した高杉は、哀歌と上条に手を握らせ、その重ねられた手と哀歌が抱くインデックスに手を置いた。

「後で、しつかりとお返しをしてもらつからなー。」

愚痴りながらも、高杉は目を閉じ、しつかりと力を発動する。

「それじゃあお三方、どうぞ楽しい御旅行を！』

次の瞬間、哀歌、上条、インデックスの3人は文字通り消えた。瞬間移動したのだ。

「さて、とりあえず任務はこれで終わりということで解散していいか？お返しはまた別の機会にして、実際問題、疲れてんだが』

「そうだな……んじゃあ今日の所は解散つてことで……』

『

そう言いかけて、直後護は後悔した。なぜなら……

「うつしゃあ！ 後はクリスの奴に見つからないように、ホテルまで戻ればいい！』

「トーラ次郎ストラップ！ まだ間に合はずー。』

「待ちなさい高杉！ あんたをまず縛つて罰を下さるんだから！』

集合する前と同じノリになる3人に思わずため息をつきそうになる

護だつた。

「まあ、とつあえず今回はこれで解決……か」

そんなことを呟きつつ、部屋に戻るひつじして、護はなにか嫌な雰囲気を感じとつた。

まるで『誰かが見てる』ような、嫌な感覺。

「まさか、まだなんかいるってわけじゃないよな?」

念のために後ろを振り返つてみるが別のおかしなどいはない。

「まあ、氣のせいだよな?」

そう自分を納得させ自分の部屋に入つていく謹。それを天井裏から覗く2つの目があつた。

「本部、報告。目標である『禁書目録』は学園都市の対外暗部組織に守られている。至急対策を立てるべし」

屋根裏に潜む者は小さく笑う。

「しかし、またとないチャンスだ。だがまず、周りの護衛どもを無くさなければならぬがな」

屋根裏に潜む者はもう一度小さく笑い。闇に溶けこむようにその場を去る。すでにその姿は屋根裏から消えていた。

となる戦いの終幕（後書き）

スタイル戦終了です！

次回からはオリジナルストーリーとして、ウォールメンバー達をイギリスはアイルランドに飛ばして見たいと思つてます。

今回はスタイル1人にウォールメンバー達全員で挑んだ挙句に、最後は護と高杉の2人勝ちみたいになつてしましました。

もつすこし文章に豊かさをもてたら とおもいます。

とある組織の海外旅行

「アイルランド旅行？！」 「そつ、アイルランド旅行」 護はたつたいま聞いた言葉を疑つた。

例の魔術師騒動は一段落し、小萌先生の家でのインテックスの治療（といつか実質自己回復）と『首輪』の術式の排除も完了していた。

そのさい、原作なら上条さんは記憶を失うのだが、哀歌が徹底的に（護の頼みで）それらの可能性を排除したため。それは起きてない。

その代わり、原作では上条と関わりをもつはずの2人の魔術師 が一切関わってきていない。この結果がどうなるかは護にとつて不安要素の一つになっていた。

「そもそも、アイルンドってどこのことだっけ？」

「私の故郷で、イギリス……『グレートブリテン北アイルランド連合王国』すぐ横に位置する島よ。昔はイギリスの領土だったこともある国なの」

クリスの言葉に、護は首をかしげた。

「あのや……そこがどんなとかは分かったけどさ、なんでそこに旅行つて話になるんだ？」

「それがね……お父さまが里帰りしてこいつてこいつてるの。

今夏休みでしょ？』

そう彼女はアイルランド人なのだ。能力に憧れて国を離れ、学園都市にやつつきて『念動能力』を手に入れた……ただ分からぬのが、なぜ彼女が『暗部』に入ったかだつた。

『ふーん。だけどそれに僕達がどう関わつてくるのさ？』

『うん……お父さまが『お前の友達もついでに連れてこい』って言つてつてね。それで護たちさえよければ『ウォール』の皆とインデックスちゃんも一緒にいけないかなと思つてるの』

それは護にとつては是非行きたい話だが、それには懸念材料が一つある。それは自分たちが『暗部組織』の人間だということだ。

『ウォール』の人間の役目は『外部組織の排除、及び殲滅』であり、護たちは街の中に潜む、あるいは進入してくる外部組織の工作員などと戦う役目をもつてゐる。

里帰りといふ事情でアレイスターが役目を解くだらうか？

『それは確かに行きたいけどさ。統括理事長がそれを許すか？』

『それがさ、もう許可をもらつてあるの』

護は思わず口にしていた、コーヒーを吹き出しそうになつた。アレイスターが許したつて！？

『ええと、確かここに……あつた！ これがアレイスターからの通達よ』

クリスが自分の学生カバンから出したのは一枚のコピー用紙。

「なになに……『アイルランドへの渡航を許可する。準備が済み次第、すぐにでもでも、構わない。ただしせつかくアイルランドに行くのだから、現地組織の調査をしてもらいたい。具体的には学園都市に刃を向ける可能性のある外部組織の調査だ』……なんか許すどころか、積極的に行くことを進めてるみたいだぞ？」

「そこが私にも不思議だつたんだけど……まあ、とにかく旅行にいけるというのは分かったでしょ？ みんなで一緒にアイルランドに行かない？」

しばし悩む護。なんだか嫌な予感がしたりするのだ。あのアレイスターがこんなに普通に渡航を認めるというのはおかしいのだ。だが、逆にこれがアレイスターの想定している『計画（プラン）』に関係している場合には……それを避けることは、自分が守ろうとしている人を危険にさらすことに繋がる可能性がある。それだけは避けたいという思いが最終的には肩を押した。

「それじゃあ、行くとするか！ 他のみんなにも連絡して……ついでだから当麻の奴も誘おう。いいかクリス？」

「別に構わないわ。人数が多いほうが賑やかで楽しいし」

その後、ウォールメンバー全員が旅行への同行を示し。上条も丁度、夏休みの補習が（上条にしては珍しいことに）終わっていたこともあり、参加することになった。そしてもちろんはらぺこシスターことインデックスもである。

という訳で現在、一行は学園都市内部の国際空港に来ている訳なのだが、クリスを除く全員が出発ゲートがあるターミナルからの景色に言葉を無くしていた。

「あのさ ク里斯？ 本当にあの飛行機にのるの？ しかもスイートルームつていいくらするわけ？」

ターミナルから見える護たちが乗る予定の旅客機は、『ボーイング957型機』といい、ボーイング社の最新モデルである豪華旅客機ともいえる機体である。

「うーん お父さまが払ってくれたから、分からぬけど、多分、200万から300万ぐらいじゃないかな」と思つ

クリスの言葉に絶句する一同。なにせ1人につき200～300万とすると、護たち7人で最低でも1400万。最高で2100万はする計算になるからだ。

「クリス。アンタの家ってそんなに金持ちだったつけ？」驚きを隠せない様子の美姫と対象的に哀歌はさほど驚いた様子を見せない。

「美姫。これを見て」哀歌が差し出したのはクリスのパスポートだった。先程から全員のパスポートは哀歌が預かっていたのだ。理由は哀歌から物を奪える人間などそういうないからだ。

「えーと、なになに これは哀歌の名前よね？ 何か以外に長いわね 『ザ・ライト・オノラブル・レディ・クリス・エバーフレイヤ・オブ・アーマー』これがなに？」

「問題なのは、その名前……ザ・ライト・オノラブルというのは伯爵以下の貴族に対する称号なの。しかも爵位の後には必ず、なににのという地名がつくから、オブ・アーマーってのがそうだと思つ……つまりクリスは伯爵だかなに爵だかは分かんないけど、クリスは『貴族』つてことになる……」

瞬間、全員の視線がクリスに注がれる。

「…………ごめん、黙つて……私、貴族だからつて特別扱いされるのがやだつたから今まで内緒にしてたの」

なる程と内心納得する譲。実家が貴族なら、あれだけの旅客機をチヨイスできる訳もわかる。

「分かつたから、早く行こうぜクリス。お前の故郷なんだろ向こうでは案内頼むぜ？」

高杉に言われ、すこし落ち込んでいたクリスの目に光りが戻る。

「うん！ ただしそう宗兵、向こうで寝てばっかりだつたりしたら、ブチ殺すわよ？」

なんか物騒なことを言い合しながら搭乗ゲートに向かう2人に続いて他のウォールメンバーも向かっていく。

その後ろで、インテックスがポツリとつぶやいた。

「なんか、まったく話しに入つていけなかつたかも」

「ああ、なんか俺たちかやの外つて感じだつたな……でも、

せっかくの旅行だから楽しもうぜインテックス！ 珍しく不幸な事態も起きてないし、俺は今回は恵まれてるみたいだしな！」

と上機嫌の上条だが搭乗口でインテックスの安全ピンが検査に引っかかり、服を買いに出発ギリギリになるまで走り回りまいでお馴染みの『不幸だ～！』を叫ぶこととなつた。

それが、7人が巻きこまれる大事件の始まりだとはこの時だれも気づくはずがなかつた。

となる組織の海外旅行（後書き）

今回からオリジナルストーリーである『アイルランド旅行編』が始まります！

クリスの故郷であるアイルランドでウォールメンバー達プラス上条たちが巨大な騒乱に巻きこまれるという話ishにするつもりです。

後、インデックスの覚醒シーンを吹っ飛ばしてしまってごめんなさい。そのあたりを期待していた、皆さんには深くおわびします（汗）

お気に入りが49になりました。皆さんのおかげです。ありがとうございます！

これからもよろしくおねがいします。

じある山間の突発銃撃

「ふう・・・・・やつと着いたな・・・・・で、ここからどうやら
つてクリスの家に行くんだ？」

日本から約1~2時間をかけ、ようやくアイルランドの首都ダブリン
のダブリン空港に到着した護たちは、空港の東出口に立っていた。

機内ではさすがはスイートクラスだけあって豪華な作りになつてい
たのだが、科学オーナーのインテックスがあちこち触るのを止めたり、
やたら豪華すぎるため、あちこち壊さないよう気に使いつづけて
いたため、7人はちつとも快適に過ごせなかつた。

「えつとね・・・・・・確か、空港に迎えに行くつて・・・・・
ああ、あそこだ！ベネット！」みゆき、「

空港出口にいくつから寄せているクルマの内の一台がこちらに向かつ
てくる。

『お帰りなさいませ。お嬢様。そちらの方々がお友達の方々だいぢ
いますか？』

『そりよベネット。お父さまは元気にしてる？』

『ええ、皆様が来るのを楽しみに待つておられます』

一連の会話は、アイルランド語でかわされた為に護たちはサッパ
リである。

「ああ、みんな」めん。紹介するわ。私の家に仕えてくれている執事長のベネット・ライヒンガルドよ」

「始めてまして皆様。わたくし、Hバーフレイヤ家にて執事長を務めさせていただいています。ベネット・ライヒンガルドと申します。お見知りおきを」

ベネットの流暢な日本語に、しばし畳然とした7人だが、慌てて自己紹介をした。

「僕が古門 護です。こちらが竜崎哀歌。そっちが高杉宗兵で、こちらが上条当麻。そしてこの子が」

そこまで言いかけて護はある重大な事実に気づいた。修道服を着込む少女、『禁書目録^{インテックス}』には『名前がない』！

「（まづい、どうする… 素直にインテックスなんて言えないし… かといつてすぐに偽名なんて思いつけないし… どうすれば良いんだあああ…）」

「この子は、テレジア・リースって言つんです」

護が混乱してる間に、哀歌が助けに入った。

「じゃあ、みんな移動しましょ。私の家はここからすこし距離があるから、すこし車で寝るといいわ」？

といつて、2台に分乗して（ベネットが運転するものとは別にもう1台來ていた）クリスの家に向かつことにした一行はそれぞれに車内での時間を満喫するはずだった。『その時』が来るまでは。

空港から出た2台には以下の振り分けで護たちが乗り込んでいた。

1台田、クリス、美姫、高杉

2台田、譲、哀歌、上条、インテックス

という感じである。

そしてアイルランド到着そうそうに2台田に乗っていたメンバーは事件に巻きこまれることとなる。

それは、護たちの乗る2台田が山間にさしかかった時だった。

「おつかしいな 」2台田の運転手であるジーモーズは焦っていた。

後ろでは今回のお客さんがたがスヤスヤと眠っているが、こつちはそれを気にしてはいられない。

明らかにガソリンの減る量が早いのだ。最初はそれ程でもなかつたのだが、山間に入った辺りから急激に減り始めた。こんな山の中で、エンストはいくらなんでも避けたい。この減り方は明らかにガソリンが漏れ出していることを示している。なら確認するしかない。

ジーモーズは即座に判断し、車両無線を使って1台田に連絡を送る。

『ひづらジーモーズ。車両に異常を感じるため、確認の為に一旦停止し、後で行きます』

無線を送り終わつたジョームズは運転席か、おり、給油口を調べ……

・・凍り付いた。

予想どおりガソリンは漏れ出していた。だがその原因は、彼が予想していた蓋の閉め忘れなどではなかつた。

「これは・・・・・銃弾の跡・・・・・まさか・・・・・!？」慌てて警戒の目線を周囲に向けるジョームズだが、気づくのが遅かつた。

次の瞬間、ジョームズの脳天を7・62ミリのライフル弾が貫き、彼を絶命させたからだ。

「ん・・・・・! 護! 起きて!」いち早く、ジョームズが倒れたことによる衝撃に気づいた哀歌が警告の声を発したのと同時だつた。

バラバラと突然、付近の木の上や草の影から覆面の男たちが近づいて来た。その手に握られるのは突撃銃^{アサルトライフル}。

「いつたい・・・・・護! 早く起きて!」

哀歌に揺さぶられ、ようやく目を覚ました護は、即座には状況を理解できなかつた。だが窓に広がる血痕、倒れる運転手、窓に広がる銃痕になんとか事態を認識した。

「い・・・いつたいこれは? ていうか、奴らはいつたい?!

「そんなこと言つてる場合じやない! 早く逃げないと・・・・・・

「

そう言いかけた哀歌の右肩を銃弾が貫いた。

「哀歌！　くそお！　起きるんだ上条！　インテックス！」

そう叫ぶ護の首筋に銃口が突きつけられた。

「抵抗するな。動けば、引き金を引く？」

静かで感情を感じさせない声だった。わかる事は声が男性のものだ
ということだけ。

「なんだよ、お前ら……」

よつやく田を覚まし、信じられない田でみる上条に向けて、覆面の
男は簡潔で同時にこれ以上ないほど実態を指し示す言葉をはいた。

「IRAだ……本来、わが国の土地たる北アイルランドを手
にする為に戦い続ける、正統な共和国軍……君たちからい
う『イギリスにおけるテロリスト』だ」

となる山間の突発銃撃（後書き）

アイルランド！　といわれてIRAを連想する人はそういうないと思
います。

IRAといつのは実在する組織です。過去にいくつものテロ事件を
起こした組織で今は、そのなかの過激派が活動しています。

そんな組織を登場させた理由はこの後の話で判断してもらいたい
と思います。

さて、この後、護たちはどうなつてしまつのか？　見守つてください！

とある女性の協力要請

「（IRA…………アイルランド共和国軍…………）」
「側にも存在してたのか…………」

実は、護は軍事や歴史に興味があり、元からそれに関する知識は豊富だつたりするのだ。

護は『覆面の武装集団、IRAの構成員たちに銃口を突きつけられつつ考えていた。

「（だが、なぜIRAがこちらに関わつてくる？ 外部組織の掃討の役割をもつウォールでもIRAを相手にしたことはないし、僕達をさらつてもなんの意味もない。狙う理由ができるとしたら、むしろ一台目の方だから、クリスを狙つてたのか？ ）」

「車から降りてもらおう。早く出るんだ」

男に促され、仕方なく車を降りる護。能力を使つてこの場をしのぐことも不可能ではないがリスクが高すぎる。

上条とインテックスに関しては役に立たない。上条の『幻想殺し（イマジンブレイカー）』は銃弾にはなんの意味も持たない。インテックスにはそもそも戦闘能力はない。

哀歌には人間離れした身体能力と魔術という武器があるが、先程の銃撃によって意識を失っている。

つまり現状は八方塞がりなのだ。

「これからお前たちをバスのところに連れて行く。くれぐれも抵抗するな。できれば無傷で連れてこいと言わてるんだらな」

現状、対抗策はない。ここはおとなしく従うしかない。そう判断し頷く護は満足げに首を縦に振った。

護、哀歌、上条、インデックスの4人は全員田隠しされ両手を手錠で拘束された上で大型車？（見えないので正確には分からないが、上条、インデックスの声を確認したりしての予想）に乗せられ運ばれた。

「（ＲＩＡが……僕らを狙つ理由はなんだ？　僕らを襲うメリットは？　僕らを人質にして学園都市に金を要求するとか？　でもそれならわざわざバスの所に連れて行く必要がない……・・・・・いつたいなんなんだ？）」

ひたすら答える出ない問いを護は繰り返していた。

「さあ、着いたぞ」男たちにどつかれながら降ろされ、田隠しきとられた護たちの前には、古びた簪の門らしきものがそびえ立っていた。

「（）が、ボスつて奴のいるところなのかよ？　あからさまに田立つ場所じやねえか」

上条が不審に思つのも当然で、城より規模は小さいものの城郭や櫓を備えた立派な砦であり、隠れ潜むテロリストたちの拠点としては明らかに不自然な場所になる。

「ここは古い魔術的な城塞なんだよ。でも、今は機能していないみたい

い」

インデックス

禁書目録の名をもつ彼女が言うのだから間違はないだろうが、ではなぜこの場所に武装組織が拠点を構えているのだろうか？

「ここに、入れ！」護たちが通されたのは応接間のような場所だった。古びた外観とは裏腹に内部は意外に小綺麗にされており、折りたたみ椅子が5つと簡素な木製の机がおかれていた。

そして、応接室にある窓の側に1人の女性が佇んでいた。

「ボス！ 彼らを連れて来ました！」

ボス、そう呼ばれた女性はこちらに顔を向ける。

金髪でヨーロッパ系の顔立ちをした美女。

彼女は静かな口調で、日本語で語りかけた。

「始めてまして。私がＩＲＡ・・・・アイルランド聖騎士団、団長のラミア・エバーフレイヤ。クリスが、娘が世話になつてるそうね

」

護はたつた今聞いた言葉を疑つた。クリスを娘と言つたということは、彼女・・・・ラミアはクリスの母親ということになる。だが、まさかクリスの母親がテロリストだなんて・・・・

「あなたたちをさらつたのには、勿論、理由があります。私の娘・・・

・ · · · · クリスを助けたい · · · · その為にあなたたちの力を借りたいのです 』

『ラミアの思わず言葉に護の思考が一瞬停止する。

「いつたいどういうことだよ！ あんたはエバーフレイヤ家の運転者を撃ち殺させてるじゃねえか！ なのに力を借りたいってどんなつもりなんだよ！」

「あの運転者は、クリスの父親が雇っている傭兵 · · · · 海外の元軍人です。あの子の父親はIRAから離脱した別組織 · · · · 通称リアルIRA · · · · 私たちからいうところの『タラニース』という組織のリーダーなんです · · · · あなたたちには理解しにくいかも知れませんが · · · · マジックキャバル魔術結社 』 という組織の一種なんですよ」

魔術結社という言葉にインデックスがいち早く反応する。

「まさか、その人が私たちをここに呼んだのは · · · · 』

哀歌の言葉に、ラミアは頷くことで肯定する。

「あの人は、『禁書目録』^{インデックス}。その子の中にある10万3千冊の魔導書のうちの1つ。アイルランド神話における伝説の書物である『侵略の書』を手に入れようとしている。私はそれを止める為に『アイルランド聖教』から依頼を受けて動いてるの。お願い、協力して

思わず流れに、護たちは顔を見合わせる。彼女を信じ、協力するか、それとも · · · · ·

『

「お願い。あの人人がイングリッシュから原典を取り出すために動き出したら、クリスが……あの子が死ぬことになる！」

瞬間、全員の目がラミアに注がれる。

護には、もうなにがなんだか分からなつていた。

クリスが死ぬつて！？

じある女性の協力要請（後書き）

はい。実は、護たちを襲つた彼らは、敵ではありませんでした。

ところなんともありきたりな展開にしてしまいました（汗）

しかも、今回戦闘シーン一度もなしです。シシ「ナリベ」はかなりあると思いますが、堪忍してください（涙）

今回一番大変だったのが、アイルランド神話調べです。

そもそも『アイルランド』って国？ 的なレベルでしたので、神話などはちんぶんかんぶんで調べるのを苦労しました。

そうこうえば、ついに総合評価130を超えました。みなさんありがとうございます。これからも感想などあれば送つてください！

とある男の銀製義手（シルバーハンド）

「クリスが死ぬって……どうしたことですか？……」

・

哀歌の問いかけに対するラミアの答えは簡潔だった。

「能力者には魔術は使えない。それは知ってるかしら？」

「それは…………知つてます…………けど。それがどうしてクリスが死ぬことにつながるんです？」

「あの子は学園都市の学生として『科学サイド』で暮らしているけども…………それは彼女が望み、私が『逃がした』から。本来彼女は『女神の素質』という特性をもつ『魔術サイド』の人間なの」

・

ラミアの言葉は護にとつて衝撃的だった。ラミアの言葉が意味するのは……

「そうよ…………あの人は、クリスの父親はクリスの3人の妹たちがもつ『運命の3女神』の特性。そしてクリスが生まれながらに持つ『主導神ダヌ』の特性を使って『禁書目録』の中に眠る『侵略の書』を手に入れようとしているの」

その言葉は護を驚愕させたが同時に疑問も与えた。それは『禁書目録』からそう簡単に知識を奪えるだろつか？という疑問である。

確かに『禁書目録』^{インテックス}の知識を守る『自動書記 ヨハネのペン』は上

条の『幻想殺し（イマジンブレイカ）』により破壊されている。

だが、これはこの世界における『未来』について知っている護だから分かることだが、禁書目録の知識を閲覧できたのは、日本神道系の魔術師である闇咲とインデックスの『遠隔制御靈装』を手にしたフィアンマだけである。

闇咲の場合は特殊だとして、インデックスの知識を閲覧するためにはイギリスにおける『清教派』と『王室派』がそれぞれ管理している『遠隔制御靈装』を使う必要があるはず……そこまで考えて護は、はたと気づいた。

「まさか……クリスの父親はクリスの力を使ってイギリスを？」

「ええ、『主導神ダヌ』の素質を持つクリスを『覚醒』させて、その強大な力で一気にイギリスの『王室派』の象徴『バッキンガム宮殿』を襲い、内部にある『禁書目録』の『遠隔制御靈装』を奪い取る。そしてクリスは『能力者』。あの子に『女神の素質』があるといつても、神話級の魔術を行えば、多少回復魔術で生きながらえさせられたとしても、確実に死んでしまう。万が一死の危機を免れても、一生廢人となってしまうの」

「しかし、いきなりせめても、そう簡単に奪えないと思つけどな？」

「上条の疑問にラミアは当然のように即答した。

「まず、リアルIRAとしての表の戦力がテロ活動を行うと同時にバッキンガム宮殿に攻撃を仕掛け、王室派の人間が避難するように仕向けるのよ。そしてわずかな使用人や魔術師しかいないバッキンガム宮殿に『人払い』をすませたうえで、裏の戦力が一斉攻撃をか

け、一気に『遠隔制御靈装』を奪つ……それが人の考
える計画よ」

ラミニアの言葉に護たち4人は沈黙した。

護は、選ばなければならなかつた。ラミニアの言葉を信じ協力するか。
それとも彼女の言葉を嘘と決めつけ中立の立場をとるか。

少なくともラミニアの言葉からラミニアが『魔術サイド』の人間である
ことは間違いない。

だが、ラミニアの話すことにはまったく確証がない。

「（せめて、彼女の言葉を証明する『何か』があれば……）

そう思つた矢先、思わぬ形でその願いはかなえられた。

突如、応接間が真つ二つに切り裂かれた。

比喩でもなんでもなく純粹に床がぱつくりと口を開け護たちをのみ
こもつとする。

「ウソだろおおおお！！」まっさかさまに下の階に向けて落ちて
いく護はパニックになりながらもなんとか重力を制御してゆっくり
と着地する。

上では、哀歌が上条を、ラミニアがインテックスをそれぞれ抱えて着
地する。護のように『能力』を使つまでもなく平然と着地できると
ころはさすが『魔術サイド』の人間だけあると感心するところだが、

いまはそれどころではない。

たつた今、護たちがいた応接間。そこの床の裂け目を通して、護たちの前に一人の男が着地する。

肩にかかる程度の銀の長髪で顔には大きな十字の傷跡。なにより特徴的なのがその右手に握られるひと振りの剣。

「さあて 『聖騎士団』に邪魔されちゃ厄介だから早めに潰しにやって来てやった。おとなしく死んでくれ？ それとこそのお前たち 『禁書田録^{インテックス}』の護衛者だったか？ お前たちもついでに潰してやるよ 」

男の剣を見たインテックスの顔色が変わる。

「どうしたんだ？ インテックス」「当麻。あの剣はアイルランド神話に出てくる神の武器をモデルにした靈装なんだよ！ 名は 」

「『ヌアダの剣（クラウ・ソラス）』だ。まあ、味わつてもらおうか。この力を！」

男の叫びとともに、剣からすさまじい光が放たれ、一瞬にして護達を光の渦が包み込む。

「当麻！ お前の右手でこの渦に触れるんだ！ このままじゃ飲み込まれる！」護の叫びにわずかに困惑した上条だったが、即座に自分たちを囲む渦に右手でつくった握りこぶしをぶち当てる。

はじけるような音とともに光の渦は消し飛ばされる、だが消えると

同時に無数の光弾が護達に向かってくる。

「下がつて！護！」哀歌が護を横に突き飛ばし、護の前に出る。

「現出せよ、『ディストラクション・ブレイブ破壊大剣』！」哀歌の叫びとともにすさまじい閃

光が彼女から発せられ、向かつてきた光弾をすべて打ち消す。

その光が収まつた後、そこに立っていたのは『変化』をとげた哀歌だつた。

「あれつて、哀歌だよな？翼が生えたりしてるけど、あれは哀歌なんだよな？」

上条が戸惑つのも当然で、彼は哀歌の『変化』した姿を見たことがない。

「ああ、そうさ。僕の仲間にして親友。そして対魔術戦闘のエキスパートだよ」

哀歌はその両手で構える『破壊大剣』を真上に振り上げながら一瞬で男の前に移動する。

その全長3・5メートルの大剣が男に向けて振り下ろされる……
……が男はその攻撃を『右手』一本で構えた剣で防いだ。

「おまえも魔術師のようだが……知ってるか？『ヌアダの剣』の持ち主である神『ヌアダ』は戦いにより両手を失い……
……医学の神が作つた特製の『銀の腕』を取り付けることによって力を取り戻した……それが表向きの伝説だ。だがもう一つあまり知られていない伝説がある。医学の神が作つた『銀の

腕には『神器を扱えるだけの怪力』をもたらす力がこめられていたという伝説だ……つまり『銀の腕』と『ヌアダの剣』はセツトじやなきや力を發揮できないのさ……ただ、さすがに両手を切り離してまで力を手に入れようとは思えんのでな……俺の場合は、『右腕』を『銀の腕』にしてそこに『銀の両腕』の特性を集めているというわけだ』

驚愕し、男の右腕を見つめる哀歌。確かにその右腕は銀製の義手になっている。

「さて、それじゃあ吹き飛んでもらおうか。いくら巨大な武器をぶつけても俺には意味はない。この『右腕』がある限りな！」

哀歌が身構えるのと同時に、男の剣が勢いよく振られ、哀歌の体を大剣ごと吹きとばす。

「哀歌！くそ！『グラビティック・ハンマー重力鉄槌』！」護が作り出す重力の鉄槌を、しかし男は『右手』で受け止める。

「……超能力……科学サイドの象徴……なるほど確かに強力だ。だが、その程度で、このグラム・ストリスを倒せると思うな！」

どういう力を使ってか重力を『弾き飛ばした』グラムはその剣に巨大な光の波をまとわせる。

「滅びろ超能力者！ これで『あの方』の計画は成就する！」

グラムがいつきに振りぬいた剣から巨大な光の波が放たれる。護は周辺の重力を操作し、その攻撃を抑えようとするが、多少スピード

が遅くはなるものの、まっすぐ一ひきに向かってくる。

「（「）の攻撃、科学の法則を完全に無視してゐるせいで、能力が効かない！？」

自分の無力さを呪いつつ護が觀念して目を閉じようとした時、その前に人影が立つた。

「ほんに早く……あきらめてんじゃねえぞ！」

次の瞬間、前に立つ人影……上条当麻の『右腕』がまっすぐ伸ばされ、その手が波を粉々に打ち砕く。

「なあ！？」驚愕するグランに向けて上条の言葉が放たれる。

「てめえが、その『右手』を使って、まだ俺の『仲間たち』を傷つけようつて言うんだり……まずは、その幻想をぶち殺す！」

「

じある男の銀製義手（シルバーハンド）（後書き）

後書き　ついに戦闘シーン突入です！

ついでに初めて上条さんの決め台詞を入れることができました！

なにしろ、禁書田録の2次だというのに今まで上条さんの活躍をほとんど描けてませんのでやっとここに思い出です（涙）

ちなみに今回出てきた敵の武器は実際にアイルランダの神話に出てくる武器です。

興味を持ったら調べてみてください。

さて、次回は上条さん大活躍の話に・・・なるのかな？（汗）

とある女性の戦闘介入

「その『右手』…………お前いつたいなにもんだ？」

「なに者でもない。ただの高校生や。ちょっとばかし変わった右手をもつ、ただの高校生…………だよ」

「ただの高校生が、俺の攻撃を打ち消せるはずが無い！ いつたい…………」

「幻想殺し（イマジンブレイカー）さ。こここの右手には、あらゆる異能の力を打ち消す力が宿ってるんだ。こここの前ではお前のどんな攻撃も無駄ですよ？」

護の言葉に、グラランの口元が歪む。

「ふざけるなよ…………そんな戯けた力があつてたまるか！」

「

再び光の波を放とうとするグラランだったが…………

「私のことを忘れてるわよ？」

？いつのまにか、グラランのやや後ろに来ていたラニアがその手に槍を構えて立っている。

ラニアのもつ槍を見たグラランの表情が変わる。

「ああま…………そつか、お前も『一族』の血を…………』

女神の素質』が成せる力か！　まさか、『死の女王スカアハ』の特性とはな。となると……。その槍は！』

「魔槍『ゲイ・ボルグ』。勇者クー・フリンの武器として有名だけど、本来は死の国の女王である『スカアハ』のもの……。
あなたも『これ』の威力は知ってるわよね？」

瞬間、ラミアのもつ槍が凄まじい速度でグラントに向けて投げられる。そこは別に普通だ。だが違うところが一つ。彼女は『足で投げた』のだ。

「その投擲法…………まさか！」

「そりや…………！」

ラミアはグラントにむけて薄く笑つ。

「こいつは、あんたのもつような『量産型』じゃない…………。
『オリジナル本物』よ！」

グラントは慌てたように構えるがすでに遅い。

投擲された『ゲイ・ボルグ』は空中で突如30の鎌に分裂し、闇色の鎌に変化しづらトに遅いかかる。

グラントが光の波を放とうとするが間に合わない。突き進む30の鎌はその全てが容赦なくグラントの全身に突き刺さつた。

「ぐわああああ！？」

激痛に全身を蝕まれ絶叫するグラランは、自分の体の変化に気づいた。鎌が刺さった部位が徐々に『老化』を始めている。

「ハリニア！ キセモ、なにを！」

「あなた、自分で言つて忘れてるの？私は『死の女神スカアハ』の特性をもつてているのよ？『死』を司るスカアハに『老化』が関係ないわけないでしょ？」

唇をかむグラランにラミアは静かに告げる。

「安心して。手心を加えて置いたから、あくまで『刺さった部位』が老化するだけ。『葬式』で親族が見るあなたの顔は今とまよ？ だけど、あなたを『助けはしない』わ。体の30箇所を鎌で貫かれた以上、なにか措置をしないかぎり、あなたは助からないわ！」

「ぐ……そ……が……！」体の30箇所から真っ赤な血を流し、口から血の塊を吐き出しながらも、グラランはおのれの右手に握られる抵抗の象徴である剣を持ち上げようとする。だが、その手はもう一つの『右手』に押さえられる。

「てめえの幻想はここで終わりなんだよ。グララン！」

彼の右手が触れたとたん『グララン』の力を支える『銀の腕』はバラバラに碎け散る。

「きさま……これで……勝ったと思うな……
・俺は始まりにすぎん……『タラース』という『組織』を相手に貴様になにができる……」

「関係ねえよ」上条は力強くグラントの言葉を否定する。

「なんこと関係ねえよ。相手がどんなものでも俺は逃げない。自分が『助けたい』と決めた奴の為なら、俺は地獄の底でも突き進む。それが俺の……『上条当麻』の信念だから！」

上条の言葉に目をみはるグラント。グラントは悟る、ここには予想もしなかつた強敵だったと。

「あなたの敗因は、武器の力に頼った上に、その武器が完全でなかつたことよ。しかも一点の攻防に特化しているあなたは面の攻撃には不利だった。つまり、私相手には相性が悪かつたってことね」

「だまれ…………この化物…………が…………ビームまで行つても…………貴様らの『一族』の定めは変わらん…………ぞ」

「それが最後の言葉？ 意外に小物だったのね。一族の定め？ そんなもの私が知ったことじゃないわ。とっくに『一族』から追放されてる私にとっては」

護は、目の前で繰り広げられるやりとりにただ啞然としていた。

分かつてはいたことだが、この作品世界のキャラたちは『凄い』。

そんなことを改めて自覚させられた護だったが、同時に戸惑いも感じていた。本来なら『ラミア』も『グラント』も……そしてクリスを始めとする『ウォール』のメンバーも、作品には登場しないはずの人物である。それが出来た理由は一つしか考えられない。すなわち護が異世界からこの世界に『介入』したから……であ

る。

すなわち、もしも『仲間』や敵が死んでしまつとすれば、それは自分でせい……

そんな護の心中などつゆ知らず、フリニアは護に向き直る。

「早めに加勢できなくて」めんなさい。この『ゲイ・ボルグ』はいつも手元に置いとくわけじゃないから

「それは仕方ないです。でも、そいつは『グラン』はどうするんです？」

「うちの部下たちで、こいつの実家に届けるわ。こいつの親はIRAとリアルIRAの区別はつかないだろうし、IRAの一員として国に貢献したと云えられる。こつは『敵』だったが、その親は違うからな」

既にものいわぬ死体となつてているグラント聖騎士団のメンバーが運んでいる間に、護たちはラミアからクリスの父親がリーダーを務めているという組織『タラニース』について概要を聞かされた。

『タラニース』とは、かつてアイルランドがイギリスと争っていた時代に、アイルランド聖教会直属の魔術勢力である『聖騎士団』とは別に民衆の手で作られた魔術結社のことをするのだといふ。

「IRAが長きにわたるイギリスとの戦いをえて、最終的に独立を勝ちとれたのも魔術勢力である『聖騎士団』や『タラニース』の暗躍があつたからなの」

「じゃあ……なぜ、『タラニス』は今も戦う……の？」

哀歌の質問は当たり前のことで、戦いが終わった以上『タラニス』の役目も終わるはずである。

「アイルランドは確かに独立を果たしたのだけれど、そのせいで、北アイルランド6州はイギリスのものとなつたの。その時にこれ以上の闘争を避けたい『聖騎士団』とアイルランド全土を取り戻すまで戦う意思をもつ『タラニス』が対立したの。結果としてタラニスはわかれらとは袂を分かつ、表向きはリアル IRAとして、未だイギリスに対して戦いを続いているの」

「なるほどな……まあ、それはそれとして……やっぱりクリスを助け出すんだ？」

上条は、いままででも動きだしたい表情をしていたがラミアを首を横に振つた。

「今すぐには、動けないわ。まず『聖騎士団』のメンバーを集めなきゃいけないし……」

「僕らは先に行きます！」護はラミアの声に被せるよつてなんだ。

「早くしないと手遅れになるかもしれない。それはそうですよね？」

「

「確かにそうだけど……あなたたちだけで行かせるわけには……」「確かにそうだけど……あなたたちだけで行かせるわけには……」

「

「心配になる気持ちも分かります！だけど、今はクリスが……
・僕の『仲間』が危ないんだ！早く助けたいのは当然です！」

「ハニアはしばし考える素振りをしたのち、ポケットから何やら丸めた紙を取り出さし、それを護に向けて投げた。

「それは地図よ。アイルランド語で書いてあるから哀歌つて子ぐら
いしか読めないだろうけど、クリスの家の場所が書いてある。いい
かい？ 絶対に死なずにまつてて。できるだけ早く私達も駆けつけ
るから」

ハニアの誠意に感謝し、護は深く頭をさげた。

「じゃあ、いこうかみんな。前回はクリス命名による『迷子のイン
デックス 捜索大作戦』だつたけど、今回は『囚われのクリス救出大
作戦』だ！ 僕らの『仲間』を救い出しにいくぞ！」

おひーーといっ掛け声が古城に響き渡った。

となる女性の戦闘介入（後書き）

グラントとの戦い。終了しました。

今回出てきた『ゲイ・ボルグ』ですが元は『死の女神』の持ち物だと知るまでにえらく時間をかけました（汗）

どうやらアイルランドの神話はキリスト教の伝来と共に徐々に忘れられていったようですね。なかなか難しいです（涙）

さて、次回はクリスと共にいた美姫と宗兵の方の話ににする予定です。

さうじて資料あつめに忙しくなるな（涙）

あと、みなさんのおかげでついに150ポイントこえました！ 有難いござります！

これからも感想などあれば送ってください！

とある古城の不安待機

「なあ・・・・・護たち、いくら何でも遅くねえ?」

クリスの実家である、エバーフレイヤ家所有の古城、『フレイヤ城』で高杉、美姫、クリスの3人は護たち一行の到着をまつっていた。

「ねえ、ベネット。護たちの車に連絡はまだつかないの?」

「はい・・・・・只今、幾度か応答するよう連絡を送っているのですが、返つてこないため搜索隊を出して確認を急いでおります」

「

ベネットの言葉にクリスの顔が曇る。クリス以外の『ウォール』メンバー達の表情も陰つている。

学園都市の裏側で動く暗部組織の一員である『ウォール』メンバーである3人はどうしても今の状況を悪く考えてしまう。即ちなんらかの『事件』が起きたのではないかと考えてしまうのだ。

「みなさま・・・・・そんな暗い顔をなさらないでください。そのうちにきっと連絡が・・・・・つづく」

「どうしたのベネット?」

「ただいま連絡が入りました。搜索隊が山中で放棄された2号車を発見。前部座席に2号車運転手のジェームズの遺体が乗せられていたそうです。また車体にいくつかの銃痕を発見したと・・・・・?」

「なんだって！？　じゃあ護たちは誰かに狙われたってのか？　て
いうか護たちはどうなったんだよ！　」

高杉の言葉にベネットは首を横に振った。

「護たちたちの姿は無かったそうです。その行方については捜索中
．．．．．ですが、同時に『追跡者』達からこんな情報が．．．
？」

「なにやら、クリスに耳打ちするベネット。その行動はすこし表には
出せない情報だということを意味していた。

「そう．．．．．．そつか、『あれ』が関わってるかもしねい
んだ．．．．．」

「はい．．．．．私兵部隊を動かしましょうか？」

「今の状況でお父さまが許すはずがないわ．．．．．．．．．．

2人の会話にまったくついていけない高杉とクリスだったが、と
にかく今は対策を立てなければならないと話に入ることにした。

「なあ、私兵部隊つてクリスの家が独自に保有する兵隊のことだろ
？　なんでそんなものを出すってんだ？　だいたい『あれ』ってな
んなんだ？」

「そりよ、護たちになにがあつたっていうのよ！？」

「ベネット．．．．．2人は『私たち』と同じ『裏側』を知る人

間よ。話しても構わないわよね」「

「お嬢様が良しとされるなら、私には異論はございません」

?ベネットの言葉に頷き、クリスは2人を見つめ直す。

「よく聞いて。この国には『IRA』というテロ組織が存在するの。正式には『アイルランド共和国軍』というのだけど、かつてアイルランドがイギリスに支配されていた時代、それを良しとしない人々が作った『抵抗組織^{レジスタンス}』が時代を経て変化したものなの。今回、護たちを襲撃したのはそのうちの一派……『聖騎士団』と名乗るやつらだと分かったのよ」

「アイルランド政府軍から、連絡がありまして『聖騎士団』が我が『エバー・フレイヤ家』に対して宣戦を布告してきたというのです。ただいま私兵部隊は城の周辺に展開して防備を固めはじめております」

「じゃあ早く私兵部隊の一部を動かして、護たちを……」

「そろはいがんのだよ、我が娘の友人たち、今は我が城への攻撃に対する備えを急ぐ必要があるのでな。残念だか攫われた友達へ私兵部隊は回せないので」

突然の声に慌てて後ろを向くクリスたちの目に入るのは、ブランドもので身を固める40代ほどの紳士。ジェラルド・エバー・フレイヤである。

「お父さまー、でも…………」「安心するんだ。私から軍と

警察へも協力を要請した。じきに見つかる。それよつこにも危ない、ベネット！ 娘たちを連れて『地下壕』へ行つてくれ。私はここで指揮をとらなければならん』

「分かりました。かならず御案内します』

それを聞いて安心したよつに息を吐き、階段で2階に上がつていくジヨラルドを見るクリスの瞳は少し悲しげな色をたたえていた。

「わあ、『地下壕』に繋がつております』

高杉たちが案内されたのは、城の地下にある地下牢の一室だった。

「あの……繋がつておる以上、これより下なんて……」

『『地下壕』はこれより更に下……地下20階にあるのでござります。この壁に掲げてある絵画を押す』と……』

』

ベネットが絵画を押した途端、床が急に沈みはじめた。

「沈んだ！？ いや、降下してゐのか？」

『その通りでござります。この部屋じたいがエレベータとなつてしまして、地下20階までの直行となつております』

『なんか忍者のからくり屋敷みたいね……そつこえれば『地下壕』ってどんなものなの？ 戦争中に作られてたつていう奴なの？

「

「いえいえ……そんなに古いものではございません。ジンラルドさまが作られたものであります……『地下壕』という名はついておりますが……まあ、ジンラルドさまの地下の私室といったところでしょうか」

そんなことを話している間に、エレベータは地下20階にある地下壕の入り口である鉄扉の前まで到着した。

「わあ、着きました。この扉の向こうが『地下壕』でございます

そうこうで伸びさせよとしたベネットの腕を高杉が掴んだ。

「高杉さま? どうなさいたので?」

「人の気配がする……」これは俺たち以外にも人がくる予定なのか?」

「いえいえ、そんなはずがありません! ここに立ち入れるのは旦那さまの御家族かその関係者のみです。そして旦那さまから渡されるエーパスを持っていないかぎりこのエレベータは動かせません」

となると、中にいる誰かは『よそ者、侵入者』あるいは『家族、関係者』ってことになるが……。

「クリス、美姫、ベネットさん。ここでもまつていて下さい。俺の『無限移動』で扉の外を確認していくる」

「そういえば、あなた様は学園都市の能力者でしたね」

「ちょっと！ もし扉の向こうの奴が敵だったら！」

クリスが言い終える前に高杉はさっさと瞬間移動してしまった。

「宗兵は大丈夫よクリス。あんたがあいつに惚れてるのは分かってるけど、すこしは仲間を心配しなさいよ？」

「バ……バカ！ 私はあいつのことなんて全然……」

「お嬢様も、『オト』をもつお年頃になられたのでござりますね」

そんな会話などつゆしらず、扉の向こう側に移動した高杉だったが、その前に意外な人物がいた。

「お久しぶりですね……あのアパート前の戦い以来でしょつか？」

「お……お前は！」忘れるはずもないその姿、長髪でボーネテールで巨乳で、おまけに、なんだか露出度の高い服装をしながら、とてつもなく長い日本刀を所持する女。

「あの日本刀ガールがなぜここに！？」

とある古城の不安待機（後書き）

今回、久々に高杉たち一般ウォールメンバーに話を戻しました。

今回、能力による戦闘はいっさいなしにしてしまいました。次回からはいれようかなと思っています。

ところで今回、高杉宗兵とクリス・エバーフレイヤの恋愛を混ぜようかなど思ったした時に ジャあ主人公である護は誰と付き合わせようかと悩むように

なにかアイディアがあつたら、感想で送ってくだされば幸いです。

とある地下での2人の邂逅

とある古城の地下深くにある『地下壕』。そこで2人の男女があいまみえた。

1人は科学の象徴、『学園都市』暗部組織構成員の高杉宗兵。もう1人は魔術勢力の象徴、『必要悪の教会』ネセサリックス所属の魔術師、神裂火織。

かつて、たった一度、それも一瞬だけしか戦つたことのない2人をここにで巡り合わせるとは、運命の女神は皮肉好きと言えるだろ？

「あんたは 確か、護の奴が言つていた『魔術師』って奴の一人だったよな？ なんでこんなところにいるんだよ？」

「仕事 いや、任務の為ですよ。アイルランド聖教からの依頼を受けて、エバーフレイヤ家当主『ジェラルド・エバーフレイヤ』を拘束して、イギリスに送る為にここで待機していたのですが、予想に反してあなたが現れたという訳です。」

「ジェラルド・エバーフレイヤって つまりクリスの父さんを攫うってことか？ なんて事をいいやがる！ あいつの母さんは死んでんだぞ！？ そんなあいつを更に苦しめるつもりかよ！」

「

高杉の言葉に神裂の眉がピクリと動く。

「当主の妻が死んでいる？ なるほど、あなたたちには事情が伝わっていないようですね」

「

「事情つて……よく分からんが、とにかくこいで俺が黙つて見逃すとは思つてないよな？」

戦闘態勢をとる高杉だが、今回は得物の『機能性炸裂弾射出器』はない。つまり自分の体を使つた格闘戦で挑まなければならぬ訳だが……。

（「正直、勝てる気はしないんだよな……」）

高杉は以前、アパート前で神裂と戦つたさい、神裂の超人的な身体能力を味わつている。

まともに戦えば、間違いなく負けることを高杉は痛いほど感じていた。

（「まともに戦えば勝ち目は薄い……だが俺の能力ならこの空間から追い出すことはできる……」）

拳を握り締めて、睨みつける高杉に対して神裂は静かな視線を向ける。

「あなたは、一度私に完全に負けています。奇跡でも起きないかぎり、あなたに勝つすべなどありません」

神裂の言葉に高杉はニヤリと口元を歪めた。

「違う……違うぜ、日本刀ガール。奇跡つてのは起きるものだ！ やねえ……起こすものだ！」

瞬間、神裂の視界から高杉は消え、次には神裂の真上から凄まじい

スピードの蹴りが放たれる。

だが、神裂は当たり前のように右手でそれを防ぎ、左手でカウンターの一撃を放つ。

その一撃を再び瞬間移動で避わす高杉。広い地下空間で拳と蹴りの応酬が繰り広げられる。

「なるほど、前回を教訓にそこしは改善してるようですね・・・。ですが能力者とはいえただの『人間』が私に勝つことは出来ないですよ？」

正面にたつ高杉の瞳に神裂のもつ刀『七天七刀』の放つ反射光が突き刺さる。

「七閃！」高速の抜刀術に偽装した7本のワイヤーを放つ技。まともに食らえば肉など切断されてしまう。だが高杉は瞬間移動の能力者である。

「んな攻撃当たるわけねえだろうが！」

再び能力を使用した高杉が移動したのは、神裂の・・・両足の間だった。

「！ なにを・・・」

驚愕し、混乱する神裂に高杉は少し苦笑いする。

「こなんところクリスに見られたら絶対鉄骨ぶつけられるだろうな・・・だが仕方ない！」

神裂の両足をがつちりとつかみ高杉は告げる。

「どうだ？ 奇跡は起こせるもんだろ？」

瞬間、神裂はその空間フイールドから消え失せた。

そのとたん、入り口の扉を蹴破る勢いでクリスが部屋に突入してきた。思わず身構える高杉だったが予想に反してクリスからの拳は無かつた。代わりにクリスは高杉に思いつき抱きついた。

「バカバカバカバカ！なんで私達を巻き込まないように1人で飛び込んじゃうのよ！ わたしたちはチームなのよ！一緒に戦うのが当たり前でしょ！」

「まつたく・・・私とベネットさんで抑えていたけど、戦闘音が消えたとたん無理やり振り切って飛び込んだのよ。余程、高杉が心配だつたみたい。普段は死ねしねいつてるくせにね」

呆れながら言う美姫だったが、その口調にはバカにする響きはない。むしろ羨ましい響きがあった。

「悪かったよクリス。だからそのせ・・・すこし離れてくれねえか？」

そう指摘されて始めて、自分が高杉に完全に密着していることに気づき思わず真っ赤になるクリス。

「仲のよろしいことで、良かつたですなお嬢様。ところで高杉さま。先ほど戦つてらした相手はどこに消えたのですか？」

高杉は宙をさす。

「飛ばしたのさ。俺らがこの国に降りたつた場所。ダブリン空港へ」

「あそこから、ここまではかなり遠いんですが 」

「それが俺の『無限移動』なんだよ。正確な座標と風景さえ覚えていれば、たどえここから日本へでも飛べる。ただ精神状態や体力に影響されれば海にドボンもありえるけどな 」

高杉はやっと離れたクリスや美姫と肩を寄せ集めた。

「俺が戦つた相手は、前に護の奴が言つてた『魔術師』という奴らの1人だ。あと『アイルランド聖教』の依頼を受けてるとか これはよく分からんけど、クリスの母さんが死んでいるとこいつことを否定するような素振りを見せてた 」

「それ、本当なの!? ねえ高杉ー母さんが生きてるかもしれないの! ? 」

「詳しいことは分からぬ。でも、なんでそんなに驚くのさ? 」

「 あのね、私の母さんは元々 IRA の1人だつたの。でもアイルランドが独立を果たしてからは、IRA の稳健派に所属してたの。過激派だったお父様とはそのころ知り合つて、すぐに付き合い始めたみたい。でその後、私が6歳ぐらいまではなにごともなく過ぎて行つた。でもある年、IRA過激派が稳健派の要人を片っ端から襲撃する事件があつたの。事前に父さんから連絡を受

けていた母さんはなんとか家からは逃げたんだけど、通りに車で出たところでトラックに追突されて海にドボン。ひき逃げだったから、見つかったのはだいぶ後、おかげで母さんの遺体も見つからなかつた。私が母さんの薦めもあって学園都市に通うようになつた直前だつた」

クリスは少し目を伏せた。

「私は母さんの遺体を見ていない。だからもしかしたら生きているかも知れない。そんな希望を抱いていたの。もし高杉と戦った相手が嘘つきじゃなければすこし希望が見えてくるつてことなのよ」

思わぬクリスの辛い過去に触れるこになつてしまつた2人は黙つて聞くしか無かつた。

「確かにな……」こを狙つてる『聖騎士団』だっけ？そいつらを捕まえて喋らせれば真実が分かるかも……」「それはいけません……お姉さまは、知つてはならないのです」

突然の声に一斉に振り向く4人の前に立つていたのは、見たところ13～14歳の少女たち2人組。

「私は、アン・エバーフレイヤ」「私は、セレナ・エバーフレイヤ」

2人は声を揃えて言葉を放つた。

「お姉さま。お父様の為にお姉さまの保護と同行者の排除を開始

とある地下での2人の邂逅（後書き）

高杉2度めの神裂との戦闘です！

いやは勝たせるのに苦労しました。

そしてメンバーの一人、クリスの秘密が明らかになっていきます。

なかなか、オリジナル・ストーリーとかは難しいですねw

とある姉妹の女神特性

高杉たち4人は異常な状況に混乱していた。

目の前に現れた2人組の少女、アン・エバーフレイヤとセレナ・エバーフレイヤ。その姓『エバーフレイヤ』が示すのはただ1つ彼女たちがクリスの関係者ということである。

「なあ、クリス…………お前に妹つていたのか？」

「ええ、確かにいたわ。でももう何年も前にIRAのテロで2人も亡くなってるのよ！　あんたたち妹の真似なんかして、なんのつもりよ！」

「お姉さま…………私達は間違いなくお姉さまの妹です。あの事故で確かに私達は1度死にました。でもお父様が生き返らせてくださったのです。力を『える』という方法で…………」

「そんなはずないわ！　お父様がスピリチュアルな事柄にすぐ詳しいのは知ってるけど、いくらなんでも…………まさか！」

「ふふ…………お姉さまはやはり信じられませんか。だけど関係ないです暫く眠っていてください」

アンの目が赤く光る。その光は否応なくクリスの瞳に突き刺さり……その意識を奪つた。

「クリス！？　くそ！　なにをやつた！」

「なに……すこし寝てもらつただけです。だつて……
これから始まる戦いはお姉さまには刺激が強過ぎますから」

「ヤリと笑うアンとセレナに思わず身を引く高杉。2人の表情は狂
氣じみていた。

「さて、まずはお姉さまの気にかけるあなたから、血祭りにあげて、
お姉さまの心を開きましょう」

「なら私はそっちの子を片付けるわ。良いかしら?」

「ええ、構わないわ」

2人の少女はそれぞれ右手を前に突き出す。

「バブドよー」「マハよー」

「「わが身を用いてこの地にいでよー」」

その途端、2人の体を膨大な闇が包み込む。

「これはまさか……魔術!?」

「そうね……」これは、少なくとも科学の範囲には入らない。
なによりこの圧迫感……少なくともこの姉妹。普通の
人間じゃないわ

「よく分かつているようですね。ですが分かつたところで私達に勝
てるとは思わないでくださいよ?」

巨大な闇を払い姿を現した2人は異形の者へとなりはてていた。

「驚きましたか？この姿が運命女神であるバブドとマハの象徴たる姿なんですよ」

「バブドは大カラス。マハはカラス。それぞれ戦場ではカラスの姿を取るんです。そして人という容器いれものにそそがれた神が人を通して象徴の姿を取れば……この姿になるんですよ」

2人の体を黒き羽毛が包み込み、その背からは漆黒の黒き羽が大きく広げられていた。

「さあ、始めましょう」

アンとセレナは声を揃える。

「「血塗れの歓迎会を…」」
カーバル

アンとセレナはそれぞれの相手に向かっていく。一直線に明確な意思をもつて。

「くそが！ ベネットさん！ クリスを連れて上に逃げて！ こいつの狙いは俺たちだ！ ベネットさんまで巻き込まれる必要はない！」

「

「他人の心配をしてる場合ですか？」

白銀に光る剣を一気に突き入れてくるアンに対し、高杉には得物はない。だが、高杉には能力という武器がある。

突き入れてくる直前に瞬間移動しアンの背後から鋭い一撃を放つ高

杉。だが

ガギン！と、いつ甲高い音とともに高杉の足は黒き翼に防がれた。

「鉄板入れてゐるのに、ふせぐのかよ！」

舌打ちするた高杉に向けてアンはニヤリと笑いかける。

「ふふふ 勝てるかしらね？」

瞬間、アンの体を覆う羽毛が一斉に舞い散つた。

「つっ！？ なにを ぐわあ！？」舞い散つた羽毛の1枚1枚が漆黒の短剣となつて高杉の体に突き刺さる。瞬間移動のおかげで全ては刺さらずに済んだが、すでに左肩、右足、わき腹に短剣が突き刺さつている。

「ふふふ そんないじでお姉さまを守れるつもりだったなんて、片腹痛いですわね」

「そりかよ。だが俺もがっかりだぜ？ この程度の攻撃とはなんなもの氣をつければ簡単に避けれんぜ？」

高杉の言葉に口元を歪めるアン。

「私の全力はこんなものなはずがないでしょ？！」

アンの翼が振るわれた先はクリスを抱えて逃げるベネット。

容赦なく振り下ろされた翼は、ベネットの体を吹き飛ばし、同時に

クリスの体を包み込む。

「お姉さまはいただいたわ。じゃあ、ちょっとお姉さまに協力してもらつて手品でもやりましょうか」

その翼が離れた時、そこに広がる光景に高杉は目を疑つた。

「そんな、馬鹿な！」

信じられないのも、当然だ。なにしろそこにはクリスが10人いたのだから。

「先にタネ明かししておくと10人中、9人は偽物よ。1人だけが本物。ただし能力は同一。性格は全員があなたへの敵意しかない。もちろん本物オリジナルも今は『敵意』しか残らないように調整してある。．．．．．さあ、守ろうとした人間に攻撃されるなんて．．．．．最高のシチュエーションじゃない？」

アンの言葉を合図に、10人のクリスが一斉に高杉に襲い掛かる。

一方、姉妹のもう一方、セレナと美希との戦いは、ほぼ互角に進んでいた。

「しつこいわね！　いいかげんに倒れなさいよ！」

「うるさい！　この程度の電撃で倒れてたまるか！」

「だったら砂鉄で切り刻んであげようか！？」

「私の翼に通用さないことはさつき実証したんだけど…」

閃光と爆音、土煙と轟音、いつのまにやら2人は高杉たちのいる場所からかなり離れた場所まで移動して戦っていた。

「うん？ そういうのは、どうなの？」

「ふふ……やつと氣づいたか。ここまでお前を誘えれば私の勝ちは決まったようなものだ！」

なにをと言いかけて美希はあることに氣づいた。『Jの部屋』には無数の『棺』が置かれていることに。

「Jの部屋の名は『靈安場』」

セレナは告げる。

「そして、私に宿る神、マハは広大な埋葬地を統治していたとされている……この言葉の意味わかるかしら？」

美希がなにかを言う前に異変はおきた。部屋に無数に置かれている棺のふたが一斉に開いたのだ。

「さあ、起きろ！ 死人ども！ お前たちの倒す相手はすぐそこだ！」

次の瞬間、部屋一面に置かれた棺から、無数の死人が襲い掛かつた。

高杉と美希はまさしく最悪な状況に追い込まれようとしていた。

とある地底の戦闘終盤

「くそが……これで、どう対処しろって言つんだよ？！」

高杉は10人のクリスが放つ無数の鉄球をひたすら避けながら下を噛んでいた。

「（どれが本物か分からぬ以上、迂闊に攻撃はできない……俺の能力じゃ、相手を飛ばすことはてきても動きを止めることは……くそ！）うじうのは護の奴が一番向いてるんだかな！」

（ ）

舌打ちしつつ宙を移動する高杉の視線の先には10人のクリスと1人の少女。魔術師姉妹の姉、アン・エバーフレイヤだ。

「ふふふ……お姉さまを傷つけるのをよほど警戒しているようですね……ならやる気を起こさしてあげましょウ」

アンは、羽毛の一枚を剣に変え、近くに立つクリスの腹を突き刺した。

「……クリス！」口から血を吹き出し、地面に倒れしていくクリス。高杉はそちらに向かおうとするが、倒れた瞬間、クリスは羽毛に変わった。

「良かつたわね～。こいつは偽物よ。でも、次に刺すのも偽物とは限らないわよ？」

悪魔の笑みを浮かべるアンに高杉は苦々しげな視線を向ける。

今ままでは完全に手詰まりだ。普段意識しない護や哀歌たち仲間の存在を高杉は嫌といつほど思い知らされていた。

「はは！ やっぱり手も足もでないよ！ そんな甘い気持ちで私達に勝てるわけないんですよ！」

アンの翼から放たれる無数の羽毛が剣となつて高杉を狙う。

「さあで、じこまでもつか楽しみですね！ セイゼイ仲間に狙われる苦しみを……」

アンの言葉は最後まで続かなかつた。なぜなら、地下の扉をぶち破り、少女が入ってきたからだ。高杉が待ち望んだ仲間の一人。

『竜崎哀歌』が。

「待たせたね……助けにきたよ……」
上にいつて高杉……クリスは上よ

「な……なにを言つて……お姉さまはここにいるのですよ？」

「私にまで小細工が通じると思った？ ……そこのクリスはあなたが羽毛を変化させて作った偽物……女神バブドの特性の一つである戦場での同士討ちをそつこと利用してみたいだけ……同じ魔術師の私には一瞬で分かるほど雑な術式ね」

唇を噛み、睨みつけるアンに対し哀歌は明確に言葉を叩きつける。

「debit a935 」の魔法名に誓い、私はあなたを逃がさない！」「

瞬間、哀歌は自分がぶち破つた扉を片手で持ち上げ、ブーメランのように『放り投げた』。

「！？ こいつ、化物！？」慌てて避けるアンを掠めて巨大ブーメランと化した扉は容赦なく9人のクリスを薙ぎ払う。

「まじか . . . 全部本当に偽物かよ！ クリスを、俺の仲間を利用しやがって！」

「高杉！ あなたが怒りをぶつけるべき相手はこっちじゃない！今はクリスを助けることに集中して！ 上に急いで！ ク里斯は父親と共に隠し部屋にいる！ 場所は護が教えてくれる！ 早く行って！」

「

哀歌の叫びに、我に帰り、自らの体を転移させようとする高杉に向けてアンの剣が飛ぶが、その攻撃は哀歌の『火竜の怒りをは大地を焦がす』により燃やしつぶされる。

「どこを狙ってるの？ あなたの相手は私だよ

「

哀歌は、アンを睨みつけ、自らの腕を高く上げる。

「Jの地の底で、私の仲間に手を出したこと、永遠に後悔させるから！ 現出せよ『ディストラクション・ブレイト破壊大剣』！」

瞬間、眩いばかりに溢れる閃光と衝撃波にアンの体は包まれた。

一方、『靈安場』でセレナ相手の戦いを続ける美希は孤独な戦いを続けていた。

棺から無数に溢れ出でくる『死人』。
アンデッド

どこかのホラー映画のように瞞されたら、仲間になってしまつ訳ではないようだが、映画以上の俊敏さを持つており、ここは映画通り、頭部を攻撃しなければ即死とらならない。

とは言え、電撃使いの美希にとつては最大出力の電撃を浴びせれば大概頭にもダメージがゆくので倒すこと自体には苦労していない、ただ、余りにも連續して能力を使用する場合、『電気切れ』を起こしてしまう危険があるので。そうなつてしまえば、美希はただの『女子中学生』となつてしまつ。

「まったく……………どんだけ出てくんのよ、あの死人ども……………だいたいあの棺からどんだけ出てくんのよ？　あの大きさでの数はなしでしょうが！」

そんな事を愚痴つている間に、隙をついてセレナが羽毛を変化させた無数の短矢を浴びせかける。

それを電撃で片つ端から叩き落とす美希だったが、ここで遂に電気
切れが起きました。

「ぐー? しまった ?」

「おやあ？ 電池切れかな、ビリビリちゃん？」そのままだと死人

「どもの仲間入りだよ？」

嘲笑するセレナに向けて美希は目線を向ける。

「分かった……私の負けよ……好きにすれば良いわ。
その代わり、一つ教えて欲しい事があるの……」

「なに？」

「あなたを助けたお父さんは、なにを企んでるの？」

セレナは口元を歪める。

「話す義理なんてないけど、まあ冥土の土産に教えてあげる。お父さまが為そつとしてるのはイギリスの占領よ。かつてアイルランドを支配したイギリスを今度は「から」が占領するのよ?こんな愉快な話をないじやない!」

は
・
・
・
・
は
・
・
・
・
・
は
・
・
・
・
・
・
・

突然、笑い出す美希を怪訝な顔でみるセレナ。

「なにが可笑しい！」

「いや なんだ、そんなショボい」のために、こんな力を使つてゐるなんて知らなかつたからさ なんだ、私はてつきり世界征服とか考へてゐるのかと思つてたけど なんかえらく外れたわね なんか、アンタを潰すのも馬鹿らしくなつてきた だから アンタじゃなくて、こつちを潰す！」

美希の目がキラリと光つたのをセレナが確認した次の瞬間、靈安場の4方の壁が突如崩れ、部屋を地下の照明が照らし出す。

動いていた死人たちは、一様に身悶えし、次々と倒れていく。

「バカな…………なぜ、貴様に力が残っている？」

「逆に聞くけど、私が一度でも力を使い切ったと言った？　この死人どもが靈安場入り口に近づかないのに気づいて閃いたのよ。この死人どもは『靈安場』という環境の中でしか活動できないんじゃないのかってね…………大当たりだつたわ！」

見抜かれて動搖する、セレナの足元が四角に区切られ、彼女の体は穴に落ちていく。美希が砂鉄を操ったのだ。

「これで終わりよ、セレナ。しばらく眠りなさい！」

穴に向けて雷撃のヤリが放たれ、戦いに終止符が打たれた。

ひかる地底の戦闘終盤（後書き）

おかげで、多くの皆様にみていただき感謝しています！

この、番外編はまだまだ続きますが、よろしくお願いします。

とある執事と風の少女

古城内部の一室、隠し部屋にクリスの父、ジョンラルド・エバーフレイヤー家執事『ベネット』。ト。

「まもなくだ……まもなく計画が成就する。時期的には少し早いが『聖騎士団』の手が完全に伸びる前にことは終わらせねばならん」「

「まだ、運命の3女神の特性を持つ者は2人しか集まっておりません。4人目の御息女はいまだに見つかってはおられませんのに……」

「かまわん……たとえ2人でも、クリスの『主導神ダヌ』の力があれば十分に事はたりる……まあ、長期戦はきついがイギリス清教の持つ『遠隔制御靈装』を奪う程度には十分に役立つはずだ」

この隠し部屋は古くからこの城の内部に作られているもので、数々の戦乱の中、当主を守り抜いた部屋もある。

「それはそうとして……『侵入者』はどういたします？城内部に『必要悪の教会』^{ネセサリウス}所属の魔術師複数の侵入を確認しておりますが……」

「消せ」「ジエラルドの冷え切った声が部屋に響く。

「アイルランド統一のために戦ってきた我々が『対魔術師戦力』を

保持していないはずがないだろうが……『タラース』戦闘員をすべて出すのだ……やつらを一人残さず始末しろ。指揮はお前が取れ

「かしこまりました……儀式の準備を整え次第、私も戦列に加わります」

一礼して部屋からベネットが出ていき、部屋に静寂が満ちる。

「あいつがクリスを学園都市に送った時はヒヤヒヤしたが、とにかくこれで計画に必要なパークはすべてそろつた。娘たちの体さえあれば計画は実行できる……ふははははー見ていろいろイギリス王家よ！我らの絶対的な正義を味あわせてやるー！」

「絶対的な正義…………良く言えますね、そんな言葉」

予想もしない声にバツと後ろを振りかえるジエラルド。その瞳に映るのは…………

「取り返しにさせてもらいましたよ。さて、僕たちの仲間を返してもらいましょうかね？」

古門 護、高杉宗兵、上条当麻の3人の姿が高杉の瞳に突き刺さる。

「馬鹿な…………きさまら、どこからこいへ？ この場所は通常の方法ではたどり着けない！」

「あいにくと、こちらにも『魔術の専門家』がいましてね、彼女の力を借りて探り当て、後は高杉の力で瞬間移動すればそれできことは終わるんです」

「

護は、自らの右手をジョラルドに向ける。

「……で終わりにしませんか？ あなたの娘、クリスの妹達はいま
『』の哀歌と美希が押さえている。あの2人を含めなきやあなたの計
画は実行できないのですよね？ だったらこれ以上の戦いは無意味で
しかないと思いますけど？」

「ふん……知つたような口をきくな小僧。その口ぶりからす
ると、『聖騎士団』と接触したと『』ことか……なるほど
奴ら、かなり正確に俺の計画をつかんでいたようだな。だが、そ
のすべてが正確なわけじゃない」

ジョラルドは口元に冷笑を浮かべた。

「わが娘達から聞かなかつたのか？ 私はあの2人を『蘇生』させ
たことを」

一瞬、何を言わたのか理解できない護達だったが、すぐにその言
葉の意味を悟る。

「まさか……」

「そうだ……娘達が死んでいようが『女神の素質を持つ体』
さえあれば十分なのさ。よってお前達がいくらわが娘を押さえよう
が、わが計画には影響しない」

抑え笑いをしながらジョラルドは続ける。

「ただし、私の計画を頓挫させることはできるぞ。なにしろ私の計

画はあの2人の体がなければ成立しないのだからな……完全に消滅されれば私としても計画をあきらめなければならぬ……だが、貴様らにそれができるか？ わが娘、クリスを取り戻すためにきたお前たちにその妹を殺せるか？』

グッと口ごもる護。確かにここでクリスの妹達を消滅させてしまえば、クリスの心にどんなダメージを『えてしまつかわからない。だがここでジエラルドの計画を止めなければ自分たちを信じ送りだしたクリスの母ラミアに申し訳が立たない。

「古門。こんな奴に選択肢を限定される必要なんてねえよ。用は俺達がこいつを倒せばそれで解決つてことじゃねえか』

上条の言葉にはつとめる護。いつの間にジエラルドに2つの選択肢しか解決策がないように誘導されかかっていた。

「その通りだぜ護。こいつさえ倒せばすべてが終わる。クリスのためにもお前に希望を託したラミアさんのためにも絶対にこいつを倒して俺たちの仲間を……クリスを取り戻そう！』

そう。自分達『ウォール』の仲間。学園都市の闇の中で共に戦ってきた仲間。暗部組織構成員として生きることが良いことだとは言わない。それでもこんな所で『道具』として利用されるよりはずつとましなはずだ。

「ああ。取りもどそうクリスを。元凶倒してすべて終わりにするぞ！」

護は差し出した右手に重力を纏わせる。同時に自らにかかる重力を極端に減らし護は面白の前の敵に飛びかかる。

「重力拳！」重力により極端に重さがプラスされた拳がジェラルドの顔にめり込む。

そのまま軽く5メートル吹き飛び壁にめり込むジェラルド。

「ぐふ・・・・・　きさま、その能力・・・・・なるほど噂に聞いた『重力掌握』^{グラビティマスター}とやらか・・・・・重力を操るとは、全くなめた力を持っているものだな」

「なぜ、僕の力を？」

「逆に知らん方が不自然だと思うがな・・・・・貴様、自分がイギリス清教に危険視されていることを知らんのか？我々『タラニース』はイギリスと戦い続けている組織だぞ？　イギリス内部の情報をある程度つかんでいないはずがない。　禁書目録を守護するためとはいえ、貴様が東洋の聖人や天才と呼ばれた魔術師を倒したことがどういう意味を持っているかぐらい考えれば分かるはずだ」

その言葉は護にとつて衝撃的だった。イギリス清教を敵に回した？

一瞬思考停止状態に陥った護に向けて、ジェラルドは突如出現させた2振りの剣を向ける。

「甘い・・・・・　甘すぎるぞ『重力掌握』！　」その剣から猛烈な光の波が放たれる。

「この技は・・・・・あの時のーー聖騎士団の皆での戦闘の時、グランが放った技。

「ヌアダの剣……お前たちはどうやら知つてゐるようだが……」
「……こいつは量産型ではないぞ？本物だ！」

放たれた光の波は凄まじい勢いで壁を吹き飛ばす。

「さあて……全面戦闘の始まりだ！」その言葉を合図に、隠れ部屋の外に配置されていた『タラニス』戦闘員が一斉に護達に襲い掛かる。

通常なら、ここで護達は終わつていただろう。魔術の専門家である哀歌は『地下壕』で戦闘中で禁書目録インテックスは『聖騎士団』に保護されているため魔術に対抗できる人間が上条だけでは勝ち目は薄い。だが、ここで思わぬ助つ人が入つた。

「わが手には炎、その形は剣、その役は断罪！」突如、猛烈な火炎が今まさに飛びかかるつとしていた『タラニス』戦闘員達を吹き飛ばす。

その炎を放つた本人は、護達を見て、面倒そうに舌打ちした。

「やれやれ、本来なら君たちを助けるつもりなんかなかつたのにねえ。僕と言う奴はよほどのお人よしのようだ！」

護は眼を疑つた。そこに佇むのはイギリス清教の魔術師、スタイル・マグヌスだったからだ。

「なぜだ？なぜイギリス清教の人間がその能力者を守る？敵視していたはずではないのか！」

「僕だつてこいつを助けるつもりなんて毛頭ないさ……」

だが、この子の体を苦しめていた魔術を取りのぞいてもらつたのは事実だし なにより禁書目録インオックスが彼らを慕つて いる以上 僕は彼女の笑顔を守る必要があるんでね 』

スタイルがかつて記憶を失う前の禁書目録インテックスにした誓い。

『安心して眠ると良い。たとえ君は全て忘れてしまつとしても、僕は何一つ忘れずに君のために生きて死ぬ』

「本来なら、アイルランド聖教からの依頼で神裂と一緒に『地下壙』で待ち伏せする予定だつたんだけど、直前に『隠し部屋』の存在が伝えられたから探していたんだが まさかここで厄介な顔と会うとはね 正直想定外だつたけど、結果的にはこれで良かつたかもしれないな ジェラルド・エバーフレイヤ、あなたを倫敦塔までお送りしましょう。下手な抵抗はよしてください」

ジョラルドは思わず展開に呆然とした様子で硬直していたが、すぐにスタイルをにらみ返した。

「はたして、君達総出で戦つて我々『タラニス』をつぶせるかな？ アイルランド最大の魔術結社でもある我々をなめてもらっちゃこまる」

「僕が、今までいつたい幾つの魔術結社をつぶしてきたと思う？ 今、僕は最高に怒りを覚えてるんだ あの子を狙う君にね 」

スタイルの言葉に押されるように後ずさりするジョラルドに向けてスタイルはローンカードを突きつける。

「灰は灰に、塵は塵に、吸血殺しの紅十字！」ステイルの両手から放たれる2本の炎剣をジエラルドはかきうじて避ける。

だが、当然ながら背後に控える『タラース』戦闘員全員が避けられるわけではなく、多くの戦闘員が業火に焼かれ、炭化した死体となって転がる。

「くそが……たかが1人の魔術師如きにわが計画を潰されてもたまるものか！　おい！ベネット！」はお前に任せた！　奴らを食い止めるのだ！」

自らも剣をふるい戦っていたベネットはジエラルドの言葉に静かに頷き。スタイル達に向き直つた。

隠し部屋に複数あるらしい脱出口に向かつジエラルドに向けて放たれるスタイルの炎剣をベネットは水流を纏わせた剣で強引に切り裂き消滅させる。

「大変申し訳ありませんが……旦那さまからのお達しでここから先にあなたをお通しすることができないのですよ」

ベネットは悲しげな視線を護達に向ける。

「わたくしとしては本来あなた方と戦いたくなかった。しかしエバーフレイヤ家に仕える身である以上、主の命令には従わなければないのです」

ベネットはおのれの持つ剣に目をやる。

「この『報復者』も、もつずいぶん働きました。正直、この戦いを最後にしたいのでござります……お觉悟ください、御一同様。手加減はいたしませぬので！」

アイルランド神話における伝説の武器の一つ『報復者』^{フラガラッハ}。その剣が光を発したかと思うと、複数の光の剣が空間から滲みだすように現れる。

「この剣は、どんな鎧でもどんな鉄でも打ち砕き、貫通するのでござります。形こそ光でも切れ味は同じ……さて、この全てを受け止められますかな？」

ベネットの言葉を合図に宙に浮かぶ複数の光の剣が一斉に護達に向けて襲い掛かる。

スタイルはとっさに炎剣で光の剣の一本を防ぐが、そのすきを突いて別の剣が彼のわき腹をかすめる。

「グ……！」苦痛に顔をしかめるスタイルに3本目の剣が襲い掛かるが、「ふん！」という掛け声と共に護が振るう剣が光の剣を弾き飛ばす。

護が持つのは『ヌアダの剣』の量産品の一つ。『タラニース』戦闘員がもつっていたものだ。

護達が戦つたグラントは右腕を『銀の腕』とすることで『ヌアダの剣』を自在に扱つていたが、どうやら『銀の腕』とは腕を覆う Gandレットのようなものだつたらしい。つまりグラントは嘘をついていたわけだが……。

「何はともあれ……これを使えば科学サイドの僕でもある程度戦えるわけだ」

もちろんプロの魔術師でもない護に『ヌアダの剣』を使った魔術は扱えない。だがただの武器として『ヌアダの剣』を扱うことはできる。さらに『神話級の武具を扱えるだけの筋力を授ける』特性を持つ『銀の腕』を利用すれば今まで実現不可能だった技を実現することができる。

「前回もそうだったけど、僕の能力は魔術攻撃に対して効きにくい面がある。でも魔術的武器を能力で強化した攻撃なら、多少は効くはずだ！」

剣を高々と掲げた護を警戒し、剣を構えるベネットだが次の瞬間、凄まじい衝撃が彼の持つ『報復者^{フラガラッハ}』に走る。

「！！」その勢いに押されて剣を構えたまま後ろに飛ばされるベネット。前方に佇む護はすでに剣を水平に構えている。

その攻撃を視認させない一撃。護は『ヌアダの剣』の上からの斬撃に強力なGを加えることによって音速を超えるスピードで剣をふるい、凄まじい衝撃波を前方に放ったのだ。

通常、音速で腕を振るなどすれば腕の方が耐えきれず吹き飛んでしまう。その上人間の筋力ではそもそも音速を超える速度で剣をふるうなど不可能である。護の能力を使えば可能かもしれないが、腕はあくまでも人並みである。しかし『銀の腕』を使えば、それらのリスクを魔術的な効果によつて克服できる。

「まさか……量産品を利用することは……いやは

や考えもしませんでした。ですが、所詮量産品は量産品。本物にはかないませんぞ?」

殆ど一瞬と言つてこゝほどのスピードで護の前に立つベネット。その剣が護の首を飛ばそうとするが、間一髪で高杉が護に触れて瞬間移動する。

「おや……他の方々に倒されてしまふましたか

「生憎とな。おたくの戦闘員は全員潰させてもうつた…………次はあなたの番だぜ」

「はたして、そいつまへこきますかな?」

にせりと笑うベネットに悪寒を感じ、下がるつとある高杉だったが、直後体がベネットの方向に吸い寄せられるのを感じた。いや、正確にはベネットにではない『報復者』^{フランガラッハ}に吸い寄せられてくるのだ。

「神話では敵対者が自ら刺さつて来ると記される力ですが…………さすがにそんな力はないのです……ただ相手を自らの近くへ寄せる力として強力な吸引力を発動できるのですよ」

ベネットがつきだす『報復者』に向けて一気に高杉の体が吸い寄せられ……当然の結末として高杉の体を『報復者』が貫いた。

高杉の口から血が噴き出し、背まで貫通した剣からは真っ赤な滴が地に落ちる。どうかわづ見ても致命傷だ。

ベネットがゆつべつと剣を抜くと同時に高杉の体が地面にドウと倒れる。

「高杉！」護が駆け寄ろうとするがその前に『報復者』の刀身を血で真っ赤に染め上げたベネットが立ちふさがる。

「まだ戦いは終わっていいですよ？ 次はあなたの番でございます」真っすぐに突き出される『報復者』を『ヌアダの剣』で受け止めようとする護だったが、所詮は量産品。本物の一撃を受け止められるはずがなかつた。

容赦なく『ヌアダの剣』を碎いた『報復者』が護の胸を刺し貫く。不自然なほど痛みを自覚できなかつた、ただ体の力が抜け、果然と自分の胸に刺さる剣を見つめ、護は一気に地面に倒れ伏せた。

まだ、この場にはスタイルと上条がいる。彼らだけに戦わせるわけにはいかない。そう思うのだが体が言つことを聞かない。

「大丈夫か！ しつかりしろ！」上条が高杉を揺すつてゐるらしい、だが直前に上条の声が、いや気配が消えた。どうやら瀕死の高杉が上条をどこかに瞬間移動させたらしい。

とにかくこれで、無駄死にが出ることとはできた。もつとも自分たちも無駄死にしそうな身で偉そなことは言えないのだが。スタイルはプロの魔術師だ。形勢が悪いことを悟れば逃げ切ることもできるだらう。とにかく自分達の役目は終わりといふことだ。

「（人生の終わりを異世界で迎えるなんてな……ていうか、ここでのことが全部夢で死んだら元の世界に戻れたっていうオチにならないかな……）」

もはや視界はかすんで、ほとんど何も見えない。すでに体の感覚のほとんどは消えさせ、死に向かつて進んでいるのが分かる。

その時、ふと護の耳元で言葉がささやかれた。

「死なないで」

聞き覚えがない、だがどこか懐かしい声。

「助けに来たよ 約束、忘れてないよね？」

優しい優しい少女の声。この声を確かに護は聞いたことがあった。

その耳に響く風の音。

再び少女の声がした。

「今度はあなたを絶対助けて見せるから！」

その声を聞いた直後、護の意識は暗闇に沈んでいった。

心ある執事と風の少女（後書き）

今回は最近にしては珍しく長めになりました。長期休載していくぞ
めんなさい（汗）

今回、最後の最後にこの話のキー・ポイントになる人物をちらりと登場させてみました。

誰だかはお楽しみとしていたので

ちなみに、『イルランド旅行編』はこれで終わりではないですよ！

もう少しだけ続きますので、退屈な方、もうすこし我慢をお願いします。

あと少ししたら、本編に戻していくつもりですでのー。(涙) tu

死から田間めと最後の特性

「ねえ、君はだれなの？」

静かな静かな夜の湖畔。焚き火に照らされながら聞く少年に縁の少女は静かに答える。

「私にもわからない……」

少年は黙つて湖畔を見つめた。

「じゃあ、なんで僕を助けたの？」

縁の少女は首をかしげてしばし悩む。

「私にはできなかつたから……」

その少女の言葉の意味を少年は知らない。それでも隣の少女の憂いは感じた。

「私はここにいる理由がない……なのに、君を助けて……ごめんね、巻き込んじゃつて」

「心配しないで？」

少年は笑顔を見せる。

「僕が、君がここにいる理由になるから」

少年の言葉に少女はふと表情を和ませる。

「あつがとう」

少年と少女はいつまでも静かな湖畔を見つめていた。

「…………僕…………は…………いつたい…………」「護はふと意識を取り戻した。

「たしか、あの時…………」

フレイヤ城の隠し部屋で、護はエバーフレイヤ家執事のベネットと戦った。そして戦闘のさなか、ベネットのもつ『報復者フラガラッハ』に胸を貫かれ、そのまま地に倒れ伏せ意識を失った。意識を失う直前に誰かの言葉を聞いた気もするのだが、ぼんやりしていて思いだせない。

「ん…………護が起きた！ みんな来て！ 護が起きた！」聞こ覚えのある声に目を向けるとそこには美希がいた。

「美…………希…………？」「良かつた…………もしかしたらアンタがこのまま田を覚まらないのじゃないかと思ったわよ」

安堵のため息をつく美希。どうやら心配をせじこまつたようだ。

「護…………良かつた…………」

駆けつけてきた哀歌も安堵の声を漏らす。心なしかその瞳がうるる

でいる。

「しかし良かつたぜ。俺の右手もほとんど役に立たないまま、お前達が死んじまつたら後味悪すぎるもんな」上条も安堵のため息を漏らした。

「あのや………！」は、ビーム？

護の問いに答えたのは、いつの間にか護のベットのすぐ横まで来ていたラミアだつた。

「！」は『聖騎士団』が管轄する修道院付属病院よ。あなたはベネットとの戦いの後、ここに運ばれて治療を受けてたの。正直危ないところだつたわ……結果的には高杉つて子も合わせて2人とも一命を取り留めて良かつた……

「あの………僕つて………そんな重傷だつたんですか？」

「大変な重傷よ。なにしろ心臓を剣で刺し貫かれたんだから。しかも神話級の『靈装』でよ？ これで重症にならないはずないでしょう？ 実際、あなたは一度『死んだ』のよ？」

「へ？………死んだ！？」

「ええ………確かにあなたは一度死んだ………でも、おかしなことがあきたのよ………戦場に乱入してきた少女………フードかぶつていたから声からの推測だけどあなた達と同じくらいの少女があなたに触れた途端にあなたが息を吹き返したのよ！ そのままその子は高杉君にも触れて息を吹き返させた………そしてそのまま、あなた達を狙っていた『タラニス』戦闘員達を手を振るだけで『斬り

捨てていた』わ。まるで見えない斬撃を放つかのよつ』

ラニアは呆れたように首を振る。

「あれは紛れもない『蘇生能力』ね……人間でそれをやるのを私は初めて見たわ……そいえばその子ね、あなたが目を覚ましたらこう伝えて言い残した言葉があるわ……『この世界は大変ね』だつて。後、名前も教えてくれたわ……『ミストラル』って名だそりよ」

「ミストラル……」

護はミストラルの言葉の意味を考えていた。

『『この世界は大変ね』その言葉が示す『この世界』とは護がいる』とある『世界を指示しているのか、それとも単に魔術サイドの世界のことを指しているのか。

もし『とある』世界を指しているのだとしたら、ミストラルは自分と同じく『異世界』から来た人物と言つことになる。

「その子はどうに行つたんですか？」

「さあ、気が付いたらいなくなつていたという感じね……煙のように消えてしまつたわ」

ミストラルと名乗る少女。彼女がなんとなく護達を助けるとは思えない。なにかしら理由があるはずである。だが現時点では護にそれを確認する手段はない。

「（今は、この騒動を終わらせることが先か……だが、執事である『ベネット』にも敵わない今の状況で……どうやってクリスを救いだせばよい？）」

現状、クリスの身柄はジェラルドのもとにある。哀歌と美希が戦闘の末に抑えたクリスの妹達も戦闘のさなかに現れたベネットが奪つてどこかに消えた。その上、今の状況では次にジェラルド達がどういった行動をするのが分らない。

「今回逃がしてしまったのは残念だけど、実は解決手段がないわけじゃないのよ」

ラミアの思わず言葉に全員の視線が集中する。

「どういふことですか？」

「あの人計画は、クリスに宿る『主導神ダヌ』の特性を利用して、『運命の3女神』の力を解放して、イギリス王家の禁書目録用の『遠隔制御靈装』を奪うというものだつたけど、実際それは今の時点では不可能だつたのよ」

ラミアはため息をつきつつ話を進める。

「『運命の3女神』の力を利用するためには、当然ながら『運命をつかさどる3人の女神』のことを指す。つまり、女神の特性は1人につき1神しか備わらないとすれば、『運命の3女神』の力を利用するためには3人

『運命の3女神』というのは、当然ながら『運命をつかさどる3人の女神』のことを指す。つまり、女神の特性は1人につき1神しか備わらないとすれば、『運命の3女神』の力を利用するためには3人

の『女神の特性』を持つ人間が必要となるはずなのである。

「あの時、クリスの妹だと名乗ったは2人だけ…………じゃあ、まだもう一人、クリスの妹で女神の特性を持った奴がいるってことですか！」

「ええ、その通りよ。クリスにはもう一人の妹セルフイがいるわ。そして彼女さえこちら側にあればあの人の計画を阻止することも可能な……」

「じゃあすぐにしてのセルフイって子を探して保護すれば…………」

「ええ、保護できればね…………」

保護できればといふ言葉に護は少しいやな感じを覚えた。この□ぶりは不確定要素があるといふことを意味している。

「保護できればって…………保護できない理由でもあるの？」

美希の問にアリシアはすこしうつむきつつ答える。

「あるのよ…………」

絞り出さよつてアリシアが出した答えは。

「あの子は、吸血鬼になつてているのよ…………」

その言葉に頭の上に疑問符を浮かべる美希と上条。一方哀歌は事態の深刻さを理解したらしく溜息をついた。

「保護できない理由が分かつた…………アイルランド聖教所属の立場

とすれば『悪魔』の一種とされる『吸血鬼』を……・・・身内から出すわけにはいかない……出してしまったのなら関わってはいけない……・だから確保できない……そういうこと? 「

哀歌の言葉に頷くラミア。

「本當なら……・・・そんな建前を気にしている場合じゃない……・・・そんなこと分かり切つてる……それでも今の私には『立場』があるわ……・大勢の部下を預かる『騎士団長』として軽率な行動はできないの……・たとえそれが私の子に関することであつたとしても

」

ラミアはこの事件の中心にかかる『組織』の一員であり、組織にとって益になる範囲であれば自分の娘を助けるために『個人的な』行動を許される。

だが教会の定めたタブーを破つての行動は許されない。

「だから、セルフィを保護することは私達『十字教』の人間には無理……・本当に迷惑かけるけどあなたたち『科学サイド』の人間にしがあの子を保護することはできないの」

「つまり、僕たちにクリスの最後の妹……・・・セルフィさんを保護してほしいということですね? では、最後に一つだけ聞かせてください……・セルフィさんを保護することが、どうして『タラニース』の計画を阻止することにつながるんですか? 「

「さつき話したようにセルフィは『3女神』の最後の一人……女神『モリガン』の特性を持っているわ……『モリガン』は『3女神』の内でもっとも力を持つた神とされ……神話によつてその姿を変え

る三相一体の女神でもあったの。豊穣の女神である『乙女アナ』。永遠に生命を生み出す『母神バブド』。幻影の女王、死母神である『老婆マハ』の三相を持っているとされているわ……このうちの『ハブド』と『マハ』の名はあなたにも覚えがあるんじゃない? バブドとマハ。この2つの女神の名を確かに護達は耳にしていた。なにしろその名は、クリスの2人の妹達が持つ女神の名であるのだから。

「つまり、神話によつて差はあれど、モリガンは他の2人の女神より上位に立つているの。よつてモリガンの特性を使えば他の2人の女神の特性が使われるのを止めることができるのよ」

確かにモリガンが上位の神であるなら、他の2神を止められるだろう。だがここで一つ疑問が残る。クリスはまだ敵のもとにあるのだ。つまり……。

「『主導神ダヌ』の特性を持ったクリスの体が敵の手にある以上、たとえモリガンの特性を使って一時的に2人の女神を止めたとしても無意味になるのではないですか?」

いくらモリガンが他の2神より上位の立場に立つとはいえ、さりに上位の女神であるダヌには勝てない。

「確かに『主導神ダヌ』の力を使わればモリGANでは抗しきれない……でもね、モリGANには他と一風変わった……それでいて決定的に違う『特性』があるの。その『特性』は、『戦いの結果と死を予言する』というものなの……神話では戦いの前に死んでいく兵士の血に濡れた衣服を川で洗うことで結果を知らせると言われているわ。用は民間伝承における『死神』などの原型なのだけど『予言』するというよりは『宣告』すると言つた方が近い……。

・女神モリガンはその戦場のおける戦いの結果と人の生き死にを自在に操れる…… そう考えてくれれば良いわ 」

もし、モリガンにラミアの言つ通りの力があつたとすれば、それを特性にもつセルフィはまさしく最強と言える。ただし、強大な力には必ず代償がつくものである。

「その代わり…… 代償として、その特性を発現させた時点でその人間の寿命は止まってしまう…… 発現したままの姿でどどまり続ける。それは不老不死ではなく、ただ定められた寿命が来るまで同じ姿なだけ…… そして特性を利用するためには自らの血液を相手に付着させなければならぬ。戦場で『死ぬ前』のはずの人物の衣服がなぜ『血まみれ』なのか…… 考えれば当たり前でその血とは『モリガン』自身の血なの。すなわちモリガンは自らの血で相手の衣服を濡らすことによってその所有者の生死を操つてるのよ。また、一番強力な特性……『戦いの結果を宣告する』という能力は発動できるのは1回だけ。その能力は、第一に『戦場』でなければ発動できない。第一にその『宣告』は特定の人物に特定されるわけではなく戦場にいる全員に適応されてしまう。それもその1回のために記憶、性格、力、能力、そう言ったものをことごとく失うことになる…… 利点もある代わりに危険な特性であることは間違いないの 」

「その代わり上手くいけば、その特性を使ってジョラルド達『タラニス』の計画を十分に阻止できる。ですよね？」

額ぐラミアを見て護はふつと口元を緩ませる。

「分かりました。あなたの代わりに僕と哀歌と美希で行つてきます…… 本当なら高杉の奴持つも連れて行きたいけど…… あいつは

まだ寝てるみたいだし……」

「「ちよっとまつたあ……」「」ここで2人の声が重なったのを聞いて首をかしげる護。この場に男は上条と自分しかいなかつたはずなのだが？

「俺だけ置いていくつてのは薄情だぜリーダー。俺は『ウォール』のメンバーなんだ。厄介事には最後までついていく

「俺もついていくよ。俺の『幻想殺し（イマジンブレイカ）』がどこまで役に立つかは分からぬけど……『禁書目録^{インデックス}』を助けるためにも元凶倒さなきゃいけないわけだしな」

高杉と上条の2人の参加によって、セルフイの捜索隊は数を増やすことになった。

「それでセルフイって子はいったいどこにいるんですか？」

護の言葉にラミアは部屋にかけられている世界地図の一角を指し示す。その指の先あるのはアイルランドの隣の島国。すなわち……

「グレート・ブリテン北アイルランド連合王国、イギリスにセルフイはいる……正確にいえばイギリス清教、第零聖堂区『必要悪の教会』管轄下の倫敦塔にね」

その言葉が意味するのは……

「つまり……」

哀歌がその言葉の意味をストレートに言い表す。

「私達にイギリス清教と……・真正面からガチンコをやれってい
うの？」

死かぎりの三覚めと最後の特徴（後書き）

今回は戦闘シーン一切なしになつてしましました（汗）

なんだか難しい説明ばかりの話になつてしまつて申し訳ありません。
文才がないせいで、こんなに長く……といつといつ反省した
らきりがないほど反省しておつまます（涙）

次回はクリスの最後の妹『セルフイ』を巡つての護達『ウォール』
対『必要悪の教会』との闘いになるかなと思っています。

アイルランド旅行編だけで長引いてすみません。もうまもなく本編
に戻つていくつもりですのでもうしばらくお待ちください。

となる組織の共闘要請

「なんだかんだでここまで来ちゃつたけど、あそこに入るのって本当に可能か？」

イギリス清教における暗部とも言える『必要悪の教会』管轄下の倫敦塔まで高杉の『無限移動』でやつてきた護たちだが、来たのは良いが中に入ることができずにいた。

別に、警備が厳重すぎるとか、魔術師と出くわしたとかいう訳ではない。そうではなく、当たり前すぎることで護たちは足止めを食らっていた。

「考えてみれば……倫敦塔は表向き、普段は一般に公開されてるんだったっけ」「

ロンドン塔は、中世に立てられた城塞であるが、同時に数々の人々の血を吸つた処刑場、牢屋もある。そんな血なまぐさい城ではあるが、その歴史的価値から世界遺産に登録されていてるため、普段は一般公開されており、世界中から観光客が訪れている。

確かにその血なまぐさい歴史はともかく、歴史を感じさせる外観は多くの人を魅了する。

ただし、それはあくまで表向きの話であつて実際は現在でも、対魔術サイド専用の牢屋、処刑場としてこの城は使われているのだ。

「確か『禁書目録』の頭の中の資料によると、この塔の中の『隠し部屋』にセルフィィは捕らえられてるんだよな？ 隠し部屋って……フレイヤ城にあつたやつみたいなものか？」

上条の言葉に哀歌は首を振る。

「あの城の隠し部屋は純粹に『部屋』だつたけど……この城における隠し部屋とは…………『隠し牢屋』と言つたほうが正しい…………表に出せない者達を封じておくための部屋になるから」

この城塞は敷地の中にいくつか建物を備えており、城だけで成り立つてゐる訳ではない。

血染めの塔(ブラッティタワヤラックタワー)、黒き塔(ミッドルタワー)、ミドル塔、ベル塔、塩の塔(ソルトタワー)、ビーチャム塔などの中塔と、兵舎、礼拝堂などの施設に加えて、本丸の城にあたる『白き塔(ホワイトタワー)』を加えた全てが倫敦塔(ロンドン)となるのだ。

「それで、その隠し部屋がこの敷地のどの建物の中にあるかなんだが…………そればっかりは禁書目録(インテックス)にもわからぬいらしい。おそらくイギリス清教にとって不利に成りかねない情報は記憶として残してないんだろうな…………」

となると、当然ながらこの敷地の中を探し回らなければならぬわけだが、あいにくと今は昼間。堂々と探つていれば、不審がられてしまつただろう。もつともイギリス清教も一般人が見学している時間帯に堂々との施設を利用するには避けるだろ。

「ひつなつたら、日が沈むまで市街で待機して、倫敦塔から一般人がいなくなりしだい先入して調べるしかないな」

高杉の言葉に上条は首を振る。

「いくら夜に人がいなくなるからってダイヤモンドとかも展示されてるんだから監視力メラとか防犯装置とか付けてあるんだぜ？ そういうのどうするつもりだよ？」

「そこは私の出番よ」

美希は自分の前髪に電気を発生させながら言つ。

「私の能力を使って、そいつた電動式防犯設備は全部無効化できると思うわよ」

「そつか、美希はビリビリの従姉妹で同じ力を持つてたんだっけな

」

関心する上条。彼は事実を知らないゆえに軽く言つているが当の本人にとっては重い話である。

「よし、そうと決まつたらさつそく実行に移そう。閉館時間まで市街で自由行動。なにかあつたらすぐに携帯で連絡するように！」

てなわけで、護たち5人は定刻まで時間を潰すことになつたのだ。

護は哀歌と連れ立つて、市街を歩いていた。元の世界では一度も海外でたことの無い護にとってはイギリスの風景は本気で新鮮だった。

「ここの近くだと、大英博物館があるよね。僕はそことか見学したいな」

「いまだに緊張状態は続いているのに……のんき過ぎない

? 「

「どの道、焦つても事態は好転しないだろ？ 時間までは割り切つて楽しもうよ」

そう言つた護だが直後、彼の表情が強張つた。哀歌の表情も張り詰めている。

2人に緊張をもたらす原因がなにかといえば目の前に広がる風景を見れば分かるだろう。

「『』の不自然なほど無人な風景……まさか、これは！」

「『人払い』の術式……まさか、もう『必要悪の教会』に悟られたの？」

両腕を竜人に変化させ、警戒する哀歌。

最高に、警戒する2人の前に現れたのは…………

木製の杖ステッキをついて、学生服の上からフード付きのマントを羽織る少女だった。

一瞬場を沈黙が包み込み、一呼吸おいて双方から言葉が飛んだ。

「きみ…………？」「あの…………」双方喋りだしたところで重なり再び黙つてしまふ。

「…………君から要件をどうぞ」

「あ…………はい。私の名はナタリーと申します。魔術結社『救民の杖』に所属しております。あなたがたに話したいことがあってこんな方法を取らせていただいたことお許しください」

しつかりとしたアクセントの日本語を話す外国人少女（瞳の色が青であることからの判断）にすこし戸惑いながらも護はナタリーへ向き直る。

「話したいことって何のは？」

「はい。あなたたちがやうどしてこじて私達を混ぜていただけないかといつ話しなんですけど……」

「僕達がやうどしてこること、なんのことかな？」一いぐら相手が丁寧な態度で接觸してきたとしても、それですべて信頼できるはずがない。ましてや護たちは学園都市の暗部構成員である。

「警戒されるのも無理ありません。ですが私はイギリス清教に協力はしていません。だいたい協力しているなら、わざわざあなたたちと接觸せずに通報したほうが早いです。私は…………いや、私達はあなた達と同一の場所を狙っているのです…………この国唯一の裏側専用の牢屋を」

裏側専用の牢屋。この言葉が指し示す場所は一つだ。すなわち倫敦塔である。

「な？ 僕達はともかく、なんで君達が倫敦塔を狙うんだ？」

「あなた達と同じです」

「」

「同じ？ . . . まさか、仲間が捕らえられている？」

ええと頷くナタリー。

「あの塔には、私達のリーダーが捕らえられています。私達はそれを取り戻したいのです。その為に『吸血鬼セルフィの奪取』を目指すあなた達に協力させてもらいたのです」

なるほどと護は納得した。

リーダーを失つた彼らは、それを取り戻さなければ組織として機能しなくなりかねない。だから確実にリーダーを助け出す為に護たちの協力を必要としているのだろう。

「もう一つ聞かせて欲しい、僕らの目標をどうやって知った？」

「私達は、世界のあちこちに拠点を持ちます。そのうちの一つ、アイルランド支部からの情報からです」

「たまげたな そんなにデカい組織なのか君達は」

護は素直に驚愕していた。もし彼女が言っていることが本当であれば、『救民の杖』はかなりの規模を誇る組織ということになる。それだけの組織は1年か2年で作り上げられるものではない。

「私達、『救民の杖』のルーツは十字教における『旧約聖書』、私達ユダヤ教における『聖書』の中に出てくるモーゼの跡継ぎ『ナンの子、ヨシュア』が率いた『杖部隊^{ステッキ・コマンド}』にさかのぼります。この部隊はモーゼの弟のアロンが持っていた『救民の杖』と呼ばれる杖を守護する役目を持つた精鋭部隊でした。安住の地、エルサレムを持つ

てからも部隊は存続し続けました。』

ナタリーは、一息ついて話を進めた。

「ところがバビロニア帝国という国の侵略を受けてユダヤ人国家の『イスラエル王国』は壊滅。多くのユダヤ人が捕虜となつてバビロニアに連れていかれた。……これを『バビロン捕囚』と言うのですが、この出来事によつて『杖部隊』も一時消滅しました。しかし、バビロニア帝国が滅ぼされたことによつてユダヤの人々はイスラエルの地に戻ることができました。それに伴い『杖部隊』は復活し、その後、とある男が現れるまで存続し続けました。」

「ある男？」

「現在、もつとも多くの信者を抱える一大宗教の教祖をまと言えれば分かりませんか？」

もつとも多くの信者を抱える宗教……それを指すのはたつた一つだ。

「十字教……」

「ええ、その男を『神の子』と崇める一大宗教の誕生によつて『杖部隊』を含めた『ユダヤ教』自体が『神の子を殺したものたちの集まり』とされるようになつてしまつたのです。その為に『杖部隊』のようなユダヤ教を象徴するような勢力は時の十字教各派閥のトップに睨まれ、次々と潰されて行きました。そんな中、『杖部隊』は地下に潜伏し、十字教に対向する為、部隊の組織化を進め、やがて名を『救民の杖』と変えました。幾度となく……特に魔女裁判などを行なう『イギリス清教』、最大宗派である『ローマ正

教』と戦い、それを経て『世界最大の魔術結社』と呼ばれるようになつたのですが、今から10年ほど前、私達の主力はイギリスで、ある男によつて一方的に蹴散らされ、リーダーをさらわれたのです！』

護は首を傾げた。ナタリーが話していたことを信じるとして、それほどまでに巨大な組織の主力を個人で蹴散らすことができる人間がいるだろうか？

そこまで考えて、ふと護は思い出した。10年前、イギリス、そのキーワードに繋がり、なおかつ個人で組織を相手取れる力を持つ男。

「後方のアックア……いや、ウイリアム・オルウェルですね？」

「？…………後方の…………かどうかは知りませんが、確かにその男です。イングランド出身の魔術的な傭兵であるその男は我々とイギリス3代派閥の1つ『騎士派』との戦いに介入し、見事に我々を打ち負かしました。しかし、今、彼はイギリスから姿を消しています。その為、あの男がいない今がチャンスなのです」

かなり、色々と厄介な事になつてゐると内心ため息をついた護だつたが良く考えれば、この申し出を断ることもないと思い直した。

彼女たちが自分たちを利用したいのは間違いないだろう。

だが、彼女たちとの共闘はこちうにとっても有難い話である。

ラミアは『自分たち、十字教徒に救う事は出来ない』と言つていた。だがナタリーたちは、ユダヤ教だ。その枠には縛られない。

「わかった……。その申し出を受けるよ。その変わり、君たちが知っている情報を提供してほしい、後から仲間を集めてまた会いたいから集合場所を決めてくれないか？」

「分かりました……では夕方5時に喫茶店『カバラ』にきてください。場所は×××です」

ナタリーは一礼して最後にこう言つた。

「本当に噂に聞いたとおり、善人なんですね……正直、感動を覚えました」

それだけ、言いのこして、ナタリーの姿は暗がりに消え、再び目の前の景色に人が戻ってきた。

「ねえ、護。奴らを信頼して良いの？ 犢かもしれないよ？」

「大丈夫だよ。たとえ犠だつたとしても哀歌がいるから」

護の言葉に赤面し、下を向く哀歌。そんな姿に微笑しながら護は市街に広がっている仲間たちへと連絡を取る為無線機に手を伸ばした。数時間後、護たち『ウォール』メンバーは集合場所に定めた大英博物館の前に来ていた。この非常時で無ければゆっくり見学していくたいところだが、今はそうはいかない。

「つまり、その『救民の杖』つて組織も俺たちと同じ目的で動いてるつづー」とか

「しかしね、アンタ、良く申し出を引き受けたわね。これが罷だつたらどうするのよ？」

「罷だとしても、自分達『ウォール』なら食い破れると信じてる」

護は、上条に視線を向けた。

「上条……ここから先はきっと厳しい戦いになる。正直、全員が生きて帰る保障なんてない。それでも来てくれるか？」

「そんなの決まってんじゃねえか。友人の頼みをそう簡単に断れるかよ。それに俺の右手が必要なんだろ？ だったら行くしかねえよ」

上条の言葉に、やはり主人公は違うな……と感じさせられた護だった。

「護……嫌な感じがする。ここから離れた方が良い」哀歌に唐突にそう言われ、周りを見渡す護だったが目の前の光景におかしな所は特にない。

「どうしたんだよ哀歌？」

「誰かが魔術を発動しようとしてる、それもかなり大掛かりな術式を……禁書目録インテックスがいれば何の術式か解けるのだけど」

「大掛かりな術式？」 そう護が呟いた直後だった。

ぱっくりと地面が口を開け、その場の全員を飲み込んだ。

「は？」 「え？」 「なに？」 「うそ？」 「きた！」

それぞれ声を上げながら、5人は地のそこに落ちて行つた。

「ん…………つてて…………痛ついな…………みんな無事か？」

「私は大丈夫」

「私も大丈夫よ」

「俺とこいつも大丈夫だ」

「高杉のおかげで助かつたぜ…………」

「どうやら全員、無事だつたようである。」

護は痛む頭を振りつつ、現在の状況を確認する。

どうやら自分たちはかなり地下奥深くに落ちてしまったようで上にある穴から見える光はかなり遠い。

だが、落ちた場所はえらくスペースがあり、また舗装された道のようになつていて、まるで人の手によって作られたかのようだ。

なんというか、巨大な地下トンネルにいるような感じを受ける場所である。

「とにかく、この道を進んで出口を探そう。息が続く以上、どこか入り口が出口があるはずだし」

そう言って、歩き出そうとした護だが直後、周囲の壁に異変が起じた。

「！？ なによこれ？」

周りの壁のあちらこちらに突然、血で塗りたくつたような真っ赤な『？？？』という文字が現れたのだ。

「この文字は！ みんな早くこの文字を消して！」

慌てて叫ぶ哀歌だったが少し遅かった。

ボコッと壁の一部が、人形になり、壁から独立して動き出す。

その手に土塊から形作られた剣が握られている。

そんな奴らが周囲の壁から次々と湧き出してきた。

「！」つら、まさか……『ゴーレムか？』

「多分……でも、こんなタイプはみたことがない！」

前方に迫り、ゴーレムの一体が、土塊から作られたライフル銃をこちらに向けた。

「まずい！」とつさに右手から『超重力砲』^{グラビティブースト}を放ち、その一体を含めて前方のゴーレムをまとめて吹き飛ばした護だが、敵は四方八方にいる。

周りに展開してこるゴーレムからの一斉射撃が始まった。

哀歌が拳で頭を砕き、高杉が放つ機能性炸裂弾がゴーレムたちをまとめて吹き飛ばし、美希が放つ鉄球が10体まとめて粉々にし、上条の『幻想殺し（イマジンブレイカー）』がゴーレムをただの土塊に戻しても・・・・敵の数は一向に減らない。

「くそ！ 真の意味でゴーレムを無に帰せるのは上条だけだ。こいつらを倒すには術者を倒さないと！」

とはいっても周囲を完全に、ゴーレムの群れに囲まれている状態ではどうしようもない。

「なら、俺の能力を使って前方限定だが道を開くか？ 殺すことはできんが、時間稼ぎにはなるぜ」

高杉が機能性炸裂弾射出機をゴーレムたちへ向けながら言つ。

「いや、高杉の能力を使うとしてもこいつらを転移させる場所がない！ ここは美希に頼もう！」

護の言葉に首を傾げる美希。

「美希！ ここは地中だ、砂鉄を操つて360度全方向に展開させてくれ！ 前方以外の全ての方向で盾代わりに利用する！」

「なんで前を開けるんだ？」

上条の問いに護は自分の右手を振りながら答えた。

「あいつらにこの能力をぶつけてやる為だ。それに、哀歌の攻撃を当てる為でもある」

そんなことを話している間にも、ゴーレムたちは距離を詰めてくる。

「行くわよ！ 砂鉄展開！」

瞬間、ぞわっと地面が動いた。地中に含まれる無数の砂鉄が美希の意思により、周囲に展開される。

「よし、じんじは僕らの番だ！ 哀歌！ 前方の敵を一掃するよ！」

「分かつた！ 『龍の息吹』！」

「『超重力砲』！」

哀歌の前方に現れた魔法陣から放たれる強烈な光線が、護の超重力砲により信じられくらいの速度に加速し、一瞬で前方のゴーレムたちを消滅させる。

「今だ！ 走れ！」 護の叫びを合図に、5人は一斉に前に向けて走り出す。

壁から湧き出してくるゴーレムたちを周囲の砂鉄で防ぎながら全力で走る5人。

どれだけ走ったろう。ふと気がつけば5人はおかしな空間にたどり着いていた。気付けばゴーレムたちの姿も見えない。

「あいつら . . . 諦めたの？」

展開していた砂鉄を解除し、周りを黒く染める美希。

「いや、こんなところで奴らの攻撃が止むなんて不自然だ。きっと理由がある」

そう言う護に、上条が声をかける。

「多分、あれが理由じゃねえか？」

上条が指さす先、そこには1人の老人が座っていた。

漆黒のローブに身を包む、黒ヒゲの老人。

彼はその皺の刻まれた顔をこちらに向ける。

「ようこそ、儂の神殿へ」

「あなたは誰？」

哀歌の間に老人は簡潔に答える。

「『律法学者』^{ラブ}だよ。アイルランド聖教に雇われた、祖国を裏切つた哀れな老人さ」

となる組織の共闘要請（後書き）

はい、今回、ユダヤ教を初めて出してみました。考えてみれば『禁書シリーズ』の中にユダヤ教ってあんまり出ていなかつたかなと思いますがいかがでしょう。

最後に出てきた、律法学者の老人については、『魔術的な傭兵』^{ラビ}というのがアツクアだけでは不自然だよな~という思いから作ったキヤラです。

さて、またまた話が長くなりそうな感じになつてますが、最後まで付き合つただければ幸いです。

クリス助けるまでに、あと何日かかるだらう~（汗）

とある「^{ラビ}」と突入開始

「律法学者か……まったく厄介なのに当たっちゃったな」

護は、ゴーレムを操る老いた男を見つめる。

ゴーレムと言えば、イギリス清教のシヨリーという魔術師も学園都市への侵入の際に『エリス』という名の個体を使っていた。

時間軸的には、まだ先の話ではあるが、そこにヒントはある。『ゴーレムは、破壊できないわけではない。すぐ周辺にあるもので復元されるが、一度はバラバラにすることも可能だろ。』

「（一時的にせよ）ゴーレムを崩して、その間に律法学者を戦闘不能にすれば勝機はある！』」

となれば、先制攻撃しかない。グズグズしていれば、再びゴーレム軍団を呼び出されれない。

田で哀歌と美希に合図を送り、護は律法学者の周辺の重力を掌握する。

「僕が抑える。哀歌！美希！ やれ！」

「！」危険を察知し、行動を起こそうとする律法学者だが、体に異常な力がかかって手足を動かすことができない。

「無駄だよ律法学者。僕の力は『重力掌握』、重力を自在に操る力だ。あなたの周辺にかかる重力は通常の倍になつて。動くことは

できないよ」「

焦りの表情を浮かべ、逃げようと無駄な抵抗を試みる律法学者に向けて哀歌の放つ火球と美希の放つ超電磁砲が一度に放たれる。

形容し難い音が響き、放たれた攻撃は律法学者に直撃した。

「一人相手にオーバーキルじゃねえか?」一部始終をただ眺めるだけしかできなかつた上条がなかば呆れたように言つ。

「仕方ないわよ。魔術師つてのは規格外の怪物なんだから」「

そういう美希に、それなら超能力者だつて怪物では?と思つた護であるがあえて口に出すのは避けた。

しかし、こんなにあっけなく終わるものだらうか。

そう思つた護の予感は見事に当たつた。

「なるほど、怖いな。これが噂に聞く『ウォール』の実力つて奴か」「

突然、聞こえて来た声に慌てて後ろを向く護たち。そこにいたのは赤髪、碧眼の青年。

「誰だ、君は?」「

「律法学者だよ 名はダビデ」「

平然という青年に、驚いたのは哀歌だ。

「馬鹿な あなたのような若造が 律法学者になれるとは思えない」

哀歌の言葉に、苦笑いしながら青年は答える。

「キリスト教の迫害者にして、後に使徒として布教に勤めたパウロも若くして律法学者になっていた。なら、俺くらいの律法学者がいても不自然じゃないと思つがな？」

「どの道、お前の先輩はやられたぜ？ お前も早くにげたらどうだ？」

高杉の言葉に一瞬、ポカんとした青年は次の瞬間、高笑いをあけだ。

「はははははははは！ なに言つてるのさ？ あんなのが先輩な訳ないじゃん！」

青年は一息ついて言ひ。

「あればダミーの『コーレムだよ。君たちの実力を試すためのね』

なに？と護が首をかしげたとき『地下神殿』の壁をぶち抜いて大勢の人間が入ってきた。

「『めんなさい』『ウォール』のみなさん！ ダビテがどうしても実力を確かめたいといって独断で飛び出していつてしまつて、慌て追いかけたんですけど間に合わなくて 」

先頭にいる女性に護は見覚えがあった。というより数時間前に会話

した相手である。

「救民の杖のナタリーさんだけ？ つまり、ダビテは敵じゃなかつたってこと？」

「はい……彼も組織の構成員です。実力者ではあるんですけど、すこし独断先行気味で……ダビテ、あんた組織全体の信用を失わせる気？」

ナタリーの叱責に、肩をすくめるダビテ。おれらへつもこんなやり取りをしているのだろう。

「とにかく『ウォール』の皆さんには御迷惑かけました。今からお返しがわりに『カバラ』で安息をとつてもらいます。積もる話もありますし」

それは護たちにとつても願つてもない話である。

よつて護たち一行は地下通路を通り、喫茶店『カバラ』に辿り付いたのである。

「さて、どうからお話をすれば良いのでしょうか？」

「まず最重要犯人を収監されている『隠し部屋』についての情報が欲しい。あそこにセルティが収監されてるはず。そしておそらく・・・・・」

「ええ、私たちのローダーも収監されているでしょう」

『カバラ』で、簡単な食事をとつて一息ついた護たちは、さっそく、計画を練る作業に入つていった。正直、時間がないからだ。

「その『隠し部屋』については場所の特定はできています。倫敦塔^{ロンドン}を構成する塔の一つ『血染めの塔^{ブラッド・タワー}』内部です。」

「問題はそこに行くまでの道のりです。まずは無数の監視カメラを始めとする防犯システム。さらに魔術的なトラップがてんこ盛り。さらりと、あたらこちらに仕事中の魔術師や看守がいます。」

「監視カメラなどの電子的な防犯システムは美希の能力で何とかできると思つ。魔術師や看守については……強行突破しかないかな？」

「私が派手に暴れて陽動するのは？ 本丸の『白き塔^{ホワイト・タワー}』を攻撃してそちらを本命と思わせるのはどう？」

哀歌の提案に護は頷いた。対魔術戦闘に關しては哀歌がピカイチの器量を有している。

「ああ、頼む哀歌。じゃあ、哀歌が氣を引いてる隙に他のみんなで……」

「念には念を押す必要があるんじやないか？ 僕も陽動をかけよう。『^{ガーレム・ソルジャー}人造軍隊』を使って血染めの塔以外の全ての建物に奇襲をかける

「

ダビデの言葉に、それももつともと頷く護。そこで、なんだか置いてきぼりを喰らつてゐる感がある上条がおずおずと手を上げる。

「因みに俺はどうすれば？」

「上条の『幻想殺し』は、魔術師な仕掛けを破壊するのに必要不可欠だけど、上条はあくまでも民間人だ。危険すぎる」

「そこは私たちが全力でカバーします。確かに上条さんの力は必要ですから」

という訳で作戦は決まった。この数時間後、護たちによる倫敦塔ヘの奇襲攻撃が始まったのだつた。

2時間後、倫敦塔のあちこちで戦闘音が巻き起こつていた。看守たちにゴーレムの大軍が襲い掛かり、哀歌がプロの魔術師たちを直接殴つて吹き飛ばす。

2人の戦いぶりは際立つていた。

「哀歌たちへ敵の注意が集まつてゐる！ 今のうちに血染めの塔へ！」

護の声を合図に、『救民の杖』戦闘員500人近くと『ウォール』メンバー4人に上条を足した合計505人が血染めの塔に突入する。

血染めの塔にも看守はいたが、その数は少ない。大多数が哀歌たちの迎撃に回されているようだ。

「護さん。この辺りが『隠し部屋』があると思われる場所なんですが……ここには触れば即死するレベルの魔術的なトラップが仕掛けられています！」

ナタリーの叫びに護は上条を見る。

「『！」は上条の力が必要だ。』のトラップを破壊してくれ！』

頷いた上条がナタリーの指さす壁の一 角に触れたとたん、触れた部分が唐突に消え、通路が出現する。

「どうやら』の先が『隠し部屋』みたいだな。みんな行くぞ！』

通路に突入する護たち。その通路はすぐに切れ、目の前に広大な地下の監獄が広がる。

「あの通路は地下に繋がるワープ装置みたいなものだったのか』

関心する護だが、今はそれよりやる事がある。

「セルティ！ セルティ・エバーフレイヤはいるか！ 助けにきた！ いるなら返事してくれ！』

護の叫びに居並ぶ牢屋の一つで影がピクリと動いた。

「本当に…？ 本当に私を助けに来たの？』

少女の震える声が護たちに問いかける。

「私は吸血鬼なのよ！？ そんな私をどうして！？

「君のお姉さんを、クリスを助けたい』

護の言葉に、牢屋の中の少女が息を飲むのがわかる。

「そのため君の力が必要なんだ！」

』

ヒカルのアーティスト突入開始（後書き）

さて、ようやくセルティで合流せることになりました！

次回かその次かでアイルランド編も終わりかなと思っています。

あいかわらず話が進まないにも関わらず見ていてくださいる皆へここに感謝します！

とある出来事と怪物変化

ロンドン倫敦塔でようやくクリスの最後の妹セルティに出会えた護たち。だが、これで解決とはならない。この塔からセルティを連れ出さねば、クリスを助けることはできないからだ。

「おい、護！ 塔の周りに敵が集まり始める。早く逃げないとマズイぞ！」

隠し部屋の入り口で見張りをしていた高杉が叫ぶ。

実際、血染め（ブラッティ）^{タワーネセカリウス}の塔の周辺には、事情を察知した必要悪の教会の魔術師たちが集まり始めていた。

「哀歌たちの陽動も限界か 高杉！ お前の『無限移動』で飛ばせるのは何人だけ？」

「触れなきや飛ばせないから、頑張つて2人が限界だぜ？」

とつさに考える護。2人が飛ばす限界なのなら、まず飛ばすべきはセルティである。問題はセルティと共に行くべき2人目を誰にするかだ。

「IJの場合は上条さんに行つてもらうべきかな」

上条は『幻想殺し（イマジンブレイカー）』という強力で摩訶不思議な力を持っている。だが、そんな力を持つしていても、あくまでも上条は民間人である。

だが、おそれく上条は残ることを決めてしまつだらう。困つてゐる人をほおつとおけないのが彼の性格なのだから。

「（だが、上条さんを万が一にも死なせるわけにはいかない。それがアレイスターから課せられた任務でもあるからな）」

護が無理にでも上条たちを飛ばそうと、高杉に呼びかけようとした瞬間、だつた。

隠し部屋の入り口付近で凄まじい爆発音が響き、同時に護たちのいる牢屋に高杉が瞬間移動してきた。

「さすが高杉！　？護の考えを読んでベストタイミングでかけつけるとは！」

「馬鹿か美希！　んなわけねえだろ。入り口に来やがったんだよ、例の赤髪神父が！」

赤髪神父と言われて、連想されるのはただ一人しかいない。

「高杉！　上条とセルティをラミアさんの修道院に飛ばせ！　早く！」

護の声に急かされるように、高杉の両手がセルティと上条に片手づつ触れられる。

「おい、護……」「なに言いかけた上条に向けて護は頭を下げた。

「（めん、上条）」

瞬間、吸血鬼セルティと上条は倫敦塔から姿を消した。

「おやおや、また君たちかい？　まったく何度も僕の前に敵として現れるつもりなんだ？」

隠し部屋に堂々と入ってきた赤髪神父こと、スタイル＝マグヌスは護たちを一目見るなり言葉を吐き捨てた。

「インデックスの件で君たちには借りがあるから戦いたくはないんだが……なぜ、こんな大それたことをした？　返答しないでは……」

懐に入れてあるルーンのカードを取り出し、真上に掲げるスタイル。

「君たち相手でも容赦なく燃やし尽くす」

轟という音と共に業火が部屋を赤く染める。？

「まつてくれスタイル！　こんな事をしたのはインデックスにも関係しているからなんだ！」

護の言葉スタイルの眉がピクリと動く。

「どうこういじだ？」

「僕の仲間が巻き込まれた問題が、インデックスにも関係してたんだよ！」

一部始終を話す護。話を聞いたスタイルは苦々しい表情を崩さない

まま告げる。

「あの子の為に動いているというならば、僕は君たちを処断できない。^{アイクビショップ}僕が最大主教に事情は説明しておく。君たちはこの塔の裏口から脱出しそう。僕が案内する。その魔術結社の奴らも一緒にだ。本来なら、灰にするところだが、今回はそうするわけには行かないからな」

スタイルの厚意（インテックスが絡んでいるからだが）に素直に感謝し護たちは、塔の外に出る為、スタイルの案内で裏口に向かう事となつた。

そのころ、陽動をかつてでた哀歌とダビデはいまだ奮闘していた。

「火竜の怒りは大地を焦がす！」哀歌の叫びと共に彼女の手から業火が火炎放射器のように放たれ、無数の魔術師たちの体を焼く。がプロの魔術師たちに次々と襲い掛かる。

護たちの突入時から見事な陽動を行つてている哀歌とダビデだつたがそろそろ、その陽動も限界に近づきつつあった。

「おい、怪力女！ 敵の戦力が『血染めの塔』^{ラッティ・タワー}に向きつつあるぞ！ そろそろ陽動も限界じゃないか？」

ゴーレムの兵士たちに絶え間無く指示を出しながらダビデが叫ぶ。

「確かに陽動はもう無意味 本来は護たちの協力に

向かうべきだけど 「の状況では向かえない」 哀歌がそう言つのも当然で、ダビデと哀歌の周辺を一重二重に魔術師や騎士たちが囲んでいる。

ダビデやら急を聞いた『騎士派』の人間も駆けつけてきたようだ。

「ダビデ あなたは、ゴーレムを使役できるのだから、地に逃げることはできる? 」

突然の哀歌の問いかけに虚をつかれつつもダビデは首を縦に振る。

「確かにできるが なぜ、そんな事を? 」

ダビデの言葉に哀歌は薄く笑う。

「あなたを巻き込みたくないから これから私の力を全力で行使するわ でもこの力は制御がききにくい、だから、あなたにこの場にいてもらつては困るの 」

「しかし、それを言つなら護たちは 」

「大丈夫 」

哀歌は血染めの塔を見つめ言つ。

「護の氣配はもう倫敦塔ロンドン塔から離れてる、他の仲間の人たちも だから心配はいらない 」

そう言われてもまだ納得のいかない表情を浮かべるダビデに向かって、哀歌は右手の親指を立てグーサインを作る。

「大丈夫よ . . . 私は普通じゃない 『怪物』^{モンスター}は那么简单には倒れないから。だから早くこの場から離れて 」

ダビテは哀歌を見、包囲する魔術師たちを見、もう一度、哀歌を見て、くそ!と吐き捨てた。

「いいか! 絶対に死ぬんじゃないぞ! 戻つたらお前に聞きたいことは山ほどあるんだからな! 」

それだけを言い、ダビテは地に新たな文字を書く。それと同時に生き残っているゴーレム兵士たちに最後の命令を下す。

「せめてもの助力だ! 我が兵士たち、勇敢なる少女の為に、己が全てを持って敵に向かえ! 」

その声を合図にダビテの真下に穴が開き彼を飲み込み。無数のゴーレム兵士たちが、魔術師たちに突っ込んで行く。

哀歌はダビテの厚意に感謝しながら、これから使う自分の力について心を揺らしていた。

「(本能に負けず『竜崎哀歌』として力を制御できるのは、持つて10分、それを超えれば私は私でなくなる それだけは絶対に嫌だ。私は『人間』でいたいのだから) 」

前方を見つめる哀歌。突入したゴーレムたちは次々と魔術師や騎士たちに倒され土塊と化していく。おそらく後数秒としないうちに自分に彼らの矛先が向けられるだろう。

「護たちが逃げれて良かつた。逃げていなければ、きっと私が力を使つのを止めようとするからね。それに私が『モンスター』となつて敵を倒すところを護には見られたくない……護には『人』として見てもらいたいから」

哀歌を中心になにか大きな力が広がっていく。その透明な力を感じ、思わず哀歌を見つめる包囲者の耳を哀歌の言葉が打つ。

「我が呪われた血よ！ 深き深淵より目覚め、忌むべき力で敵を討て！」

次の瞬間、哀歌を中心に莫大な閃光と衝撃波が放たれ、包囲者たちの視界を奪う。

霞む視界になんとか哀歌を捉えた包囲者たちは絶句した。もはやそこには少女は存在しなかった。

かれらの目に映ったの神話に出てくる存在。勇者たちに打ち倒される存在。規格外の怪物。

驚愕に瞳を開く包囲者たちに、怖るべき怪物がその牙を剥いた。

とある海峡の騎士戦士

結果だけいえば、護たちの救出作戦は成功した。

倫敦塔に囚われていたクリスの妹、セルティの救出に成功し無事にロンドン塔に脱出。

共に脱出した『救民の杖』のメンバーを含めて、死者は無し。イギリス清教の要塞施設を攻めた作戦としては驚きの成功を収めた護たちだが、一つだけ予想外の事が起きた。

哀歌の失踪である。

「つまり、哀歌はあそこで残つて騎士派の兵士たちや、魔術師たち多数を相手に戦つたと？」

「ああ、俺はその場を見なかつたが間違いない。なにしろ、あの惨状だ」

ダビデが指差す先にはテレビに映るロンドン塔がある。

その有様は悲惨だった、殆どの建物が原形を留めていない。真ん中からへし折られたかのようになつていて、真っ黒に焦げて瓦礫になつたりしている。

さすがに本丸である『白き塔』^{ホワイト・タワー}は崩れはしなかつたものの、壁に無数の穴が空いている。

テレビの特番では、女性アナウンサーが、今回の事件に関してIR

Aが関係している可能性があるという事を喋っている。

騎士派の兵士たちや、イギリス清教の魔術師たちが、あんな事をするわけがない。あの場において、これだけの破壊を引き起せる人物は1人しかいない。

「哀歌は自分の力を解放したんだと思う。彼女ああ見えて、いつも全力で戦つてゐるわけじゃないそうだし。彼女は僕らの中で唯一、魔術、超能力、そのどちらにも対応できるエキスペートだ。哀歌ならあれだけの破壊を引き起こせてもおかしくない」

「だがよ…………なら、哀歌はどうして戻らねえんだ？ 哀歌の奴の実力なら敵を蹴散らして戻つてくることぐらいできるはずたろ？」

高杉の疑問に護はすこし思考を巡らす。まず考えらるのが、なんらかの理由で哀歌が捕らえられたというものだがその可能性は低い。

もしイギリス清教側が哀歌を捕らえたのだとすれば、なんらかの動きが見られるはずだが、そのような動きは見られていない。

第2に考えられるのは、哀歌が今だ敵と交戦中という可能性だ。どうか現時点ではその可能性が一番高いだろう。なにせ哀歌はステイルと遭遇できていないのだから今だ、敵として追われているはずだからだ。

思考の袋小路に入りかけた護をナタリーの声が呼び戻す。

「護さん！ イギリスにいる在留員のメンバーからの連絡がありました。ドーバー海峡付近において大規模な魔術戦闘を確認したとの

ことです！ 片方はイギリス清教の騎士派。もう片方は詳細は不明ですが1人の少女だと！」この報告における1人の少女とは間違なく哀歌だろう。やはりあの後も戦闘を続けていたようだ。

「現場に近づける？」

「海峡付近をイギリス海軍が遠巻きに海上封鎖しています。陸上も同様に陸軍によって封鎖され近づくのは困難とのことです」

「となると哀歌を助け出すには、敵中を強攻突破するしかないわね。魔術師さんたちと合わせてならなんとかできるんじやない？」美希の問いにナタリーは首を横に振る。

「美希。ナタリーたちは『魔術結社』だ。その立場上、イギリス軍と当たるのはキツいんだよ。『魔術』は表向には存在しない事になっているんだから」

護は高杉に視線をやる。

「正直、キツイけど哀歌を連れ帰るのは僕達『ウォール』だけで行おう。数では圧倒的に不利だけど、高杉の『無限移動』を使えばイギリス軍とぶち当たらずに戦場にたどりつけるはずだ」

護はナタリーに向かって、両手を合わせる。

「君達『救民の杖』の力をもう少し貸してほしい。アイルランド聖教のラミアという人と連絡をとつて会つて欲しいんだ。『タラニス』に挑むには僕らだけでは力不足なんだ・・・・・君達の力を貸してほしい。頼む！」

頭を下げる護に困惑した表情を浮かべるナタリー。そこへ横から別の声が入った。

「そうだな。なんだかんだ言って、貴君たちに協力して貰つたのは事実。そのおかげで私はあそこから解放された。なら、貴君たちにその返礼をしなければならない。我々として全面的に協力することを約束しよう」

「リ、リーダー！ そんな簡単に決めちゃうんですか！？ 私達が協力しようとしているのは『十字教』の人間ですよー！」

リーダーと呼ばれた外見16歳前後の少女は、ナタリーをキッと睨んだ。

「過去のしがらみと、恩人たちの頼み。そのどちらを優先させるかは言つまでもあるまい？ それとも、リーダーの決定に逆らう気か？」

慌てて首を振るナタリーにリーダーの少女は満足そうに頷き護に向き直る。

「というわけで、我々『救民の杖』は今回全面的に協力することをリーダーである私。サラの名にかけて誓おう。貴君たちは全力で仲間を救いに行くがよい！」

サラの言葉に大きく頷き、護は高杉を見る。

「じゃあ、頼むぞ高杉。俺と美希を飛ばしてくれ！」

「分かったよ、リーダー。行くぜ！」

高杉の両手が2人に触れ、護と美希はドーバーに飛んだ。

「報告！　標的^{ターゲット}の奇襲により、第1小隊壊滅。追撃中の第2、第3小隊が現在戦闘中です！」

イギリス三大派閥の一つ、騎士派のリーダーである『騎士団長^{ナイトリーダー}』はその静かな瞳を部下に向けた。

彼の元には、かれこれ数時間前にロンドン塔を襲撃したという犯人についての情報が入ってきている。しかし、自らの部下に絶大な信頼を寄せている騎士団長でさえ、その情報の精度を疑つたものだ。

「一個小隊30人を相手に、この暴れっぷりとは只者ではないな。本来なら私自身が出るべきなのだろうが……」

騎士団長は、手元に置いてある資料に目をやる。

「私にはすべきことがある。まだ為すべきことがある

騎士団長は、部下に向けて指示を出す。

？「清教派の『最大主教』に連絡を取れ。あの女に頼るのは不本意だが、我々独力での対処には時間が掛かってしまう

「はっ、直ちに！」命令を伝えに走つていく部下を騎士団長は何処か遠い瞳で見つめていた。

「しつこい！　いいかげん諦めろ！」

哀歌の持つ『破壊大剣^{ディストラクション・ブレード}』から放たれる衝撃波が追つ手の騎士たちをまとめて吹き飛ばす。

「！」の異能の怪物が……？そんな姿を取らず本性を表せ！

若い騎士の一人がロングソードで斬りかかるが哀歌の剣に防がれる。

「私は私……本性などない……今のが、私なんだ！」

カウンター反撃で放たれた哀歌の拳が若い騎士の鎧を碎き、彼の胸を貫く。

「……」驚愕に目を見開き、次の瞬間絶命する彼を哀歌は軽く振るよつに手を動かし、周りに展開する騎士たちの方へ投げ飛ばす。

「まだ、やるのかしら？」

破壊大剣を軽く降りつつ、告げる護に、長くいくつもの戦場を駆け抜け、修羅場を経験しているはずの騎士たちの心が揺れる。

これほどまでに、理不尽な力をもつて戦う者を騎士たちは一人しか知らない。かつてイギリスで王女を救つたとある傭兵。そして今は、ローマ正教に仕える男。

「ぐ……退くな！　イギリス王家に牙を向いた異能の怪物をなんとしても仕留めるのだ！」

隊長らしき騎士の叫びと共に残っている者たちが剣を哀歌に一斉に向ける。

「そつか、来るんだ……」

哀歌は、その口元を少し歪める。

「ならば見せて。騎士の真髄」

哀歌の全身から、溢れ出る不可視の力が騎士たちにぶつかる。

「かかれ！」隊長の掛け声と共に騎士たちが一斉に哀歌に剣を上げたその時だった。

「あ～あ、戦場に広がる騎士派の戦士のみなさん～。まもなくそこは砲撃に晒されるのにつき、早くそこから離れるのを進めるのよ」

なんだか場違いな少女の声が響いた。

「！」の声は最大主教、ローラ・シュチュアート……

「やつぱり、わらわの事を知りたりけるようね。とにかく、竜崎哀歌。そなたには死んでもうにつき、承知しておいて？」

騎士たちが慌てて、離れていくのを横目に哀歌はどうかから来るであろう攻撃に備える。

そして気づいた、ドーバー海峡の向こうから巨大な光の塊が近づいて来ること。

「これは . . . 海上からの遠距離砲撃術式？」

「そりゃ、ガウン・コンパスからの遠距離砲撃術式につきよ」

もはや、光線は後数秒もしない内に到達する。

そう判断した哀歌は破壊大剣を改めて握り締める。

その剣にはめ込まれている4つの宝石が哀歌の意思に反応するかのように光を放つ。

「世界に宿る竜の意思よ。その力を、その意思を、その意義を、その存在を、我が手の剣に込めたまえ、『万竜の意思』！」

大きく振りかぶった刀を一気に振り下ろす哀歌。その刀から放たれた4つの光が混じりあい一つの巨大な光線となり、迫り来る光とぶつかる。

そのまま、空中で大爆発を起こす光線を眺めている哀歌に向けて、退避していた騎士たちが再び襲い掛かる。

「く！」騎士たちの剣を間一髪で避ける哀歌。彼女は確かに人外の怪物と呼べるかもしれないが、その力は無限ではない。

あれだけの大技を使つた後に、ふたたび柔軟な動きを取る事は難しい。

「そこだ！」避けた哀歌ね先にも別の騎士がいる。彼が突き出した剣が哀歌の左腕を貫く。

「舐めるな！」左腕に走る激痛に顔を歪めながらも、全力で繰り出す蹴りで刺した騎士を吹き飛ばす哀歌だが、おそらく今までには、致命傷は避けられないだろ？。

「さすがに、力を使いすぎた…………」のままじや、持たない……

肩を大きく上下させ呼吸を整える哀歌を見て騎士たちの間に安堵の空気が広がる。

敵は無敵ではない。その事実が騎士たちに余裕を感じさせていた。

「そろそろ終わりにしようじゃないか。怪物少女！」
モンスター・ガール

隊長の繰り出した剣が哀歌の体を貫いつとした、その瞬間だった。

「哀歌！ 助けにきてやつたぜ！」

突然聞こえてきた声に騎士たちの動きが止まつた隙に高杉が哀歌に触れる。

「高杉？」

「先にアイルランドへ行け哀歌！ 今のお前をこれ以上戦わせるわけにはいかない。これはリーダーからの命令だ！」

哀歌がなにか返す前に、『無限移動』で彼女を飛ばした高杉は懐にある機能性炸裂弾射出機を取り出し騎士たちに浴びせかける。

「『』しゃくなまねを！ 並の人間なら肉片になるであろう炸裂を

受けてもどういう術式を使ってか死にはしない騎士たち。これには高杉も首を振つてため息をついた。

「新手が一人増えただけのこと。覚悟しろ！」

襲い掛かるうとする隊長だったが直後、彼の体を電流が駆け抜けた。

一瞬で意識を失い地に倒れ伏す隊長を見て騎士たちに動搖が走る。

「こんな戦場に1人きりで来るわけないでしょ？？」

電撃を隊長に直撃させた美希は、ポケットから無数の小さな鉄球を驚掴みにして取り出し空中に放り投げる。

「喰らいなさい、『超電速射』！」
（レルバルカン）

美希の叫びと共に、空中に放り投げれた鉄球が一気に加速し光と化して騎士たちを吹き飛ばす。

「！」のくらいで良い？護！」「

「ああ、最後にもう一撃だけお見舞いして引き上げよう」

護は両手で空気を掴む動作を取る。

その手に掌握された重力が護のイメージ通りの形になっていく。

「その力・・・・まさかお前たち学園都市の・・・・」

「そうや。僕達は学園都市の組織『ウォール』だ。地獄に落ちても

忘れるな！」

この言葉はとある無能力者の名セリフだから本人に失礼だなーと思
いながら護は掌握した重力を一気に騎士たちにぶつける。

「喰らえ！『重力鉄槌』！」
グラビティックハンマー

放たれた重力は騎士たちをまとめてクレーターの底に押し込める。
護は、敵にも味方にもこれ以上死者を出したくなかった。戦おうと
すれば恐らく相手を殺してしまつ。だが蛮勇はいらないのである。

「あの騎士たちは、あれでしばらくは意識は戻らないはずだ。今
内に、高杉の無限移動で戻りつ」

「本当、人使い荒すぎだぜ。俺たちのリーダーは、帰つたら取りあ
えず寝させてくれよ？」

高杉の手が2人に触れる。

「とりあえず作戦は成功つてことで良いんだな？　てことはよつや
く……」

「ああ、今度こそクリスを取り戻す。クリスをあのふざけた親から
取り戻すんだ！」

決意を胸に護たちは飛ぶ、クリスの母ラミニアがまつアイルランドの
修道院へ。

とある結社の軍事要塞

エバーフレイヤ家当主であるジョーラルドは、巨大な施設の一室で長椅子に腰掛けていた。

彼の居城はすでに『聖騎士団』により押さえられている為、アイルランドには戻れない。

そこで、現在彼は世界で唯一、現実的に中立を守ることが可能な国。スイスにいた。

どの陣営にも属さない、アルプスの自然の要害に囲まれた、世界でも例を見ない本当の意味での永世中立国。それがスイスに対して人々が持つ一般的なイメージだろう。

だが実際の所、そんな綺麗な中立などありはしない。第2次世界大戦の頃から敗北した国の要人の避難場所。犯罪組織のマネーロータリングの中継地として機能することでスイスは中立という立場を維持できたと言える。

ジョーラルドも『タラース』の組織力を生かし、スイス政府と裏での繋がりをもつ事で、その国内にタラースが所轄するちょっととした軍事要塞を築いていた。

「それで、ロンドン塔を襲撃したのは『ウォール』の連中で間違いないんだな」

「はい。イギリスにいる構成員からの報告から考へてもほぼ間違いないでしきう」

「しかし、奴らはなぜわざわざイギリスに喧嘩を売るような真似をしたのだ？」

「それについてですが。一つ気になる情報がござります。塔から脱走した囚人の中に、少女の吸血鬼がいるとの報告がありました。またデータによるとこの吸血鬼はアイルランド出身との事です」

執事長ベネットの言葉に、ジョラルドの顔が驚愕に染まる。

「まさか、奴らがロンドン塔から連れ出したのは……」

「ええ、恐らくですがクリス様の最後の妹であらせられますセルティ様かと思われます」

「随分と行方を探しても見つからなかったのはそういう理由か……となるとすこし計画を変更せねばならんな、クリスの覚醒を急がねばならない」

「しかし、ジェラルド様。クリス様の急激な覚醒の促しは下手をすると……」

「かまわん。今は多少のリスクは冒しても急がねばならん。ベネット、お前は『神話空闇』の準備を急げ」

「は、直ちに」

一例として部屋を出てこべネットに田もやうじジョラルドは虚空を眺めながら呟いた。

「奴らをこれ以上放置するわけにはいかんな……まあ飛び込んでこい愚か者ども。特上の罠を用意して待つておるぞ」

冷たく重い空間に、ジョラルドのくぐもった笑い声が響きわたった。

「お疲れさま。でも遅かつたわね。あなた達最下位よ」

イギリスの騎士派との戦いから戻った護たちにラニアがかけた第一声がこれだった。

「最下位って競争とかじやあるまいし……ていうかなんでラニアさんだけしか修道院にいないんです？」

「タラースの現在地が掴めたのよ。だから先に戻ったメンバーは騎士団の部下たちと共にもつそこのに向かってるのよ」

「タラースの現在地が掴めた？ 今まで尻尾を掴むことも出来なかつたのに……で、どこなんですか？」

「またイギリスに逆戻りとかは勘弁だぜ？」

疲労困憊を全身で表している高杉にラニアはゆるっと首を振つて否定する。

「安心してイギリスではないわ」

「あつそつ。なら良かつ……」

「タラースのメンバーはスイスにいるわ」

「あ・・・・・・・つてはあ！？ ちょっとまでなんでスイス？ 奴らの計画はそんなところじゃ出来ないだろ？」

「ええ確かにそうよ。だからこれは私たちへの挑戦と見るべきね。ロンドン塔をあなた達が奇襲してセルティが私たちの方で確保されてしまったから無理にでも私たちを潰そうと考えた・・・こんなところじゃないかな？」

「だとしたら、敵が準備満タンで待ち受けている所に罠と知りながら飛び込んでいくことになるわよね・・・まあ、それは今までも同じだつたけどね。それにしても、ジエラルドって奴はよほど自信があるのかしら。もう住んでたお城はないのに」

首を傾げる美希にラミアは一枚の用紙を差し出す。

「そこに書いてあることを読めばジエラルドの自信の理由がわかるわよ」

「えーと何々・・・ふんふん・・・は？・・・ええ！？ 軍事要塞！？」

「そう、タラースはスイス国内に第2次大戦時に築かれていた要塞を改築して拠点の一つにしているような。あいつらスイス政府とも裏のコネクションを築いていたようね」

「ラミアはため息をつきつつ用紙を美希から受け取る。

「仮にも永世中立国が、一陣當て手を組むなんてあつてはならない

「なんだけど……綺麗な中立なんてありはしないってことね。まあ、というわけであなた達には『騎士団』が用意した特別機でスイスまで行つてもいいつわ。準備が出来たら伝えて」

そう言つて修道院の院長室に入つていつすらアーリアを護は慌てて呼び止める。大事な事を忘れていたのだ。

「な、なに？」

「実は特別機の機内に眠れるスペースを作つておいて欲しいんです。仲間の1人が疲労でぶつたおれそんなんでも分かつたわ。必ず用意させるから待つていて」

「無茶いうわね……でも分かつたわ。必ず用意させるから待つていて」
安堵のため息をつく護の背中を高杉がなにかを敬うような目で見ていた。

「リーダー。あんたを初めて神だと思ったぜ……」

「……」
というわけで一行は特別機でスイスへと飛び、スイス国内にいる『騎士団』の協力者たちが経営する旅館に辿り着いたのである。

「私、スイスつて始めてだけど本当綺麗なもんね。こんな風景某アーメでしか見た事ないわ」

「なに？ 気なこと言つてんだよ。これから俺たちはあのアルプスの山ん中の要塞に突っ込むんだぜ？ 少しは緊張感もてよ」

「まあ、確かに景色は綺麗だけね」

「リーダー！」

てなことを話している護たちは、旅館の3階の窓から外の景色を眺めていた。

この旅館。なぜか会員制であり、護たち以外の客がない。旅館の経営者曰く、『騎士団』の方から資金が送られて来るから大丈夫なそうなのだが、それならわざわざ旅館にしなくても……と思つ護だった。

「さて、景色も満喫したようだし。突入作戦の計画を立てるわよ！」

旅館のロビーに置かれた長机に地図を広げたラミニアが意氣よつよつと告げる。

「私たち聖騎士団は、正面から強行突破をはかり、一気に要塞に突撃すべしと考える。敵の居場所が分かつてている躊躇う必要はないわ

」

「貴女は、本当に騎士団の長か？ そんなリスクを冒さずとも、我々のメンバーのゴーレム使ったちに地下道を作りださせて向かったほうが早いと思うんだか？」

」

「それには僕も賛成です。ただ魔術の使用をタラニスの奴らに気づかれるのはマズイですよね。だから僕達『ウォール』は少數精銳のチームによる潜入を提案します。潜入チームを除く全員が要塞に突

入をかけ、気を引きつける内に、潜入チームが地道を使って要塞内部に侵入するというのがどうでしょう？」

護の提案にラミアとサラはすこし考え込む。

「確かにそれが確実かも知れんが、陽動側にかなりの被害がでるぞ？」

「ですが、闇雲に突入するよりは少なく済むはずです。それにここで躊躇つても事態は好転はしないと思います。死ぬ氣で戦わないとタラニースは倒せない……」

「確かにそうね。私はあなたの案に賛成するわ」

「私も貴君のアイティアに賛成しよう」

両組織のリーダーが賛成に回ったため、突入計画は決まった。かくして、ついに『タラニース』と護たちの最終決戦の火蓋が切つておとされることになったのだ。

数時間後、アルプス山中に鎮座するタラニース所有の軍事要塞『ダグサ』では軍服を着た兵士たちが警戒態勢に入っていた。彼らはスイス軍ではなく海外から集められた傭兵、あるいはリアルIRAのメンバーで構成されていた。

9時30分。1人の兵士が雲間に光る光点を視認した。それは次の瞬間、いくつも増え確実に近づいて来る。

「ミサイルだ！迎撃しろ！」

兵士に言われるまでもなくミサイル防衛システムにより対空ミサイルが発射させるが、よりもよつて迫る光点はミサイルを避けた。

「バカな！？」驚愕する兵士たちの頭上に容赦なく光が降り注ぐ。

「敵襲だ！」そう無線機に怒鳴る兵士の首に短弓の矢が突き刺さる。

「！？」兵士たちが見る先には、鎧騎士の集団とロープを被った異様な集団。

先程、自分たちに降りそそいだ光線はなんの被害も与えていない。その事実に彼らが気づくよりも早く魔術で作られた無数の矢が兵士たちに放たれる。

絶叫が響き、次々と仲間が倒れている中で、動ける兵士の何人かが要塞各所に設置されている機関銃座にとりつき射撃を浴びせかける。だが、まっすぐ突き進む弾は地面から湧き出すように現れた土づくりの人形に防がれる。そう、巨大な複数のゴーレムに。

「^{ラビ}律法学者たちは全員ゴーレムを突つこませるのだ！それを合図に一斉攻撃を開始する！」

サラの指示に答える、複数のラビたちに操られたゴーレムが一気に要塞に向かっていく。

恐慌に陥りながらも兵士たちが放つ機関銃及び機関砲の弾がいくつ

かの「コーレムを碎くがすべては無理だ。

突撃したコーレムの一体がその巨大な腕で機関銃座の一つを叩き潰すのを合図に『聖騎士団』と『救民の杖』の2台魔術組織が軍事要塞『ダグサ』に襲い掛かる。

真上で響く破壊音に気をかけながら護たち潜入班はダビテの作る地下道を進んでいた。

予定としては、要塞内の一室に真下から侵入する予定であり、今現在も進みつづけているのだがなぜか部屋の真下に出られないでいた。

「おかしい。ここまで来てもまだ部屋の下にいないなんて

「もしかして、これはダミーだったとか？」

それはないだろと護が首を振った時先頭を進みダビテが急に動きを止めた。

「どうしたんだよ？」ダビテの後ろを進み不審そうに聞く上条にダビテは右手で前方を指すことで答える。

「これは、エレベータ！？」

ダビテがいる位置より先は空洞でエレベータが設置されている。どうやらタワーの拠点は地下らしい。

「本当に地下が好きな連中ね・・・」「

呆れる美希をよそに、護は真上にあるだらう床にかかる重力を極端に軽くし、軽く押すだけで要塞内の通路。エレベータの前に出る。

「エレベーターまで警戒がザルだと明らかに僕達を誘つてると思つが
・・エレベーターは行くしかないな 」

「まあ、私たちは今までそうやって来たんだから今回も同じよね」

「リーダーは毎回人使いが荒いが今回は仕方ない。なんとしてもクリスの奴を取り戻さなきゃならないからな 」

「俺は、あの哀歌つていうお前達の仲間に借りがあるんだ。早く返さないと気が済まないんだよ 」

「エレベーターでタラースを倒せば、インデックスの危機も終わる。絶対にこの戦いに勝つてやる 」

「私たち姉妹を苦しめる元凶を倒して絶対クリス姉さんを助ける!」

「

6人はそれぞれの決意を胸に秘め、地下の戦場に向かっていく。すべての決着をつけるために。

エレベータがついた先は小さな小部屋の中だった。殺風景な部屋の中にいくつかの調度品や家具が置かれている。

その内の一つ。安楽椅子に1人の執事が腰掛けていた。エバーフレイヤ家執事長のベネットである。

「おやおや、皆様。ここまで来ておしまいになられてしまったのですか。正直驚嘆いたしました」

「じつと微笑むてベネットは壁に設置されているボタンを押す。

「ですが今は、あなたたちと戦っている暇はありません

護たちの足元がぽっかり開き、彼らを飲み込む。

自動でしまつていく穴の駆動音を聞きながら背を向けるベネットに少年の声がかかった。

「毎回、その手は喰わないよ。特に僕はね」

後ろを振り向いたベネットの顔に映るのは落ちるすだつた護の姿だった。

「？？？ああ、なるほど『重力掌握』あなたの周辺だけを無重力にしたのですか。いつのまにかそんな力の使い方を覚えたのですね」

関心するように、顎に手をやるベネットに向けて護は腰にさす鞘から剣を抜く。

その右手に装着しているのは『銀の腕』。アイルランド神話の神『ヌアダ』がもっていたという『神話級の武具を使いこなせるだけの怪力を与える腕』。

その手に握られるのは『ヌアダの剣』。エバーフレイヤ城で見つかった本物に限りなく近い複製品。

護の出で立ちを見て、ベネットは目を細める。

「あなたは、前回その装備で敗れているのですよ？ それでもやるといふのですか？」

「確かに僕はあなたに負けた。一度は完敗といつてもよい負け方をした。だけど、だからといって戦わないわけにはいかない。仲間を助けた出す為に」

次の瞬間、一気に加速した護がその刀身を振り下ろす。

キン！ といつ甲高い音と共に、ベネットの報復者フラガラッハがヌアダの剣の一撃を防ぐ。

「仕方がないでござりますね」ベネットは報復者を軽く振り護を少し遠くに飛ばす。

着地した護とベネットの視線がぶつかり合つ。

「今度こそ、死んでもらおうといったまじょう」

同じ頃、落とし穴に落ちた護以外の5人はさつきとはうつてかわって巨大なドームの中にいた。

「良ってきたな。我が娘。そしていまいましい組織のものたち」

5人の前にたつのは、エバーフレイヤ家当主であるジェラール。

「よつこじや儂の『神話世界』へ！」

ジエラルドが指を鳴らすと、地面が開き中から十字架に吊るされたクリスが現れる。

「クリス！」慌てて駆け寄ろつとせる高杉だったが直後に思い止まつた。これは罠だと悟ったからである。

「そうだ。それ以上近づくな。それ以上私に近づけば十字架上のクリスは自動的に処刑される！」

動きを止めざるをえない5人を見て、ジエラルドはクククと声を潜めて笑う。

「さあ味わえ！」の『神話空間』の力を！」

ジエラルドの叫びと共にドームの中に異常な力が溢れていく。

？突然空中に現れた巨大な棍棒が振り下ろされるが間一髪で避ける5人。だがセルティの叫びが残りの4人を驚愕させる。

「なぜ、『ダグサの棍棒』をこんな所で使えるのよ？ あんな神話級の武具のオリジナルをスイスで自在に操るなんて不可能なはずよ！」

「それができるのが、この『神話空間』なのだ。さてタップリとの威力味つてもらおうか！」

地下の巨大な空間で最終決戦が始まった。

とある執事の驚愕正体

「うおおおお！」

叫び声を上げながら護が振り下ろすヌアダの剣とベネットの報復者^{フラガラッハ}が正面からぶつかり合ひ。

護の持つヌアダの剣とベネットが持つフラガラッハは共にアイルランド神話に登場する伝説の武具の名である。

だが、両者の剣には明確な違いがある。

ベネットが持つのは本物。

護の持つのは本物^{オリジナル}に近づけたといつても複製品。

この違いは決定的であり、普通ならこの2人の戦いは勝負にならない茶番劇となるはずである。だが、護とベネットによつて繰り広げられている戦いは互角の様相を見せていた。

「前よりは成長しているようですね？」

「前回の戦いで殺されかけたんだから備えくらいするのは当然じゃないですか？」

フラガラッハで護のヌアダの剣を押し返そうとするベネットに対し護は重力によつて重みを増した肘打ちの一撃を喰らわせることで行動を防ぎ、吹き飛ばす。

仰け反り、吹き飛びながらもなんとか体勢を建て直すベネットに護は重力により加速された剣を横薙ぎに振るつ。

だが、その斬撃は格上の神剣フラガラッハにより防がれる。

「なかなかやるではないですか。この短期間で私と互角にやり合えるまでになるとは……」これもクリス様を救い出す為ですかな？」

「当たり前だ！ ク里斯は僕達の仲間だ。奪われた仲間を取り戻すのは当たり前だろ？」

「なる程、それだけの決意で臨んでいるのなら私も本気で戦わなければ失礼でござりますね」

「本気？ まさか今まで手を抜いていたっていつの？」

「私が本気を出したといつていましたでしょ」

ベネットはフラガラッハの刀身に軽く右手で触れ、次の瞬間、その刃に添えた指を流すように動かして血を刀身に染み込みしていく。

「いつたい、なにを……」

「私の力を覚醒させるのです。いや、フラガラッハを目覚めさせる為でもありますな。より正確に言葉で表すとしたら、元の姿に原点回帰するとでも言ひ方のでしようかな」

流れの血を吸い込んでいるかのようにフラガラッハの刀身が真紅の色に染まっていく。それだけではなく柄の部分までもが赤く染まつ

ていく。

「戻るのは久しぶりで『」ぞいます。 護さん。 あなたに今こそ私の
真の名を『教えよつ』」

急に声が変わったベネットに戸惑いを見せる護を見て、ベネットはすこし目を細める。

「済まない少年。 一刻も早く君と対話したいばかりに焦つて出てきてしまった。 私の名は『ルー』。 君には馴染みがないだろうが、アイルランド神話に置ける『神』の1人だ」

その執事姿が変わっていく。 老年の執事姿から若く光り輝く青年の姿に。

「私は太陽を象徴する神であり、そして邪眼のバロルを打ち倒した英雄。 だが同時に祖父を殺し一族を討ち滅ぼした罪人でもある。 そんな私がようやく平穏を取り戻せたのがエバーフレイヤ家だった。 よつて私には現当主ジエラルドに仕える義務がある」

彼の持つ赤く染まったフラガラッハをその上からさらに眩い光が包んでいく。

その光が消えた時、そこにあるのは一本の真紅の槍。

「私は『神』だ。 そして君は人だ。 それでも戦うというのか？」

「神だらうがなんだらうが、関係ないです。 僕はクリスを・・・・仲間を取り戻すため戦うんです。 だいだいあなたは、なんで神を名乗るくせにあんな悪の権化に味方するんです！？」

「一つ言わせてもらおう少年。この世に絶対的な悪も絶対的な正義も存在しない。片方が善だと言つことがもう片方にとつては悪などというのは良くあることだ。君はジエラルドを悪の権化といつたが彼が今に至るまでにどういった事があつたかを君は知らないはずだ。彼を一方的に悪と決めつけられるのは世界の全てを熟知し、全ての人の抱えれものを知る事ができる人間のみだ。君はそうではあるまい？」

「だから僕に仲間を取り戻すのを諦めろと？」

「そうは言わない。先程も話したように正義など千差万別だ。君も君の信じる正義の為に動けば良い。だが……」

ルーはその手に握る真紅の槍を護に向ける。

「私も、私が信じる正義の為に戦う。そして人間の歴史では勝者の正義が認められる。自分の正義を通したければ勝つしかない。君にそれができるか？」

ルーはその手に持つ槍で投擲の構えを取る。

「この槍の名は『貫くもの（ブリュー・ナク）』。祖父であり魔神であつた邪眼のバロルを倒した槍であり報復者フラガラッハに隠れし名槍。君に使うのは嫌なのだかな。クリスが慕う人間である君に使うのは」

瞬間、ルーの手から槍が飛んだ。いや実際は投げたのだろうが護にはそう見えた。

投げられた槍は真紅の稻妻となつて護に向かつ。

「つっ！」重力操作によつて体を無理やりに横に弾き飛ばし攻撃を避けた護は自分が先程までいた場所を見つけ驚愕した。

地面が真つ赤に加熱し、溶解している。にも関わらずそこに突き刺さる槍は溶けていない。いや、槍自信が熱を発しているのだ。地面を溶かす程の灼熱の槍となつて。

？？

「 イフル
i b r u 」

そうルーが眩いた途端、突き刺さつたままのブリューナクが再び真紅の稻妻となつてその手に戻る。あれ程灼熱しているはずの槍を握つているのにルーの顔に苦痛はない。

「これでもまだ戦うか？ 少年 」

「超重力砲！」
グラビティブロスト

ルーには答えず重力の塊を放つ護だがルーはまったく動じない。

一瞬で横に移動して攻撃を避け、続いて信じられない速度で護に付き、ブリューナクを突き入れる。

護がとつさに突き出したヌアダの剣がブリューナクを防ぐがその衝撃で護は一気に部屋の壁に吹き飛ばされ、その勢いのまま壁をぶち抜き、隣の部屋まで飛ばされる。

「かはっ！？」呼吸困難になるつえに咳き込み、血を吐き出す護。

今の一撃だけで体にかなりの負担がかかったようだ。

手で握っていたヌアダの剣は刀身が砕けたらしく柄から先が無くなつてもはや使えない。

目眩を覚えながら立ち上がる護にルーは再び投擲の構えを取りつつ告げる。

「今度は当てるぞ少年。今降伏するなら命は保障する。その若い命をむぎやむざ散らすな」

「僕…………は…………自分の信義に…………従う！…………僕が来たことが…………この世界をこうしてしまったのなら…………僕が責任を取らなきやならない…………たとえ、ここで死のうと…………僕は靈となつて…………幾度でもクリスを助ける為に戦う！」

護の言葉にルーは一瞬、怪訝そうな表情を浮かべた。だがそれは一瞬で、その手に構えるブリューナクの狙いを護につける。

「そうか、ならば君の信義に私も全力を持つて応じよう！」

今度こそ全力で、ルーが放つブリューナクは真紅の稻妻と化した上でさらに5つの稻妻に別れる。満足に動けない護に避ける術はない。

非情に迫った稻妻5本が護に突っ込み、部屋全体に轟音が響きわたる。静寂が戻った時、そこに『古門 護』はいなかつた。

とある戦の最終決着

「ぐ！ みんな避けて！」 セルティの叫びに他の4人が反応するより早く宙に浮かぶ棍棒が容赦なく5人の真上に振り下ろされる。

振り下ろされた先にいるのは、美希と高杉。

「高杉！」 「分かつてや！」

高杉が美希の手を取り、瞬間移動で躲す2人。

「面倒な力だな……攻撃が当たらんではないか」

「あいにくとあなたの攻撃を受ける義務なんてないもんでな！」

高杉が放つ拡散弾を不可視の壁で防ぎつつ、ジェラルドは指をパチン！と鳴らす。

次の瞬間、突如現れた3つの棍棒が高杉と美希、セルティと上条、ダビデ一人で分散していた5人に振り下ろされる。

「起きろ第7柱『伯爵アモン』！」

ダビデの声に応えるように、地中から出た馬鹿でかい手が棍棒を抑える。そのまま地中から這い上がりてくるかのように巨大なゴーレムが姿を表す。

それと同時に、上条の幻想殺し（イマジンブレイカー）によつて上条とセルティを狙っていた棍棒は打ち消され、高杉と美希を狙つた

方は虚しく畠を叩いた。

「行けアモン！ 汝が力を全て用い、我の敵を滅せよ！」ダビデの言葉に従い、巨大なワタリガラスの顔を持つゴーレム『アモン』がその巨体を揺らしながらジョラルドに向かっていく。

「ゴーレム使いだと……そうか貴様が情報にあつたユダヤ系魔術結社の構成員か！」

残っている高杉たちを狙っていた棍棒がゴーレムアモンに向かう。

「俺オリジナルのゴーレムを舐めるなよ！」

その棍棒をアモンは右手に出現させた炎剣で切り裂いた。

「あなたのその棍棒。確かにオリジナルのようだが分身させている以上どうしても力は弱くなるらしいな。俺の使役する72体のゴーレムの内の7番めでも切れるほどに！」

『ゴーレム』アモンがそのまま大きく開く犬歯が煌くその奥から真っ赤な業火が迫ってくる。

「そんな単純なことに気づかないのか？ それとも気づいてたのに後回ししてたのか？ どの道これで一つ分かった。あなたは倒せるってな！」

イヌとカラスの混じつたような叫びと共に『アモン』の口から真っ赤な業火が放射される。

凄まじい業火に不可視の壁を作る暇もなく慌てて右に転がるジョラ

ルド。

血走った目でダビデを見るが、その使役するゴーレムと共にその場を動かないのを見て、口元を歪める。

「仲間を救いにきてその仲間の存在に縛られて思つたように戦えないとは、ちょっとした喜劇じゃないか？」

その言葉に怒氣を放つ高杉や美希だが、どうしようもできない。ハツタリか本当か解らないが、実際問題クリスは十字架に捕らえられている。もしこの十字架に魔術師であるジエラルドが細工をしていれば近づいた時点でクリスが処刑される可能性も無しとは言えないのだ。

「要は近づかなければ良いのよね？　だつたら…」

美希が上着のポケットから鉄球を出すとするのをセルティが止める。

「まつて美希さん。たとえ父さんがクリス姉さんの十字架になにか細工しているとしても、近づいたら自動的に処刑されるというのはハツタリだと思うわ。だってクリス姉さんを失えば父さんの計画は無意味になつてしまふもの。だから父さんも無闇に姉さんは殺せないはず。父さんを倒しさえすれば終わるはずよ」

「ふん、忌々しい娘めもつ氣つきおつたか」

自分からハツタリを認めた上でなおジョラルドは余裕の表情を崩さない。

「だが、たとえハツタリだつたと分かつた所で戦況は変わらない。ここに居る限りな」

「ほぞけ！ ハツタリと分かつた以上貴様を殺して終わりにしてやる！」

ダビテの怒声に同調するかのよつに雄叫びを上げ、『ゴーレム』アモンが炎剣を持ちながらジェラルドに向かう。

「確かにその『ゴーレムは強い。それは認めよう。だが、ここではそれが頂点となることはない」

ジェラルドの言葉にダビテが首を傾げたその瞬間、突進していた『アモン』を巨大な拳が一撃で吹き飛ばす。その手は巨大ながら『ゴーレム』のような人工の感じを受けない。まるで生き物のような、それでいて生命を感じさせない。そんな妙な感覚を『える腕。その一撃を喰らわせたのは。

「邪眼のバロル。巨人の一族フォモールの王にして、死を司る巨神だ。今の私とやり合うということは、いつを始めとする神話そのものと戦うこと意味する」

ジェラルドの言葉も終らない内になにもない空間から次々と異形の者たちが姿を現す。

「さすがにダーナ神族を再現させるのは難しかつたがフォモール神族なら再現はできた。ここで戦う限りお前たちに勝ち目はない。神族に勝てる人間など現実には存在しないのだから」

神話上でダーナ神族に破れ滅びた筈の者たちが一斉に5人に狙いを

つける。

「それでも戦うしかない……行くぞ！」ダビデの声を合図に5人は目の前の敵を潰すため突撃する。仲間を救うという自らが掲げる目的のために。

同じ頃、地下の別の部屋ではアイルランド神話における神であるルーが目の前の光景に戸惑っていた。自分がその全力を持って投げた名槍ブリュー・ナクは間違いなく護に突き刺さる筈だった。満身創痍の護に力を使う余裕など無く。また避けることも出来ない。間違い無く死ぬ筈だった少年は未だ目の前に存在する。

「少年。君はいつたい」

ルーの言葉に護は答えない。ただ瞳を向ける。その時ルーは戦慄した。護の向けた瞳は真っ赤に染まっていた。充血している目ではない。目の細胞全てが赤の色素をもつたかのような瞳。

「ウガオオオオオオ！！」異次元獣の雄叫びを思わせるような叫びと共に神であるルーの体が一気に後方に吹き飛ばされる。

「ぐー？」2、3部屋をぶち抜いて吹き飛んだルーは態勢を立て直そうとするが、それよりも早く護の拳が連続して打ち込まれる。神であるルーでもその拳による攻撃をまともに視認できないという状況にルーは混乱していた。

しかも、その一撃一撃はルーに物理的のみならず靈的なダメージま

で『えて、いるのだ。そんなことは、いくら超能力者でも不可能なはずである。

「（こ）の少年は学園都市の超能力者だったはず。だが、そうだとするといつたいなぜ？」

そこまで考えた所で護が突然攻撃の手を止めた。

これ幸いにと離れるルー。

護は己の右手でピストルの形を作る。

その先の空気が揺らぎ、妙な黒き光の玉が作られていく。

その姿に訝しげな表情を浮かべるルーは直後護の顔を見て驚愕した。

彼は笑っていたのだ。

ルーがブリューナクを投げるのと護が右手から黒き光線を放つのはほぼ同時だった。

ルーが投げたブリューナクと光線がぶつかり合うと思われた時黒い光線と接触したブリューナクの穂先が消えた。そしてそのまま槍自体を消しさつたまま光線は突き進む。

ルーが高速移動で宙に飛んだのと同時に光線が今までルーがいた場所を消しさり、そのままの勢いのまま地に綺麗な大穴を開ける。

しかしそれ以上は続かないらしくそれで終わる。

ルーは今の攻撃の正体をすぐに看破していた。

護は重力使いである。そして重力により引き起こされたものとも強力な事象はブラックホールの発生である。

本来ブラックホールとは太陽などの大質量の恒星が超新星爆発をした後、自己重力によつて極限まで収縮され得るものとされている。だがそのセオリーを目の前の少年は全く無視して小規模ながら形をとつたブラックホールを作り出している。

それはもはや人の域を超えている。

そこまで考えてふとルーは先程護が叫んだことに思い立つた。

『僕が来たことが……この世界をいつしてしまったのなら……
僕が責任を取らなきゃならない』

この言葉を文字通り受け取るとしたら目の前の少年は『この世界の住人』ではないということになる。

ルーは直感した。この少年は異世界からの来訪者ではないかと。異世界でどんな存在であったかは解らないが、今の少年は明らかに人間の定義から外れている。

そして、今の護には、なにかをしようとする意思を感じられない。ただ『目の前の敵に対し力を行使する』という本能のようなものに従い、力を解放させているに過ぎないのだ。

このまま放置していれば少年はこの世界の全てにとつて害悪となり、世界を牛耳る者たちによつて排除されてしまつ。

それを止める方法はただ一つ。護が備える靈的及び科学的力の核を強力な力で押さえ込みコントロールすることである。

それによつて今回のような瀕死になつたときの暴走を抑えられれば護はまだこの世界で生きられる。

だが潜在的ながら強力な護の力の核を抑え、コントロールするのは並み大抵のことではない。

それをすることは、人には不可能だ。そう人には。

「私なら、恐らく少年の核を制御できよう。だがその行為は主人に対する反逆を意味している」

護が連射するいくつものブラックホールをかわしながら、ルーは咳きつづける。

「だが、そもそも私は祖父を殺し、一族を滅した反逆者である罪人……主人への反逆は私の運命さだめなのかもしれない。ここで彼と出会つたこともまた運命なのかもしれない。彼の中に生き姿なき神となることは私にとって最良の選択なのだろう。私はこの姿を保ちすぎた」

ルーは己の周囲に護により消されたはずのブリューナクを複数出現させる。その数8本。

「封じよー。」

ルーの声に応じ8本の槍が稻妻に転じ護を囲むよう周囲8箇所に突き刺さる。

その途端、8本の槍から8つの真紅の光が伸び護の動きを抑える。ルーは、自らの体を輝かせ、自分の体を目的に最適たように変えていく。

「少年。今ままの君ではこの世界で生き続けるのは不可能だろう。だから私が手を貸す。君が元の世界に戻れるまで私が君を支えよう。だから君は君の信義を貫き通せ。クリスを助けるのだらう?」

「

聞こえるはずもない問いを呟き、ルーは自らの体を真紅の光玉に変える。

そのまま光玉は真っ直ぐ護に突き進み護の体に入り込む。

一瞬、顔を歪め雄叫びを上げる護だがそれはほんの一瞬だった。

護の目を染めていた赤は消え、『古門 護』が戻つてくる。

「いつたい 僕は 」

護は周りを見渡し、自らに止めを刺そうとしていたはずのルーの姿を探すがどこにも姿を確認できず首をかしげる。

その護の肩がポンと叩かれた。

慌てて後ろにふりかえる護の田に映るのは執事長ベネット。

「なぜ、その姿に？ まだ僕に止めを刺してもいいのに……」

「

「あなた様は、気づていらっしゃらないのかも知れませんが、私とルーとコインの表・裏のような物でございます。私はエバーフレイヤ家によって神であるルーに付属された『作られた人格』なのです。いわば私は本来姿を持たない神の『器』^{うつわ}と言えるでしょう。そしてルーがその器から離れあなたの中に入つたことによりわたしの存在意義はなくなつたのでござります」

「

ベネットはゆっくりと右手を上げる。その途端、彼の右手にフラガラッハが現れた。

「ここで私の役目は終わります」

その言葉を合図にベネットはフラガラッハを振りかざし護に斬りかかる。

その時、護の右手はとつぜん槍を握った。真紅の槍。その槍の名はブリューナク。

驚く間も無く、まるで操られているかのように腕が動きブリューナクを突き出す。

突き出されたブリューナクはフラガラッハを貫通しベネットの体に突き刺さる。

「なぜ 」

「これは . . . 私の希望でもあるのです。私がお使いしたエバー
フレイヤ家第1継承者であるクリス様の為に動きたい気持ちもあり
ましたが、私は あくまでも器。ルーがジエラルド様に
. . . . 忠誠を誓う以上私がクリス様をお救いすることは不可能
でした。ですが 今ならそれが出来ます 」

ベネットは、その震える右手で執事の燕尾服のポケットからなにか
を取り出す。

その小さな箱のような物の名はオルゴール。

その蓋がひとりでに開き、メロディが流れ出す。そのメロディはモ
ーツアルトの『レクイエム鎮魂歌』

「私があの方にしてあげられる最後の御奉仕がこれです . . .
. . 護さま。約束してください ク里斯様をこれから
もずっと『仲間』として守つてくださると お願い致しま
す 」

その言葉がベネットの最後となつた。その体が地に倒れ伏せ、その
魂を送るレクイエムが悲しき音色を響かせる。

「なんで こんな 僕にどうじりつて言つんだよ . .
. . 自分だけでは仲間の1人も救えない僕に そんな約
束果たせるわけがない なんでこんな風に終わらせちゃ
うんだよ！ 」

護の叫びに答える声はなく、ただ悲しげなレクイエムの音色だけが流れ続けた。

時間を遡ること数分ほど前、護以外の5人はジエラルドの使役する神話上の怪物たちと戦闘を続けていた。

「消えされ怪物！」

美希が放つ『超電速射^{ヒルバーカン}』が一度に複数の巨人の頭を貫き絶命させる。

だが倒したそばから新たな巨人が空間から滲み出るように現れる。

「これじゃあ……きりがないじゃない！」

「まつたくだぜ！ いつたい何体倒せば良いんだよー…？」

「喋っている暇があつたら戦え！」

ため息をつく2人をダビデが怒鳴りつける。

彼はすでに10体以上のゴーレムを同時に操つて戦っている。

その操るゴーレムたちは獅子奮迅の戦いぶりを見せ、巨人たちを始めとする怪物たちと互角の戦いを演じているが、ダビデの魔力も無限ではない。

現に、ゴーレムたちの動きは鈍り始めていた。

対照的に魔力を氣にする様子もなく、怪物たちを倒しているのはセルティ。

吸血鬼であるセルティは不死である為に生命力を交換させてつぶられる魔力が涸渇することがない。

セルティは魔力を利用することによって元より人離れしている吸血鬼の身体能力をさらに強化しその細い腕から放つ一撃で、自分の数倍もある怪物たちを軽く吹き飛ばし、倒した巨人が持つ巨大な武器を振るい怪物たちをまとめてなぎ倒している。

また、上条も自らに襲い掛かる怪物たちの攻撃をぎりぎり避けながらその右拳の一撃でダメージを与えて倒していく。

だが、5人の奮戦にも関わらず邪眼のバロルを始めとする怪物たちの数はなかなか減らない。むしろ増えている。

「ふはは無駄無駄！　ここにいる限り儂の倒すことなど不可能！
せいぜいあがけばよいわ！」

「抜かせ、この空間に仕掛けがあるのなら壊せば良いだけの事だ！
おいでマジンブレイカー！　？どこでも良いから触れてみろ！」

「お・・・・・おづー！」　ダビデに応え、足元の地面を護が触った瞬間だった。

なにかがはじける様な音と共に上条が触れた一定の地面にヒビが入り陥没していく。そしてそれと共に怪物をかたどつたらしき銅像が飛び出し空中で砕け散る。

「そつか・・・父さんはこの空間の真下に神話を象徴するもの

を配置する」と、この部屋を小規模な神話世界にしていたんだわ

！

「ところは、上条の右手で破壊して行けばいいんじゃねえか！」

」

「ふん、この部屋の構造に気がつきおつたか。だが気づいたとしてどうする」ともできはせん

「

ジョラルドが指を鳴らすとクリスの周囲から滲み出すように槍を構えた巨人が左右に現れ十字架につけられたクリスにその槍先を向ける。

「次に破壊行為にお前たちが及べば、この娘は死ぬぞ」

「父さんには、姉さんは殺せない！ 計画の実現の為には姉さんが

・ · · · ·

「それ、主導神ダヌの特製をもつ『体』がな

ジョラルドの言葉にセルティの表情が強張る。

「まあか · · · · ·」

「そうだ。前にも話したと思うが儂の計画に必要なのは女神の素質をもつ娘たちの体だ。生きているにこしたことはないが別段それに拘ることはない」

ジョラルドはその目線をクリスに向ける。

「いっそ、ここで貴様らの目標を碎いてやるつか」

左右にたつ巨人が槍を大きく後ろに引いた。勢いをつけ敵を完全に絶命させる為に。

「クリス！」高杉が飛び出そうとするが間に合わない。誰にも止められぬままクリスが殺されようとしたその瞬間だった。

とつぜん、部屋のどこからともなくメロディーが流れ出した。悲しくも厳かなそのメロディーの名はレクイエム。

ガキン！ という鈍い音と共にセルティが投げた巨大な斧が槍を構える巨人の一体の体を両断した。

「覚悟！」巨人が倒れてできた空白を突き、セルティは真っ直ぐジェラルドの元に突き進む。

「こしゃくな娘が！」

その人外じみた威力を誇る拳を不可視の壁で防いだジェラルドはその手にもつ本物の神剣であるヌアダの剣をセルティに向ける。

「終わったな、我が娘よ！」

「そうね・・・。終わったわ。父さんの計画がね！ 上条さん！ 地面を殴つて！」

セルティの叫びに、ジェラルドが目を見開くが、構わず上条は地面を叩く。

その途端、叩いた箇所に出来たひび割れが瞬く間に部屋全体に広がり、次々と陥没し、象徴物が砕け散る。

「バカな いつたいなぜだ！ なぜ象徴が全て崩される！ たとえ『幻想殺し（イマジンブレイカー）』の力をもつてしてもこの部屋全ての象徴を破壊するなど不可能なはずだ！」

「その理由、教えようか？」

突然響いた声に、体を震わせ上を見上げるジェラルド。その目線の先、天井をぶち破つて降りて来たのは『ウォール』リーダーの護だつた。

「バカな 貴様はベネットと当たつたはず。あいつと戦つて貴様のような若造が勝てるわけがない！」

「ああ、確かに僕はあの人には勝てなかつた。 だがあの人は最後の最後に僕を殺さずクリスを助けることを選んだんだ。 あの人はあんたへの義務より美希への忠誠を選んだんだよ！」

「ふざけるな！ たとえそうだとしても、いつたいなぜ象徴をすべて破壊できた？」

「あんたも聞いたはずだ。 流れ出したレクイエムを」

「それがなんだと 」

「そのメロディーが、この部屋の地面に存在する象徴をラインで繋いだんだ」

「なに！？」

「執事長であるベネットは、あんたにこの部屋の準備を任せられた時、密かに細工を行っていたんだ。わずかな可能性を考慮して」

ベネットが行つた仕掛けについて護は知ることはできない。だがベネットと表裏の関係だったルーと一緒に化している事で護にはその全てが理解出来た。

「ベネットは直属の執事としてクリスに仕えていた。そして一連の騒動の中でもクリスだけは救いたいと願っていた。だけど執事長という立場にたちあんたへ仕える義務をもつ以上その気持ちを封じ込めるしかなかつた」

だがベネットは護との戦いのはてにルーが護の中に生きることを選択したのを見てその意思を変えた。

「事態が、ジエラルドの計画にとつて不利に進もうとしている今なら自分が守るべき人を救える。ならばそれを実行しようとベネットは決意した」

そして、僅かな希望をもつて用意していた仕掛けを発動させた。自らの死と「引き金」を引いて。

「Jの部屋の地下の象徴物たちは、一つ一つが独立して構成されていた。だから上条のイマジンブレイカーでもその全てを無効化するのは無理だつた。だがそれが魔力的ラインで繋がれてしまえば上条の力で一撃で無効化できるんだ。そうでしょうジエラルドさん？」

「なぜだ？……なぜ貴様がそこまで知つてゐる。なぜそこま

で語られる！？ 貴様は部外者。とつぜん介入してきた余所者は
すだ！ なぜ？ 』

『僕の中に教えてくれる存在がいるからだよ。ベネットと共にあつ
たもう1つの存在が僕を救い。僕に事実をすべて教えてくれた』

『まさか、ルーか？ そんな筈はない奴は私たちに仕える義務があ
つた。貴様などにつくはずがない！』

『私が仕える義務があるのは、エバーフレイヤ家にだ。 ジェラル
ド、お前にではない』

突然声が変わった護にジェラルドはもちろん周りで見守る5人も十
字架から解放され意識を取り戻したクリスまでもが目を見開いて見
つめる。

『お前がここまで来るのはなにがあったかを私は理解している。お
前の行動にある意味では正当性があることも』

『理解しているなら、もう一度私に仕えなおせ！』

『家族の全てを、イギリスと祖国の争いの中で失い。その復讐の為
にお前は戦つてきた。そしてその中でエバーフレイヤの血を引くラ
ミアと出会い、お前は彼女と結ばれエバーフレイヤの当主となつた

』

『そりだ！ 私は当主だ！ よつて貴様は私に仕える義務がある！

』

『確かにお前が目指した復讐は当然とも言えるしだれにもお前を悪

と断じるに仕�できない。ただお前は一つやつてはならぬことをした』

「なんだと?』

『エバーフレイヤの人間に刃を向けたことだ。エバーフレイヤの血を引く娘たちを計画の為に利用しようとした、感づいた2人の娘を手にかけた。私はエバーフレイヤ家に仕える義務を持つ。お前のした事は私を敵に回すことだった』

「なんだと?』

『だが私はそれでもお前を止めなかつた。お前を止めようとする者たちが止められるかを見極める為に。だがそれは叶いそうになかつた。それで私は姿を現した。今私が宿るこの少年のまえに。そしてお前が疑わぬようお前を倒そうとしていた少年を消した上でエバーフレイヤ家への義務を果そうとしていた』

「ならなぜ殺さなかつた?』

『少年を止める必要が生じたからだ。殺すのではなく止めて助けることを選択したのだ』

「なぜだ?』

『それを話す義理などない。それに私との会話を集中する余裕などあるのか?』

「なんだと?』

『そろそろお前の部下たちを倒したお前の妻が仲間と共にくる頃ではないか』

その途端、天井に無数の穴が開き、そこから次々と聖騎士団と救民の杖のメンバーが降りてくる。その先頭は聖騎士団団長のラミア。

「ジェラルド。あなたの計画はもうお終いよ。神話の加護をなくして今あなたではもう私達と戦うことも逃げることもできない。もうここで終わりにしましょう」

「君も私を悪と見なすのか、君は私の事を一番理解してくれていたじゃないか！ その君でさえ今の私を悪と見なすのか！？」

「私は確かにあなたを理解してた。だから一緒にになって戦つてあなたと結ばれた。でもあなたは変わってしまった！ 私が知っているジェラルドは他人を自分の道具のようにはけして扱わない人だつた！ あなたは復讐の為に変わってしまった。私の愛したジェラルドはもう遠い昔に消え去ってしまった！」

ラミアはその手に持つ槍を握り締める。

「私はあなたを愛した。理解したつもりでいた。だけど私ではあなたの復讐の感情をあなたの心の傷を癒せなかつた。あなたの気持ちを気づけなかつた。だからこの結末を招いた責任は私がとる。私があなたを殺す」

ラミアは右手に持つ槍。グングールの槍先をジェラルドに向ける。

「さよなら、ジェラルド」

突き出されたグングールはジェラルドが構えたヌアダの剣を碎き容赦なくジェラルドの体を突き抜け背中まで抜けた。

死に纏わる伝承につながるグングールの特性によつて刺さつた箇所から強烈な勢いで老化が始まつていく。

すでに体の4分の3以上が老化しているジェラルドの口が僅かに動いた。しゃがれて途切れ途切れだかジェラルドはこう言い残したのだ。

『ハミア、すまん』

それがエバーフレイヤ家当主であり魔術結社『タラニス』のリーダーであつたジェラルドの残した最後の言葉となつた。

ついに全身が老化し、干からびたミイラのようになつたジェラルドの体は次の瞬間には砂となり空中を流れしていく。

それを漠然と眺める護の服の裾をだれかが引いた。

引いたのは、クリスだつた。

十字架から解放された時のままの微妙にあちこちを強調した儀式めいた服装のままクリスは護に飛びついた。

「！？ ちょ、ちょっと！」

「ありがとう護くん！ 私なんかの為に傷つきながら戦い続けてくれたんだよね？ 本当にありがとう！ 私、どうやってこの恩を返せば良いか迷っちゃうぐらいなのよ？」

年頃の男子にとつて異性からのいろいろなアプローチは強烈なことこのうえない。護ももちろん例外ではなく一瞬完全に硬直状態に陥つてしまつたが、いそいで話題を変えることでなんとかそれから脱出した。

「でも、僕はクリスの父さんを結果的には殺すきっかけを作った。いくら悪人だったとしてもあの人はクリスの肉親だった。ごめんクリス」

「いいの……護くん。私は確かに父さんを尊敬してたし、父親として愛していたわ。父さんも私を愛してくれていたと思う。でも父さんは私を計画の為に利用しようした。それは悪い事でしかないわ。だから父さんがいなくなるのは寂しいけど私は護くんを憎んだりはしない」

「『めん……そういえばどうするんだ？ 僕たちは学園都市に戻ればおそらく『ウォール』としてまた活動することになるけどクリスはもう暗部組織用員となる必要はないはずだろ？』

護は一体化したルーからクリスが学園都市暗部に入った理由を知らされていた。

父親であるジエラルドの影響下からクリスを逃がす為に学園都市と交渉したラミアに学園都市から亡命の条件として暗部の人間になることがあつたのだ。

「私は、これからも護くんや仲間と一緒に『ウォール』の一員として一緒に戦うつもりよ。だって仲間だもの」

「本当にそれで良いの？」

「うん」

「ありがとう…………じゃあ、戻りや。僕達『ウォル』のあるべき場所へ！」

護の言葉に、高杉と美希は拳を上げて応えクリスは大きく頷き立ち上がる。

その後、旅館で療養していた哀歌とも合流し、再びアイルランドに戻った護たちは残り1日しかない退座期間の中でクリスやラミアの案内でやっと旅行を満喫することができた。

そして出発の日、空港で護たちは思わず同伴者がいることを知る。

「セルティイが学園都市にー？」

「ええ、あの子あつての希望なの。後は私としての都合もあるのだけど」

そう申し訳なれやうに囁ひながら。

「エリック・アイルランドで母さんと一緒に暮すのは私が吸血鬼である以上難しいの。私は迷惑かけたくないからどこか十字教の影響が少ないとこに行きたいんだけど、どうせ逃げるなら姉さんと一緒にのどいろが良いの」

「それで学園都市とコンタクトをとつて許可されたのよ。特例としてね、その代償は暗部に入るすこと。その暗部組織の名は『ウォール』

。向こうから直々に指定されたわ。あなたたちってあの街のトップから気にいられてるのかしら？」

「じゃあ、セルティは僕達『ウォール』のメンバーとなつて学園都市に来るんだね。なんか女子の方方が大きくなつてきているような 」

そんな護の呟きは誰にも聞こえることなく、ウォールは新しいメンバーを抱えて学園都市に戻ることとなつた。

この先、自分たちをまつさうなる騒乱をこの時、護たちは知るよしも無かつた。

?

となる戦の最終決着（後書き）

ようやくアイルランド旅行編が完結しました！（とはいってもまたたく旅行を描いていませんが）

次からは本編に戻りたいと思っています。時間軸的にアクセラレータの辺りの話になると私は、御指摘にもあった通り私が浅学な為に学園都市サイドでの描きかたが誤ったものにならないようこもつと色々調べなくてはならないと思いました。

さて、現在台風が中部地方に近づいてきたりしますが、進路にあたるみなさんは大丈夫でしょうか？

どうか無理をせず御無事でお過ごしください。これからもよろしくお願いします！

とある3位の意外要請

吸血鬼。その存在は空想上の存在とされていたが現在魔術サイドでは実在するものとして認識されている。ある特異能力『吸血殺し（ディープブラッド）』の存在が確認された事により。

「で、それで その能力をもつ人がなんでこの街にいるつていうんですか？」

「これは僕の予言として聞いて欲しいだけど、ある男がある少女を救う為に吸血鬼を欲した。だが、吸血鬼などそう簡単に見つかるはずがない。そこで男はその立場を利用して知った『吸血殺し（ディープブラッド）』の少女を確保した。だけどその男は自分の所属していた組織を裏切って行動していた為に魔術サイドが介入しづらい科学の街である学園都市に拠点を持つたんだ。その男の名は、鍊金術師アウレオルス・イザート。」

「だとしたら、私もそこに引き寄せられるってことよね？ でも今は別段なにもないけど？」

「そこばかりは僕にもよく分からないんだけどね ただこれは推測だけど吸血殺しの効果が及ぶのは一定の範囲だと思うんだ。現に彼女が消してしまったのは吸血鬼化した村の人であつて遠くから引き寄せた訳ではないという事だし」

護たちがいるのは、学園都市特有のサービス職の一つである個室サロンの中である。護たちのような暗部組織の人間は仮の拠点をいくつも用意する。護たちのような学園都市全域においての活動が想定されるような組織は必然的に各学区内に最低1つの拠点を持つのは

珍しくない。

「それで護さんは、その少女を救おうとしているんですか？」

「まあ、それもあるけど……上条さんに万が一がないようになるという目的もあるんだ」

護が警戒しているのは、作品の流れとの違いの発生だ。その例がグリビトン事件の時的一件である。

「（いつた이나にが原因で流れが変化するのかがいまいち分からな
いけど……もしかしたら上条さんがアウレオルスに破れる
という展開だつてありえるんだ）」

護からすれば上条が死ぬこと、佐天さんが死ぬことも繋
がるので嫌でも避けなければならぬ。

その為に自分の作品知識を使って最悪の事態を避けるべく、先手を
打つことで展開を変えようとしているがはたしてそれが可能かどうか
については護にも分からない。

護という異物をかかえたこの世界がどんな変化をするかについて護
が知れるわけがない。

「それで具体的にはどうする気なの？」

机におかれているポテトフライの山に手を伸ばしながら哀歌が言つ。
因みに彼女はこれで3皿めである。

「とりあえずアウレオルスが潜伏している場所は分かつてゐるから

内部に入つて調査するしかない。 だだその為には僕らが生徒になるしかない 」

「 生徒つて とつしてなんですか? 」

「 アウレオルスが潜伏しているのは三沢塾といつ進学塾なんだ 」

「 進学塾? なんでそんな所を拠点にするんですか? あからさまに田立つと思うんですけど 」

「 人が多くいるあの場所だからこそアウレオルスはそこを選んだんだ 」

アウレオルスが三沢塾に潜伏した訳は実現不可能と呼ばれた鍊金術『アルス・マグナ黄金鍊成』を執り行う為だったのだが護はあえてそこに触れようとは思っていない。

本当の理由は、後で分かることだし今はそれより優先する事があるからである。

「 民間人が多くいる場所なら、自分を狙う組織から攻撃されにくいうからだと僕は思うんだけどね 」

とりあえずもつともな理由で「まかし護は本題に入る。

「 僕の調べでは、あの三沢塾つていう塾は科学崇拜を行うオカルト結社みたいになつてているらしいんだ。 それで本来ならアレイスターが処理を命令して終わりの筈なんだけど、そこでアウレオルスが乗つ取つてしまつたもんで面倒なことになつて いるらしいんだ 」

「 そのアウレオルツていう奴はどんな戦い方をするんですか? 」

「戦い方というか 彼は鍊金術師だから当然鍊金術を使う訳なんだけど、その中でも実現不可能と呼ばれ、鍊金術の到達点である黄金錬成^{アルス・マグナ}という鍊金術を使うんだ。その効果は『考えたことをそのまま現実にする』というもので事実上無敵かつ反則な力なんだよね」

「それって 反則っていうかチートだね そんなの相手にして勝てるの？」

哀歌の言葉に護は即答できない。正直な所、護は上条さんがいる限りアウレオルスに勝つのは無理ではないかと思つていてる。

なにしろ作品中ではスタイルと上条さんが協力して、重傷を負いながら『黄金錬成^{アルス・マグナ}の欠点を突いてようやく勝てた相手なのだ。

自分がどこまで戦えるかと問われると護は正直自信がないのである。

「僕もなんとも言えないけど『無敵』な人間なんて存在しないんだからなんとかなると信じたいね」

「時に、先程護は生徒となつて潜入すると言つたけどウォール全員で忍び込むわけ？」

「いや、アウレオルスに魔力を探知されるとまずいから今回は潜入組は僕と高杉と美希とクリス。哀歌とセルティは万が一に備えて外で待機していく欲しい。特にセルティは今回は吸血殺しが関わっている以上気を付けなきゃならない」

護の言葉に微妙に頬を膨らませるセルティ。彼女としてはせっかく

姉と同じ組織の一員となつたのだからもつとチームの一員として働きたかつたのだ。

とはいへ、今回はそう簡単に現場に連れていく訳ではない。

「セルティにも哀歌と一緒に万が一の時のバックアップという大事な役目がある。しつかり頼むよ？」

「分かりました……」

渋々ながらセルティが了解した時、護の携帯電話からレクイエムの着信音が流れ出した。

メールの差出人は『御坂美琴』。

護は一瞬、心臓が飛び出るかと思つた。

美琴とは木山をめぐる一件以来、まったく会つていない。

アイルランド旅行などに出かけていたせいもあるが、美琴自身が遭遇するのを避けていふようなのだ。

その美琴からのメールの内容は至つて簡潔だった。

『アンタのアパートの前に行くから待つていて』

それがメールの内容だつた。

それから数10分後、護は哀歌たちを個室サロンに残し、1人アパートの前に立っていた。

メールには時間が指定されていなかつたためになるべく早く着こうと急いで来たのだが、まだまったく姿は見えない。

「面と向かって、じつ話せば良いんだろう？・・・」

あの一件の後、偶然顔を合わせてしまつたりした時の美琴の表情には怯えが感じられた。

正直、前のように話せる自信が護には持てないでいるのだ。

「は～・・・ん？ あ、来た！」

前方から走つてくる常盤台の制服を着た美琴。外見は別段焦りや恐怖を感じられるわけではないがだから護が安心できるわけがない。

走ってきた美琴は、護の前に来るなり開口一番「いっ」と言った。

「お願い。 協力して！」

「・・・はい？」

「だから協力して！」

てっきり、なんか問い合わせられるのかと思つていた護は予想外の言葉に拍子抜けした。

「あのや・・・一体なにを協力しようっていうの？」

「……じゃ話せないから、ついて来て」

有無を言わせずにすたすたと歩いていつてしまつ美琴の後を慌てて護は追つた。

美琴の後に歩きながら、護は今の状況を訝しんでいた。プライドの高い美琴がわざわざ他人に頼むのは珍しい。

だが護には今の時期に美琴が自分に頼み」とをする理由が検討つかないのだ。

護の知識の中では、美琴が関係する一大イベントといえば、姫神をめぐる一件の後に起こる一方通行アキセラレータが関係する一件しか思い当たらぬ。そして、それはもつと先に起こるはずの出来事のはずなのだ。

ポケットに入れた携帯を取り出し日時を確認する護。

携帯の示す日時は、8月15日。

「（8月15日に、なにがあつたつけ？）」

疑問に思いながら護は第1話で上条が美琴と会つ某ファミレスで美琴と向かいあうことになつた。

「それで……僕に協力してほしい」とつて何？」

ファミレスでバー・ラ・アイスにコーラを注文した護の質問に美琴はしばし黙つた末にポツリと呟いた。

「アンタは、学園都市の上との繋がりを持つている……違う？」

「…………だとして一体なんなのさ？」

「もしアンタが上の事情を知っているなら教えて欲しい事があるのよ」

ひと呼吸おいて美琴は思い切ったように言った。

「絶対能力進化計画（レベル6シフト）って知ってる？」

もちろんその言葉を知っている護は思わず表情を強張らせてしまう。

「やっぱり知ってるのね」

「ねえ、1つ聞いていいかな？」

ここまで来て護は決断した。遅かれ早かれ美琴が闇を知るのなら今自分がおかれている闇について話そようと。

「どうして、僕が上と関係を持っていることに気づいたの？」

「アンタが警備員アンチスキルを相手に大暴れした後の出来事からよ。あれだけの被害を与えたアンタがお咎めしなんて不自然だわ。それにアンタが入院したとき、学園都市統括理事会の1人が会いに来ていた。後で知ったことだけど名は剣崎達也。統括理事としてはもっとも新参で、如何なる理由で理事になつたかも不明な人物。そんなのと関わっている以上、アンタが上と繋がつてないと思う方が不自然じゃ

ない」

「良く知ってるね……。すがは第3位の『超電磁砲』^{ケルガン} ラッキングでも仕掛けたの？」

「うむむ……今は関係ないでしょ。それより質問に答えなさいよ」

「ふ……分かったよ。確かに僕はその計画を知ってる。学園都市第1位のレベル5、アクセラレータをレベル6にする計画で、その内容は君のクローンを20000体殺すというもの……だろ？」

「知っているなら話は早いわ。わたしはその馬鹿げた計画を止めたの。だから一緒に手伝ってくれない？」

話の時期が早まつたのか、はたまた自分の知識にないようなイベントなのか。悩む護だがそこで一つ気づいた。とあるシリーズにはと禁の他にもう一つ外伝がある。その名は『ある科学の超電磁砲』^{ルガン}。

「（どうか……。そういえば外伝もあつたんだっけ。でもアニメでは今の様な状況は描かれなかつたような？……。）どうか！」「ミックの方に書かれている出来事なのかもしれない。だつたら僕の知識の中にはないのも頷ける）

「ねえ、アンタ聞いてるの？」

「…………ん？ あ、ああ！ 聞いてるよ！ 頼みは分かつた。でもそれをするという事は学園都市第1位と戦う可能性があるこ

とを意味するんだよ？ 美琴は第3位。 僕は第4位。 2人がかりで戦つても勝てるかどうかは

「たとえ、1位と当たらうと関係ないわ。 私は正面から実験をつぶして見せる！」

美琴はまだアクセラレータと直接当たった事がない。つまりアクセラーターの強さを知らないのだ。

「ふー なら、一つ聞かせてくれないかな？ どうやって計画を潰す気なんだ？ 計画には学園都市内部のかなりの研究機関が関わっているはずだよ。 それを片っ端から潰そうとすればアンチスキルに感づかれると思うけど？」

「要是、研究所の建物とかを壊さなければ良いんでしょう？ だったら私の能力でハッキングをかけて研究所の機能を再起不能なほど破壊してやれば良いのよ」

「ハッキングって やっぱりしてたんだ 怖るべし第3位 もはやサイバー・テロじやん」

「能力でアンチスキルをほぼ壊滅させた人間に言われたくないわよ！」

「そこを突かれると痛いんだけどな 時に、その研究機関所属の研究所の場所については把握しているわけ？」

「ええ、ある筋からの情報もあつてね。まあ、全てではないけど」

「なら、それをすれば良いじゃないか？ 別段僕を必要としなくて

も・・・・・

「私がハッキングをかけたとして、いくらなんでも全てを機能不全にできるとは思えない。だから上と通じてるアンタに私が機能不全に出来なかつた施設を破壊してほしいのよ」

なんて、身勝手な・・・・・と思つ護だつたが、ここに計画を止めることはゆくゆくは上条さんの危険を少なくする事に繋がるものも事実なので口には出さない事にした。

「分かつた。だけど僕にも都合があるから、そう長い事それに関わつてられないよ？」

「無理を言つてるのはこいつなんだから分かつてる。また連絡するからその時はよろしくね？」

そつ言つだけいつて美琴は、席を立つてレジで2人分払つて出いでてしまつた。

「（当たり前のように2人分払つて出て行くとか意外にブルジュア？いや、考えてみればレベル5といえば金持ちで当然か）」

そんな事を考える護に『中』から声がかけられた。

『戦う』と決したようだが、話にあつたアクセラレータという男に勝てるのか少年？』

「（ルーか・・・・・分からない。僕の能力である『重力掌握』で扱う力も所詮はベクトルの範疇にあるものだからアクセラレータ

の能力『アクセラレータ

一方通行』の前には歯が立たないかもしない。あいつの能力はベクトル操作・・・・・あらゆる物の向きを操れる。それを利用した反射を使われば僕には勝ち目はないかもしない)

』

『少年。君の能力でかなわないといつなら私が力を貸そう。私の力を扱えれば良い』

「（そんな事を言つたつて、能力者には魔術は・・・・・）」

『君のその力は『超能力』ではない』

「（は！？）」

『いや、正確には学園都市で開発された超能力ではないといつべきだな。君の力は開発されたものではなく、元から備わっているものだ。それも、この世界ではなくべつの世界で』

「（なんであなたがそれを！？）」

『魂が発する力で大体わかる。だからこそ私は君がこの世界で生き抜けるよう力を貸すことにしたのだぞ？　よつて君には私の力を使えるはずだ。まあ、訓練を経ないと制御は難しいだろうが』

「（訓練つて？）」

『少年の精神世界で君を鍛える。その為にはここでは不味いのだが』

「（分かつた。アクセラレータに立ち向かう為には確かにあなた

の力が必要になる。よろしくお願ひします) 「

とこう訳で護は、ルーの言葉に従い自分のアパートの部屋に（個室サロンに哀歌とセルティを置き去りにしたまま）向かったのだつた。

『さて始めるぞ。少年』

「（分かりました……）」

ベットに横たわる護は内心ビクビクしながらその時を待っていた。正直怖い。いや怖いわけがない。なにしろ精神世界で訓練なんていふ事態はマンガやアニメではよくある展開だとしても自身で経験することなどまず無いからである。

護がなにか考える前に唐突に視界が真っ暗になり護の意識は途絶えた。

「……は？」

護が立つのは奇妙な空間だった。自分が住んでいた元の世界。現実世界が荒れはてた姿。いや風化したと言うべきだろう。

「……は君の精神世界。そして君を鍛える場所だ」

姿は見えず声だけが空間に響く。

「視線の先を見るが良い

」

促されて向ける視線の先にあるのは。

「ブリューナク？」

「そうだ。私の槍だが、今は君が使うのだ。早く槍を抜け少年。
時間はない」

ルーの言葉が終わるより早く曇り空より、なにかが一気に落ちて来る。

慌てて護が槍を引き抜いた直後無数に落ちたなにかがその姿を現す。

「な？ 哀歌？」

目の前にたつのは自分の仲間。哀歌だったのだ。護の言葉に哀歌はなんの反応も見せず、いきなり破壊大剣を現出させた。

「！？」としさにブリューナクを構えた護だったが容赦なく振るわれる破壊大剣に吹き飛ばされる。

「！」は僕の精神世界 だから哀歌が となる
と、あの時落ちてきたのは「

護が言葉を紡ぎ終わる前に、別の場所に落ちたものたちが次々とその姿を現す。

「やつぱりか」

護の前に立ち塞がるのは、自分の仲間である『ウォール』の面々。

さらに『タラース』のベネットやジョラルド。『救民の杖』のメンバーたち。

「僕と関係した人たちが勢ぞろいつてことか？」

「この状況を君のもつブリューナクのみで切り抜けてみよ。この世界では君の力は使えない」

「なる程ね……そういうことならやるしかないか。仲間と戦うのは嫌だけど、全力でやってやる！」

真紅の槍をその手に握り、護は田の前の強敵たちに向かっていった。

?

とある三位の意外要請（後書き）

久々振りに本編に戻りました。

実は私、謹同様レールガンの方の「ミニシクには詳しくないんです。よってこるから話を進めるにあたつて読者のみなさんが?と思われることが多いあると思いますが御了承ください。

とある成果と強襲作戦

護は精神世界でルーの名槍。ブリューナクを持ち戦っていた。

本来、護は格闘技術に精通しているわけではない。その護が今までいくつもの戦いで生き残れたのはひとえに自らがもつ能力があつたからだ。能力によって身体能力を強化したりする事によつて超人的な力を發揮することが出来ていた。だがこの精神世界では自らの能力は使えない。

武器になるのは自分の体とその手に持つブリューナクだけである。

「ぐわああああ！？」救民の杖のゴーレム使いダビデが操るゴーレムの拳をもろに受けた護の体が宙を舞う。本来ならこの一撃を喰らつただけで護は絶命するはずだが精神世界であるせいか傷を負つても直ぐに再生してしまう。もつとも痛みや潰される感触は伝わつてくるが。

「（くそ、洒落にならない。いくら死ぬ事がないといつても毎回こんな痛み味わうなんて嫌だよ……いかに僕が能力頼みだつか思い知らされるな）」

護は右手でつかみ続けていたブリューナクに目をやる。真紅の名槍は傷一つなくそこにある。だが護にはルーが使つているようにこの槍を使えない。

「（槍術はあるか、武器術や格闘技もろくに習つたことない僕に槍を使った戦いなんて……）」

そう思った直後、今度は高杉が能力を利用した瞬間移動で護の後頭部に蹴りを入れる。

同じ瞬間移動系の能力者である白井黒子の得意技もある。

「（）ばあー？」

奇妙な声を上げながら吹き飛び廃ビルの壁にめり込む護。

「（今まで特に意識もしなかつたが、こんなにも高杉の蹴りには威力があつたのか？）」「

普通なら今ので内臓の1つか2つは潰れたところだ。肋骨も肺に突き刺さるはずだ。だが痛みは感じ、感触もするものの重傷には居たらない。再生してしまうからだ。

「（くそ・・・この際使えないとか言えないか。 やるしかない！）」

護は槍を強く握り締める。

「（ルーは僕がブリューナクが『使ひ』と言った。なら、僕にはこの槍を使って戦う力があるということになる）」

正面から迫るセルティを見つめながら護は立ち上がる。

「やり方や流派なんて関係ない。 これが僕のやり方だ！」

護は両手で保持する槍を無造作に横に薙ぎ払う。

通常、槍に横に薙ぎ払う機能はない。 槍の本質はあくまで突き刺さることにあるからだ。それはブリューナクとて例外ではなく通常なら刺す」としか出来ない。 そつ、通常なら。

「！？」

ブリューナクがセルティに触れるか触れないかの所で槍の先から光が左右に伸びた。 まるで戦国の武士が使った十文字槍のように。

「うおおおお！！」 護が振り抜くブリューナクの刃がセルティを横薙ぎに吹き飛ばす。

「おめでとう。 それで正真正銘その槍は君の槍となつた」

再び響く姿なきルーの声。

「槍の側面を見るが良い」

言われるままに槍の柄の側面に目をやる護。 そこには無かつたはずの槍の銘が刻まれている。

『緋炎之護』 それが槍に刻まれた銘。 護の物となつたこの槍の名だつた。

「本来、我々が使う武具に特定の名などない。 なぜならその武具は自らの体と特性によつて形作られるからだ。 私が扱う槍が『ブリューナク』だつたのには対して意味を持たない。 私が君の体に入つたことで君は潜在的に私たちと同じとなつた。 よつて君がその槍を振ることを決めた事により、 その槍は姿を変える。 西洋式の投げ槍から東洋式の十文字槍に」

良く良く見れば槍の色彩 자체が微妙に変わっている。真紅の槍は今では緋色の槍となりその外觀も戦国武将が持ちそうな和式へと変わつている。

「さて、槍は君のものとなつた。だがそれだけでは足りない。君が私から受け継いだ特性を君なりに使いこなせなければその槍はただの武具でしかない」

ルーの言葉と共に、今まで護に向かって來いた『仲間』を始めとする敵たちが消える。

「最後の訓練だ少年。その槍で、私を倒してみろ」

今まで実体を現さなかつたルーがここに来て姿を現した。その手に握られるのはつい先程まで護が握っていた槍。即ちルーを象徴する武具『ブリューナク』。

「さあ、見せてみろ少年。君の槍『緋炎之護』の力を」

言葉と同時にルーのブリューナクが真紅の稻妻となつて宙を飛ぶ。

「（あんなの受けたら怪我ビシビシじゃないぞー）」

護はブリューナクを構えたまま全力で横に転がる。

「そこか」

ルーの言葉に護が身構えた直後、地面に突き刺さつたブリューナク

が5つの稻妻を護に向けて放つ。

とつせに緋炎之護を前に構える護だがそれだけでは稻妻を防げない。5つの稻妻は防御をすり抜け全てが護の体を駆け抜けた。

「ぐわあああ……」

苦痛と熱さと痺れが一度に襲い掛かる異質の痛みにのたうつ護。

「少年。 槍をそのまま使つことは誰にもできる。だがそれでは強敵相手には通じない。 槍の概念に囚われず、自分の思うことを槍を通して現せばよい。 槍が姿としてくれるはずだ」

護はのたうちながら、なんとか槍の柄を掴み直す。

自分の思うことを槍を通して現せ。 いまだ実感は湧かないが、 そういうのならばやるしかない。

護は「」の槍の銘を頭に浮かべる。『緋炎之護』自らの名が入った銘が意味するのは『炎の護り』。

「（なら……）」「

無言で再びルーがブリューナクを放つ、 空中で5つに分かれた真紅の稻妻に向けて護はこんどこそ明確に緋炎之護を向ける。

「第壱の技、緋炎剛壁！」 心に浮かぶままに、 正確には槍が示すままに護は技の名を叫ぶ。

そのとたん、 迫り来るブリューナクに対して護の緋炎之護の槍先か

ら放たれる緋炎が炎の壁を作り上げる。その壁が迫る5つの稲妻を5つとも防ぐ。

「第弐の技、緋炎斬波！」護の叫びと共に槍の穂先が緋炎を纏い、その緋炎之護を護が全力で横に振るひ。

槍から放たれる緋炎が鋭さといつ本来炎が持ちえない特性を宿しと波となる。

新たにブリューナクを構えなおすルーを緋炎の斬撃が切り裂く。それと同時にルーの体も切り裂かれる。

「見事だ少年。これで正真正銘、その槍は君のものだ。緋炎之護は君の強い力となるだろ？」

ルーの体が透けて行く。

「槍は君の中にある。君が呼べば君の力となる。緋炎之護を君が信じるもののに使うがよい。訓練は終わりだ少年。現実世界に戻すぞ！」

護がなにか言つ前に彼の意識は問答無用で途絶えさせられた。

「…………部屋…………か！」

護は唐突に意識を取り戻した。とつさに部屋の時計に目をやれば訓練を初めてから30分もたつてない。

「あんだけ訓練して現実は、30分もたつてなかつたのか！」

護は自分の両手に刀をやる。

「（ルーは銘を呼べば、槍が力となると言つていただけじ本当にできるのかな？）」

護は右手で宙を掴みながら、その銘を呼んだ。

「緋炎之護」

そう呟くのと同時に護の右手は槍の柄を握っていた。

「……………どうやら、本氣でこの槍は僕のものになつたらしいな

」

護が戻れと念じると、緋炎之護は光となつて消えて行く。

「さて、なんだかんだで新たな力を手にいれられた訳だけど……………なんか怖いな。僕はいつたいなんなんだ？」

超能力と魔術は本来相入れないはずの存在である。

超能力者には魔術は使えず、魔術師には超能力は扱えない。それが原則だ。では超能力と魔術を扱えることになった護はなんだというのだろうか。

「なんだかおかしいぞ。僕はあくまでも元の世界では一般人だったはずなのに」

考えて見ればおかしな事はいくつもあった。こちらに来た直後に発

現したレベル5級の能力。自分をなぜか支援する統括理事の1人。自分が異世界から来た事を知っていたアレイスター。

「うう……考えれば考えるほどますます混乱してきた……まあ、今はそれは後回しにして……そうだ！ 哀歌たちの事すっかり忘れてた！」

そうである。護は個室サロンに仲間2人を置き去りにしたままなをすっかり忘れていたのだ。

その後、2人にたっぷりと絞られた護は何度も謝り、なんとか解放されたのは1時間後だった。

「うう……疲れた、もう動けない……」

「私たちを置き去りにしたまま、忘れた護が悪いんだよ？ 罰なんだから、最後までやつてもうからね」

護は2人のお叱りを受けた後、セルティの荷物を学生寮に運ぶ仕事をさせられていた。学園都市に移る事になつたセルティは霧ヶ丘女学院に通うことになつた。

セルティはてっきり姉であるクリスと共に住むと思っていた護だつたが彼女的には色々な意味で姉には迷惑をかけたくなかったらしい。だが、それは別に結構なのが部屋に入れる荷物を入れたダンボールの数がとにかく多い。

生活用品や下着などはまあ普通だがその後に続くなにか良く分からぬ縦に長いダンボールや微妙にオカルト的な物品が飛び出していく

るダンボールまでかなりの数なのだ。

凄く気にはなるのだが触らぬ神に祟りなしのことをわざこのつとり護は深く触れず作業を進めた。

こづして引越し作業を終えた護は爆睡していた高杉をむりやりたたき起にして自分のアパートに瞬間移動させ、気絶するよつて眠りについた。

その後2日間はいつも通りすぎていった。

どこからか侵入してきたロシアの工作員の捕獲やら、なぜ侵入できただと首を傾げたくなるぬいぐるみを抱いた少女の保護などという護たちからすれば比較的平凡な日々が過ぎていった。

そんな2日間が過ぎたり3日めとなつた時だった。

朝からまるで予告のよう一面の曇り空にカミナリが鳴り響くなか護の携帯にメールが来ていた。送り主は美琴。

「なになに・・・・まじか、本氣で8割がたの施設を再起不能にしたのかよ。つまり残りの2割の破壊に協力してほしいってことか」

メールには施設の場所も記されていた。

「ならさつそく行くとするか」

今回はウォールの仲間たちは連れていかない、これはあくまで個人的な用事だからだ。

稻光が走る曇り空の下を護は目的地へと走っていた。

「ふわあ 超暇ですね」

とある研究施設の内部を一人の少女が歩いていた。

外見はへたすると小学校高学年にみえる少女だが彼女も普通の人間ではない。彼女も暗部の人間なのだ。

「第3位の襲撃の可能性を考慮して防衛しろっていう命令でしたけど超だれもこないじゃないですか」

彼女の名は絹旗最愛。能力者であり名は『オフェンスアーマー窒素装甲』。

「まあ、この脳神経応用分析所に襲撃が来ないのは平和つてことで超ありがたいんですけど」

そう絹旗が呟いた直後、すこし遠くでなにかが吹き飛ぶ音が響き、同時に建物の全域で警報がなり出した。

「残念ながら平和は超簡単に崩れましたね とりあえず空気の読めない超不届き者を成敗しにいきますか」

掌から数cmの窒素を凶器に変え、絹旗は敵の侵入箇所、分析所正門へと歩みを進めた。

「ここの単調な動きから見て短期警戒用の無人装甲車か……」
向こうにあるのは駆動鎧パワードスート……たつた一施設になんて過剰な警備態勢だよ……だが僕の攻撃は防げない！」

護は目標である研究施設に正面から強襲をかけていた。要は正門を重力操作によつて盛大に吹き飛ばし堂々と内部に侵入したのだ。

迫つてくる無人装甲車及び駆動鎧達に對して護は超重力砲を放ちまとめて吹き飛ばす。

「せつせつといつりを退けて施設の中心を破壊しなきやならないんだけどな……」

護がため息をついた時、唐突に周りに展開していた装甲車や駆動鎧達が一斉に動きを止めた。いや、停止したのだ。

「？」

「退屈してゐなら超相手しますよ侵入者。いや、第4位の重力掌握グラビティマスター」
いつたい何のつもりかは超分かりませんが、ここで止めますからね

「絹旗…………最愛？　なんで…………そうか…………」
アイテムも計画に関わつてたんだ！　くそ、迂闊だつた！』

「なんでその名を知つてるか超疑問なんですけど。まあ、それは置いといて…………行きますよ第4位』

護がなにか言つ前に絹旗は近くにあつた輸送用の大型トラックを軽々と片手で持ち上げ護に向けて投げつけて來た。

「避けられない……！」重力を操作し、とっさにトラックを真上からかけた重力により地面にめり込ませる護だが次の瞬間には距離を詰めた絹旗の右拳が腹にめり込む。

「！？」

「これでうちのコーダより上とは超片腹痛いですね」

「いや…………まだ全力なんて一言も言つていないよ…………」

護は右手を重力によつて加速させ、弾丸のよつなスピードの一撃を絹旗に向けて繰り出す。

自動防衛機能により、護の拳は装甲に防がれるが勢いは殺せず、絹旗は一気に後方に5メートルほど飛ばされ施設の壁をぶち抜いて吹き飛んだ。

「君の能力は防御に特化しているはず…………この程度じゃ死がないだろ？けど、衝撃までは防げないはずだよね？」

大穴が開いた壁の向こう側から出てきた絹旗に立った外傷はない。

「なるほど、伊達にレベル5を名乗つてゐわけじゃないのは超理解しました…………ですがこの程度じゃわたしは超倒せないですよ？」

「分かつてゐ…………いや、殺すことはできてしまつかもしれないけど僕はしたくない。特に君のような大切な人を殺すことは

「

「な・・・・・！ なにを超クサイ台詞言つてるんですか！？」

「そのままで受け取つてもらえば良いよ。言つたとおり、僕は君を殺したくない。だから、すこし大人しくしてもらうよ」

護の言葉になんらかのアクションを予想し身構える絹旗。だが次に護がとつた行動は絹旗の予測を大きく裏切つた。

「緋炎之護」

護が呟くと同時にその右手に緋色の十文字槍を握られる。

「な！ そんなの超ありなんですか！？ 複数の能力を・・・・・」

「第弐の技、緋炎斬波！」掛け声と共に振るわれる護の槍から緋色の炎が波になって放たれる。絹旗の足元へ。

絹旗のわずか前方の地面を緋炎が地層ごと切り裂き彼女の足場を不安定にさせる。

ふらつく絹旗は次の瞬間、眼を見開いた。目の前に護がいたからだ。

「第参の技、緋球爆散！」

その言葉と共に、至近距離で突如現出した緋色の球体が炸裂し凄まじい衝撃波に絹旗の体は宙高く舞い上がった。

「超ビッグなつて……」

なかば混乱ぎみの絹旗は直後に、わき腹に痛みを感じた、首を下げて見てみると槍の下にある石突が衝かれている。

「言つたろ、殺したくはないって。だから今は眠ってくれ。僕の大
事なレベル4」

鎧素装甲の防備でも防ぎきれなかつた一撃は容赦なく絹旗の意識を奪つた。力を失う絹旗の体を抱え、護は重力操作により地面に降り立つ。

「ふー…………我ながらクサイ台詞吐いちやつたな…………
ビーヴやーハーの槍を使つと運動にも影響がでるっぽいぞ」

ため息をついた護は自分の腕に抱かれる絹旗を見る。じつして見ると絹旗はただのか弱い女の子にしか見えない。

だがわき腹に突き刺さつた石突がそんな思いを吹き飛ばす。

「この傷を治療させるには、とにかく一度アパートにもどつて哀歌に見せないと…………つて結局仲間を巻き込んでるじゃないか…………とつもだつたとはいえ、もっと力の制御をするべきだつたな…………」

嘆く護だったが後悔してももう遅い。

「仕方ない。とにかく一度戻るしかないな。破壊は後回しだ」

絹旗を抱えたまま、護は腰にさしてある携帯で高杉を呼んだ。

そのころ脳神経応用分析所の一室では一人の少女があることを成し遂げようとしていた。

「これから、なにをするのですか？　てミサカ19090号は問い合わせます」

「good question あなたはこれから真の
感情をもつのよ」

少女の指先が目の前の機械に触れられ、巨大な集合体の一つでした
かなかつた少女に向けて変革の波が放たれた。

となる成果と強襲作戦（後書き）

いやあ・・・・難しい！　レールガンストーリー　難しいです！

とにかく知識がなかつたものだから調べるだけで一苦労で、それでもおそらく作品内に矛盾点はたくさんあると想います。

そんな私ですが、これからもよろしくお願いします！

とある鉄橋の第一位

「ん 超！」」はび！」」

「僕ん家だけど？」

「そつ書えば てこつか超訳わからないんですけびーー？」

「君は僕との戦いで重傷を負つて意識を失つたんだ。それで僕がここで治療するために運んできたんだけど」

「因みに治療したのは 私 だよ」

やはり面識のない人間に對しては途切れ途切れになる哀歌である。

「外傷を回復させる能力でも超持つてるんですか？」

「まあ そんなもの かな」」 ? ?

「とにかく君を治療したけど、別に恩を着せようとしてるわけじゃない。拷問をかけようとか尋問しようとしてるわけじゃない。ただ一つだけ教えて欲しいことがあるんだ」

「なんだつてんですか？」

「君達は いや、麦野沈利はいつたいどこを守つてるんだ？」

「「つかのコーダーの今まで知つてるとか、あなたもしかして超二つ
ち側の人間ですか？」

「さあね それじゃ お質問を変えよつか
君が施設にいたのは『御坂美琴が襲撃する可能性が高い施設の護衛』
のためかい？」

顔色を変える縄旗に護はやはつと心の中で頷いた。

「やつぱつやうか 哀歌、ちよつといの番町に連絡し
て」

「」れは？」

「美琴の携帯の番町だよ」

「「」めん、私の携帯の充電切らしてて ちよつと充電して
くれ」

護が止める間もなく哀歌は（なぜか）部屋の外に飛び出していった。

「なんなんだ一体」

困惑する護を見て縄旗は「つそつため息をつき呟いた。

「あの反応見て分からんなんて 第4位は超鈍すぎじゃな
いですか」

「ん？ なにか言った？」

「別に超何も言つてませんよ？」

「なら良いけどさ……じゃあ治療も終わつたことだし戻れば
仲間がまつてゐるはずだよね？」

「なぜ解放するんですか？　あなたたちに利益があるとは超思えないんですけど。　私がまたあなたの前に立ち塞がつて戦いを挑むかもしれませんよ？」

「その時はその時だよ……また同じひで戦つだけだよ。ただしそちらがアイテム総出で来るのなら、ひも総出で戦つ」

「やつぱりあなたも超暗部の人間でしたか？」

「そういう事、僕は全力で第3位に協力する。それがこの計画の核である第1位と戦うことに繋がったとしても」

「あなたの決意は超結構ですけど、その前に私たちに潰されるかも
しないですよ？」

「大丈夫
？」

護は右手でグーサインをした。

「僕の仲間たちはそんなヤワじやないよ」

絹旗は護の眼を見つめた。濁りのない澄んだ眼をしている。この最下層の闇にいながらどうしてそんな眼をしていられるのだろう。

「まあ、その余裕がどこから出て来るのか超理解できませんが、そ
うこうことにしてしましちゃう」

綱旗は部屋の扉に手をかけつつ口づいた。

「なんで、闇の中にいて、そんな眼をしてられるんですか . . .
超不思議でなりません 」

小声だったので護は気づかず、綱旗はそのまま部屋を出でていった。

「『ごめん美琴。今すぐ会えない?』

「悪いけど、今からちょっと用事なんでも無理よ 」

「用事つて研究施設を襲撃することだろ? ならすぐには攻めない
ほうが良い。第5位のレベル5が率いる奴らが守っているはずだ
」

「はー? なんでアンタがそんな事知ってるのよ? 」

「そのメンバーの一人とお前が指定した研究施設で交戦した。敵
はお前が襲撃する可能性の高い施設を守備している可能性が高い。
無闇に突っ込めば怪我するぞ! 」

「そんな事 ごめん。少し遅かったみたい。アンタの言
う通りそれらしき奴が見えてきたから 」

護が問い合わせる前に無数の爆発音が巻き起こり通話が唐突に切られる。

「くっそ！」

舌打ちしつつ護は部屋にある金庫から、外部銃器であるFNファイブセブン拳銃を取り出し弾倉を装填する。

5・7ミリの特殊弾を使うこの拳銃は護が比較的良く使う銃器であった。ただ大概使用するのは訓練用のプラスチック製衝撃弾だった。

「拳銃程度での第4位 いや、今は5位か に敵うとは思えないけど他のメンバーにはある程度効くはずだ」

拳銃を腰のホルスターに差し、ドアを開けた護の眼に映ったのは 部屋の前で座り込んでいる哀歌だった。

「 」

「 」

なんだか妙な空気が2人の間に流れ、一体を沈黙が包んだ。

「なあ、なんか悪い事したのなら教えてくれよ

「別になんでもない 護は気にしなくても良い

なんだか不機嫌な哀歌を連れて、護は美琴の携帯を逆探知して割り出した研究施設に急いでいた。恐らくすでに美琴は麦野たち『アイテム』と交戦している。作品の流れ上、ここで美琴が死ぬというのを考えられないが万が一に備えて駆けつける必要がある。

護はすでにウォールのメンバー全員に連絡をとつており拠点の一つである高級マンションの最上階の一室を集合場所にしていた。

目標の高級マンションに行くためにはとある橋を渡る必要がある。

「」の橋だよな 美琴と上条さんが戦つたりした場所は

なんだか感慨深い思いを抱きながら橋を渡ろうとした護は直後微妙に違和感を覚えた。

周りに人がいない。自分たち以外の人間の姿が。

「まさか、人払い !」

「違う、護。魔術が使われた感触はない。これは人為的に作られた無人空間 」

哀歌の言葉に考えを巡らす護は次の瞬間、最悪な風景を見た。

美琴が一方通行と戦つていた。

「美琴！」

橋の上で叫ぶ護に向ける美琴。その額には暗視ゴーグルが

・ そこまで見て護は気づいた。

「お前、妹達か！」
シスターズ

護の叫びにミサカはなんの反応も示さない。代わりに反応したのは

アクセラレータ
一方通行だった。

「なんだア、こんな場所に用でもあるってかア？」

護の思考は一瞬停止しそうになつた。なぜこゝにあの第1位がいるのか？

「私たちは通りかかつただけ…………あなたになにかしようとは…………思つていなゐわ…………」

哀歌の言葉に対し、アクセラレータは冷笑を浮かべて答えた。

「たとえそうだとしてもよオ。 実験を見られた以上そのままにする訳にはいかねえよなア。 大体それ以前に怪しすぎるンだよ…………お前らア、どうやつて封鎖線を通り抜けてきたンだよ？」

そう言えども、と護はこゝにくるまでに見かけた警備員らしき集団を思い出した。特殊部隊風の服装をしていたが特に気にしないで通り過ぎた。だが良く考えれば警備員アンチスキルの一般部隊は共通の装備をしている。特殊部隊風の装備をしている一般部隊など存在しない。となるとあの特殊部隊風の集団は暗部組織ではなかつただろうか？ ではなぜ自分達は当たり前のようにつぶやくことができたのだろう？

「答えねえつもりかア？ まあ、そういうことならとりあえず…………スクラップ決定だ！ クソ野郎！」

いきなり叫びを上げた アクセラレータに対して護は行動を取れなかつた。

それでも護は死なずに済んだ。間一髪の所で哀歌が護を弾き飛ばし

アクセラレータの攻撃から避けたのだ。

「現出せよ！ 破壊大剣！」
ディストラクション・ブレード

叫びと共に全方向に光を放ち数刻後には人外の姿になる哀歌。その姿にアクセラレータも興味深げな視線を送る。

「そいつは、肉体変化^{メタモルフォーゼ}かア？ 見るのは初めてだが、少しは楽しませてくれんだろオナ！」

嬉しそうな叫びをあげながらベクトル操作によつて空中に飛び上がりつつ拳を放つアクセラレータ。

その拳の勢いに押されて地面に激突する哀歌。

「アクセラレータ！」

両手から重力波を……つまりは両手版の『超重力砲^{グラビティマスター}』を放つ護だが即座に反射されてしまいこちらが自分の放った技を止めるハメになる。

「なんだア？ この能力……噂の第4位のじゃねえか！
はっ、たまんねえなアおい！」

歓喜の声を上げるアクセラレータに護は背筋が凍るような錯覚を覚えた。

作品知識をもつて分かつていたことではあつたがアクセラレータの存在や力は間違いなくチート級だ。

「やはり僕の能力では通用しないか」「

「そんな分かり切つたこと聞いてんじゃねエよ。分かりきつたことだろオガ」「

嘲笑うアクセラレータに向けて護は明確にその目線を向ける。

「確かに第1位と第4位…………位でも能力でも僕が不利だ。でも、僕にはあんたにはないものがある！」「

その言葉にアクセラレータが首をかしげる前に、護はその名を呟く。自らに宿る超能力以外のその力を護は出す。

「緋炎之護！」護の叫びと共に、その手に槍が握られる。緋色に輝く十文字槍が。

「（デュアルスキル
多重能力者だとオ？）」「

心中で首を傾げるアクセラレータに向けて護はその槍先を向けた。

「第弐の技、緋炎斬波！」「

勢いよく横薙ぎに振るわれる緋炎之護から、緋色の波が勢いよく放たれる。

「！」さすがに驚き、身を固くするアクセラレータだが、一応反射は効いているらしく、アクセラレータの周囲を覆っているだろう能力による保護膜に接触した緋炎は、斜め後方に逸れ、巨大な光球となつたかと思うと強烈な光を発つし、刹那に消滅した。

「（作品知識通り、アクセラレータの反射は一応、魔術にも効くってことか）」

舌打ちしつつ、攻撃を警戒して後ろに下がる護。

一方のアクセラレータは自分の反射が正確に適応しなかつたことが腑に落ちないらしく、苛立った様子で護を睨みつける。

「お前…………なんナンだ、その能力」

「わざわざ書い必要がありますかね？ 第1位さん？」

「そりゃあそだよなア…………ならじょいと変更だ……
…………言いたくなるまでシメテやる」

その言葉に身構える護。次の瞬間、アクセラレータの周囲がかき乱され、すさまじい台風級の暴風が渦となつて護に襲い掛かる。

「つっ！ 第参の技、緋球爆散！」

言葉と同時に槍の穂先に現出した巨大な光球は瞬時に爆発し、発生した凄まじい衝撃波が迫る暴風とぶつかつてその攻撃を相殺する。

だが、その隙をついて近づいてきていたアクセラレータの運動力を操作した蹴りを護はもろに受けてしまった。

そのまま凄まじい勢いで川に向けて吹き飛ばされる護。そんなち水深が深いわけでもない川に頭から落ちて行つたら護には命はない。

だが、そうはならなかつた。

なぜなら川に落ちる直前に、かけつけてきた高杉が瞬間移動を使って護を抱きかかえて難を逃れたからだ。

「ああ？ なんなんですか、奇跡の救出劇ってかア？ だが、あいにくそりやあ無理だな」

嘲笑いながら、なんらかの攻撃を加えようとしたアクセラレータだったが、それは叶わなかつた。

なぜなら、アクセラレータの周囲、360度全方向を砂鉄の壁が囲んだからである。

「別にアンタが美琴の無知のせいで生まれた、その姉妹たちを殺すのはかつてなんだけどさ。私を私にしてくれた護に手を出すのは許せないんだよね」

砂鉄を展開させたのは美希。学園都市レベル5第3位と同じ力をもつ少女。

「アンタが第4位じゃ満足しないってのなら

美希はその手にパチンコ球を握りしめる。

「第3位と同一の私が相手をしてやるわ！」

となる鉄橋の第一位（後書き）

様々な都合で長い期間、投稿が遅れてすみません！

今回はアクセラレータ初登場です、今回はチームメンバーの美希についてのストーリーでもあるので、期待ください（なにが？）

とある一位と最強真理

「なんだア、お前は？」

「私の名は美希。あなたが殺しまくってる妹達の姉に当たるかしらね」

「姉？．．．．．なるほど、お前もこのクソ気持ち悪いクローネどもの1人か。それにしちゃあ、やたらと感情表現が豊かだな」

「私は彼女たちとは別ラインで生まれたからね。当然ながら感情表現能力は他の妹達シスターズと比べて豊かよ」

美希は、その右手に握っていた複数のパチンコ球を空中に放り投げる。

「無駄話は命取りよ、第1位！」

空中で超電速射によつて放たれた複数のパチンコ球は音速を超える速度で砂鉄の壁をぶち抜いてアクセラレータに向けて突き進む．．．．．が、常時全方向にベクトル反射を適応させているアクセラレータに通じるはずもなく、その全てが反射され、美希の後方にあら地面に大穴を開ける。

「そんな程度じゃ、相手になんねえぞ？」

「まだ私は全ての手を使っちゃいないわよ？」

ニヤリと笑う美希は能力で砂鉄を操作する。そう、アクセラレータ

を囲む砂鉄の壁。

アクセラレータの目の前で、彼を囲む砂鉄の壁が一斉に崩れ、彼からすこし離れた複数の場所。合計6箇所に纏まって展開する。

その動きに訝しげな視線を向けるアクセラレータに向けて、美希は歪んだ笑みを向ける。

「喰らいなさい、第1位」

6箇所に展開した砂鉄の球から一斉に高速振動する砂鉄の塊、すなわち砂鉄弾がアクセラレータに向けて撃ち込まれる。

当然の如く、アクセラレータのベクトル反射に美希のこの攻撃は通用しない。

放たれた砂鉄弾は即座に反射され、渦を巻いて纏まっている6箇所の砂鉄球に直撃し、その中に『戻っていく』。

つまり、放たれ反射されても砂鉄球はダメージを受けず連射し続けられるのだ。

「てめえ……なにを企んでやがる?」

「アンタに答える義務がある?」

あいかわらず歪んだ笑みを浮かべ続ける美希。だが状況は良くはない。実際美希の攻撃は未だアクセラレータには一発も当たっていない。

にも関わらず美希の顔から笑みは消えない。まだ余裕を持っている。

「ねえ、第1位。アンタ、灯台元暗しつていい」とわざ知ってる
?」

「それがなんだってんだ?」

「つまり、人は意外なほど自分の足元に転がる危険や罠に気づかなければこのことを言いたいのよ。ちょうど今のあなたがそうだから」

美希の言葉にアクセラレータがなにか言葉を返そうとするが、それはなされなかつた。

なぜならアクセラレータの立つ位置の周囲が突然切り取られアクセラレータの体はぽつかり開いた穴から地の底に落ちて行つたからだ。

美希が狙つていたのはこれだつた。第1位のレベル5のアクセラレータに正面から攻撃しても力負けするのは火を見るより明らかである。

そこで美希はあえて派手な攻撃を連續して加え、そこにアクセラレータの意識を向けさせつつ密かに砂鉄を操つてアクセラレータの保護膜の恩恵を受けない足元の地面を狙つたのだ。

念のためにアクセラレータが落ちていつた穴の内部に砂鉄を流し込み蓋をする美希。

「早くここを逃げましょつ護。あの1位相手じや、私がした抑えも時間稼ぎにしかならないわ」

「確かに第1位相手に、今の状態では不利だぜリーダー。」ヒは引き上げてウォールの全員で対策を立て直した方が良いと思つぜ？」

「

「まあ、確かに。話してる間にもまた来そうだし……よし、総員A-10に移動し集結だ！」

そう言って、動こうとした護の腕を哀歌が掴んだ。既にその姿は普通の少女に戻っている。

「護、私が時間稼ぎになる。あなたの技での効果を見る限り、多少にせよあの反射に異常を起しあせることは魔術攻撃しかない。完全変化……私の第3変化を使ってアクセラレータを足止めしてみるわ」

「無茶だ！ たとえ魔術攻撃を使っても、あの第1位には通じなかつたんだぞ！」

「護の攻撃はね。だけど人の魔術と人外の魔術は違つてしまふから効くかもしない」

「だけど……！」

「あの1位は学園都市という科学サイドのトップを象徴する怪物よ。怪物と当たるのは怪物が良い。それにリーダーにはウォールの皆と共にいる義務がある」

「それなら、なおさら……！」

「現実を見て！ 今の状況じゃあどうやっても生贊がいるのよ。護

護

は優しすぎる……暗部に生きる組織のリーダーとして、もう少し冷徹に、部下の1人くらい非情に見捨てるような思考を持ちなさいよ！」

哀歌の言葉に、護は唇を噛むが、噛んでなにか状況が変わるわけではない。

「…………分かつた。逃げることにするよ」

その言葉に安堵の表情を浮かべる哀歌に護は続けて告げる。

「ただし逃げるのは哀歌だ」

哀歌が問い合わせる前に護は手に握りしめている緋炎之護の石突で哀歌のみぞうちをつく。

「！」

驚愕に目を見開きながら、意識を失っていく哀歌に護は告げる。

「ごめん哀歌。僕は暗部にいても闇にも悪にもなりきれない半人前だよ…………だから僕には哀歌を生贊にするほど非情にはなりきれない」

護は空気を読んで、行かずについた高杉に手で『連れていけ』とこつサインを送り、高杉は一瞬迷う素振りを見せたが即座にグーサインを送り護の前に倒れる哀歌を抱えて瞬間移動する。

高杉が瞬間移動した直後、まるで囁いたかのように砂鉄の蓋を突き破りアクセラレータが地の底から復活する。

「おやア？　お仲間には見捨てられたかア？　」

「そういう風にしか考えられないのか。　哀れだな第1位」

護はアクセラレータに本当に哀れみの目線を向ける。

「過去にあつた何かを恐れて、人を傷つけるのを恐れて、最強になれば周りに利用されて誰かが傷つくのを無くせる。そう思つてゐるのなら大間違いだ。この都市まちは、アレイスターはそんな考えが通用する相手じゃない！　ますます人を傷つけることになるだけだ！」

「知つたような口をたたくンじゃねえ！」

激高し、近くに積み上げられていた鉄骨を次々と飛ばすアクセラレータ。

「第弐の技、緋炎乱舞！」

護の叫びに答えて、槍の刃が緋炎に包まれ光を放つ。

迫る鉄骨をまるで踊るように槍を振るつて切り捨てる護。

切り捨てられた鉄骨の切断面は真つ赤に加熱している。高熱を発する槍の刃に焼き切られたのだ。

アクセラレータの放つ鉄骨を全て切り裂いた護は続いて新たな言葉を紡ぐ。

緋炎之護が護の手の中で凄まじい閃光を発しながら緋炎を纏わせ巨

大な姿を作り上げる。

「なんだと？」

アクセラレータが見上げる先にあるのは、まさしく炎龍。緋色の炎に形作られたこの世のものならざる怪物だった。

「第五の技、緋龍炎撃！」

創造者の言葉に従い、巨大な龍が疾風の如く、凄まじい勢いでアクセラレータに襲い掛かる。

辺り一体に響き渡る轟音と龍の咆哮が鳴り響き、土煙と閃光が広がる。

「ぐ・ぐ・ぐ・かはつ！」さすがにアクセラレータも今回は反射をもつてしても防ぎきれなかつたらしく口から地の塊を吐き出し、荒い息を繰り返している。

だが、それでもまだ立ち続けられていること。それ以前に生きていることが彼の能力の高さを簡潔に示している。

周りの地面が完全に焼き払われている中でアクセラレータは立っている。

「まったくまだやる気なのかい。今で最強にも防げない分野があることは分かつたろ？」

「うむせえ！ 無駄口たいてんじやねえよー！」

怒りのこもつた叫びを放つアクセラレータだが、その手が微妙に震えているのを護は見逃さなかつた。その震えが示すのは怯えかはたまた武者震いか。

「強がつても、僕の攻撃を今の君では防げない。なんならもう一度喰らわせようか？」

護の挑発にアクセラレータは地面を踏み鳴らすことで答えた。踏み鳴らした箇所から地面がささくれ立ち、いつきに護の足元まで迫る。

「第参の技、緋炎爆散！」

真上に跳躍した護が呟くと共に現出した緋球が炸裂し衝撃波で護の体を宙高く舞いあげる。

「第弐の技、緋炎・・・・！」

護の言葉はそれ以上、続かなかつた。突然全身にくまなく均等に走るよつに奇妙な激痛が襲つたからだ。

「ぐわああー？」

痛みに絶叫し、空中でバランスを崩した護の体はそのまま重力に引つ張られ地面に容赦なく叩きつけられる。

それでも死なずにすんだのは緋炎之護の加護があつたからだとえよう。とは言つても死なずにすんだというだけで護は重傷だつた。

「デかい力ほど暴走した時のリスクもデかい・・・・今のオマエはまさしくその典型例つてわけだ」

地面に倒れ伏す護をみて笑みを浮かべつつアクセラレータは護までの距離を一瞬で詰め、衝突の衝撃でさけた皮膚の傷口に指を差し込んだ。

怪訝な目線を向ける護にアクセラレータは愉快そうに告げる。

「さあて、問題です。オマエの体の血を全部逆流させたらどうなつてしまふでしょオ？」

護は半分赤く染まる視界に捉えているアクセラレータの言葉に全身の毛が逆立つような錯覚を覚えた。この言葉はすこし内容が違うがシスターZの一人を殺すさいにアクセラレータが放った言葉である。つまりアクセラレータは明確に護を殺すつもりなのだ。

「（）いっは、本気でマズイ…………だけど、体…………が…………」

完全に意識朦朧としている護を見て歪んだ笑みを浮かべたアクセラレータはベクトル操作によつて目の前の不可思議人間の生命を絶つはずだった。

その時、アクセラレータは奇妙な風を感じた。自らの足元から風がふいて来ているのだ。だがはたして風が『下から』吹くものだらうか？

アクセラレータが疑問に感じた次の瞬間真下から吹いた強烈な風がアクセラレータの体を上空に舞いあげた。

いかなるものでも通さないはずのアクセラレータのベクトル反射の膜を素通りして。

「（こつたい、どうなつてやがる？）」

自らの能力は消えていない、なのになぜ風は膜を素通したのか。背中からベクトル操作で作り出した小さな竜巻のようなものを使って上空に滯空しながら周りを探すアクセラレータはその視界に奇妙な少女を捉えた。

なんというか印象を一言で表すとすれば『縁』と即答されそうな少女だ。上から下まで見事に縁だ着ている服装だけでなく髪の毛も、よく見れば瞳までグリーンだ。

「（また、第4位のお仲間か？）」

思案を巡らすアクセラレータだったが、それは続かない。なぜならまるで目の前の少女の腕に合わせるかのようにアクセラレータに向けて緑色をした風が竜巻のようになつて向かってくるからだ。

向かってくる竜巻に対して働くはずの反射はここにもなぜか機能しない。もろに竜巻に巻き込まれたアクセラレータはそのまま、さらには高空中に舞いあげられる。

もはや呼吸をすることもキツイはずの高度でも少女は平然としている。

言葉を発することもできないアクセラレータに対して少女はなにかを告げた。竜巻内部の轟音の中でも不思議なことこまつまつり聞こえた。

「最強の意味をもつと知りなさい第1位。いまのあなたでは、永久に最強にはなれない」

なにかを問い合わせる前に竜巻の中に突っ込んで来た少女の拳がアクセラーターの首筋をうち、彼の意識を奪い。

2人を包んだままの緑の風はそのまま地面に向かい、静かに着地する。

意識を失ったアクセラーターを地面に寝かせ、少女は瀕死で横たわる護の方に向かう。

「古門護。学園都市第3位の『グラビティマスター重力掌握』。こちらではそう呼ばれてるみたいね」

聞こえるはずもないのに少女は護の体に右手を触れつつ囁き続ける。

「やつとあなたに会えた。やつとあなたを見つけ出せた。だから私はもう迷わない。たとえ貴方が全てを忘れているとしても私はあなたの為に生きて死ぬ。だから、こんな所で死なせはしない」

少女の手が緑色に淡く光り、触れられた箇所の傷が癒されていく。

「あなたは私を信じた。私を変えてくれた。だから私は、ミストラルはあなたを救う。それがたとえ、かつてのあなたじゃないとして も」

太陽が沈み暗闇に包まれた橋下に淡い緑の灯火が静かに静かに灯り続けた。

リーダー不在の暗部組織

学園都市は世界でも例を見ないほど厳重に警備されている。

交通の遮断に加えて周囲が高さ5メートル・厚さ3メートルの壁で囲まれている上に、

街全体を三機の監視衛星が常に監視している。

もつとも現時点ではそのうちの一機がインデックスの暴走によって破壊されていて、ために2機しかないわけだが、それでも街の警備は世界一厳しいとされている。

だがこの世の中に完全なものなどなかなか存在しない。それを証明するかのように今日も学園都市は正体不明の余所者の侵入を許していた。

「まつたく！ 護が行方不明なこんな時に！」

愚痴を言いながら走るのはクリス・エバーフレイヤ。学園都市暗部組織『ウォール』の構成員である。

「文句言つても始まらないわよクリス姉さん。今は美希さんや哀歌さん達を信じて護さんの無事を祈るしかないわ

「ああ、リーダーがそんな簡単に死ぬわけねえよ。きっと美希や哀歌が見つけるわ。だから俺たちはその間、自分達の役目を遂行するんだ。リーダーもきっとそう言つと思はず」

クリスの言葉にこたえるのはクリスの妹で同じ『ウォール』の構成

員、セルティ・エバーフレイヤと、同じく暗部構成員の高杉宗兵である。

そんな2人の言葉に不承不承ながら一応頷くクリス。

学園都市にいくつか存在する暗部組織の1つである『ウォール』の役目は外部組織要員の掃討、討伐及び学園都市内部への侵入者への対処である。

そんな役目を負って活動する『ウォール』は現時点で大きな問題を抱えていた。

つい先日、学園都市第1位のレベル5『一方通行』^{アクセラレータ}と遭遇しその後戦闘に入つた『ウォール』リーダーであり学園都市レベル5の第4位『重力掌握』^{グラビティマスター}こと古門 護が忽然と姿を消したのだ。

何が起きたのかを知り得ない『ウォール』メンバー達は様々な手を尽くして学園都市内を探し回つているが掴めていない。そんなリーダー不在の状況で『ウォール』は新たな侵入者への対処を求められたのだ。

正直な話、リーダー代理を務める高杉はその求めを却下しようとしあほどだった。だがその求めてきた相手が相手だったのだ。

「それでも統括理事長から直々の求めっていうのはホントなの
高杉？」^{アレイスター}

「おう、ぜひともこの街にいる間に保護してほしいそだ

「保護つて……掃討や捕獲じゃないの？」

「そこ」が不思議なんだがな……おおかた魔術師みたいな一般に知られたくない人間なんじやねえか？」

会話に当たり前に『魔術師』という単語が混じる高杉だがそれも当然で彼ら『ウォール』はすでに幾人もの魔術サイドの人間と交戦している。

よつて『ウォール』は現在学園都市内部に存在する暗部組織の中でも（高杉の推測ではあるが）唯一魔術サイドの存在を認知している組織となつている。

「魔術師か……思つんんですけど、この街つて魔術サイドの人間がけつこうほいほい侵入してないですか？ 護さんが言つていたアウレオルスっていう鍊金術師にしてもそうですが……魔術的な侵入に対しては弱いんですかね？」

セルティの言葉に高杉は首をかしげた。

「よくは分かんねえけど、弱いといつより見逃してる感じがするんだよな。実際あの銀髪スター……インデックスだつたか？ あの子それ自体は戦闘力がゼロに等しいのに堂々と都市内部に侵入してるわけだしな」

「となると統括理事長が何考えてるのかがすごく気になるけど……・そのあたりを護君ならしつてるのかな……」

「確かにリーダーなら何か知つてるかもしないが……行方不明以上それを考へてもしかたねえ。今は侵入者を早く確保しねえ……」

……

そう高杉が言いかけた瞬間、全員が耳にはめている小型の骨伝導式インカムに声が飛び込んできた。

「ウォールメンバー応答願います！ ウォールメンバー応答を願います！」

どうやら暗部組織の下部構成員からの連絡らしい。

「こちらウォールリーダー代理高杉。なにがあつた！」

「侵入者と遭遇しました！ 場所は第10学区の元吉沢大学付属研究所の廃墟付近。現在内部に入つた部隊が侵入者と交戦中です！ 早く来てく……ん？ な……おい……うそだろ？ 来るな、来るなあ！」

拳銃の発砲音と何かの爆発と思しき音と主に無線がぱつたりと切れた。

「これは本格的にまずいわね……。」

「第10学区となるとここから徒歩じゃ時間がかかりすぎる。2人とも俺の手を握れ。無限移動で瞬間移動するぞ！」

両手をがつちりと少女2人が握ったことを確認し高杉は瞬間移動する。

吉沢大学、それは第12学区に存在する私立の宗教大学であり世界各国に分校を持つ学園都市外では有名な大学である。

そしてそんな有名大学が管轄する唯一の研究所が第10学区にかつて存在した『吉沢大学付属研究所』だった。

隣接していないにも関わらず付属のは不思議であるがそれ以上に不思議がっていたのはこの研究所が行っている研究内容であった。表向きには『世界各国の神話で語られる建造物などを科学的に検証する』ための研究所とされてはいたもののその内部には関係者以外立ち入ることはできず、研究成果も一度も公表されたことがないという異質な存在であった。

そんな研究所が廃墟となつたのは5年前のことだつた。大学上層部からの研究所からの連絡が途絶えたとの通報を得て駆けつけたアンチスキルの隊員たちが見たものは半壊した研究施設と炭化した無数の死体の山だつた。

一時ニュースなどでも広く取り上がられたこの事件だつたが、研究所に何があつたのかについては全く解明されず、大学側も特に事件についてのコメントをしないために事件は迷宮入りしてしまつた。

その後研究所跡の廃墟はなぜか撤去されぬまま今に至るのであるが、ここにきて侵入者が入り込んだのはこの廃墟だつたのだ。

「ちつ！ 遅かつたか！」

「下部組織構成員たちは残らずやられてるわ……この焦げ方から見て発火系能力者……いや、余所者である以上、未確認の原石かあの魔術師の赤髪神父じやない？」

「 そりかもしれんが…… だしたら何のためだ？ セルティに
関する一件ならもうラニアさんが話をつけてるはずだし、インディ^{クス}に関しても今は特に問題はないはずだぜ？」

「 とすると原石ということになりますか？ だとしてこんな廃墟に
名の用事なんでしょう？」

首をかしげる3人がここで立ちつくしていても何も解決しない。

「 とにかく俺達も中に入るしかない。レベル4が2人に吸血鬼1人
なら敵なしだろうが警戒して進もう」

「 そうね」

「 分かつてます」

こうして廃墟に3人は入っていく。これから起きる驚嘆の出来事を
3人は知る由もなかつた。

リーダー不在の暗部組織（後書き）

遅れに遅れてやっと久々の投稿です。

なかなかアイデアわからず結局1ヶ月以上も投稿できなかつたことお詫び申し上げます。

今回はリーダー不在の中で新たな敵？に立ち向かう話を描きました。

護はいつたいどこへ？という疑問も多々あると思いますが、それは後ほど・・・。今回の新章としては三沢塾編としまして新キャラも登場させるつもりでいます。

どんなキャラかは次回を「期待ください」。

廃墟の少女と表裏人格

研究所は外から見るとまさしく廃墟だ。だが内部に入ると意外にいくつかの部屋はその形を残している。

焼け焦げた廊下の両側の壁は黒ずんでおり、かつての火災の様子を物語つていた。

「この研究所って火事で焼けたんですか？」

「ああ、火元は不明だそうだがここで死んだほとんどの者の死因は火災による焼死なんだとさ」

「なんていうか怨念やら幽霊やらがでてきそうね……」

なにやら微妙に怯えた顔をしつつ進むクリスを見てセルティはニヤツと笑つた。

「クリス姉さん、もしかして怖いんですか？」

「べ、別に怖くなんてないわよー そういうあなたはどうなのよ？」

「

「私は怖くないわ。だいたい本物をみたことがあるから別に怖がることなんてないし」

本物？と目をまるくするクリスにふふんと得意げに鼻を鳴らすセルティ。その時だった。

「静かに……いたぞ侵入者だ。あそこに影が見えるだろ?」

高杉の声に残りの2人は足音を忍ばせ進みつつ前方の部屋のドアから伸びる影に目を凝らす。

「あの影から推測するにハゲで身長160センチぐらいの男みたい」

「

「もしそうだとしてそんな奴がなんでこの廃墟に……」

そう高杉が言いかけた時、列の最後尾にいたクリスの肩が唐突に叩かれた。

「理由を知りたいですか?」

突如背後から聞こえてきた声に反射的に後ろを振り返る3人の目に映つたのは黒のショートヘアの美少女だった。

年齢はおそらく17歳前後。

細めの体を赤色のプロテクターで部分的に装甲している。

特長的なのはその両腕だろうか、パツと見口ボットの腕のようでありその掌にはなにかを発射するためなのか丸い穴がある。

「だれなの? ていうかあのドアから伸びてる影は?」

「あの影は人体模型です。私は火野咲耶といたします。あなた達は学園都市暗部組織『ウォール』の人ですよね?」

「なんでそれを知っている?」

「あなた達の名は裏側に生きる者たちには広く知られています。学園都市に侵入する者、敵対するものをすべて掃討する統括理事長のアレイスターとして」

咲耶の言葉に3人の表情が曇る。確かに外から見ればそうなのかもしない。だが『ウォール』の、ひいては護の目指すものは決してアレイスターのしもべとなることではない。

「私がここに来たのは私の過去にけりをつけるためです……。それを邪魔すると言うのなら例え『ウォール』が相手でも叩きつぶします」

「それは俺達が全員高レベルの能力書だと理解した上の言葉か？」

高杉の言葉に咲耶は小さく頷く。

「もちろんです。たとえこの街の能力者全てを相手にしてでも私はやらなきやならないことがありますから」

「だったら俺達にはお前を捕縛する義務がある。お前がなにを為したいにしてもこの街に牙をむいた外部の人間を掃討するのが俺達の役目だからな」

「そう……ですか……じゃあ仕方がありませんね。あなた達を倒して目的を果たします」

その言葉に高杉が身構えた瞬間、咲耶の前身を円形の炎が包み込んだ。

廊下全体を走り抜ける熱波に思わず腕で顔をかばう3人。

彼女を包む円形の炎が崩れるように消えた、そこに咲耶は変わらずいた。

いや全く変わつてないわけではない。むしろその見た目はだいぶ変わっている。

髪はロングヘアーとなり深紅の色に染まっている。髪の奥に見える瞳も深紅。

「どいてよ『ウォール』メンバー。」

さきほどまでと口調まで変わった咲耶は両の掌を3人に向ける。

「じゃなきや燃焼させちゃうぞ？」

その言葉に3人が身構えた直後、咲耶の両手の掌に空いた穴から強烈な炎が放射された。

「！？」「冗談じゃねえぞ！」

焦りがにじむ声で叫ぶ高杉。本来なら無限移動でさつやとこんなところ早くおさらばしたいところなのだが他の2人に即座に触れられない今の状況では2人を置いてきぼりにしてしまつことになる。

「伏せて高杉さん！クリス姉さん！」

「マナー・マクリルの名において、その偉大さをもつて我が敵を打ち碎き給わんことを！」

セルティの叫びと共に突如廊下の天井を突き破りながら現れた巨大な水の帆船が、迫つてくる火炎放射を防ぎながら咲耶に向けて突進する。

「これで時間は稼げるはず……早く逃げ……」

そう言いかけた時、背後からあつけないほどあっさりした咲耶の声が聞こえてきた。

「ここの程度で防げると思ったの？ 笑止……やつぱり燃焼させちゃうから！」

馬鹿など振り返ったセルティの目に入ったのはいつの間に持ったのか両手で全長3メートルはあろうかという大剣を振りかざす咲耶の姿だった。

炎を纏つた大剣の一撃は迫つていた帆船を一撃で切り裂き、さらにその先にいるセルティに体剣の纏う業火が迫る。

「セルティ！」

妹の危機を見て思わず叫びながら、クリスは念動力を使つた不可視の壁をセルティの前に展開する。

もろに不可視の壁に激突した業火はそこで押しどめられるように見えた。

「笑止……私を超能力で止められると思ってんのかな？」

咲耶の言葉にギョッとするクリスは直後に見た。

不可視の壁に防がれる炎の中を通り抜け、巨大な剣がじかに向かっている光景を。

「くそ！」

不可視の壁を遠慮なく剣が貫き、クリスを串刺しにする直前にぎりぎり彼女に触れた高杉がクリスを研究所の外に転移させる。

「くそ……クリスは仮にもこの街最強の念動力者だぞ……あの剣は……いやこいつはいつたい何なんだ？」

「あなた達に教える義理なんてないわよ？ただ一つ言わせて貰うとするとお……科学によつて生み出された人が扱えるレベルの『異能の力』で止められるわけないじゃん」

高杉はセルティに目をやる。

セルティは目を出口の方に向ける。逃げた方がよいといつサインだ。

正直なところ高杉もそんな気持ちだつた。こういうイレギュラーな存在を相手にするには『ウォール』総出でかかるのが今までの常識だ。

だが現状、リーダーの護は行方不明。もっとも対魔術戦に長けていいる哀歌は美希と共にリーダーの行方を捜索中。

今いるメンバーの中で対魔術戦を行えるのはセルティだけだが、咲耶はセルティの放った魔術をいとも簡単に打ち破つて見せた。

セルティには先ほど放った魔術以外にもいくつか魔術は扱えるかもしれないが、彼女の表情を見る限り先ほどの水の帆船の魔術攻撃はかなり強力な部類に入る攻撃だったのだろう。それがあっけなく破られてセルティは動搖しているらしい。

「（現状じゃ有効な手段はねえ……正直引くしか手はねえか）」「そう思つた高杉が瞬間移動するためにセルティに近づこうとした時だつた。

終始、にやにやと笑みを浮かべていた咲耶が急に表情を変えた。

「わざわざ逃がしてもらつたのに戻つてくるとはね……」

その言葉にあることを高杉が予感した直後、その予感通り鉄骨が一気に数10本天井をぶち抜いて咲耶目がけて落下してきた。

「ちい！」

舌打ちをしながら高速で鉄骨を避ける咲耶。

「確かにあなたの力は強力なようだけど……アイルランドの時の奴らのように人外ではなく、体は普通の人間のようね。避けたところから考えるに、今の直撃を受けたら死ぬんでしょう？」

鉄骨により開いた天井の穴から高杉が逃がしたはずのクリスが中に着地した。

「私をなめてもらつたらこまるわ。私はこれでも学園都市最強の念

動力者なのよ？ 確かに不可視の壁はあなたの剣に貫かれたけど、私の技はあれだけじゃないんだからね」

クリスの言葉に咲耶は苦笑を浮かべた。

「笑止……たとえそうだったとしてえ……それはあなたも同じじゃないの？」

「確かに私も体はただの人間よ。でもあなたに全くダメージを与えない無能力者ではないわ」

クリスは長点上機学園の制服の両ポケットから一つずつ拳ほどの大きさのまるい球を取り出す。

それの正体は小型の爆弾。

「念動力の威力、味あわせてあげる！」

クリスが掛け声と共に空中に放り投げた2つの爆弾は一度はばらばらに重力に従い落下したが、途中で明らかに重力に逆らって落下を止め空中に滯空する。

「いっけえー！」

クリスの念動力に操られ、爆弾は加速し、複雑な軌跡を描きながら咲耶に向けて突き進む。

「笑止！ そんな程度で最強を名乗ってるの？」

クリスをあざ笑いながらその右手を迫る爆弾に向ける咲耶。剣を使

「つまでもなく片^ヒがつくと踏んでいるのだ。

確かに咲耶の炎の放射で爆弾は空中で撃墜されてしまつ可能性は高い。

「『ヒ』で終わりだ、能力者！」

咲耶があのれの能力を使おうとしたその時、異変が起きた。

空中で迫ってきていた爆弾が『自爆』したのだ。

いや、それは意図的な爆発だった。なぜならその爆発はクリスが手に持つている遠隔制御装置により為されたものだからだ。

その爆発と同時に、爆弾内部にしこまれていた無数の鉄の矢、通称フレシェット弾が爆発の衝撃に押され飛び出す。

その押しだされ勢いに乗り制御できなはずのフレシェット弾は、そのすべてが咲耶の両腕を覆う装甲腕に突き刺さっていた。

「なん……だと？」

「言つたでしよう？ 私は念動力系最強の能力者だつて。爆弾から飛び出した直後のフレシェット弾を操作することなんて造作もないわよ。その矢は強力な麻酔薬を塗りつけてあるわ。あなたを殺しはしないけど、その両腕の能力制御用の装甲腕を破壊したついでに眠つてもらうわよ？」

そう言つた直後、クリスは違和感を覚えた、追い詰められたはずの咲耶に焦りの色が感じられない。それどころかまだ薄く笑つている

られる余裕がある。

「笑止……一ついいかしら？ いつ私が装甲腕を『能力を制御するための腕』と言ったかなあ？ それともう一つ、これを外した私がどうなるかわかる？」

咲耶の言葉に考えをめぐらすクリスはそこで考えたくもない予想が頭をよぎるのを感じた。まさかと瞳を向けるクリスに咲耶は頷いた。

「分かったみたいね。あの装甲腕は『能力を制御するため』の物じゃないの。あれは『能力を抑えておくため』のものなのよ。異形の存在に完全になってしまわないのでね」

そう話す咲耶の周囲を不思議な炎が覆つていいく炎の色としては濃すぎる深紅の炎。

その炎は彼女の体全体を覆つかのように巨大な火球となっていく。

廃墟の少女と表裏人格（後書き）

前回前ふりしておいた新キャラとは今回登場する『火野咲耶』です。この名前を見た時点でもつ火を連想する方も多いのではと思っていますがその通りです。

いつたいうこの子がどう三沢塾編に絡んでくるの？と思つ方が多いと思います。

じつは私自身悩んでいた部分でもあります。

次の話で決めた設定を投入するわけですが 不評を買う結果になるとも思います。どうかソフトにお願いしますね（泣）

とある少女の第三人格

「私はまだ万全の状態で100%自分の力を制御できないの。だからあの装甲腕を使って『火野咲耶』として制御できる能力を使っていたんだよねえ。だけど、それはもう無理。あなた達がこうしたから」

巨大な火球はもはや見上げるほどの大きさになつていて。

「私が……『火野咲耶』が消えて中に宿りし者が目覚めてしまうの。咲耶姫が」

その言葉が合図になつたかのようすに大きく膨れ上がつた火球が猛烈な閃光と共に炸裂する。

凄まじい衝撃に高杉もクリスもセルティもそれぞれの力を使う間もなく問答無用で研究所の外まで吹き飛ばされた。

「がはっ！？…………いつたい？」

口から血の塊を吐き出し、せき込んだ高杉が見た先には神々しい光に包まれる少女がいた。

外見はそれほど変わつてないわけではない。ロングヘアはそのまままだしその髪、および瞳の色も深紅のままだ。

だが来ているのは先ほどまで装着していたプロテクターで所々補強されたステッツではなく、高校で習う歴史の授業の教科書の最初の方、飛鳥時代や平安時代の女人が着ていそうな服装になつていて。そ

の服もやはり深紅。

「これが私の第三段階 咲耶姫としての意思が体を操つて
いる状態です。分かりますか？」

先ほどまではまた口調が変つた咲耶 いや咲耶姫の言
葉に高杉はけげんな表情を浮かべる。

「第三段階だつて？」

「はい、性格には3つめの人格とでもいいましょうか。一つはあな
た方が最初に会話した人格、もう一つは先ほどまであなた方が戦つ
ていた人格、そして最後に私、咲耶姫としての人格です」

「そいつは多重人格者つてことか？」

「正確には、あなた方と戦つた好戦的な人格はそうです。ただ私は
そうではありません」

「じゃあなんだつていうんだ！」

「科学の力で創り出された人工的なオカルトとでも言いましょうか
・ · · · 吉沢大学付属研究所が生み出した存在ですよ」

「？ ジゃあ、なんだ。吉沢大学付属研究所はこの科学の街でアレ
イスターに見とがめられることもなく魔術やら魔術師やらに関係す
るようなオカルトを研究していったつて言うのかよ！」

「アレイスター · · · · · この街のトップである人間は気付いて
いたのだと思います。だからこそ、あれだけの騒動のなか私を宿し

た『彼女』に追つてが、からなかつたのだと思いますよ。それとあなたは知つておいでか知りませんが、遠い昔、超能力と魔術は明確に区別なされていなかつたのを知つていますか？ 今や魔術の一種とされる鍊金術が元は今の科学者が行う研究学科のようなものだつたことと同じで科学とオカルトの境界線はあいまいだつたのです。『彼女』をいじりまわした者たちはその原則に従つただけとも言えるでしょう」

「じゃあなぜ、彼女はそのすでに壊滅した吉沢大学付属研究所に来たんだ？」

「彼女が来た理由は本人が言つたと思ひますが過去に蹴りをつけるためですよ。付属研究所が壊滅したことになりを潜めたはずの吉沢大学……いえ、それを内包する巨大な組織が再び動き出しましたからです。その組織が配下に持つ三沢塾と呼ばれる存在を使って

「

咲耶姫の言葉に高杉は思い当たることがあつた。

アウレオルス＝イザートと言ひ名の魔術師（正確には鍊金術師といふらしいが）が学園都市内の進学塾である『三沢塾』と呼ばれる進学校に潜伏しているという情報は護からの通達により耳にしていた。

だがその『三沢塾』がオカルトじみた存在の配下に入つてゐるなどと言うことは聞いたこともない。

「そして現在、その組織の計画は外部から三沢塾を乗つとつた第三者の手により一時停止状態にあるという情報を掴んだ『彼女』はもう一人の『彼女』と私の承諾を得たうえでこの街に来ました。この

廃墟に来たのは慌てた組織の人間がここに残っている『残骸』や『資料』を回収しに来る前に処分を行う為です』

「それで、あんたはこの街全てを、暗部を相手にしてでもその計画を止めようとしてるのか？だったらなぜその組織とやらをダイレクトに攻撃しない？」

「攻撃したくてもいきなりは無理なのですよ。私もこの街の暗部全てを敵に回して勝てるとは思っていません。潰すべくは『彼女』が敵とする組織だけ。しかしその組織が厄介なのです。その組織を率いているのがこの街の上層部を占める人間の可能性があるのです」

「学園都市の上層部の人間がその『組織』を率いているとでもいうつもりか！」

「各種情報から考えるとそのようになつてくるのですよ。この街の上層部、統括理事会でしたね？ そこを構成する人物の名のすべてを知っているわけではありませんが・・・その主義主張は一人ひとり違ははずです。そして上に立つ者の中には意外に『善人』は少ないです」

「だいたい他の国と比較して30年は技術が進んでいると言われる学園都市の上層部の人間がそんなオカルトじみたことに手を出す必要があるかー？」

「他と比較して30年も進んでいるのはあくまで科学技術ですよね？ その一方でこの科学の街で魔術や魔導は下手をしたら他の国以上に軽んじられています。それが意味するのはこの街がオカルトに関係した外部勢力の攻撃に対しての備えが薄い、防備がもろいということになりませんか？ そしてそれを危惧する者たちが対抗する

ためにオカルトに手を出す…………といつのは考えられないことではないとは思いませんか？』

「じゃあ、お前が直接組織を潰しにかかるのは……』

「はい、もしその組織の行動や計画が学園都市の上層部の意思によるものだとすれば下手をすれば科学サイドそのものである『学園都市』をまるごと相手にしなければならなくなるからですよ』

「だから俺たちとも容赦なく戦ったのか。俺達が上層部の名で動く暗部組織、それも外部勢力の工作員や組織そのものを掃討、討伐する役目を持つ組織『ウォール』だから』

「それもありますけど、あなた方『ウォール』がこの学園都市が抱える暗部組織の中で唯一、『組織』としてのまとまりで『魔術サイド』の一組織との戦闘を繰り広げ『オカルトへの対処』を行う実力を持つ可能性があるからでもあります』

咲耶姫はことばをつづけた。

「もしあなた達が奴らを傘下に収めているこの街の上層部の誰か、あるいは上層部全体の指示のもとに動いているのだとしたら非常に厄介ですからね。なにしろイギリス清教の特殊部隊『必要悪教会』、あの国の3大派閥の1つ『騎士派』と互角にやり合い、アイルランドを本拠地として長年イギリスと互角にやりあっていた魔術結社『タラニス』を他の組織の支援があつたとはいえ打ち破り、その時に協力した世界最大の魔術結社『救民の杖』とは良好な協力関係を結び、一度は対立したイギリス清教とも比較的穏健な関係を結んでいた。これだけのことをしてしまつ組織に警戒しないわけはないです

よね？』

『なぜそれを知っている？』

『あなた達の名はもはや『魔術サイド』では有名になっていますよ？特に十字教の裏側で活動する者たちにひとつては』

『同時に科学サイドからも重宝されているかもしませんよ？あなた達『ウォール』は』

咲耶姫の言葉を否定しようとする高杉だつたが、言葉を口から出すことはできなかつた。

高杉は元々『ウォール』に属していたわけではない。元はクリス共に別の暗部組織として活動していた。そこを引きぬかれる……。というより自分達の組織にいきなりリーダーとして護が配置され、同時に美希と哀歌が加入し『ウォール』となつたのだ。

そしてその『ウォール』は確かに例外的な暗部組織ではあつた。

かつてクリスと共に暗部組織にいたころは上に『司令塔』のような指示役がいてその人物からの指示や命令に基づいて裏側の仕事を行なつてきた。

だが『ウォール』の場合、その活動の大半が『統括理事長』からの依頼であり、その他はリーダーである護の判断によるものである。それ自体がまずおかしい。

それに暗部組織が独自の判断で動くことはご法度のはずなのだが、あまつさえ『外部組織及び工作員の掃討』を役目の一つとしている

にも関わらず外部魔術組織と連携したりしている『ウォール』に制裁が下されたことは一度もない。

咲耶姫の言つのように確かに『ウォール』は学園都市から優遇されているようにも思える。

高杉の心の揺れを感じたのか、咲耶姫は薄くほほ笑んだ。

「思い当たる節があるのではないですか？ そうなればあなた方が十分私たちの目指すものの障害になるとは思いませんか？」

「俺達『ウォール』は統括理事長の指示に従つてはいるが完全な駒になどなるつもりはない。俺たちはリーダーが言った『闇の中につても自らの信念を貫ける組織』になるために行動しているだけだ」

「だとしてもアレイスターの命令に従つているところは事実ですね？ そうであれば私たちと敵対してもおかしくはない。実際にあなた方がここにきたということはアレイスターからの指示が出たのではないか？ それともこれはあなた方のリーダーの指示ですか？」

咲耶姫の言葉に詰まる高杉。

「その様子を見ると凶星のようですね。アレイスターからどんな指示を受けたのかは分かりませんが、ここでアレイスターがトップに立つ学園都市上層部と関わるわけにはいかないのです。ですからここであなた方を倒して、アレイスターとのつながりを絶ちます」

火野咲耶、いや『咲耶姫』がそう言つた瞬間だつた。

「火龍の怒りは大地を焦がす！」

聞き覚えのある声が響いた。『ウォール』の仲間であり、唯一対魔術戦闘に特化している少女の声が。

哀歌が声と共に放つた龍の姿をとつた紅蓮の炎は、咲耶姫を上から飲み込む形で地面に激突した。

「のわあ！？」

本日3度目の爆風に吹き飛ばされ空中に舞い上がった高杉を哀歌がキヤッチし地上に降りる。

「お前、哀歌？ なんでここに？ リーダーは見つかったのか？」

高杉の言葉に哀歌は首を振る。

「まだ見つかってはいない・・・・でも魔術に近いなにかの存在を感じして・・・・その質の異常さを感じて、捜査を美希に任せて私だけきたの・・・・」

「質の異常だつて？」

「高杉が戦っていた敵は・・・・多分魔術師でも超能力者でもない・・・・これは予想ではあるけど力の質から考えてアイルランドの時に戦つた・・・・人ならざる者かもしれない」

「なんだつて・・・・？ あいつが、咲耶姫が人ならざる者？」

驚愕する高杉に哀歌はことばをつづける。

「この敵相手には高杉達では分が悪い……私がなんとか戦つてみる……敵わないまでも足止めくらいにはなるから……早く逃げて」

「馬鹿野郎！ そんなことできるか！ 仲間を置いて……」

「じゃあ、高杉に……あいつと互角にやりあえるの！？ 今『魔術サイド』の人ならざる者と戦うすべを知つていて……実際に戦うことができるのは私が護かクリスの妹のセルティしかない……でも護は行方不明、セルティの力では及ばなかつた……なら私がやるしかないわ」

ぐつと詰まる高杉、確かにいまの自分では『咲耶姫』には敵わない。それは分かつているのだ。だがそれでも納得できないのだ。アイルランドの時でも哀歌は常に強大な敵を相手にしんがりになつて戦つていた。

そんな哀歌を今回も足止めに使おうと思えるほど高杉は非情になりきれないのだ。

「リーダーを、護を見つけ出して！ あの人なら……きっとなんとかできる！ セルティはもうみんなのもとに向つてゐる。クリスマんとか説得した……あとは高杉だけなのよ……早く行つて！」

高杉は哀歌を見、咲耶姫を飲み込み燃える炎を見、再び哀歌を見てから苦々しげに溜息をつき一言ついた。

「必ず戻つてこいよ」

そう言い残し高杉は、無限移動で仲間の待つ場所に瞬間移動する。

とある少女の第三人格（後書き）

今回の話で新キャラの正体がつかめてきた人もいるのでは？と思
いますがいかがでしょうか？

贊否両論があると思いますが、ネタばれ承知で書かせていただくと
この発想の元ネタはロシア成教のとあるシスターです（笑）

次回で一応話に区切りがつくかと思っていましたが一体今回の三沢塾
だけで何話食うか予測不可能です（汗）

とある姫と竜人少女

高杉が瞬間移動したのを確認して哀歌は安堵の息をついた。

なぜなら哀歌は理解していたからだこの敵との戦闘は下手をすると仲間に危険を及ぼしかねないものになるということを。

その証拠に、今さつき火炎に呑みこまれたはずの少女。高杉は『咲耶姫』と言っていたが、平然と火炎の中から出てきたその少女に目立つた外傷はない、それどころか着てている時代錯誤な印象を与える服にも一つの焦げ跡すらない。

「さつきの攻撃には正直驚きました……でも科学、魔術問わず私に炎による攻撃は効きませんよ？」

「だいたい予想はついていたけど……高杉からあなたの名を聞いて理解したわ。あなた……いや、その少女の中にいるあなたの名は木花咲耶姫コハナサケヤヒメ……人ならざるものね？」

哀歌の言葉に咲耶姫は着物の裾を口にやつてほほ笑んだ。

「ふふふ……その通りよ。さすがに分かつちゃうみたいね、あなたのような人ならざる者には」

「私が人じやないと分かるの？」

「当り前じやない。一旦でわかるわ。そもそも私達にとつて外面性は何の意味も持たないのはあなたも良く知っているでしょう？」

「そつ……私達の本質は内面性にこそある。でもあなたはなぜその少女に宿っている？……あなたは……木花咲耶姫は富士山の大社に奉られる形での地に縛られているはず。人の身に宿るのは不可能なはずよ」

「できないことはないわ。要は私の現世での象徴……いわゆる御神体をあそこから持ち出せば私はあの場所から離れることができる。そしてその象徴を人の身に宿せば、私は現世で活動することができる」

「象徴を宿す……まさかあなたを富士から運び出し人の身に宿した者がいると？」

「ええ、先ほどの男にそれについては詳しく話したから聞くといいと思うわよ？」

咲耶姫は哀歌を真つすぐ見据えた。

「ところで、あなたのことは話さないの？ そんな風に入らしく偽装しても内面から漂つてくる匂いは隠せないわよ。あなた竜人でしょう？」

「大正解……でも私は本来の姿が……好きではないから。この姿を気にいつてるのよ……それに一つ訂正するけど私は竜人ではない……日本でいう『龍』海外で言う『竜』のどちらにも当たる存在。竜及び龍を率いる者『八代竜王』が3柱『娑伽羅』^{しゃか}の娘の一人よ 名は覚えていないけどね

「それじゃあ、あなたのほうこそ不思議じゃない。なんでそんな巨大神話の登場人物が現世に現れているわけかしら？」

「私もあなたと似たような者……むりやり呼び出された……引きずり込まれたのよ……この世界に……この現世で目覚めたときには自らの生い立ちも思い出せなかつた。それにその時に呼び出した者達の手によつて人形にされたから、簡単に元の姿は取り戻せなかつた……元の自分の姿に戻れるようになつたのはつい最近のこと……」

「じゃあ聞くけど、あなたはなぜ現世にとどまつているのかしら？元の姿を取り戻したのなら幻想界に戻れるはずよ？」

「私は……私に人としての名と居場所を与えてくれ、私に本来の姿を取り戻す助けをしてくれたある人間の為にこの世界に留まつていて……彼の願う時がくるその日まで……私は彼を支えると決めたの……」

「彼と言つのはあなた達『ウォール』のメンバーのだれか？」

「ウォールリーダーの古門護。あの人のために私は現世にとどまつているのよ」

「ふうん……じゃあ私がその古門といつ人が率いるあなたたちと戦うつと言つたら？」

「全力で止める。私が胸に刻むdebita935の名にかけて」

「同じ人ならざる者ながら、魔術師として……人として私と戦おうといつのね？おもしろい、面白いわよあなた！」

「現出せよ、ディストラクションブレード破壊大剣！」

咲耶姫の言葉に答えず閃光と共に全長が3メートルを超える大剣を出現させる哀歌。

「火照命、火須勢理命、火遠理命、わが炎を纏いて現世にまいれ！」

哀歌が大剣を出すと同時に言葉を唱える咲耶姫。その言葉が終わるとほぼ同時に咲耶姫の周りに突如現れた3つの深紅の炎が人の形をなしていく。

目と口と耳もしっかりと備え、不安定に揺れる炎そのものではなく深紅の肌の巨人の姿となっていく。

その手に握られるは深紅の剣に、深紅の槍に、深紅の戦斧、3人が一つずつ持つその武器が明確に哀歌に向けられる。

それに対しても哀歌も『破壊大剣』を横なぎに振るう形で構える。

戦いの合図などなかつた、どちらから仕掛けたかもわからなかつた。

だがその日その時、科学を象徴する街、学園都市でオカルトを象徴するような異能と異能、人外と人外が激突した。

とある姫と竜人少女（後書き）

咲耶姫をめぐる話は一応一段落目が終わったところです。この後彼女がどうかかわってくるかよく見ておいてください。

ちなみに木花咲耶姫とは実際に日本の神話に登場する女神ですが・・・旦那と一緒に寝ただけで子供を宿してしまい妙な疑いをかけられてその疑惑を払しょくす為に燃やされる小屋の中で子供を産む羽目になつという苦労人です。

この名前は私の祖父で九州のとある大社について詳しい人物から聞いて知りました。

作品を書くにあたつて資料集めには苦労します（汗）

これからしばらくその大社に旅行に行くので更新ができなくなりますが、その資料集めを頑張りますのでどうかお許しを（汗）

とある日覚めと進学校

「で……結局、その咲耶姫つて奴との戦いには決着が付かず最終的には痛み分けで終わつたと？」

「うん あの女、予想以上に強くて 」

「そつか・・・・・ 対魔術戦のエキスパートのお前が苦戦する
とは余程強い奴つてことになるな・・・・・ 取り上えず哀歌は休
め。その体で無理はしない方がいい」

両手、両足に包帯を巻きつけ体のあちこちにシップを貼っている哀歌はその言葉に頷くと同時に、弦の糸が切れるように気を失った。

咲耶姫こと火野咲耶と哀歌の戦いは彼女が語つたとおり痛み分けに終わった。

一応哀歌の攻撃は咲耶に少なからずダメージを与えた。

だが哀歌も無傷というわけにはいかず全身打撲に酷い火傷を負つた。

それで生きていられたことがもう奇跡だが哀歌は現場の状況をきつ
ちり伝えた後でようやく気を失ったわけだから大したものだと言え
るだろう。

「それにしても、分かつていたつもりだつたが魔術つてのは悔れねえな・・・・・・あれだけの戦闘が全て知覚されていないな

۲۷۰

哀歌の話によると、魔術師は魔術と縁がない大多数の人々が暮らす場所では『人払い』という魔術を使って無意識下に干渉することで興味を逸らし、無関係な人間はその地点へ立ち寄らなくなせるらしい。

その辺りの理屈は高杉にはさっぱり分からぬが、とりあえずあれだけの騒ぎをよくぞ表沙汰にしなかつたものだと感心していた。

「その侵入者はどこにいたんだよ？　私のサーチ術式にも反応しないんですけど」

そついつて首を傾げるセルティは納得いかない表情をしている。

「奴だつて始終魔術を使つてるわけじゃねえんだから見つかっても仕方が無いんじゃねえか？」

「それは確かにそつなんですが私が行つたサーチ術式はその体内のマナを魔術に変化する人間に反応するはずなんですけどそれなら引っかかるないです」

「そつか……くそ、リーダーも見つからない上にこんなやつかいな案件をかかえちまうとはな。セルティ、お前はここでサーチを続けておいてくれ。俺はリーダーの捜索に加わる」

「分かりました。気をつけください高杉さん」

「ああ、だがお前も氣をつけろセルティ。リーダーから聞いているだろうが……今この街にはお前にとつての天敵、『吸血殺し（ディープブラッド）』を持つ少女がいる。けして三沢塾に近づくな」

「分かつてます。私たち吸血鬼にとつては致命的な能力の持ち主。近づいてしまえば、自我があつても吸つてしまふのを止められなくなる。そして一滴でも啜つてしまえばその瞬間消滅してしまう」

「分かつてゐんなら良い。頼むぜ？ お前を失つたらおれはクリスの奴に顔向け出来ない」

そう言い残して高杉は瞬間移動した。だれもいなくなつた部屋の中でセルティはぼつりと呟いた。

「高杉さん。やつぱり姉さんのこと気にかけてるじゃないですか・・・」

「起きる、しつかりしろ護！」

自分を揺さぶりながら叫ぶ声に護の意識は強引に現実に戻された。

「…………上条？ 僕は、いつたい…………」

「さつきインデックスの喰みつきから逃げようとして部屋から出たらお前が倒れてたんだ。それでお前の手当をしてたんだよ。いつたいどうしてあんなところに倒れてたんだ？」

「簡潔に言つと、学園都市レベル5の第1位と戦つて負けた

「レベル5！？ てか今さらつと凄いこと言わなかつたか？」

「いやだから第1位と戦つたんだって」

「いやじゃねえよ！ ただでさえ一人で一国の軍隊を相手に戦えるのが護たちレベル5だろ？ その第1位ともなれば最強の能力者ってことじやねえか！ そんな奴とぶち当たるなんて無謀なことしてる時点では信じらんねえけど、その相手と戦つて生きのこつてられてることの方が一番信じらんねえ…… 本当にになにがあったんだよ！」

「僕も良くなは覚えていないんだ。第1位のアクセラレータには僕の重力掌握^{グラビティマスター}は通じなかつた。その後戦いの最中に体に激痛が走つて気を失つたからなんで助かつたのかは本氣で分からんなんだよ」

実際は自らの体に宿るアイルランドの神、ルーの力を借りて発動させる特殊な槍『緋炎之護』を使って戦いもしたのだが、そこについては護は意図的に触れなかつた。

「…………まあ、覚えてないつてんなら仕方ないけどよ。護、お前無茶ばかりしそぎだぜ？ アイルランドでも俺は遠ざけて自分だけ強敵と戦つてたよな。少しは俺も一緒に戦わせろよ。お前は凄い能力を持つてるけどさ、俺だってこの右手に『幻想殺し（イマジンブレイカー）』っていう力を持つてんだ。戦うことはできる

「上条……」

上条の言葉にほろりとしかけた護だが直後にその表情が凍りついた。

「とおおおおまあああ！」

護の治療の為に晩飯を待ちに待たされたインデックスがその犬歯をむき出しにして上条の頭に噛り付いたのだ。

「不幸だああああーー！」

絶叫を発し、痛みにインデックスを頭に齧りつかせたまま床を転げ回る上条を見ながらシユールな光景だなこれ・・・・と冷静に考える護であつた。

『・・・・。ところで護、今日インデックスを狙つた赤髪神父・・・・。ステイルっていう奴が現れたぜ』

インデックスの噛みつきからなんとか解放され、護が部屋から緊急搬送した冷凍食品の山（解凍済み）により上機嫌で夕飯にありつくインデックスに若干恨めしげな視線を向けながら上条は小声で話し始めた。

『ステイルが？ なんの用事だつたんだ？』

『本人の話によると、三沢塾っていう進学校に女の子が監禁されていて、その子は『吸血殺し』という能力を持つていて。そして現在その三沢塾を掌握しているのが鍊金術師であるアウレオルスっていう奴で、監禁されているその子を助け出すのに協力しちつてことだつた』

成る程と護は思った。この辺りは作品の流れ通りだ、違いといえば上条が記憶を無くしていない為にステイルとの会話が違和感無く行われていることくらいだ。それと・・・・。

「なあ上条、スフィ…………いや、捨猫を今日見たりしなかつたか？」

「？いや、見てないけどな？」

「そりゃ…………」

この世界の時系列では本来この辺りで登場するはずの子猫。スフィンクスが登場していない。それ自体は小さな変化かもしれないが示すものは重大だ。かつてのセブンスミストの時と同じ現象、時系列の改変現象。

それが作品の中のキーイベントにまで影響するようになつては護の持つ作品知識など役にたたなくなつてしまつ。

『上条はスタイルの要求には応えるつもりなのか？』

問われた上条は頭をかきながら、答えた。

『ああ、俺にできることならやつたいし女の子が監禁されてるなんてこと放つておけないしな』

上条は作品知識の通り、三沢塾に向かう。それは流れ通りに行けばアウレオルスとの対決に繋がる。

作品知識の通りに物事が進むなら上条は最終的にアウレオルスに打ち勝つ。

だがすでにスフィンクスの未登場という小さな改変が確認されてい

る以上、その展開が改変される可能性を否定出来ない。

『ところでスタイルとは何処かで待ち合わせしてゐるのか？』

『いや…………そういうえば一緒に行くとはいつたけど何処で待ち合わせとかしなかつた…………しまつた…………』

頭を抱える上条だったがそんな上条の肩を護は優しく叩いた。

『安心しろ上条。スタイルの居場所の検討はつく。今すぐ外に出てそこに向かおう。インテックスになんかで『まかして』』

『なにで誤魔化すんだよ？』

『それはな『一』『四』『二』『三』…………』

『！ そんな事本当に良いのか？』

『ああ、インテックスを守る為ならこのくらい構わない』

『一』『四』『二』と内緒話を終えた二人はぐるりと首を回してインテックスを見る。

『！ いつたいどうしたの？ まもる？』

「なあインテックス。一つ頼み」とあるんだけ良いか？』

『？』

「夜ご飯、護や護の友達とか招いてパーティーにしようって話にな

つたもんで俺らはその友達呼びに行くんだけどインテックスは部屋で待つてくれないか？

「なんでわたしだけおいてけぼりなのかな？」

「護の奴がパー・ティー用の『飯盛り合わせセット』を頼んでくれたんだけど誰かが家に残らなきゃそれが来たとき受け取れないからインテックスに頼みたいんだよ」

「『』飯盛り合わせ！？ わかった！ まつんだよー。」

「念の為に言ひとくけど頼みものが来たからといって自分で全部食べちゃうのはなしだからね？」

「なんで分かった！？ という顔するインテックスだったが、口元からよだれを垂らしているんでは思考などだだ漏れも当然である。

「とにかく絶対に部屋から動くんじゃないぞ？」

念を押されてうとうん頷くインテックスを残し上条と護は部屋を出た。

「で・・・・なにやつてんだお前」

部屋を出た上条の第一声がこれである。

まあ部屋の前に例の赤髪神父、スタイル＝マグヌスがいたのだからその反応も当然かもしれないが

「なについてローンの刻印を貼り付けてるだけだが？」

「人ん家の軒先に貼り付けるなはなぜかと聞いたんだが？」

「あの子を守るためや、まつたく世話が焼けるよ」

本当に面倒くさそうにペタペタとルーンの刻印を貼り付けて行くステイルだが作品知識をもつ護からすればその内心はバレバレである。

「スタイルってインデックスが好きなのか？」

護の言葉にそれまで冷静に刻印を貼り付けていたスタイルがかкаー！と顔を赤らめた。

「な、なにを言つんだ君は！」

あれは護衛対象であつてけして恋愛対象として見ていくわけでは……と言い訳をするスタイルを見て、この人はこの人で素直じゃないな」と思う護だった。

「君はアウレオルスを知つてているのか？」

護がその名を出したとき当然ながらスタイルは驚いた。

「うん。 チューリッヒ学派の鍊金術師でローマ正教の^{カンセラリウス}隠秘記録官つて役職に就いていた人なんだよね？ 現在はそのローマ正教を裏切り三沢塾で吸血殺しこと姫神秋沙を確保してそのまま占拠してるとか」

「君は相変わらず地獄耳だな。 その通りだよ。 まあ、アイルランドや我がイギリスで暴れまわったことを考えれば当たり前か……」

・・・ といひで今回はお仲間たちとは一緒にじゃないのか？ 「

「 いつも言えどまだ連絡していない！ 上条、携帯貸してくれないか？」

？ 「

「 お、 おつ 」

ちょっと驚きながらも、携帯を差し出す上条。それを受けとった護は自分の無事をリーダー代理をしているであろう高杉に送りセルティを除くメンバー全員の集合を指示した。

メールはすぐに返ってきた。内容は要約すると『無事なのは良かつたが、メンバー全員の集合は難しい。とにかく俺とクリスと美希が向かう。哀歌は現在動くことは難しい』というものだった。

哀歌の身が心配だったが、今は三沢塾への対処を急がなくてはならない。上条は行動が可能なメンバーだけでも三沢塾に行くよう指示を出した。

約30分程後、護たちウォールの行動可能なメンバー4人とスティル、上条を合わせた6人は問題の三沢塾の前まで来ていた。

「 ここが三沢塾か ． ． ． ． ． 」

当然ながら護は三沢塾を生にみるのはこれが始めてなので、その大きさに圧倒されたりする。もとの世界でも一般人でしかなかつた護にとつて進学塾と言わされて思い浮かぶのは中ビルの3階に作られたものがせいぜいである。

「 ねえ、 一つ聞いていいかしら？ 私たちは護からの情報で三沢塾

に少女が捕らえられていることも鍊金術師とかいう種類の魔術師が現在そこを掌握していることも知っていたわ。でもあなたはどうやって知ったの？」

疑わしげにスタイルを見る美希にスタイルはジロリとした視線を向けながら答えた。

「簡単なことだよ。なにせその情報を伝えて来たのはこの街のトップである統括理事長たからね」^{アレイスター}

スタイルのその言葉にクリスが驚愕した表情を見せた。

「統括理事長は魔術師であるあなたに直接協力を要請したの？それじゃあ統括理事長は……」

クリスの言葉に高杉は頷いた。

「魔術師を、より正解には魔術サイドの存在を知つていることになるな」

「科学の象徴みたいなこの街のトップが魔術サイドの事を理解しているつてのはある意味不気味だわ。まるでなんでも理解しているみたいじゃない」

美希の言葉はそのまま当てはまる。少なくともこの街で起きる出来事に関してならアレイスターは全てを把握しているだろう。

魔術サイドの事をアレイスターが知つてていることに仲間たちは驚いているが護には動搖はない。なにしろ護は彼の正体を知つているのだから。

「（まあ…………だからと言つてそれをここに話すわけにはいかないよな…………そんな事をしたらそれこそこの作品世界の流れが予測できなくなつてしまつ）」

「雑談はそろそろ終わりにしてくれないか。僕としては早く仕事を終わらせたいんだが」

スタイルのやや苛立つた声に護は意識を引き戻された。

「ああ、『ごめんスタイル。みんな分かつてると思つけど当初の作戦通りには行かなくなつてる。つまり学生として進学塾に潜入する策は取れない。だから正面から殴り込みをかけるしかないんだ』」

「いきなり戦闘を始める気かヨリーダー？ 内部には学生もいるだろ？ 見つかれば面倒になるぞ」

「いや、大丈夫だよ」

護は自分の頭の中にある知識から引っ張り出した映像を再生し1人頷く。少なくとも流れとおりなら、今ままこの世界が進んで行くなら護の知識は活用できる。

「今ままなら大丈夫だよ。中の学生に恐らく僕たちは認知されない。侵入者である僕たちはね」

頭に疑問符を浮かべる仲間たちに構わず護はスタイルを見る。

「そういう魔術がないわけでもないんだろスタイル」

「無いわけではないとは思うけど君はなんでそれがこの建物に仕掛けられてると思うんだ？」

「勘つてやつだよ。勘」

適当に答えて護は今度は仲間たちを振り返った。

「良いかみんな。今回の敵はこれまで戦った相手と比べても群を抜いた強さを持つ難敵だよ。ウォールリーダーとして指示する。全ての責任は僕が取る。目標、ターゲットアウレオルス＝イザートを確認したら即座に攻撃してほしい。それによつて三沢塾塾が多少壊れる程度なら僕の権限で許可する」

ウォールメンバーが頷くのを確認し護はスタイルの肩をポンと叩いた。

「陽動は僕たちウォールがする。スタイルは当初の目的を優先して行動してほしい。それと、アウレオルスに対抗できる可能性を持つのはこの中では上条だけだよ。だから彼を無下に扱わないようにね」

「

怪訝な表情をしたスタイルだったがあえて聞き返そつとはしなかつた。

「よしみんな行こう。ここに囚われている少女を助けるために！」

護の声と共に学園都市暗部組織ウォールは三沢塾へと潜入を開始した。

ヒカルの田原と進学校（後書き）

三沢塾って塾としては大きすぎませか？

まあ東京なんかではあのくらいの建物の全てが塾というのもおかしくはないのかもしませんが、私には理解できません（涙）

さて今回は一切戦闘シーンはなしですが、ここからメンタル面さえ強ければ無敵？な鍊金術師との戦いの回に入つて行きます が、実は私アニメの方のこの回は知っていますがライトノベルの方の話を知りません（汗）

どなたか知っている方がいたら教えてもらえませんか？

自分で調べますが（汗）

とある塾の鍊金術師

三沢塾の内部は護の知識通り普通だった。

入口からすこし離れたところにある柱に血まみれで寄りかかる騎士。

ローマ正教の13騎士団の騎士の死体があることから考えるに今自分達がいるのはスタイルの言葉を借りればコインの裏の世界なのだろう。

それが意味するのは自分達がアウレオルスに侵入者と判断されることである。

「護くん。入ったのは良いけどこれからどうする？」

「そうだな……」クリスは僕と一緒に姫神を探そう。高杉と美希は2人して派手に暴れて陽動を頼む。いま僕たちはアウレオルスが侵入者と判断した者達の為を倒す為に作った空間の中にいる。原則として生徒達には僕らが見えないはず……ひたすら階段を使って上に昇りつつ適当に破壊工作をしてほしい

「了解リーダー」

「任せといて」

高杉と美希の2人が階段を上っていくのを見送った護はクリスを連れて一階から姫神の搜索を始めたことにした。

護の作品知識の中には姫神がいつたいどこに軟禁されていたかにつ

いては情報がない。

アウレオルスのグレゴリオの聖歌隊（レプリカ）に追い詰められた上条を救つたところで初めて三沢塾に登場するために現時点でどこにいるのかの推測がまったくできないのだ。

「ビームを探せば……」

「一階はともかくして二階以上は教室がいつぱいあるだろ?しね……とこりで護くん、私わっかから一つ氣になっていたことがあつたんだ」

「なにそれ？」

「さつき護くんは今いってる空間を『アウレオルが侵入者と判断した者を倒すための空間』と言つたわよね？でもそれって変じやないかな？」

「え？」

「だつてあの風体の魔術師さんは魔術サイドの人間だとすぐにわかるとして……私達は普通に学生服を着ている科学サイドの人間よ？なんでアウレオルスは私達がここを狙つていると知ることができたのかしら」

「それは……僕達がステイルと話しているのを見て僕らがステイルと共同で何かしようとしているように見えたからじゃないかな？」

「

「そもそも考えられるけど……私はもう一つの可能性を危惧してる

の「

「もつ一つの可能性？」

「哀歌に重傷を負わせた侵入者がアウレオルスと接触している可能性があるってこと」

「哀歌に重傷を負わせた侵入者つて……」

「護くんは詳しくは聞いていなかつたわね……火野咲耶って名前の少女よ。彼女の口ぶりから考えるに咲耶は魔術サイドと通じているかあるいは魔術サイドの人間の可能性が高いわ」

「（まだ、また僕の知らない人物が生まれている。この少女が僕が危惧していた重要イベントへの不確定要素と言つことなのか……）

「どうしたの？」

「いや何でもない……クリスの予測通りでも僕の予測通りでもやらなくちやならないことは同じだよ。姫神を救出しなきゃいけない人が破壊工作を始めたらしい。

「2人が始めたな僕らも……」

「囚われの少女を助けようといつのかな侵入者諸君？」

突然響いた聞き覚えのある声、そしてこの局面で聞いてはいけない声に護の全身の筋肉が硬直する。

「悄然、つまらんな少年。こんな所でその短い一生を終えるとは
護の目の前に立つ男はこの建物の主、鍊金術師アウレオルス＝イザ
ト。

「超重力砲！」

反射的に護はアウレオルスに向けて重力波を放つた。アウレオルスまでの距離は1メートルほど彼に避けることは通常なら無理だ。だがアウレオルスはそれを可能にしてしまう。

その服のポケットから取り出した鍼を首筋にさしながらアウレオルスはことばを放つ。

「消えよ」

その一言だけ。アウレオルスの口から紡がれたその言葉だけで護の重力波は跡かたもなく消滅した。

「うそ……・・・能力を・・・・・消した？」

クリスが驚愕の声を漏らすが正直護もそんな気持ちだった。

アウレオルスは確かに『黄金練成（アルス＝マグナ）』を使って心に思い描いたことを現実にできる。

だが疑念を抱いてしまえば、その疑念も具現化して本当にできなく

なつてしまつという弱点を黄金練成は持つてゐる。作品の中では具体的に描寫はされていなかつたがアウレオルスにとって未知の能力を持つていた上条に対しても「死ね」の一言を持つて死を与えることが出来なかつた。その理屈から考えれば護の能力もアウレオルスからすれば未知の能力となるはずなのだがアウレオルスはそれを消して見せた。

それが意味するのはただ一つ。アウレオルスは護がいかなる能力を持つていたかを把握していたのだ。

「あなたは僕の能力を知つていていたのか？」
「当然、黄金練成は鍊金術の到達点。その場に立つ私に知れぬことなどない」

「なら私の能力を防げるかしら！」

クリスの能力は念動力系最強の『念動霸王』。その力は本気を出せばビル一棟を真上からたたきつぶせるほど強力である。だがアウレオルスの顔に焦りはない。

「反転せよ」

そうアウレオルスが呴いた直後、クリスの体が真後ろに吹き飛んだ。

彼女がアウレオルスに放った力がそのまま彼女に反転したのだ。

クリスは入口のドアまで吹き飛んだが不自然にもドアには当たらずその直前でぴたりと制止し直後に地面に崩れるように倒れた。

「（クリスの能力まで把握してたのか？　これはクリスの予想が当

たつてたかもね）「

心中で呴く護は目の前の鍊金術師を見る。残念だがこの男に護の力は通じない。

護の中に眠るもう一つの力。緋炎之護なら多少は通じるかもしれないが魔術の使用傾向と対策を魔道書として書く仕事をしていたアウレオルスに対してはたして通じるかどうか分からぬ。

そうなっては護には打つ手なしである。

だが持ち手がそれしかない以上やるしかなかつた。

「緋炎之護！」

護が持つ最後の切り札、緋色の十文字槍。護の手に握られたその槍を見てアウレオルスの顔に初めて動搖の色が浮かぶ。

「（こ）の力のことは把握していなかつたみたいだな……これならー。」

護は槍の切つ先をアウレオルスに向ける。

「第弐の技、緋炎斬波！」

勢いよく振られた緋炎之護から鋭さを持つ炎が波となつてアウレオルスに襲い掛かる。

「（よしー！）れでなんとか……」

そう護が思つた瞬間だつた。

「ふん……アイルランド系の神話を元にした術式か」

アウレオルスは首元に鍼を突き刺した。

「完然、私の黄金練成にできぬことはない…………消えよ！」

アウレオルスの言葉と同時に護の最後の切り札。緋炎之護から放たれた火炎が一瞬で消滅した。

「な…………」

「確かに私が知らない術式ではあつたが類似した術式を知らないわけでもない…………残念だつたな能力者」

くつと唇をかむ護に対してアウレオルスは告げた。

「私には君達だけに構つてゐる暇はない。まだ侵入者は大勢いるのだからな。そこで君達にはしばらく余興を楽しんでもらうとしよう」

「

なに？」と護が訝しんだ直後、自分の放つた力をまともに受けて入口まで吹き飛び氣を失つたはずのクリスがふらりと立ち上がつた。

「クリス、意識が戻つたのか？」

そう問う護の声になぜかクリスは答えない。

「クリス？…………」

怪訝な表情を浮かべた護の耳に信じられない言葉が飛び込んできた。

「クリス。古門護を殺せ」

アウレオルスの口から出た言葉。それはからず現実になる。それが意味することは仲間であるはずのクリスと戦わなくてはならないところだと。

「アウレオルス、あなたは！」

「ここで倒すのは容易いが、それでは面白みがない。せいぜい殺し合ひのだな」

それだけを言い残してアウレオルスの姿は消えた。

クリスは無言のまま護に一步一歩近づいてくる。

「クリス……嘘だろ？ 田を覚ますんだ僕たちは同じウォールの仲間だ！」

その言葉が届かないことは護が一番よく知っている。アウレオルスの黄金練成で確定されたことは彼自身にしか取り消せない。

だがそれでも護は呼びかけるのを止められなかつた。

護はこれまでこの世界で多くの人々と戦ってきた。その中には警アン備員チスキンに人々のように殺してしまつた人たちもいる。

だが、仲間であるクリスを傷付けることを護は選択できない。そこまで護は非情になり切れない。

だがここでクリスを倒さなければ、ここで今も破壊工作をしている他のメンバーや今頃内部の捜索を始めている上条やスタイルが危険にさらされる。

「くそ……！」

大義のために個人を捨てるか、個人のために大義を捨てるか。護は選択を迫られていた。

とある塾の鍊金術師（後書き）

アウレオルスって本気で強いですね・・・・・・正直勝たせかたが分からないつていうか・・・・・・やはり上条さんしか勝てないのかな～（涙）

今回終盤で護とクリスが戦いそうになつていますが、実はクリスがその能力をフルに使って戦う場面を実はまだ描いてなかつたりします。

今回の最後から次回にかけて護は一体どういった選択をするのか。見守つてくださいと幸いです。

「クリス！」

護の呼びかけにクリスが応えることはない。

アウレオルスの黄金練成により確定された『護を殺せ』といつ命令にクリスは逆らえない。

自意識があるのか無いのかは分からぬがクリスは護に向かつてくる。

その目には感情がないわけではない。だがそれは護を仲間として信頼しているいつものクリスなら抱きもしないような感情をたたえている。

その用に宿るのは明確な殺意。

その殺氣に押される護とケリスの周囲を突如暗闇が包み込んだ。

卷之三

護が疑問に思つた直後、急速に闇は消えさり目の前にどこまでも広がる白の空間が広がる。

「（まさか）これもアウレオルスが作った空間？」

戸惑う護だったが、今はそれどころではないとクリスに意識を戻す。

「護、覚悟して！」

クリスは言葉を紡いだ。

「私はあなたを本氣で殺す！」

その言葉と同時にクリスの両手から無数のパチンコ玉が投げられる。

「鉄球乱舞！」

無数のパチンコ玉はクリスの意思に従い護に襲いかかる。

「くそ…………超重力砲！」

重力波を放とうとした護だがその手のひらから力は放たれなかつた。能力が使えなくなつていた。

「やば…………！」

慌てて何か盾になりそうなものを探す護だがどこまでも何もない白の空間に防ぐための盾になるものなどどこにもない。

当然の結果として防ぐ術を持たない護は全身にパチンコ玉を浴びることとなつた。

身体中に走る痛みに苦痛の声を漏らしながらも護は自分に宿るもつ一つの力の名を叫んだ。

「緋炎之護！」

もう一つの力はまだ護と共にあった。

空間から滲み出るよつて護の手に握られる緋炎之護を見てもクリスの表情に変化はない。

彼女が手を上げると、その動きに応えるかのように何もない空間から巨大な白い杭が現れる。

無言でクリスが手を振り下ろすと杭は一直線に護に向かつて迫る。

「第壱の技、緋炎……！」

そう言いかけて護は気づいたいつもなら戸惑うことなく放てる各種技を出せない。

「（まさかアウレオルスは……緋炎之護の力すらも無効化したのか？）」

そうだとするとこの戦いは明らかに護不利になる。

おまけにクリスが手を上げた途端に杭が現れたことから考へるにこの世界は『クリスが護を殺すのに都合の良い空間』のようだ。

「くつそおー！」

半ばやけくそに槍を突き入れる護。本気で護は死を覚悟した。

だが杭は護を貫かなかつた。

なぜなら護の緋炎之護がそのあり得ない切れ味でもつて杭を縦に切

り裂いたからだ。

「（技は使えないのに緋炎の力はそのまま？ これはどうこう？）

「

護の心の声に応えたのは護に宿る神、ルーだった。

「（どうやらあの鍊金術師は、あえて緋炎の力は残したらいい。一方的では面白くないとでも思つたのではないか？）」「

その言葉にアウレオルスに対する激しい憎悪が湧いた護だったがその感情をぶつける相手はあいにくここにはいない。

「（私の知識を貸そう。それを使って純粋な槍技で戦うのだ）」「

「（そんなこと言つたって僕にはクリスを傷つけれない！）」「

「（そらか・・・・・なら、私が君の体を使う）」「

その言葉に護がなにか返す前に護は自らの体の制御を失った。

視界だけはそのまま体だけが別の誰かに操られているかのようこの勝手に動いていく。

「良く見ておけ。躊躇いがなにを招くのかを」「

護の声で話したルーはその手に握る緋炎之護を上に掲げぐるつと回転させた。

その動作に首を傾げたクリスだが直後思わず目を見張った。

護、いや護の体を借りたルーが跳躍し一瞬でクリスの前に立つたからだ。

そのまま躊躇いなく槍を横薙ぎに振るルーに対してクリスはギリギリの所でバク転しその攻撃を避ける。

そのまま連續でバク転し、ルーと距離をとったクリスが手を上げると今度は空中に無数の巨大な十文字の物体が現れた。

それはよくよく見ればその側面に刃をもつ物体。十文字型の手裏剣だった。

クリスの念動力に操られ、その巨大な手裏剣はその大きさから考えられないようなスピードでルーに対して四方八方から襲いかかる。

だがルーに焦りの色は無かつた。

自分の正面に来た手裏剣を横薙ぎに振るつた十文字槍の両枝の内の右枝の刀の部分を突き刺すことでとらえ人間として出せる最大出力の筋力でもって360度全ての方向から迫つて来た手裏剣を弾き飛ばしたのだ。それだけの荒技をやって両枝の刀が折れなかつたのは、それが異能の力によつて生み出されたものであるからだろう。

周りに迫つていた手裏剣を全て弾き飛ばしたルーだがクリスの念動力が働いている限り、手裏剣はまた向かつてくる。周囲に向かつてくる手裏剣がない一瞬を突いてルーは右枝に刺さつたままの手裏剣を満身の力を込めて槍を振るいクリスに向けて放つた。

予想外の行動にクリスは念動力を使って迫る手裏剣を止めにかかる

がそのせいでルーへの注意が一瞬薄れてしまった。

当然ながらルーはその隙を見逃さなかった。

再び跳躍したルーはそのままの勢いで真っ直ぐクリスに向かう。

だがクリスまでの距離はそう簡単には縮められない。クリスからすれば迫る手裏剣を止め再びルーに向けて放つくらいの時間の余裕がある距離だ。

だがルーはクリスにそれだけの余裕を与えるつもりなど毛頭なかつた。

ルーは宙を飛びながら緋炎之護を大きく後ろに引いた。そう、投擲の構えをとつたのだ。

クリスがその構えに気付いた時にはもう遅かった。

ルーがその構えから全力で放った緋炎之護はクリスに迫っていた巨大な十文字手裏剣を貫通し、その先に立つクリスの胸を容赦なく貫いた。

「か・・・・・は・・・・!？」

胸を貫かれたクリスは信じられないような目で自分の胸に突き刺さつている槍を見つめる。

槍はクリスの右胸を貫通して背中まで抜けていた。この状態ではクリスはマトモに呼吸はできない。

そのまま2、3歩後ろに下がった後グラッと体が揺れ後ろに向けて倒れていった。

その倒れかけた体をルーが支え、その胸から槍を一気に引き抜く。その体を走るのは凄まじい激痛のはずだがクリスは声を発することができない。

「もう戦いは終わった。この体君に返そう」

ルーが中に戻り護に体の主導権が戻された。その瞬間護の瞳に涙が溢れた。

護がこの世界に来て始めて流した涙だった。

「こめん 許してくれクリス 僕は君を傷つけた 」

涙の雲がクリスの端正な顔に落ちていく。

涙を流す護に対してもう一度涙を落とした。

その口の動きはこう言つていた。

『ありがと』

その言葉を口を動かして伝えたクリスはそのままゆっくりと目を閉じた。泣き続ける護の腕の中でクリスの体から力が抜けていく。

その首が力を失い、護の胸板に首が倒れかかる。全身から完全に力が抜けて、体が一気に重くなつたように感じる。先程までなんとか

聞こえて来た心音はもはや聞こえず、抱きかかえるその体は体温が下がっていく。クリスは護の腕の中で死んだ。

クリスが死んだのと同時に、2人を閉じ込めていた白の空間は消え去り護は元の三沢塾の一階に戻った。

もう護は自分の腕の中で冷たくなっているクリスを見ながら泣いてはいなかつた。護はこの状態になつたクリスを救う為の方法を考えていた。

「クリスを・・・・助ける。クリスを助ける。クリスをクリスをクリスをクリスをクリスをクリスを・・・・」

ブツブツと独り言を呟きながらも護はある人物にメールを送つていた。

その文面はただの1文、「三沢塾、仲間を助けてくれ」「それだけだつた。

クリスを床に寝かせ、護は階段を上へ上へと上がつていく。

外は既に夜の帳が降りている。

時間的には上条とスタイルがアウレオルスの前にたちインテックスが既に救われていることを説明しているころだ。

クリスを自分の力で救えなかつた以上、護にできることは一つしかない。アウレオルスに対抗できる唯一の仲間。上条当麻をなんとしても助け、アウレオルスを倒す手助けすることである。

「待っているよアウレオルス。僕がいる限り上条さんを殺らせはない。上条さんならクリスの敵をきっと討ってくれる。上条さんはお前よりずっと強い。その強さを思いしれ」

護か目指すは最上階、アウレオルスがインデックスと共に原作ではいた場所だ。おそらく姫神もそこにいるだろう。

ながば壊れたような心を抱えながら、護は階段を一步一步上がりアウレオルスのいる最上階までの道のりを進んでいった。

同時刻、とある大病院で一人の医者が携帯に来ていたメールを一読して微笑んだ。

「僕を誰だと思っている?」

じある空闇の回十九（後書き）

今回は悲しい話になりました。

仲間同士が戦ひ話つてやはり書きづらうですね。選択を後悔しています。

最後のシーンの謎の医者、多分多くの人はだれか予想がつくでしょう。

次回からアウレオルスとの戦いはクライマックスへ。そしてこの一件に関わる第3者も登場する予定です。

これからもどうぞよろしくお願いします。あと最近感想とか受け取つてないんで始めて読む方とかの感想が欲しいかなと思います。

とある部屋での真相暴露

「お前……いつたいつの話をしてんだよ」

「なに?」

「そういうことだ。インテックスはとっくに救われてるのさ。君ではなくここにいる上条当麻の手によつてね。君にはできなかつたことをこいつはもう成し遂げてしまつたんだよ。ローマ正教を裏切り3年間も地下に潜つていた君には知る由もなかつたろうがね」

「そんな……馬鹿な。ありえん、人の身で……それも魔術師でもなれば鍊金術師でもない人間にいつたい何ができると言つのだ!」

「必要悪の教会（ネセサリウス）の、イギリス清教のこけんに関わるので多言は控えるが……そうだねえ、こいつの右手は幻想殺し（イマジンブレイカ）と言つ。つまり人の身に余る能力の持ち主つてわけだ」

「まて、ならば……」

「そつ……君の努力は全くの無駄骨だつたというわけだ。だが気にするなインデックスは君の望んだとおり今のパートナーと一緒にいてとても幸せそうだよ」

護がようやく最上階にたどり着いた時、アウレオルスと上条・スティル両名の会話は重要な局面まですでに進んでいた。

護は痛む体をさすりながら上条とスタイルの様子を見る。

護は即座に部屋に入ろうとはしなかった。今部屋に入つてもこの後アウレオルスがやり場のない怒りにより豹変した時『倒れ伏せ侵入者ども!』の言葉通り侵入者として地面に問答無用で倒されてしまう。ならば今はアウレオルスにその気配を悟られない方がよい。

そう判断して護は部屋の入口の壁の向こう側に身を潜めつつこつたりと様子をうかがう。

本心から言えば今すぐ緋炎之護を振りかざしてアウレオルスに投げつけたい気持ちだったが、さすがに護もそこまで馬鹿ではない。今の自分がここで介入してもアウレオルスには勝てないということは先ほどまでの戦いで嫌と言つほど身にしみた護だった。

「…」

よほびショックが大きかつたのだらう。

アウレオルスはそのままようようと後ろに下がり机に手を置きなんとか体を支えているがそれがなければ倒れそうだ。その瞳は動搖に揺れている。

その横には護達が助け出そうとしていた少女。姫神秋沙が佇んでいる。その表情からはなにを思っているのかは読みとれない。

その时机の上に寝かされているインテックス（原作の展開通りになっているところから考えるに恐らく上条からの電話イベントの後原作通り訝しんでここまで来てしまったのだろう）の口から声が漏れた。

「どうま 」

その場の全員の視線がインデックスに向けられる。

「どう ま 」

かつての少女ははっきりと今代のパートナーの名を呼んだ。その事実にアウレオルスの表情が歪む。

「インデックス！」

思わず叫んだ上条の声に重ねるようにインデックスは呟いた。

「どうま 」

直後、おなかの鳴る愉快な音が部屋中に響き渡った。

「おなか減った 」

上条は思わずつっこけかけ、スタイルは壁の方を向いて笑いをこらえ、護は原作通りの流れに思わずため息をついた。

「りん」・・・・りんごは・・・青森・・・・・「そのあまりのほのぼのとした風景にここがシリアルスな場面だということを一瞬忘れかけた護だが直後に聞こえてきた笑い声に表情を引きしめた。

「ふ・・・ふふふふふ・・・ハハハハハハ・・・ハハハハハ
ハ！」

突然笑い出したアウレオルスに護はいよいよ来たかと感じた。この流れで行くと、ここからアウレオルスの暴走が始まる。

「倒れ伏せ！ 侵入者ども！」

その言葉と共に上条とステイルは問答無用で地面へと叩き伏せられる。

「ぐ！」

「つ！」

苦痛に顔をゆがめる2人に向けアウレオルスは明確な憎悪のこもった瞳を向ける。

「わが思いを踏みにじり……わが殊勲をあざ笑い！ よかろう……この屈辱、貴様らの死で贖つてもらう！」

「待つて！」

「姫神……やめろ！」

上条の声は姫神を止めることはできない。

「分かる。私、あなたの気持ち」

「そいつは……もう……」

「でも違う、今のあなたは……」

「もつ・・・・お前を・・・・」

「知ってる。私、本当は！」

上条は動かぬ体を無理やり動かしその右手を口元に持つていいひとつする。

「本当のあなたは！」

アウレオルスが首元に鍼をさすその瞬間、上条は右手の指を歯でかんだ。いかなる異能の力でも打ち消す幻想殺し（イマジンブレイク）によつて上条を抑えつけていた戒めが消える。

「死ね！」

その一言が姫神秋沙の運命を強引に決定する。彼女の体がゆっくりと地面に倒れていく。

「姫神いいい！！」

駆け寄つた上条が素早く姫神の体を支えるが彼女はぐたりとしたまま動かない。

「んふはは・・・吸血殺し（ディープブラッド）など最早不要。悠然、約束は守つた。これでその女も己が血の因果から解き放たれたであろうつー！」

高笑いを続けるアウレオルスだったが直後に異変に気付いた。

自らの完全なる鍊金術『黄金練成（アルス＝マグナ）』。何人たりとも逆らつことはできぬ絶対的な決定力。その力を持つて明確な死を『えたはずの姫神の体がかすかに動いている。

「ん……はあーはあ……」

姫神が息を取り戻したのだ。

「な……我が黄金練成を打ち消したこと？ あり得ん、確かに姫神秋沙の死は確定した。その右手、聖域の秘術でも内包するか！？」

「『ちやちやうつせえ、んなこたもうどうだつていいんだよ』」

上条はアウレオルスの前に立ち上がる。彼と対等にやりあえる敵として。

「良いぜ……てめえが何でも思い通りにできるつてんなら、まずはそのふざけた幻想をぶち殺す！」

それが戦いのコングとなつた。

アウレオルスと上条は正面から睨みあつ。

ここまででは原作の通りだった。だが刹那、明らかに原作では起きない事象が発生した。

「降伏しなさい上条当麻。じゃなきやこの子を燃焼させちやうぞ？」

「

一体どこに隠れていたのかスタイルと同じ赤髪の少女が姿を現したのだ。

その両手は赤い装甲で覆われておりロボットの腕のようだ。

髪、瞳共に深紅でありその体の随所を覆うプロテクターも深紅。

その少女の姿に護はクリスが言っていたことや高杉が回してきた情報のことを思い出していた。

学園都市に許可なく侵入し、哀歌に重傷を負わせ、三沢塾を狙い、哀歌との戦いの後消息不明になつた炎を自在に操る侵入者。その名は火野咲耶。

「突然……なんのつもりだ？」

「笑止……あんたが奴を殺しやすいように手助けしてるだけじゃない」

咲耶はその装甲腕の掌に空いた穴をインデックに向けている。

上条が少しでも行動を起こせば容赦なくインデックスを焼こうと言ふのだろう。

「あんたにとつてこの子はかつては守りたいと願つた存在かもしれないけど……このこの子はあんたが守りたいと願つた3年前の少女じゃないわ。したがつてこの子をあなたが見殺しにするのを躊躇う理由はどこにもないのよ」

その言葉にアウレオルスの表情が揺れる。アウレオルスもかつての

インデックスのパートナーの一人。誰よりもインデックスを大切に思い。誰よりも彼女を救うために奔走し。その結果敗れた者だ。今ここにいるのがかつて自分を思ってくれたインデックスではないのは重々アウレオルスも理解していた。それでも目の前に横たわる少女の姿は間違いなく自分が救おうとした少女なのだ。

「惑わされてはいけない！ アウレオルス＝イザ　ト！」

その時部屋一帯に声が響いた。

その声の発生源にその場の全員の意識が向く。

そこには緋炎之護の柄を右手に握りしめ、入口に佇む護の姿があった。

「ここに倒れるかつてのインデックスのパートナーの一人、スタイルも自分がインデックスを救うためにできることだと信じていた役目を上条の右手によつて否定されたんだ。それでもスタイルはそれを受け止めて、これからもかつて自分が助けようとした少女に誓つた約束のために生きしていくことを選んだ。それに比べてあなたはどうなんだアウレオルス。今ここにいる少女はかつて助けようとした少女ではないから殺しても良いと一瞬でも思ったのならそれは間違いだよ。あなたは何のために力を持った？その力で何を守りたかった？自分のことをもう少女は覚えていない。だつたら殺しても構わない。そんな考えのもとにあなたは力を持つたわけじゃないはずだ！」

護の言葉に耐えきれなかつたのか、アウレオルスは顔を横にそむける。

「つるさいわね……その口燃焼させてあげようか？」

咲耶はその肩に背負っていた袋から日本刀を取り出した。

それを両手で握った途端、その刀身を深紅の炎が包み込む。

「私にはここでこの男に降りてもうわけにはいかないの。べらべらしゃべって勝手にこの男の気持ちを変えてもらつては困るのよ」

咲耶はその炎刀の切先を護に向ける。

「紅蓮の炎に沈め、重力掌握！」

咲耶が振り抜いた炎刀のその刀身を包み込む炎が一気に波となって護に襲い掛かる。

だが、護はそこで終わらなかつた。

護は通常ならあり得ないスピードで跳躍し横に長く迫る波を飛び越えた。

体内からルーが助けをしている関係で今の護は人間として出すことのできる最高の身体能力を駆使していた。

思わぬ事態に咲耶は第2波を放とうと再び炎刀を振りかざそうとするがそれより早く護の十文字槍が横なぎに振るわれる。

間一髪、その一撃を神業的な剣技で防いだ咲耶だが勢いは殺せずそのまま窓ガラスを割つて外に吹き飛ばされた。

最上階から一気に真下へと落ちていく咲耶。もろに地面に激突し凄

まじい音が響き渡った。

「上条、アウレオルスを君の右手でその混沌から救いあげてくれ！
僕はあの少女を、咲耶を抑える！」

「分かった。任せとけ護　」

首を縦に振り頷く上条に挾み手をし護は階段に向かつた。

護は階段を駆け下りながら思った。

上条さんならきっとアウレオルスをその右手で打ち破り、その彼が陥っている混沌と幻想をブチ壊してくれるはず。なら自分がやるべきことはその彼の戦いを邪魔する、自分が来たことで生まれた可能性の高い不確定要素となつた人物。火野咲耶を抑えることだ。哀歌と互角にやり合い重傷を負わせたような相手があの程度でやられるとは思えない。

「火野咲耶……彼女が何者かは知らないけど……作品の根本的な流れを変えさせるわけにはいかない……学園都市第4位、古門護の名にかけて！」

じある部屋での真相暴露（後書き）

さて と。

ここではアウレオルス対上条当麻、古門護対火野咲耶という構図が出来上がったわけですがなぜこいついう展開にしたかと申しますと非常に単純な理由です。

すばり護ではアウレオルスには勝てないからです！

そこをどうにか勝たせるのが2次創作を書く者の役目かもしぬのですが、正直アウレオルスに対して主人公である護を勝たせるのが無理がありすぎるのです。

なにしろ（ここでは描きませんでしたが）ローマ正教の超遠距離大魔術系術式をなんなく反射してしまうようなキャラですよ？ 無理です、お手上げです（涙）

なんか泣き言ばかりで情けないですが、とにかくまだ話は続きます。どうか飽きずに最後まで見てくださいるとうれしいです。

とある女神の過去履歴

その少女は、生み出された存在だった。

「君の名は火野咲耶だ。分かるかい？」

「ひの……さきや？」

「そうだ、火野咲耶だ。私達の大切な子供だ」

「たいせつな……」じども？』

『そうだ、絶対に絶対にお前を離しはしない。お前はずつと私達と共に有りつけけるんだ』

少女はその言葉を無邪気に信じた。

少女が幼い時を過ごしたのは大きな研究所だった。もっとも少女はその建物を研究所と理解していたわけではなく『大きなおうち』と思っていた。

無邪気に成長していく少女に対しても大人達が掛ける言葉は彼女にとってとても温かで少女は満ち足りた日々を送っていた。

そんな少女が一つ不思議に思っていたのが、時折研究所を訪れる大人達が彼女の『お父さん』や『お母さん』たちに怒鳴つていくことだつた。

成長するにつれ彼女はその大人達の怒声の中に自分の名が混じつて

いること。そして自分に關することで『お父さん』達や『お母さん』達が怒鳴られていることを理解した。

自分が何か悪いことをしたのだろうか、どうしてみんなに怒られなきやならないのか、それを少女は知りたくて知りたくてたまらなかつた。

そんなある日、少女は毎度のようにやつてきた『お父さん』や『お母さん』に怒鳴り散らす大人が敷地内の物置に入つていくのを見て後を追つた。少女は今まで一度もそこに入つたことはなかつた。少女にとつてその物置は全く未知の世界だつた。

物置に大人が入つていたのを確認した少女はずつとまつた。出てきたところを捕まえて話を聞くつもりだつた。どうして自分のことで『両親』達を怒鳴るのかと。

だが中に入つていたその大人はいつまでたつても出てこなかつた。

しびれを切らした彼女は物置の戸を開けた。次の瞬間彼女は誰かに突き飛ばされた。

「……」

突き飛ばされた衝撃で思いつきり腰を強打して悶絶する少女の耳に今まで聞いたことのない声が聞こえてきた。

「『めん。大丈夫だつた?』

その声に顔を上げた少女は絶句した。

目の前に立っていたのは自分と同じくらいの年齢で、その顔と着ている作業員風の服は血で染まつていて、その右手が剣のようになつていて、その剣のようになつた右手に先ほど物置に入つていた大人を串刺しにしている少年だったからだ。

絶句する少女の顔を見て少年はにこりと笑つた。

「君の顔を僕は知つてる。君は僕を知らないだらうけどね。さあ一緒に行こう。『敵』はもう始末した。後はこの『父さん』達や『母さん』達の目を盗んで逃げればいい」

「その……服についているのは血？ なんで……どうして……その腕は？」

少女の問いに少年は不思議そうに首をかしげた。

「どうしてって……僕らはそんなものだる？ ……もしかして君は自分が誰なのかを知らないの？」

「私が誰か？」

「そうか……」この『父さん』や『母さん』は顔を普通に育ててきたんだね。なら知らないのも無理ないね

「なによ、何の話！」

「君は人間じゃない」

少年の口から発せられた言葉に少女は全ての時間がとまつたよつて感じた。

「僕も君も造られたんだ、ここにいる『父さん』達に『母さん』達に」

少女が何か言つ前に少年はことばをつづけた。

「僕たちは『人造神計画』によつて造られた人造人間の内の1人。そしてその計画の数少ない成功した個体なんだ。成功つてのはこの場合自意識を……つまり心を持つていて自分で考えて行動できて『力』を持つている個体のことだけど僕と君はそれなんだよ」

「訳分からぬ！ 私は家に帰る！」

混乱しながら駆け出そうとする少女の手を少年の左手が掴んだ。

「…離して…」

「今戻れば君はきっと『父さん』達や『母さん』達に殺される。僕は君を死なせたくない」

「そんなはずない！ 人を殺した人なんかより私は『両親』といの方を選ぶ！」

かたくなに彼を拒む少女に対しても少年は静かに告げた。

「じゃあ、目の前に立っている大人たちは何をしてるの？」

その声に前を見つめた少女は絶対に認めたくない光景を目にした。

昨日まで自分にいつものように優しく接してくれていた『お父さん』

達や『お母さん』達がこちらに銃口を向けていた。

「なんで？ なんで？ なんで！？」

「試作体20001号、その子に『話した』のか」

「真実を知ることがいけない」と言つたの？『父さん』達

「（）で計画を破綻させるわけにはいかないのよ。もしあなた達をここから逃してしまつような事態になるのならその前にあなたごと咲耶も消す。まだ田覚めていない咲耶なら私達でも何とか殺せるわ

」

殺すという言葉が大人達の口から出てきたのが咲耶には信じられなかつた。

「これで分かつたろ？ ここの大人们はみんな僕達を試作体として見てる。人としては見ていないんだ」

「嘘……嘘よ！」

現実を認めなければその苦しみを認めなくて済む。咲耶はその現実から目をそむけることで心を保とうとしていた。

だが現実は残酷だった。

「撃て！」

どの大人が言ったのかは分からない。だがその号令のもと彼女が慕つていた『お父さん』や『お母さん』達がその手に握る拳銃が一斉

に火を噴いた。

彼女は目を閉じた。

その人生の最後まで彼女は目をそむけようとしていた。

「目をそむけても何も変わらないよ」

そんな少女に少年は言った。

「残酷な現実なんて」

少年は前を強く見据える。

「自分の手で切り裂くんだ！」

刹那、少女の目の前で奇跡が起きた。

迫ってきた拳銃弾を目の前の少年はその剣に変化させた両腕ですべて切り落としていたからだ。

「馬鹿な……試作体20001号、貴様は目覚めていなかつた失敗作だったはず。なぜ力を使える？」

「いつ僕が力を使えないって言った？ アンタたちが勝手に失敗と判断しただけじゃないか」

「それでは……」

「うん……『父さん』達や『母さん』達程度では僕を殺せない

よ」

少年は右手の腕剣の切先を目の前の大入達、研究者達に向ける。

「でも『両親』たちの体を切り刻むのはさすがに気が引けるから別
の方法で倒させて貰うよ」

少年のその言葉に研究者たちは次に何が来るのかと少年の方に全神
経を集中する。

だがその警戒していた攻撃は彼らが予想していた正面からではなく。
空からやってきた。

突然湧き出した雷雲から研究者達の頭上に向けて、落雷が襲つたの
だ。

その直撃を受けた研究者達がどうなったかは言つまでもない。

その落雷の衝撃で氣絶した咲耶を背負い少年は堂々と正門から研究
所の外に出た。

「さて……行こうか。外の世界へ」

この時から少女と少年の逃走劇は始まった。

ヒカル女神の過去履歴（後書き）

今回は咲耶姫こと火野咲耶の過去について書いてみました。

この話で咲耶を研究所から連れ出した少年。彼については実のところプロットなどがありません。

どのようにして元ひびきの後関わっていくか楽しみにしていてください。

とある女神の最終切札

護は、三沢塾の正面入り口から正面に田を向けていた。

護は三沢塾最上階での闘いで侵入者、火野咲耶を緋炎之護により窓の外に吹きとばしたが哀歌に重傷を負わせ、自分も浅からぬ重傷を負いながらも逃げおおせたような相手がそう簡単に死ぬはずがないという予感があつた。

そしてその予感は間違つていなかつた。

「つー」

真上からの気配に素早く前に前転した護は先ほどまで自分のいた位置に日本刀が突き刺さるのを見た。

「やつぱり生きてたんだね。火野咲耶さん」

「確かにあの高さから落ちたら、第2形態の私でも重傷は避けられなかつたかもしませんね。ですが最終態の状態になつてしまえばあの程度では傷一つ付きません」

その喋り方に違和感を覚えた護だつたが、直後に違和感の理由に気が付いた。

地面に突き刺さった日本刀を引く抜きこむらに体を向けた咲耶は先ほどと姿が変つていたのだ。

言つならば、哀歌が竜人に完全変化した時のような感覚が護の肌に

突き刺さつた。

とは言つても外見はそれほど変わつてゐるわけではない。ロングヘア一はそのままだしその髪、および瞳の色も深紅のままだ。

だが來ているのは先ほどまで装着していたプロテクターで所々補強されたスーツではなく、高校で習う歴史の授業の教科書の最初の方、飛鳥時代や平安時代の女の人が着ていそな服装になつてゐる。その服もやはり深紅。

それは護は知る由もなかつたが、彼女が哀歌と戦つた際に見せた第3段階の姿。彼女の中に宿ると言つ『咲耶姫』の具現した状態の姿だつた。

「なるほどね あの哀歌に重傷を負わせたんだから絶対に何か力を持つてゐる人だと思つたけどそういうことなんだ
・君は哀歌と同じ人ならざる者なんだね？」

「さすがはウォールのリーダーと言つところかしら。正解よ。確かに私は人ならざる者。正確にはこの国を守る神の一人ね」

「神 か。僕はウォールリーダーになつてから一度だけ神つて名乗る人と戦つたけどその人よりはあなたの方がまだ互角にやれそうだ」

「第2形態の火野咲耶を吹き飛ばせたくらいで図に乗らない方が良いですよ」

護の言葉に火野咲耶 いや火野咲耶の中に宿る女神は口元にうすら笑いを浮かべた。

「今の私はまさしく人ならざる者。能力を封じられ体内の異能の力も半分以上封じられている今のあなたでは私には勝てないですよ？」

「そう断言もできないと思うけどね。上条当麻がアウレオルスを破れば僕に力は戻る」

護の言葉に咲耶は訝しげな顔をした。

「なぜ断言できるの？」

「僕は知ってるからだよ。あの人が必ず勝つことを

「予言者とでも言つつもりかしら？」

「さあ？ どうとも解釈してくれてかまわないですよ。ただ・・・」

護は一拍開けて続けた。

「あなたが人外の者、本来この世界の住人じゃない存在なように僕もちょっと変わってるんですよ」

「あなたも人ならざる者とでも言つつもりかしら？」

「そこは想像にお任せします。今はそんな話をしている暇なんてないんじゃないですか？」

護の言葉にはっとした咲耶が身構えるより早く護は、緋炎之護を構

えながら勢いよく跳んだ。

距離は1メートルもない。あつという間に咲耶の前に着地した護は緋炎之護を勢いよく突きいれたが咲耶はその突きいれられた槍をそのまま右手に持つ日本刀で横に払いその狙いをそらせる。

予想外の力で槍の狙いを外された護は間髪入れずに緋炎之護を今度は横なぎに払うがその攻撃を咲耶は軽そうに飛び上がって躱す。

そのまま3メートル近くの高さまで飛び上がった咲耶はその位置からぐるぐると前回転しながら護田がけて急速に落下してくる。

護が槍を掲げて防御の構えを取った直後、緋炎之護の柄を咲耶の日本刀が切り裂きそのまま護の胸を切り裂く。

「ぐわあああ！」

回転力まで利用したあり得ない斬撃術で切り裂かれた緋炎之護は現れた時と同じように空間に溶け込むように消えていく。だが護にはそれを確かめるすべなく斬撃時の衝撃に2メートルほど後方に飛ばされ地面を転がって一步も動けない状態になつてから初めて気付いた。

「くそ……緋炎之護……が……」

「大口をたたいた割には大したことがないのねウォールリーダ。それが本気かしら？」

満足に体を動かすこともできない護を見て咲耶は残念そうな表情を浮かべた。

「あなたの部下の竜人少女はなかなか良い相手だつたから。その上司のあなたには期待していたんだけど跳んだ期待はずれだったようね。今の攻撃は本気の10分の1もだしていないのだけど」

「あなたは・・・・・だれなんだ？」

「さつきも多少は説明したと思うしあなたに教える必要はないのだけど冥土の土産に教えてあげましょう。あなたが察した通り私は人じゃない。この体は人のものだけど、この力や私と言ふ意識は人ならざる者のものよ。私の名は木花咲耶姫。この国の神話に出てくる女神の1人よ」

「そんな神なんて知らない・・・・・それにこの国の神話の神なんて多すぎて・・・・・ありがたみとか湧かないし・・・・・」

「そうね・・・・・確かに今は私達のような小さな神はその存在が薄れていると思うわ。なにしろ今の中でも信仰されている宗教・・・・・3大宗教と呼ばれる十字教、イスラム教、仏教では神は絶対唯一の存在でそれ以外に神はないことになつていてるのね。でもそういう言つた宗教の中にも私達のような小さな神の影は見え隠れしているわ。あなたでも十字教やイスラム教で語られる天使や悪魔ぐらいは知つてているでしょう？」

「羽・・・・・が生えた天使と・・・・・か角が生えた悪魔とか・・・・・なら」

「同じように仏教では地獄の鬼や魔羅^{マーラ}、第六天魔王と呼ばれる存在や仏や菩薩と言つた神に準ずる存在が語られているわ。つまりどの宗教でも人間ではまねできない力をもつ『何か』の存在自体は否定

していないのよ。だいたい十字教では『天使の力』なんでももの的存在が公認されているくらいなのだしね」

咲耶は愉快そうにその日本刀をくるくると回した。

「その人間ならざる何かの存在が認められているか認められないかの違いはたった一つなのよ。それは積極的に人と関わり人の前に姿を見せるかそうじやないのかということだけ。私のような小宗派の神は人にとつて重要ながら現代ではほとんど意識されないのが特徴なの」

咲耶の言葉に対してもはや護は返すことができない。いつの間に人払いを使われたのか周りには人影もなく助けが来るとも思えない。

「それだから本来は神秘性が増してありがたみがます氣がするのだけど。人間はそうは考えないようね・・・正確にはこの国に今住む人間だけ」

咲耶はくるくる回していた日本刀を真上にピンと掲げる。

「講義はここまでよ。そろそろ終わりにしましよう？」

掲げられた日本刀に炎の色としては濃すぎる深紅の炎が纏っていく。

「火照命、火須勢理命、火遠理命、わが炎を纏いて現世にまire! ワシツヨ

」

咲耶姫の言葉と同時に彼女の周りに突然現れた3つの深紅の炎が人の形をなしていく。

その姿は赤き肌をした巨人。

護が知るスタイルのイノケンティウスのような『人の形をした炎』ではなく『炎が具現化した人間』のような怪物だ。

1人は剣、1人は槍、1人は戦斧を持っている。何かの力を使わなくとも今の護なら巨人1体の拳の一撃で死にいたるだろう。

「私をたつた1度ではあつたけど吹き飛ばしたことにも免じて神の力で殺してあげる。感謝することね。痛みを感じる間もなく死ねるわよ」

彼女の言葉と共に3体の巨人がそれぞれの武器を振り上げる。

「そうか……」

喉の奥から絞り出すような声で護は咲耶姫に向つて告げた。

「神様つてのは……弱者ですら……いたぶ……り殺す……悪趣味な奴だつたんだね」

その言葉には答えず咲耶は右手を上から下におろす。それを合図に振り下ろされた巨人たちの武器が護の体を問答無用で粉みじんに変える。

そうでなければおかしかった。

次の瞬間咲耶は疑問を覚えた。護にはいま力はない。アウレオルスにより能力は封じられ理屈は分からぬが魔術を使った力も現在はほぼ封じているために使用不可能なはずである。

ではなぜ田の前の少年は振り下ろされているはずの巨人たちの武器をその持ち主たちごと宙に浮かばせているのか？

「なんで……あなたの……第4位の重力掌握^{グラビティマスター}の力はアウレオルスが封じてる。今のあなたに力が使えるはずはない！なんであなたは力を持つている？」

「…………そんなの…………簡単だよ…………」

相変わらず倒れたまま、それでも視線は目の前の巨人たちから離さず護は答えた。

「アウレオルスが上条当麻に負けたから…………だよ。言ったよね上条はきっと勝つって」

正確には上条の演技力に臆したアウレオルスの自滅であり、そのアウレオルス＝マグナの効力喪失は彼自身が招いたものなのだが護はあってそれには触れない。触れる必要がないからだ。

「そして……上条が勝てば僕には……必然的に能力が戻る。これからが本当の戦いだよ『咲耶姫』さん！」

3体の巨人は一気に高空へと上げられていき、次の瞬間雲の上から地面へと落下した。

そう咲耶姫の頭上へと。

「消えよ……」

咲耶姫の言葉により彼女の真上に落ちてくる寸前に3体の巨人の姿は消える。

「グラビティックハンマー
重力鉄槌！」

護が握りこぶしを振ると同時に咲耶姫を真上から異常な重力が叩きつぶしにかかる。

「私を……舐めるな！」

だが咲耶姫はその重力による重圧からなんとか横に逃れ即座に日本刀を構える。

「神名解放！ その有りし姿を具現せよ！」

彼女の言葉と共にその手に握る日本刀が光に包まれ閃光を走らせる。

「くー？」

そのまぶしきる光に思わず手で目をかばった護だったが光はすぐに消えた。

その先にあつた光景に護は目を見張った。

彼女が持っていたはずの日本刀は巨大な大剣に姿を変えている。

禍々しい深紅の大剣。全長3メートルをこす巨大な凶器の刀身が光を反射し輝く。

「こ」の得物の名は天之尾羽張^{アメノヲハバリ}。日本神話に登場する最上級の神具。

わが父大山積神の属神である山津見八神を生んだ炎の神、火之迦具土神を殺した剣。炎の神の体を切り裂いたことでこの剣は単なる神剣というだけでなく炎をつかさどる特性も手に入れた。あの日本刀はこれを隠すための偽装にすぎないわ。神さえ殺せるこの剣を止めることはできるかしら？」

「なるほど、それが切り札ってわけか」

「それはあなたが判断しなさい。とにかくこの剣による一撃を喰らつて……」

咲耶姫は天之尾羽張を護に向けて水平に構える。

「ただ済むとは思わないことね！」

刹那、一瞬という言葉では表現できない速度で咲耶姫の体が移動し、瞬時に護の目の前に移動する。

これを護は避けることは事実上不可能だった。すでに護の体は限界を超えていた。能力が戻ったとはいえ先ほどの斬撃をもろに受けた護の体に蓄積しているダメージはすでに人間の許容量を超えている。立つて能力を使用するだけでやつとな護に攻撃を避けられるはずがない。

だが護の顔に絶望はなかった。目の前の敵に間違いなく殺されるであらう状況で護は唇を歪めて笑いを作っていた。

そのことに違和感を覚えた咲耶姫だがそこで攻撃を止める道理はない。

炎を纏つた大剣が、今度こそ護の体を切り裂くべく横になぎ払われた。

だが、振り抜かれたその剣が護を切り裂くことはなかつた。

その剣が護に届くか届かないかのギリギリのところで突きだされた右手が剣を止めていた。

あらゆる異能を問答無用で打ち消す右手。その右手に宿る力は『幻想殺し（イマジンブレイカ）』。

「悪い、護。アウレオルスの説得に時間がかかつちまつた」

その力を持つ者はこの世でただ一人、その名は上条当麻。

右手に接触した途端、天之尾羽張は姿を崩し元の日本刀に戻つていく。

「馬鹿な . . . 天之尾羽張を無効にした？ その右手 その力は まさかここまでとは 」

「火野咲耶だつたよな . . . 神様だか何だか知れねえが他人を利用して傷付け、その上俺の親友を傷付けて、必死に姫神を救うおうとした人間を殺そうってんなら まずは、その幻想をぶち殺す！」

その言葉と共に繰り出された上条の拳は、神である咲耶姫の顔をクリーンヒットした。その拳の勢いに押され咲耶姫の体は地面に倒れる。

それと同時に彼女の姿が変わつていった。

古風な和服の姿から、細めの体を赤色のプロテクターで部分的に装甲したスーツを着た黒髪のショートヘアの少女の姿へと変わっていく。

そのままどさと地面に倒れた彼女は身動き一つしない。

恐らく意識を失つて居るのだろう。

「上条、お前腕を失わなかつたのか」

「？ 何言つてんだよぴんぴんしてるぜ。お前の言葉がけつこう効いたみたいだ。最終的にアウレオルスが自分から術を解いて . . . 思い出すのも嫌な姿になつていたスタイルとかも元に戻つた」

「そうか」

護がこの戦いで避けたかったのは、話の大筋の流れが不確定要素の存在により改変されてしまうことだった。

だが結果的に護はアウレオルスが上条の切断された右腕から生えた竜の顎に呑みこまれ記憶をなくすという事実を改変してしまったことになる。

アウレオルスは記憶を失つておらず、上条も右手を切断されではない。

それがどう影響してくるかは護にも予想できなかつた。

そして護の思考はそこまでが限界だった。

「おこ……しつかりしん……？　ま……も……」

だんだんと遠くなつていいく上条の声を聞きながら護は意識を手放した。

とある女神の最終切札（後書き）

アウレオルス編終了です！

結局上条さんがオリキャラを打ち破るという反則的な展開になつてしまつた自分を笑つてやってください（涙）

いろいろと満足いかない部分があると思いますがご容赦ください。

次の回ではアウレオルスと火野咲耶とアウレオルスのこの後と、時系列的に次になるアクセラレータおよび妹達の回を絡めていきたいと思っています。

今回結果的に時系列を改変してしまつた謹。その影響がどう出るのか。それは私自身にも予想が付きません。

この話で49話田、次でついに50話田となります。

これからもまだこの作品は続きますが暖かく見守つていただければ幸いです。

あと最近感想とかが少ないので少しあびしいです。

気が向いたら送つてくださいと幸いです。

完結設定　まだ続きます。

「…………さん…………まも…………さん」

ぽんやりとする意識の中で護は懐かしい声、久しく聞かなかつた声を聞いた気がした。

そしてすぐにその声の正体に気付いた。護が守りつとした少女、佐天涼子だ。

「佐天さんー?」

ガバッとベットから飛び起きてすぐに胸のあたりを中心に激痛が走りまた倒れ込む護の手を佐天は握つた。

その女の子の感触に思わず赤くなる護だが直後に彼女の瞳に涙が溢れていることに気付いた。

「(また佐天さんに心配かけちゃつたみたいだな)」

「護さん私のためにまた無茶をしたんじゃないですか?」

「いやこれはスキルアウトにやられて」

「嘘つかないでくださいー。あのカエル顔のお医者さんから全部事情は聞きました! なんでそんな無茶ばっかりするんですか!」

「事情を聞いた?どこまで?」

「護さんが学園都市の裏側で組織を率いて活動しているっていうところから学園都市の第1位のレベル5と戦っているところで全部です！」

あの医者いつたいどうやつしてそこまでの情報を？と非常に疑問を覚えた護だったが今は佐天さんに対応しなければならない。

「…………佐天さんはその医者の話を信じるの？」

「護さんがセブンスマスでの事件の後から何度もいなくなったりアパートの部屋が何日も開け放しだったりすることを考えればお医者さんの言つことあながち嘘じやないかもと思います」

護を見つめる佐天の目は本気そのものだ。ふと、護は誤魔化しきれないなと思った。

「ふつ…………面白っこ」と言つんだねそのお医者さんは。でもそれは違…………」

「それで間違ってはいないのではないか少年」

突然割り込んできた声に護は全身の筋肉が急激に萎縮する感覚を覚えた。

忘れもしない」の声。今回護が一切刃が立たなかつた相手。

鍊金術師アウレオルス＝イザ　トの声だ。

「そんなに恐れることはない。もう私に黄金練成（アルス＝マグナ）は使えない。今は少年の敵ではない」

「え…………？ なんで？」

「私の黄金練成（アルス＝マグナ）は、三沢塾の2000人の生徒を操り、一斉に詠唱させることで作業効率を極端に引き上げ、僅か半日で発動させたものだ。よつてそれら全てを放棄した私には使えんのだ。やるうとすれば100年単位の時間が必要になってしまったう」

護はこんな展開を予測してはいなかつた。もしアウレオルスが敵でなくなるのなら確かにありがたい話ではあるのだが、この事象が作品にどんな影響を与えるかは計り知れない。

「あなたはどうして上条の説得に応じたんです？ あれだけショックを受け自暴自棄になつていたと言つのに……」

「思い出されたのだ。私が彼女のパートナーだったときに願つたことを。私は本来なら彼女が救われたことを素直に喜ぶべきだったのだ。だが自分のしてきたことが全て無にされた感覚に呑まれてしまい……君達を攻撃してしまつた。君の言葉は胸に突き刺さつた。あの言葉で私は正気に戻れたのだ。感謝する少年」

アウレオルスの意外な言葉に護は氣恥ずかしそうに手を振つた。

「そんなに褒めないで下さいよ……」

「ところで護さん。今の会話聞いてる限りやっぱり私に内緒で戦つてるんですね？」

佐天がいふことをつづかり忘れて喋つてしまつたことに今更気付い

た護の額から嫌な汗が流れる。

「仕方ないわね護くんは。でもそんなところも含めてウォールリー
ダー足り得てると思つけど」

その女声を聞いて護は思わずカーテンで仕切られている向こう側を
凝視した。

「やじにいるのは、クリス？」

「大正解よ、護くん。いやウォールリーダー」

護の目の前で向こうからカーテンが開いていきその先にウォール構
成員にして学園都市最強の念動力者。クリス・エバーフレイヤ。

「良かつた・・・・無事だつたんだねクリス」

「お医者の先生によるとかなり危なかつたみたいだけどなんとか大
丈夫。でもしばらくは活動は無理みたい」

「そりか・・・・まあ、アイルランドからこのかた無理してば
っかりだつたからね・・・・ここは無理せずゆつくり休
んだ方が良いかもね」

「心配してくれてありがとう。ところで護くん・・・・
またその子の前で自分の秘密を話しちゃつてるけど意識してる？」

「ん？」と後ろを振り返つた護はとても不機嫌になつてゐる佐天さんを
視界にとらえた。

「佐天さん？」

「！」今まで暴露しちやつた以上素直に認めた方が良いよと思つよ？」

無責任に煽るクリスにそれでも暗部の人間か！と怒鳴りつけたくなる護だつたが、たしかに事態がここまで来てしまつた以上全部ウソだと言つ手は使えないだろうと判断するしかなかつた。

「あ・・・佐天さん、黙つていてごめん。お医者さんが君に話したことは全部本当だよ」

「どうして黙つてたんですか」

「それを言つたら佐天さんを危険にさらせてしまうと思つたからだよ。それに裏側の闇で活動することになつた僕に佐天さんが関わつて同じ闇に呑まれないようになつたから」

「事情も分からずただ待つているのも辛いんですよー。」

そう言われて護は、原作の中で美琴が重傷の上条に放つた言葉を思い出した。

『人がどういう気持ちでアンタを待つてゐるのか、そいつを一度でも味わつてみなさい！病院のベッドに寝つ転がつて、安全地帯で見ていることしかできない者の気持ちを味わつてみなさい！』

その言葉はまさしく今の佐天さんの心境を端的にあらわしてこるよう護は感じた。

「さう・・・・だよね。今までごめん佐天さん」

「もうそれは良いですよ護さん。ただ一つお願ひしても良いですか？」

「なに？」

「護さんの手助けをせてもいいですか？」

その言葉に護とクリスはほぼ同時に聞き返してしまった。

「いま、なんと？」

「護さんが率いている組織の一員となつて手助けしたいといふ」と

「ええと……そればつまり……」
「なんですか？」

ストレート過ぎる返答にて護は思わずクリスと顔を見合わせた。

「それについてはすぐに答えられない。仲間とも話合わないといけないから一週間だけ待ってくれる？ 検討はするから」

護の言葉に若干不満そうな佐天だが一応頷いたので護は深く安堵した。

その後、今度は初春や美琴と共に見舞いに来るといって佐天は帰つていき、護とクリスはお互にベッドの上に横たわりながら今後について語り合つことになった。

「護くんとしてはどうしたいのよ彼女のこと」

「僕はできればあの人を危険な目にあわせたくない。でもここまで知られちゃった以上佐天さんはこの件に関しては一切退かないかもしない」

「それだけじゃないわ。私達ウォールの敵対組織が佐天さんと私達のつながりに気づけば彼女を狙う可能性がある。これは彼女を強引にでも私達のメンバーにして守るしかないんじゃない？」

「とは言つても暗部に佐天さんを入れるのは……それに佐天さんを枷として利用しているアレイスターが許可するかどうか……」

「それだつたらあえて表向きは暗部ではなくすれば良いんじゃないかな」

「え？」

「それについては私から話そう少年」

今まで黙つて2人の会話を聞いていたアウレオルスが口を開いた。

「今現時点では私はローマ正教を敵に回しているため迂闊にローマ勢力圏の中を動けない。同じように君達が倒した私の協力者だった少女…………火野咲耶も同じく事情は良く分からないが今はこの街にいる必要があるそうだ。そこで提案なのだが…………その佐天という子と私に火野咲耶を合わせた別動班を作つたらどうだらうか？」

アウレオルスの意外な提案に護は驚いた。

「今私は黄金練成こそ扱えないが私のダニーが使っていた瞬間鍊金（リメン＝マグナ）などの通常の鍊金術は扱える。火野咲耶といふ少女の実力については君が一番知っているはずだ。我々なら君の言つ少女を守りつつ別動班として動くことができると思うのだが」

「なんで僕達と戦ったあなたが協力しようと思つたんです？」

「必然……君達との戦いで気付いたのだ。彼女の過去のパートナーの一人であり今は彼女の記憶の中には残っていないにも関わらずたつた一つの誓いの為に今も彼女を守り続けているあの神父のように私も影である子を守り続けるべきなのだとな。今彼女は学園都市で保護されている。であれば私もこの街で彼女を守る必要がある。そこで街に残る代償として君に協力させて貰いたいのだ」

「アウレオルスが残る理由は分かつたけど火野咲耶の方は？」

「それは彼女自身に聞くと良い」

アウレオルスが目くばせする方に護の視線が移るがそこには病室のスライド式のドアがあるだけだ。

「いなide?」

「そのドアの向ひ側でさつきから彼女は待つていてる」

なに?と驚愕した護の前で扉が横にスライドしていき、開ききつた扉の前に件の火野咲耶の姿が現れた。

その両脇にはウォールメンバーの御坂美希と高杉宗兵が付いている。

「美希！ 高杉！ 無事だつたんだ！」

「そこのアウレオルスの偽物と交戦していく連絡できなかつたんだ。
すまんリーダー！」

「結構苦戦したのにまさか偽物ダミーだったとはね。あとでアウレオルス
本人から聞いて卒倒するかと思ったわよ」

苦笑しつつ語る2人の姿に安堵しながら護は目の前の火野咲耶に意
識を向けた。

その姿は護と戦つたときは大きく変わつており、ロングヘア－は
ショートヘア－になつており、赤髪は黒髪になつており体の各所に
取り付けられていた深紅のプロテクターは外され、今は入院服を着
ている。

その瞳に護と戦つた時のような好戦的な光はないように見えるが、
哀歌に重傷を負わせたような相手。しかも言うならば今回の事件の
苦戦の原因を作つた黒幕的な存在相手に警戒しないわけがない。自
然と護の体に緊張が走つた。

「心配しないでウォールリーダー。今の状態の私には能力は一切使
えないです」

そんな護の気持ちを察したのか咲耶は遠慮がちに言つた。

「どういふことなの？」

「私が能力を使うには第2段階に変化しないといけないんです。通常の状態、つまり今の状態の私は民間人となんら変わらないんです。多分街の不良程度にもやられちゃうと思います」

そう咲耶は言うが、仲間を殺しかけた相手にそりやすやすと心を開けるわけがない。

「たとえ君の言つことが本当だとしても、僕は君を信用できない。君がしたことによつてクリスは『僕』の手で死にかけ哀歌は重傷を負つた．．．．それになんで君が敵だった僕に協力するんだ？」

咲耶は無言でうつむいた。

だがしばらくして意を決したように顔を上げて話し始めた。

「護さんの仲間を傷付けたことは一方的に私が悪いです．．．．．本当にごめんなさい！」

そういうて頭を下げた彼女の両目から涙があふれてきたのを見て護は困惑した。声の調子やしぐさ。そしてその表情は本当に本心から悔み後悔しているよつに見えたからだ。

「私はただこの街で再開されよつとしている計画を止めたかっただけなんです．．．．．．．．．」

「計画つて．．．．．お前の中にいるつていう別人格みたいな奴が言つてたやつのことか？ 確か人造神計画とか．．．．．．．．．」

「その通りです高杉さん。ウォールリーダーをはじめとした皆さん
がみたとおり私は神の力をもつ人間なんです。そしてそんな力を持つ
人間を作り出すための計画が『人造神計画』という名なんです」

「その人造神計画とやらを吉沢大学が行つてたつてのか？　じゃあ
研究所が突如廃墟になつたのはおまえさんが？」

「ええ、そうです」

「じゃあお前はあそこで生み出されたのか？」

「いいえ、違います。私が生み出されたのはここじゃない。場所は
正確に覚えてはいなきけどここじゃないどこかだと思います。山の
中にある研究所でした」

高杉と咲耶の会話を聞いていた護が口を開いた。

「それじゃあ、なんで付属研究所を廃墟にしたの？」

「そこでも研究があこなわれていたからです。それも言葉では語れ
ないようなむごい研究を行つっていたからですよ」

「それを止めるために研究所を襲撃して廃墟にしたと？　じゃあ、
なんで壊滅させたはずの研究所にまた來たの？」

「それは……」の街でもう一度研究が再開されようとして
いたからです。私のかけがえのない相棒パートナーを利用して

「相棒……」というと、つまり君以外に存在する人造神の一
人ということなのかな？」

「ええ、彼も人造神の1人。そして私を研究所から連れ出してくれた仲間なんです」

「その相棒さんがなんでその計画を再開した奴らに利用されようとしているんだ？ 人造神というからには君と同じような力をもつ存在なんだろ？ 敵に利用されるなんて」

「彼は自分から彼らに協力してるんです」

「ちょっと待て！」

高杉は思わず声を張り上げた。話が良く理解できなくなっていたのだ。

「お前をその研究者達の研究施設から逃したその相棒さんがなんでその敵に協力してるんだ？ 話がおかしいだろ！」

「私にも分からんないです。ただ様々の所から伝わってくる情報を集めると近々彼を利用して人造神計画に関わることを始めるという可能性が浮かび上がってきたんです。だから私はこの街に来たんです。彼らがそのなかを行おうとしているという情報があつた吉沢大学付属研究所跡に・・・・ですがその情報は誤りでした。あそこは本当にただの廃墟だった。そこでもう一つ行われる可能性のある施設として挙げられていた三沢塾に向ったんです。そうしたらそこはすでにアウレオルスさんが制圧していた。私はアウレオルスさんに接触し恐らく来るであろうあなた達の情報を伝えました。私は三沢塾の占拠状態ができるだけ長く続けておきたかったです」

「だがそれは僕達により阻止されてしまった……」「

「はい。でもかえって良かったのかもしません。あの一件で三沢塾は閉鎖に追い込まれたそのうでの彼らの計画を一時的にせよ頓挫させることができたわけですから」

咲耶はそこまで話しあえて護の瞳をじっと見つめた。

「ですが私の相棒がやつらの手にある限り、彼らはまた計画を再開させようとすると思います。そしていまその組織はおそらく学園都市内部にいると思います。だから私はまだこの街にいなければいけないんです。でもこの街にいるには理由がいる。だから護さんの手伝いといつことでウォールに協力させて貰えないかと思つんです」

一気に喋った咲耶に対しても護はしばし無言だった。

数刻後に護が口にしたのは重い言葉だった。

「僕は君の策略によつて仲間を失いかけた・・・・・・そんな僕が君に守りたいと願つた人のお守を任せられると思つ?」「

その言葉に咲耶は下を向いた。護の言葉はその通りだつたからだ。

「復讐は先見の明をなくさせる」「

突然クリスが放つた言葉に全員の視線が彼女に向いた。

「Jの言葉はフランスの英雄、ナポレオンの名言よ。それとも一つ。賢者は敵にさえも愛情を注ぐので、敵はその支配下にはこる。これはあるチベットの高僧の言葉よ。護くん、リーダーであるあな

たの気持ちは良く分かるわ。だけど現時点ではあの子を守るためには咲耶さんの力が必要よ…………彼女は敵だった。そして今ももしかしたら敵かもしけない。だけど今護くんが復讐の気持ちを抑えて彼女の要件を受ければ良い結果が待ってるかもしれない。それにかけてみない？ 私はそれにかけたいと思つ

クリスの言葉に咲耶は祈るような眼で護を見つめる。

護は咲耶を見、クリスを見、高杉や美希、アウレオルスをぐるりと見て一息溜息をついた。

そして咲耶の方を真っすぐに見た。

「分かつたよ。今は君を信じる。僕が守りうとしている佐天さんを守つてほしい。ただ君が再び僕らの敵となつた時には…………君を僕は絶対に許さないと心に留めておいてほしい」

護は右手を咲耶に向けて差し出した。

「有難うござります！」

差し出された手に咲耶も顔全体で喜びを表しながらその手を握った。

のちに裏側では『ウォールの別働隊』として表では『学園都市最高の万屋』と知られることになるSAS（佐天、アウレオルス、咲耶のイーシャルから取られた）はこの時産声を上げた。

そんな風に護を中心と人々の間で話が交わされていたころ、学園都市の学区の内の一つ、元々未来的な学園都市内部の学区の中でも特に未来未来な場所と称される地下学区第22学区で1人の男がある建物の中、壁際で震えていた。

男の視線の先には法衣である袈裟を纏った少女がいる。

黒の長髪に黄色の瞳の少女の手には数珠で鞘が巻かれている一振りの太刀が握られている。

強い瞳で見つめる少女に対しても腰から拳銃を抜き放ち彼女に向かながら叫んだ。

「俺を殺せば、この街全てを敵に回すことになるぞ！」

その言葉に少女は薄く笑うと一言返した。

「そんなこと……百も承知」

彼女はおのれの持つ刀の鞘に手をかけた。

それを見て拳銃の照準を彼女の頭に向ける男の耳に少女の言葉が突き刺さる。

「数珠丸よ、邪を……祓え！」

建物内に男の叫びと銃声がこだまし、その銃声は1発で途切れた。

その建物から銃声が響くことは一度となかった。

三沢塾編に今回の話で区切りをつけました。

咲耶が味方に付いたりアウレオルスが味方になつたりするあたりはご都合主義すぎるとの批評が飛びそうですがあくまでも2次創作作品として理解をお願いしたいと思います。

さて、次回からは学園都市最強のレベル5をめぐる話に移っていきます。ちなみに今回の話のラストで登場した謎の法衣少女？も絡む予定です。そんな話になるか期待しておいてください！

それと今回の投稿である世界の重力掌握は初投稿いりこようやく第50話田に到達しました！

これも読者のみなさんの「指摘や励ましのおかげです。そもそもありがとうございます！」といいます！ そしてこれからもよろしくお願いします！

じある学区の都市伝説

「鈴の尼さん？」

「はい。最近噂になつてゐる都市伝説で第22学区のどこかを歩いて
いるどこからか鈴の音が聞こえることがある。それを聞いてしま
つた人は刀をもつた尼さんに追いかけられ刀で斬り殺されてしまふ
．．．．．という話なんですけど」

「それって根も葉もない都市伝説ではないの？」

咲耶の言葉に佐天は首を横にふつた。

「話だけが広がつてゐるならただの都市伝説なんだけど
実際にあの学区で先週刀による殺傷事件があつたのよ。なんか珍し
く警察が出て事故処理したみたいだけど」

「少女、その情報はどこから？」

「友達のジャッジメントからです」

「わうか．．．．．．ならば正確な情報であるうな

アウレオルスは優雅に紅茶の入ったコップを口に運びながら田の前の
イスに座る今回の依頼者を見た。

その依頼者は白衣を着た若い女．．．．．いや少女だった。

年齢は17歳程で、白衣を着てゐる。ウェーブがかかつた髪をして

おりギヨ 口田が印象的な少女である。

「indeed . . . 噂通り情報収集能力は高い . . . と。ここなら頼めそうね」

「ぬのたばじのぶ 布束砥信さん . . . でしたよね。それで依頼というのは 」

「依頼は単純よ その噂の切り裂き魔が実在するか調査してほしいと」「う」とよ」

砥信以外の3人は顔を見合せた。

そんな依頼をされてもまずどうやって噂の人物と接触すれば良いか分からぬ。

3人の表情から心を読みとつたのか砥信はふと口元を緩めた。

「実在を確認する方法なら私が教える」

思わぬ言葉に3人の視線が砥信に注がれた。

「表向きには1人だけがその噂の人物の被害にあつたことになつてゐる。しかし、実際には他にも何人も被害者がいる。表沙汰にならないだけ。そして被害に遭つた者たちに共通していることが一つある。それは 」

砥信は自分が羽織つてゐる白衣をバサッと宙に広げた。

「白衣を着ていたのだ」

「つまりその切り裂き魔が狙うのは白衣を着た人物だつたつてことなですか？」

「exactlly……正確に言つと白衣を着た研究者だがね」

「君は、研究者なのか？」

アウレオルスの問いを抵信は軽く頷いて肯定する。

「その歳で研究者とは……驚きだな少女」

「そんなことはどうでも良い。それより依頼を受けるか拒否するかどうか決めてくれ」

「そうだね……どうする咲耶？」

「どうするって……アウレオルスはどう思ひ？？」

「そうだな……依頼が依頼だけに即答は難しいだろうな。という訳で2日間だけ待つてくれないだろうか少女。必ず結論は出す」

「 geht ただし2日間だけだ。それ以上は待てない。それまでに頼む。 それでは失礼するよ」

ドアから抵信が出て行つたのを確認して佐天がため息をついた。

「歳は対して変わらないはずなのにすぐ大人っぽいあの子」

「それはともかくとして……この問題は護さんたちウォールの皆さんと決めなきゃいけないわ」

「うむ……それは確かだな。早急に連絡を取る必要があるな

」

そう言つてアウレオルスは受話器をとつた。

30分後、彼らSASの事務所、第7学区の元喫茶店の建物の中にウォールメンバー6人が到着した。

「それで……本当にその女の子は布束砥信と名乗ったんだね？」

「はい、そうですけど……なにか護さんは知ってるんですか？」

「うん……その少女は僕らが次に介入を予定している計画の参加者の一人なんだ」

「計画？」

首を傾げる佐天に高杉が解説をする。

「絶対能力進化計画っていう名の計画なんだが……これはいわゆる裏側の者による計画であって表の力で止めることは難しだよ。だから俺たち暗部組織しか計画を止めることができねえんだ」

「その計画とはなんなのですかウォールリーダー？」

咲耶の問いに護は頷き口を開いた。

「すばり学園都市第1位の一方通行を絶対能力者（レベル6）にしよつとする計画なんだ」

「え？ つまりは能力開発つてことじゃないですか？ それなら別に……」

「それがこの街のカリキュラムに沿つたものならなんの問題もないよ……ただこの計画は少々そのカリキュラムから外れすぎているんだ」

「外れすぎている？」

「一方通行が女の子200000人を20000人通りの状況で殺戮することで絶対能力者（レベル6）の実現を目指すという計画なよ」

話を繋いだ美希の言葉に佐天を始めSASの面々の表情が曇る。

「この学園都市で2万人もの犠牲者をどうやって用意したというのか？少年」

「犠牲者を用意することは確かに難しい。民間人から攫うのはリスクが高いし置き去り（チャイルドエラー）を使った計画は御坂により一度潰された為に今や暗部ではご法度になってる。だけど手がないわけじゃないんだ。民間人から用意するのが難しいなら人権が存

在しない人間を利用するんだ」

「人権が……存在しない？」

「そういう少女たちがこの街にはいるんだ。その名は……」

「

「妹達^{シスター} 学園都市レベル5第3位の御坂美琴のDNAを利用して作られたクローン達よ」

「なんかさつきから美希さんが話を繋いでばかりいますけどどうしたんですか？」

美希が話を継いだのを見て咲耶が言った。

「それは……」

言い淀む美希の代わりにクリスが答えた。

「美希はね……妹達^{シスター}の内の1人なの。正確には200000体の妹達の前に作られた試作体なの」

その言葉に佐天と咲耶は息を呑み、アウレオルスは深いため息をついた。

「つまり……美希さんは……御坂さんの従姉妹なんかじゃなくてクローンだつたんですか……」

「ええ……でも気にしないで。今の私はお姉様^{オリジナル}のクローンとして生きてはいいから。一人の女の子美希として生きてるから。

だから別に気兼ねしないでほしいな」

「はい……」

頷きつつもやはり気兼ねしてしまっている佐天だった。

「ところで話を戻すけど、その計画に参加している研究者がここを訪ねてきたんだね？ それでいて研究者を襲う謎の人物の実在を確認してほしいと言つたんだよね？」

「はい、そうです」

「恐らくその謎の人物のせいで計画に支障が出ているんだろうね。だけどその行方を一向に掴めないからS A Sに頼んだのだろうな」

「それで具体的にはこれに対してもう対応するんだ？ リーダー」

「そうだな高杉……とにかくその研究者を襲う切り裂き魔が誰か分からなければ方策の立てようがない。ここは万が一を考えて魔術側にたつメンバーに動いてもらひことにしたいと思つ」

「つまり……私とセルティに動けとこいつことなの？」

哀歌の問い合わせ護は頷く。

「S A Sのメンバーは総出で情報収集を頼みたいんだ。少しでも情報は必要だからね」

「分かりました。護さん氣をつけてくださいね」

「つむ、できるだけ情報は集めておいつ少年」

「できるだけやってみるわウォールリーダー」

3人が了解したのを確認して護はその場の全員を見渡した。

「それじゃあ任務スタート！」

護の宣言と共にその場の全員が任務の為に動きだした。

第22学区の第4階層、そこを件の鈴の尼さん」と袈裟を纏つた少女が歩いていた。

彼女はこれまでに二度で合計20人近い研究者を斬っている。

ここまでは対して問題なくこれた。

警備員は動かないし風紀委員ジャッジメントも対応が遅い為目標を簡単に突き止め斬ることができた。

だがこれまでがうまくいったからこれからもつまづくとは限らない。

今まで通りの慎重な足取りで裏道を進む少女の耳にある会話が飛び込んできた。

「しかし妹達だっだけ？ あれ、感情つてものがないのかしら？」

「ないんじやない？むしろあつたら不都合よ。計画が立ち行かなくなるんだから」

その不穏な会話に少女はその声のした方向に目線を向けた。

その目に映るのは、白衣を纏つたとし若い研究者。

歩いているのは路地裏、周りに人影はない。

少女はため息をつくと、腰につけている袋から鈴を取り出した。

チリン！ という澄んだ鈴の音に研究者たちの動きが止まる。

次の瞬間、少女は一気に駆け出し研究者たちに迫った。

驚き、動きがとれない様子の2人の研究者を見て少女は心の中で同情しつつそれでも刀の柄を握りしめた。

「邪を払え、数珠丸！」

その言葉と共に数珠が弾け飛び刀を封じるものがなくなる。

必殺の斬撃が哀れな研究者2人を切り裂く・・・・・はずだった。

ガギン！ という金属と金属がぶつかり合つ音が路地裏に響き渡つた。少女の日本刀による斬撃は哀歌の腕に止められた。

「なー？」

驚き後ろに下がる少女は哀歌の腕を注視する。いつの間にかその腕

を爬虫類じみた鱗が覆い異質な姿へと変化している。

「引っかかったね……噂の切り裂き魔さん？」

その言葉に周りに警戒の目線を配る少女。

いつの間にか少女を囲むように特殊部隊風の装備をした者たちが展開していた。ウォールの下部組織のメンバーたちである。

「はやく降伏しなさい。あなたには聞きたいことが山ほどあるの」

セルティの言葉に少女は口元を緩めた。その余裕ともとれる仕草にその場の全員が眉を潜めたが躊躇う道理はない。

「一斉射撃！」

哀歌の叫びと共に下部組織構成員たちが構えるサブマシンガンが一斉に火を噴いた。

弾種はプラスチック製の衝撃弾。

この状況で少女にできることはない。その場の誰もが事件の収束を予想した。

だがそとはならなかつた。

サブマシンガンから弾が飛びたした直後、少女は少し腰を落とした。
・・・・・よう見えた。

その瞬間をその場の誰も捉えられなかつた。

目の前に広がる事後後の風景から予測される事象は、目の前の少女がその手にもつ日本刀の斬撃で迫る衝撃弾を全ての切り捨てたということだった。

「全て 切り捨てた？」

哀歌の戸惑う声に少女は薄く笑った。

刹那、同じく周りに展開していた構成員たちがバタバタと倒れた。慌てて周りを見渡すセルティと哀歌だが先程までいた場所に少女はない。

「早すぎる。こんなに早く構成員を殺るなんて」

動搖するセルティ。その時彼女の耳元で声が囁かれた。

「安心して。の人たちは峰打ちで気を失っただけ。私の敵は彼らじゃないから」

思わず身構えたセルティの体を予想外の衝撃が襲った。

少女が振り抜いた数珠丸の鞘で強打されたセルティの体は一気に壁に叩きつけられた。

左手に鞘を右手に数珠丸を構える少女は哀歌を見つめる。

「あなたは龍人ね？」

「読まれてたのね となるとあなたも魔術側の人間 といふこと？」

「そうなると思うわ」

「そしてあの人離れした身体能力に、その両手に残る痕 聖人 つてことね」

聖人とは神の子と身体的特徴が一致する人間を指す。

有名なところではイギリス清教の神裂がいる。

だが神裂は十字教徒であるが少女は格好から判断して仏教徒である。下手をしたら異端者と見られかねない特徴をもつ少女はなぜ仏教徒でいられるのか？

「聖人？ すこし違います。間違ってはいないですけど」

「？」

「私は仏教徒 これが意味することが分からぬ？」

「なに？」

「私が仏教徒としていられる訳、それは私が仏教徒の象徴する力を持つてゐるからよ」

その言葉が放たれた直後、地面に弾け飛び散らばっていた数珠が空中に飛び上がった。

「！？」

突然の事態に戸惑う哀歌を囮むように数珠が展開する。

「人外の邪よ、闇に沈め！」

次の瞬間、展開する数珠から光が放たれ全方向から哀歌の体を貫いた。

「ごぼつ」という音と共に哀歌の口から血の塊が吐き出される。

「終わりね・・・・私を嵌めようとしたのが運のつきよ龍人娘

」

じある学区の都市伝説（後書き）

さて、今回から妹達編に入ります。

なのにのつけからこの展開！？と思われるかたも多いと思います
が今回の話題は新たなるオリキャラの紹介話とお思いください。

この少女はなぜ研究者を襲っていたのか？ それはこの妹達編に登
場させた時点で予測が着く人もいるかもしれませんがその辺りも含
めて楽しみにしていてください！

とある路地の数珠少女

その場を静寂が包んでいた。

哀歌を囮んだ数珠から放たれた閃光は間違いなく全方向から彼女の体を貫いた。

その攻撃は確かに彼女にダメージを与えたはずだった。

それは彼女の口から血の塊が噴き出したことからも明らかなはずだ。

だが有効打を与えたはずの数珠の少女は首をかしげた。

「（なぜよ・・・・・）」

少女が目をやるのは哀歌の体に全方向から突き刺さる閃光。

「（なぜよ・・・・・）」

その光景が指すのは本来なら、数珠の少女の勝利のはずである。

だが少女の表情から困惑は消えない。

「（なぜ・・・・・術式が彼女の体に突き刺さつたまま止まっているのよー?）」

困惑する少女に向けて閃光に全身を貫かれたまま哀歌は笑みを浮かべた。

「なぜ？…………といつ顔をしてるね…………そんなこと単純よ…………龍に人が勝てると思つ？」

彼女が言葉を放った次の瞬間、哀歌の体に突き刺さっていた無数の閃光が弾き飛ばされるように跳ねとばされ空中に浮かんで展開していた全ての数珠を粉々に吹き飛ばした。

「え…………？」

「あなたのその術式…………仏僧日蓮の龍口寺の法難の伝承を利用したものでしょ？あまたの説の中の一つ、『龍が起こした落雷によつて日蓮は救われた』という説を元に全方向から雷撃の剣を対象に放つ術式…………数珠一つ一つに文字を刻むことでその場を日蓮が窮地を救われた龍口の地と同一にして術式を発動させた手並みはほめるわ…………ただ一つ見落としたことがある」

「なんだといつの？」

「龍の落雷により日蓮が救われたといつ伝承を再現した空間内で龍人である私を完全に殺せるとでも思つた？確かに人に近い状態にある今ならダメージを与えることはできる。実際少しは効いた…………だけど龍相手に雷とは…………笑ってしまうわね…………東洋の龍が司るものの中に雷がある」とぐらり承知していたはずでしよう？」

その言葉に少女が唇をかんだ直後、哀歌はほぼ一瞬で少女の前に移動した。

「…………」

「次は二十九の番よ……現出せよ、『破壊大剣』……」

哀歌の言葉と共に彼女を中心に閃光と爆風が周囲に広がる。

「（…………なに、この靈力は？ 龍もどきの人間のはずじゃなかつたの？）」

爆風を受けながら少女は吹き飛ばされとはいなかつた。それはやはり聖人の力が成せる所業だつただろうか。

だが次の瞬間少女の目の前に広がつた光景は少女の体から急速に力を抜けさせた。

そこに立つのは全長が3メートルはあるかという西洋風の大剣を片手で構え、背中から神話のドラゴンのような翼を生やし両腕両足がウロコにおおわれつくしている哀歌だつた。

首の付近までウロコが覆つており人間のままなのはその頭部だけのようになつた。

哀歌はその手に持つ得物『破壊大剣』を空中で軽く振つた。

それだけで周囲の空気がかき乱され、渦巻く。

その威力に息をのむ少女に向けて哀歌は告げる。

「魔術師だろうが、能力者だろうが、聖人だろうが、原石だろうが、どのみち人には変わりはないの……神話の世界ならいざしらず……現代世界で人が神に勝てると思うな！」

瞬間、哀歌は破壊大剣を無造作に横に振るつた。

たつたそれだけの動作で凄まじい風が数珠の少女に向けて放たれた。

とつさに身構える少女だったが突風をそう簡単に避けられない。

彼女の体はまっすぐ上に吹き飛ばされた。

もつとも突風で飛ばされた程度で、仏教とでありながら聖人の特性をもつ彼女はそんなに大したダメージは受けない。

だが・・・・吹き飛ばされ空中に浮かんだ直前、目の前に現れた少年。高杉宗兵が手にする機能性炸裂弾射出器から放たれた学園都市製の炸裂式麻酔弾を無数に喰らつてはさすがの彼女も意識を手放すしかなかつた。

力を失つた少女の体を高杉はうまくキャッチし、空中に着地する。向こうを見ると変化を解除したらしい哀歌がセルティを背負つて手を振つている。

高杉は手を振り返し、自分が背負う少女を見た。

「さてと・・・お前さんには聞きたいことがたくさんあるんだぜ?
? ぱつちり聞かせてもらいうからな?」

そう言つた直後高杉はすこしため息をついてこいつに言った。

「まさかと思うが・・・」の女・・・『ウォール』に入るとかいう展開にはならないよな?これ以上女が増えても嫌なんだ

よ

などとぼやきながら高杉は無限移動でその場より消えた。

その誰もいなくなつた路地裏を構成する建物の上に一つの影があつた。

「対象は第3者の手で保護された模様、ヒミツサカ10072号は緊急報告します。」

じある路地の数珠少女（後書き）

「……」まで話が進むましたが実は少女の名前考えていないんですね。
・
・
・
・

日蓮に関係しているのでそれにちなんだ名にしようかとは思つてしま
すがなかなか決まりません（涙）

さて今回は、仏教徒でありながら『十字教』の聖人のオリキャラを
登場させました。

とあるシリーズでは仏教系のキャラってあまりでなかつたから登場
させてみましたがどうせしょうか？

ちなみに数珠丸といつのは実在する刀です。興味がある方は調べて
みてください。

彼女がどう話に関わっていくか楽しみにしておいてください。

となる理事の具体行動

「僕がリーダーの古門 護だ。始めて三國 希さん」

暗部組織ウォールが持つ『拠点』の一つ。第22学区の第2階層に建つVIP専用高級宿泊施設に捕虜となつた数珠の少女こと三國希は捕らえられていた。

説得と尋問を高杉と美希が担当し何とか本名を聞き出しだがその他の事についてはだんまりを使用して一切喋らない状態が続いていた。

そこで、仕方なくリーダーである護自身が説得に当たることになつたのだ。

「あなたが暗部組織のリーダー？ 若いわね」

「あいにくとうちのメンバーは平均年齢が10代でね。でも実力は折り紙つきだよ」

「それにしてもリーダーが直々に尋問に来るなんて、余程切羽詰まつてるの？ まあどうなら様を見やつてとこね

「どうこいつ意味？」

「私にかまけてると仲間たちがまた殺しを始めるわ。せつとあなたたちじやあ対処しきれない」

「なんだって？」

「あんた達の計画は終わりなのよ。苦労してわたしを捕らえたのに残念でした」

「ベーーと舌を出す希に護は深いため息をついた。ビーハーの少女は重大な勘違いをしているらしい。

「あのさ…………なんかさつきから僕が『絶対能力進化計画』の関係者っていうこと前提で話をしてるみたいだけど…………僕はそれを止めようとしている側なんだけど?」

護の言葉に希はまばたいて硬直した。

「え…………嘘よ嘘…………だってじゃあなぜ私を捕まえようとしたのよ!」

「なんでそんなことをするのか知りたかったからだよ。それに君を計画を阻害する者として捕えたのならさっそく計画の研究チームに君の身柄を引き渡すと思つけど?」

「言われてみれば確かにそうかも…………

「でしょ?だから教えてくれないかな?」

「…………でも…………」

「口!」もある希。それを見た護は試してみようと口を開いた。

「君が動いたのは誰かに絶対能力進化計画の妨害をするように依頼されたからじゃない?」

「なんでそれを！？」

護の言葉に希は田を見開き、思わずといった感じで言葉を漏らした。

「じつはね、僕たちウォールは表向き学園都市外部の敵対組織の工作員の掃討を担当しているんだけど・・・・・・その下部組織のエージェントたちからの報告の中に統括理事のいづれか一人と外部組織が繋がりをもつた可能性があるというものがあつたんだ」

「・・・・・・・・」

「君が計画の研究者を襲撃していると聞いたとき、君がその依頼された外部組織の人間じゃないか・・・・・・と僕は考えただけど間違ってるかな？」

「君が計画の研究者を襲撃していると聞いたとき、君がその依頼された外部組織の人間じゃないか・・・・・・と僕は考えただけど間違ってるかな？」

「まあ、君がどこの組織かについてはその服装や哀歌と戦った時に使つた術式から予想できるから良いけど・・・・・・僕が知りたいのは君に依頼した統括理事の名前だよ。僕はそいつの行動を止めたい」

「なんで計画を止めようとする立場なのに同じ立場の人の事を止めようとする？」

「君が知つてゐるか知らないけど学園都市統括理事の中に善人は少ない。僕が知つてゐるだけでせいぜい2人だよ。その他の行動には大なれ少なれ私欲が絡んでいるのが大抵だよ。だからその私欲の為

に本来犠牲にならなくて良い君のような外部組織の人間が利用されているなら僕はそれを止めたいたいんだ」

「あなたって……善人？ それともお人よし？」

「さあ？ それは自分で判断すれば良いよ。それで……教えてくれる？」

「…………ん……分かった、話すわ……
・ 私に依頼してきた学園都市統括理事は貝積継敏だと聞いたわ。
もつとも彼自身が来たわけじゃなくてその使者と名乗る男から聞いたことだけど」

貝積継敏という言葉に護は怪訝な表情になった。別にその名を知らぬわけではない。

むしろ知っているから困惑しているのだ。彼はこんな風な手を使うことができる人間ではないはずだからである。

作品内では貝積は統括理事の中で数少ない善人として描かれていた。だが善人ではあるもののブレインとして雇っている雲川芹亞の存在がある為に有事のさいに人助けなどで協力を依頼するのは難しいとされていた。

そんな貝積があまつさえ実名まで出して外部に依頼をするなど普通はあり得ないはずなのだ。なぜ、雲川芹亞がいながらこんな事を？ と護の頭は混乱してしまった。

「あの……大丈夫？」

心配した希の声に護は思考の迷路から抜け出した。

「ああ……ごめん。それで確認させてほしいんだけど本当に依頼して来た人物は貝積継敏と名のつたんだよね？」

「ええ」

「その人は統括理事の中では比較的善人のほうだ。だから君に危害を与えるつもりで依頼したのではないと思うけど……念のために君の言っていた仲間たちについては僕たちに抑えさせてもうつよ。殺しはしないから安心して」

「…………仲間たちがどこにいるか分かるの？」

「すでに君が仲間の存在を仄めかした時点でメンバーや下部組織の人間が搜索に乗り出している。それにセルティと哀歌の2人がかけているサーチ術式には君以外に魔術師の反応はない。だからすぐに抑えられると思うよ。君にはそれまでしばらくここにいてもらわなくちゃならない」

「…………分かったわ。それは仕方ないもんね」

「僕はその間に計画についていくつか調べておく。君の見張りと面倒は高杉がやることになるからよろしくね」

そう言い残して護は部屋を出た。

その先に待っている美希とクリス、そして高杉。

他のウォールメンバー、即ち哀歌とセルティは下部組織のメンバー

を率いて希の言つ仲間たちの搜索に向かつている。

「高杉は聞いていると思うけど希の監視を頼む。クリスと美希は一緒にについて来てほしい。第22学区内の計画の痕跡を探しにいく」

メンバーに指示を出し護は動き出す。護をリーダーとする暗部組織ウォール。学園都市暗部の中でもっととも外側から恐れられる組織が中の組織に向けて牙をむく。

「さて、じゃあ行こう。暗部の計画を暗部組織の僕らが止めるのも皮肉だけど……御坂や上条を助ける為にも計画を止めて見せる」

「護くんが決めたんなら私に異存はないよ」

「アンタが決めたのなら、私にも異存はないわ」

護たちウォールの3人は、計画を止める為夜（とはいっても地下に夜も昼もないのだが）の22学区へと繰り出していった。

そんな護たちの様子を隣の建物の影からじっと見つめる少女がいた。年齢は10代後半。黒の長髪を髪留めでとめており。服装は赤と白の色が混ざりあっているパーカーにジーパン。

瞳の色は黒でまばらな街灯の光に照らされる顔は端正でいかにもな和風美人である。

少女は無言でパーカーのポケットに手を突っ込むと無線機を小さくしたようなものを取り出した。

「私だけ。本当にあの人たち・・・・・・を相手にしなきゃいけないのかな」

「私はそのつもりでいるけど。なにか不満でも？」

「つうん。あなたのボスに保護された私に不満はないわ。だから言われたことはやるから」

少女は無線機のスイッチを切りその場から立ち去りうとした。

その時。

「貴様、なぜここにいる？ どうやって警戒網をくぐり抜けた？」

なにやら特殊部隊風の装備をした男と出くわしてしまった。彼女が知るよしもないが男はウォールの下部組織の人間だった。

「とにかく来てもらおう。事情を聞かなグオ！？」

最後の辺りが呻き声になつてゐるには理由がある。

少女の髪の毛の内の2本が宙を飛び、男の両目を突き刺さったからだ。いやもはや突き刺さったものは毛ではなく刃物と化している。

鋭い針と形容される髪の毛に両目を潰され苦悶の声をあげてよろめく男を見る少女の髪の毛はいつのまにか髪留めから開放されて足元まで広がっている。

その状態で一度ため息をついた少女は男を見つめながら呟いた。

「安心して……痛みも感じず斬つてあげるから」

その言葉が苦痛に身を震わせる男に届いたかは分からぬ。

だが届いているか届いていないかは今の少女には関係がない。なにしろ目の前の男は今の時点では敵なのだから。

少女の髪の毛が纏まりをもち、鋭い刃に変化する。

その刃が僅かな星明かりを反射した光景は見方によつては美しいと言えるだろう。それが少女の髪の毛が変質したものでなければだが。

斜めから横向きに振るわれた髪刀の斬撃は一撃で男の防刃防弾チョッキを切り裂き……彼の体を真つ二つにした。

余りに鋭すぎる斬撃のせいで真つ二つにされた直後の数秒間だけ男には意識が残つたらしい。

「化……け……物」

震える唇で呟く男に少女は静かに返した。

「じゃあね」

返し刀で振るわれた斬撃は男の頭を縦に切り裂き今度こそ男の意識は完全に途切れた。

風が吹いているわけでもないのに空中に髪を浮かばせている少女だがその髪刀状態を直ぐに解いたらしくやがて普通の髪質に戻る。

「ふう あなたに助けられたことは感謝してるし恩義も
感じてる でも『人助け』の邪魔をする必要があるか
な あなたは何をしたいの? 貝積継敏
」

となる理事の具体行動（後書き）

今回は学園都市統括理事の1人を出しました。

禁書ファンの人なら彼の行動の裏に誰がいるかは推測がつくと思いまが……どういう展開になるかは楽しみにしていてください。

次話からは本格的に欠陥電気編に入っていきたいと思しますのでよろしくお願ひします。

そういうえば禁書がついに映画化されますね。

私も今から楽しみにしています。

祝い！ 禁書映画化！ （笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9073p/>

とある世界と重力掌握

2011年10月7日15時33分発行